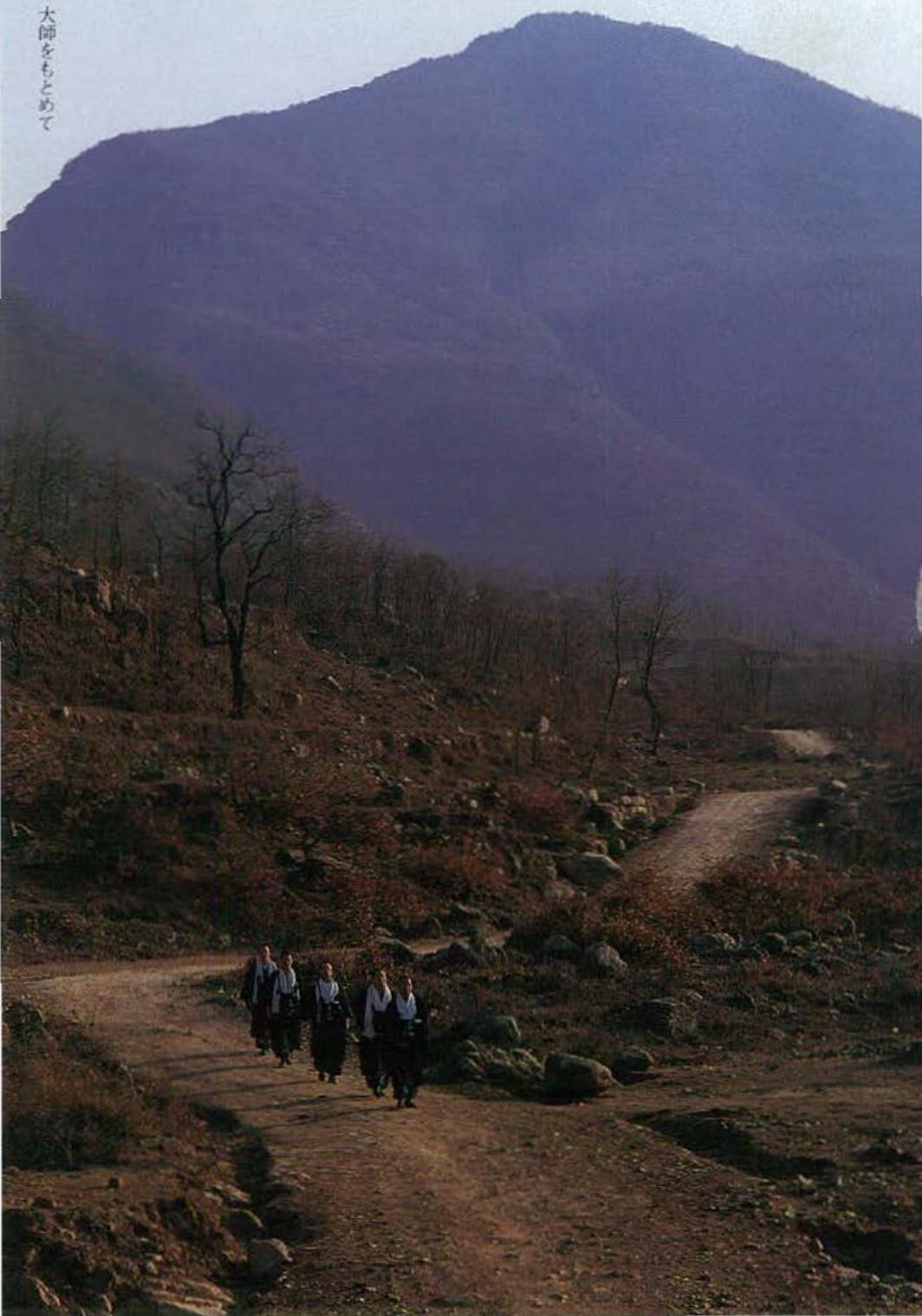


# 空海・長安への道

報告書

弘法大師御入定千五百年御遠忌記念  
「空海・長安への道」実行委員会

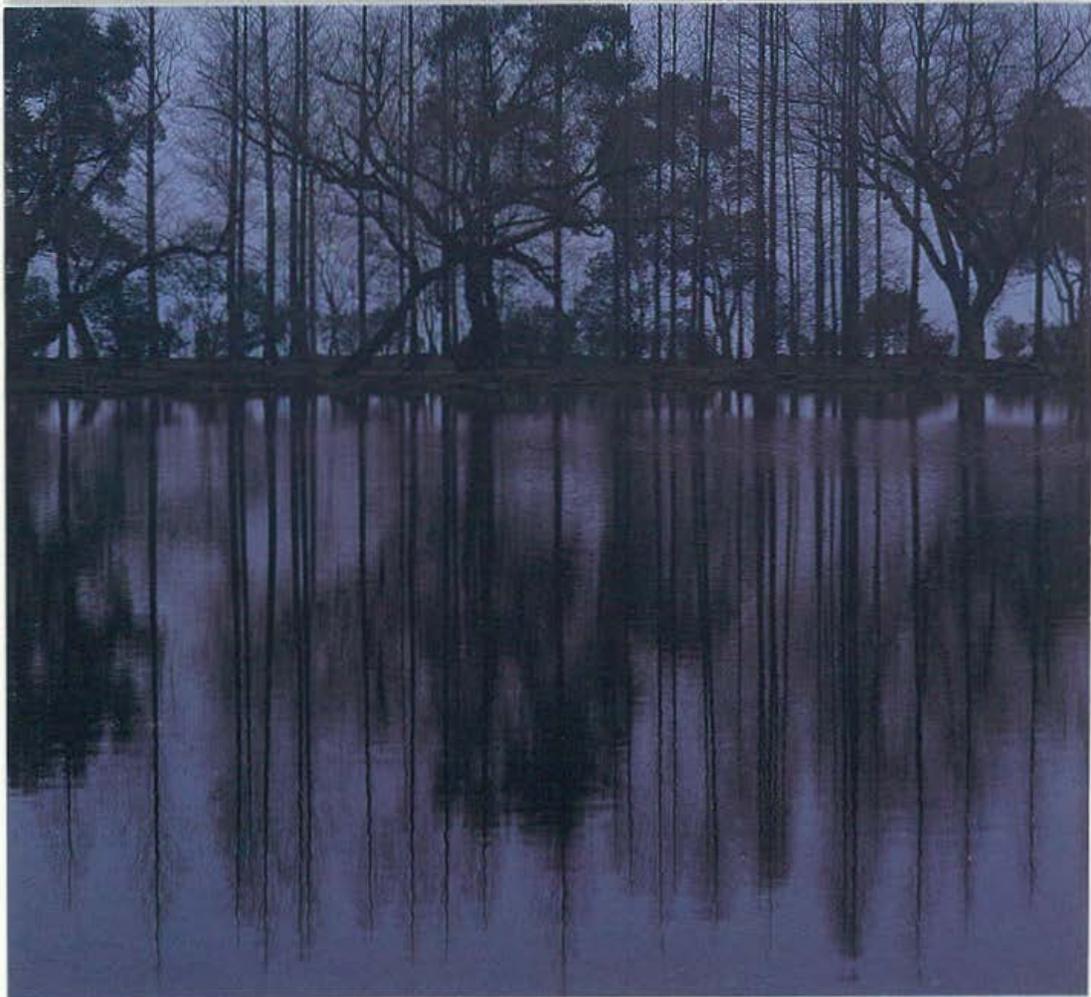
大師をもとめて



杭州、雨の西湖



鎮江の定慧寺、茗山法師



相国寺の千眼千手観音



岡江



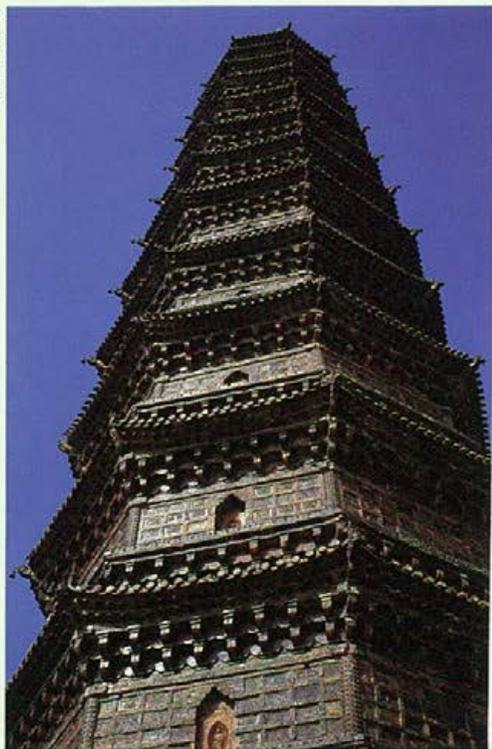
崇仁寺へ



靈隱寺、飛來峰



開封の鉄塔

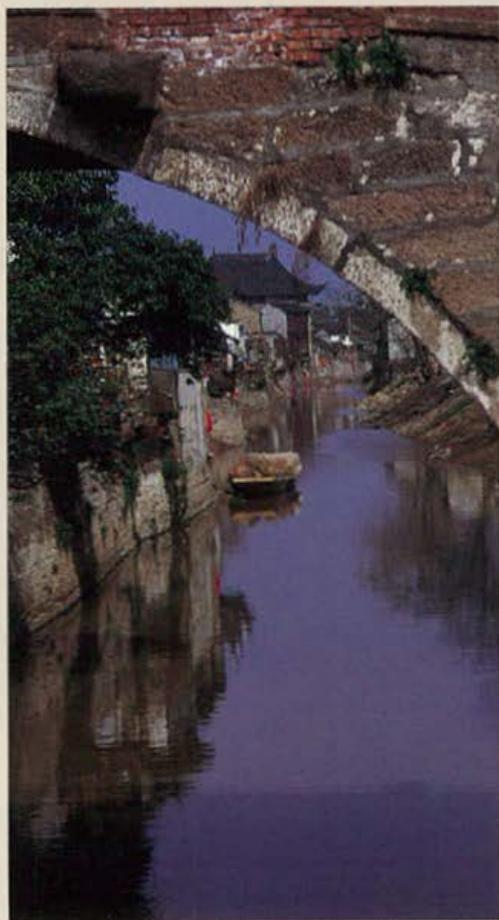




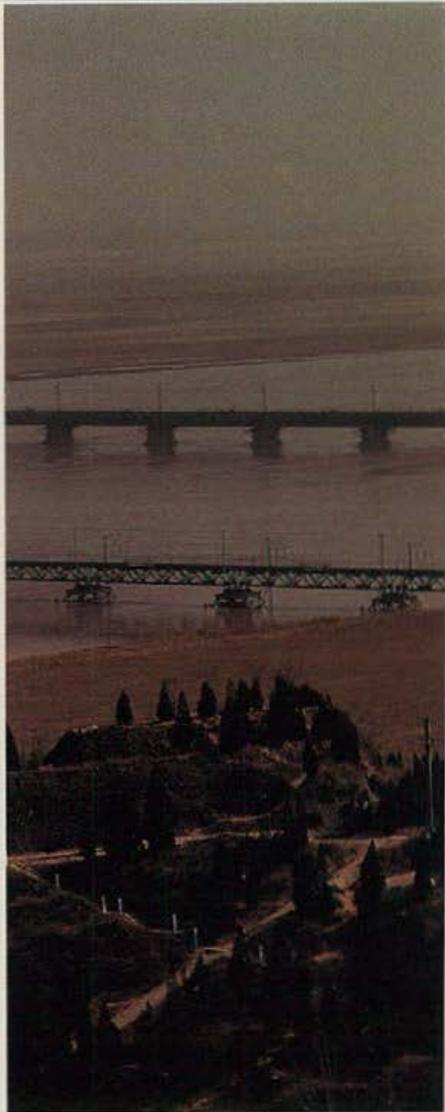
黄河を渡る



紹興の町の運河



常州の新坊橋より天寧寺の大雄宝殿を見る



南京の城壁





金山寺

## 序

弘法大師御入定千五百五十年御遠忌記念  
「空海・長安への道」実行委員会

委員長

阿部野

竜正

永遠の時の流れの中で、人間は歴史を刻み残してゆく。

昭和五十九年（二六〇）春、私共は、ものの見事に、弘法大師御入定千五百五十年御遠忌大法会を無魔盛大に厳修させて頂いたが、この大浄業は、まさに歴史に残る世紀の大慶事であったといえよう。

この御遠忌大法会に際して、私共はまた多くの記念事業を遂行させて頂いたが、中でも、日中の友好協力のもとに成就し得た大事業に二つを挙げる事が出来る。

その一つは、真言宗各派総大本山会の発願のもとに成し遂げた「恵果・空海記念堂」の建設であり、その二つは、私共年来の悲願であった「空海・長安への道」の実施であった。

弘法大師空海が求法入唐したのは、延暦二十三年（七五四）七月のことであった。その時、東シナ海の荒浪激波に身命を曝されること三十四日、漸くに漂着した地は、福州赤岸鎮（現在の赤岸村）であった。

そこより、長安への道は二千四百キロである。弘法大師以後、この道を追体験した人はいない。それを、千百八十年を経た今、わが真言僧によって完全に踏査したのである。その人々は、高野山大学助教静慈

圓先生を团长とする真言僧五名と毎日新聞社の三名による「空海・長安への道」訪中団の人達であった。

現在中国では、外国人に開放されていない地区が多く、今回の「空海・長安への道」のルートにも、尚未開放の地域がかなりあったのである。しかし、それらも、この度に限って、日中友好、文化交流の先駆者空海の名の下で、全て開放されたのである。今日の中国の国情の中では、誠に稀有かつすばらしい出来事であった。このためには、内閣総理大臣中曽根康弘閣下の中国側へのお口添、並に親書を忝うし、それによって、中国胡耀邦総書記閣下の篤いご理解を賜わり、特に、中国佛教協会会長趙樸初先生の並々ならぬご尽力を頂いたのである。尚又、日本ならびに中国のご関係の諸機関、諸先生に多大のご支援ご協力を頂いたのである。

ここに、改めてこの浄行を成功にお導き下さった多くの方に対し、衷心より深く感謝の意を表すると共に、「空海・長安への道」訪中団の諸師、諸賢の絶大なる労を評価し、心から御礼を申し上げる次第である。今迄、その記録がないまま、弘法大師研究の一つの盲点として、大きい憾みを残していた「大師入唐の道」が、この度の、「空海・長安への道」訪中団報告書によって、少しでも、その研究の道が開け、この一書が今後の大師研究の一助にもなれば、私共にとっては、望外の幸せである。

最後に、日中友好の益々の深まりと、真言密教永遠の隆昌を祈念して、この書の序とする。

南無大師遍照金剛

## 序

高野山大学長 松長 有慶

福州から西安まで二千四百キロ、弘法大師入唐の足跡を追体験する一行八名の旅は、三月三十一日、西安の東門で三十五日に及ぶ日程を終った。高野山真言宗、高野山住職会、高野山大学、毎日新聞社によって経済的な支援を受け、二か年に及ぶ綿密な基礎調査の上で決行されたこの旅は、弘法大師御入定千百五十年御遠忌法要の開白をさらに有意義なものとして、日本全国の人々の脳裏にやきつけたのである。

千百八十年まえ、大師が苦難の末、中国に渡り、都長安を目ざした二カ月の旅を、その末弟たちによって、そのまま追体験し、またこの旅を通じて、日中友好の輪を広げようというこの計画は数年前に立てられた。途中紆余曲折はあったが、御遠忌をさらに意義のあるものとしようとする高野山の熱意と、それに快く応じた毎日新聞社のみごとな協力によってついに大輪のみごとな花を咲かせ、御遠忌ムードを盛りあげるのに、はかり知れない役割りを果たしたのである。

趙樸初会長をはじめとする中国仏教協会の全面的な後援をえて、外国人がまだ入ったことのない未開放地区に入域することができたことも、この大事業の完遂には不可欠の要因であった。

長年にわたり中国仏教協会と親密な文化交流をもち、絶対的な信頼を得ている阿部野竜正宗務総長の熱意と、総本山金剛峯寺の企画室の骨身をおしまぬ奔走、高野山日中友好協会の支援、毎日新聞社の御遠慮完遂に対する協力的体勢、どれ一つ欠いても今回の成功はなりたたなかつたといつてよいであろう。

御尽力いただいた関係各位に甚深なる謝意を表し、この事業がさらに将来、弘法大師の偉徳の宣揚と、日中平和友好の大きな礎石になってほしいと念願している。

## 所 懷

高野山日中友好協会々長

内海 有昭

この事業の計画樹立から今日にいたるまで、辛酸をつくされた第一次・第二次調査隊員各位のご労苦に、深く敬意を表します。

その陰に阿部野総長はじめ中日両国関係者のなみなみならぬ努力と友情によって、赤岸鎮など未開放地方の調査が許されたことは、第一の成果として忘れることが出来ない。

赤岸鎮の荒砂にひれ伏した隊員の写真を見せられた時、思わず目頭が熱くなった。青年僧空海が大陸に第一歩を印せられたその感動が、千二百年の空白を超えてひしひしと胸を打つ。

日中の友好は、政治や経済によってのみ果たされるものではない。お大師さまがあらゆる苦難を越えて拓かれたこの道、密教の大法を授かり多くの文化文物をもたらされたこの道——末徒として報恩の誠を捧げつつ歩みつづけねばならない。文化・学術の交流を深めつつ更に究めつくさねばならない。その為にもこの報告書は先駆者の実録として貴重な手引書として、大きな役割を果たすであらう。

シルク・ロードを踏破することは私にはもう無理である。しかし四国遍路の心になって、大師求法の道

をすこしずつでも辿りたいと思う。赤岸鎮は望めなくとも福州を第一番として、お札納めの結願所は青龍寺であろう。

この道が報恩願拜の道として、日中友好の心の絆としていついつまでも、うけ継がれることを祈りたい。昭和五十四年十一月二日、はじめて青龍寺跡を尋ね得たとき、麓の鉄爐廟村の古老から、「千二百年前、青龍寺に学んでいた一日本僧から、私たちの先祖は貴い教えを授かった。私たちは今もその教えを守っている」と聞かされた。その人の名を尋ねるとはつきり「空海大士」と答がかえってきた。

秋の夕焼を背に大雁塔がはるかに拝される坂道であった。

昨年九月十四日、見事に復元完成された青龍寺に詣ることができた。若き日のお大師さまに謁し得た法悦の涙は、今も心の奥にあたたかくたたえられている。

汗拭かず涙拭くはず投地礼

## 序

毎日新聞開発本部長 山崎 宗次

弘法大師御入定千百五十年御遠忌と、それを記念する「空海・長安への道」訪中学術調査の御成功おめでとうございます。

弘法大師空海は、単にお大師さんとして、日本人に親しまれているだけではなく、大師が中国から日本に伝えた真言密教は、日本文化の華とも地下水ともなつて私たちに大きな影響を与え続けております。なかでも密教美術の絢爛さ、密教論理の精緻さ、その宇宙観の大きさ、そして何よりも宗教としての崇高さ、そのどれをとつても、現代に生きる私たちをひきつけずにはおきません。

その密教のすべてを日本に伝えた弘法大師が入唐したのは今から千百八十年前の八〇四年です。その旅がどれほど過酷なものであったかは私たちの想像力を越えます。しかし、その旅は大師にとって、旅の過酷さをはるかに越えて魅力的だったことでしょう。当時の世界最大の都市・長安で、インド仏教の最先端に行く密教を学ぶことができる。その旅は大師にとって胸うちふるえるような感動の旅であつたと思われます。

その大師が歩かれた赤岸鎮から長安までの二千四百<sup>キ</sup>の道を追体験して歩く。これほど魅力的な旅がありませんか。しかもその旅は、この千八百十年の間、だれもが実現しえずにいたのです。宗門外の私たちでさえこれほどあこがれる旅です。弘法大師の法を継ぐ真言宗の人たちが夢想しないはずはありません。その旅を、高野山金剛峯寺 高野山真言宗、高野山大学と毎日新聞社とが共同して実現しないかという話を持ち込まれたとき、私はその旅のスケールの大きさを思い、実現したときの文化的意味を想像し興奮いたしました。

いうまでもなく、お大師さんの御遠忌は五十年に一度しかありません。私の人生で御遠忌を迎えられるのは、おそらく一度だけです。その御遠忌のために「空海・長安への道」を企画し実行できる。それはやはり大師の「縁」をいただいたとしかいいようがありません。

もちろんこの企画実行のためにはさまざまな方たちのお世話になりました。阿部野竜正実行委員長を中心にした高野山の、住職会や高野山日中友好協会。毎日側でも西園寺公一事務所、日本IBM、その他いちいちの名をあげられぬほどの人々のお力添えをいただいています。

その成果はこの報告書におさめられた学術報告と毎日新聞のルポタージュに結実しております。私はお大師さんの「虚往実帰」という言葉が好きですが、訪中団もまた「虚しく往きて、実ちて帰る」旅をしました。

そして、宗門と、アカデミズムである大学と、ジャーナリズムである新聞とが、互いに協力してひとつ

の成果をあげたことに注目していただきたいと思えます。この方法は日本の学術調査や社会調査の新しい試みであり、私たちジャーナリストが、その一角に参加できたことを誇りにするものです。

最後に、企画の初期の段階から参加し、具体的な実行の労をとっていただいた高野山金剛峯寺の添田隆昭師に、共に縁の下の働きをした者として敬意を表します。

目次

序 序 序 序

所懐

第一章 大師をしたいて

空海・長安への道

第二章 大師と入唐道

弘法大師の福州から長安への道

越州の弘法大師

阿部野竜正

松長有慶

内海有昭

山崎宗次

佐藤 健

備前有隆

武内孝善

3

69

88

江南地方の仏教

—鎮江・揚州・南京を尋ねて—

中村正文 100

密教相承の祖師の足跡

—広化寺・奉先寺・福先寺・惠果の墓塔—

静 慈圓 130

第三章 大師入唐道の風景

大師入唐道市街案内

静 慈圓 155

大師入唐道の寺

近藤堯寛 190

追体験日誌〈実測距離〉

武内孝善 214  
中村正文

資料

付(一) 中国の報道関係誌上における「空海・長安への道」

259

付(二) 「空海・長安への道」中国側関係者一覧

267

総括

静 慈圓 279

写真提供 中西 浩・滝 雄一



第一章

大師をしいて





## 空海・長安への道

佐藤 健

赤岸鎮。その浜におりたつた五人の真言僧は泣いた。無理もない。彼らの宗祖であるばかりではなく、日本史が生んだ最大の天才といわれる弘法大師空海が、密教の真理と中国文化を学ぶために生命をかけて入唐し、嵐にあいながらも漂着した同じ場所に、千八百十年ぶりに日本人として立ったからだ。空海が入唐を果せなかつたら、日本の仏教、いや日本の文化は何百年遅れたか、あるいはまったく異なったものになっただろうといわれる。日本の文化史の中で空海存在はそれほど大きい。

唐から帰国後、正統密教を確立した空海が八三五年に入定して今年で千百五十年になる。四月一日から五十日間、高野山ではその徳をたたって、御遠忌大法会が続けられる。その空海の中国での足跡を追体験する「空海・長安への道」訪中団（毎日新聞社、高野山金剛峯寺、高野山真言宗共催、団長・静慈園・高野山大学助教授）一行八人は、



福建省霞浦県赤岸鎮（赤岸村）にその第一歩をしるした。それは中国二  
千四百キロの旅をして唐の都「長安」へ向かった空海を追う旅の出発  
点である。

#### 村あげて熱烈歓迎

「空海・長安への道」を歩く訪中団への赤岸村の人々の歓迎は、文字  
通り「熱烈」であった。

赤岸村ばかりではなく、霞浦県の県庁所在地である霞浦へ、私たちの  
マイクロバスが着くと、何千人という人々が車をとり囲んだ。

解放後（一九四九年以降）たった一人の外国人も来たことがなく、もち  
ろん解放前もこのような辺境の町へ、来る人はなかったようだ。つまり、  
私たちは、弘法大師空海以来、千百八十年ぶりの外来者なのかもしれな  
い。

その夜、私たちのための歓迎の宴を催してくれた町の幹部の一人は、  
握手するなり、うれしそうに、「私たちと同じ顔をしているんですね。日  
本人は」といった。

接待所で一夜を明かし、朝、二階の窓から外を見ると、何百人もの人々



が私たちを見上げている。

赤岸村へ行くと、その歓迎ぶりは極に達した。

数カ月前から、人民会場へ行く細い村道一・七キロは、車が通れるように拡大され、その会場には「熱烈歓迎」の横断幕。人口千七百人の村人のほとんどが道の両側に立ち並び、私たちのために作ってくれたという村道を通して会場へ行くと、爆竹が鳴って拍手がわきあがる。会場には村の重役や教育者たちが待っていてくれた。村をあげての大行事になってしまったらしい。同行の通訳は「国の偉い人が来てもこんな人は集まりません」と教えてくれた。

会場で村の重役たちのあいさつが終わると、村人たちは団長に書を残してくれるように頼んだ。たまたま団長が書家であったのは幸いした。

中国人は書によって人を見る習慣がある。さらに村人たちは、来村記念として五本の楠あかを植えてくれることを頼んだ。ありったけの歓迎の気持ちなのだろう。

遣唐使と空海がこの村に着いたことを、赤岸鎮の村人たちは千年以上も忘れていた。村の語り伝えにも残っていない。

「この村の人たちが空海の名を知ったのはこの村出身でハルビン師範大学の女性教授である游寿先生が里帰りし講演をかねて村に帰ったとき

歓迎の人々に囲まれて



唐の時代に赤岸鎮に遣唐使船が漂着し、その船に弘法大師空海という偉いお坊さんが乗っていたことを話したことにはじまります」と赤岸村第一中学の陳品全先生。

そして三年前、空海が惠果和尚から密教の法を受けた西安の青龍寺で開かれた空海記念碑の落成法要にまねかれた霞浦県代表の三人が、空海存在の大きさを村に伝えた。

### 空海の名前は中学の歴史教科書にも

「空海大師は日本から船に乗って嵐に遭い、この霞浦県に流れ着いたと聞きました。そして長安へのぼり、仏教を勉強して日本で真言宗を開きました。また中国の文化を学んで日本に伝え、日本の文字を作った創造的偉大な人だと聞いています」と、霞浦県の統一戦線部長さん。

「今は空海大師の名はこの地方の中学校の教科書にものり、空海の名を知らぬ者はありません」。空海は村の偉人の一人になったかのようにである。

そこへ私たち訪中団が訪れた。千百八十年の時間をへだてて、空海の名と村人たちの末えいが会話している。歴史のおもしろさだ。



村人たちは大橋という橋に連れて行ってくれた。幅二メートル、長さ六十二メートルの石の橋である。唐の時代はこのあたりまで海であり港があったという。

「空海大師の船も、このあたりまで来たのではないか」と、案内役の霞浦県政文史組の兪郁田さんはこの石橋の下を流れている川は羅漢溪といい、昔は赤岸溪と呼んだと話してくれた。

その名を聞いて、団員のひとしく疑問に思っていたことを備前有隆副団長が聞いた。

「赤岸鎮という名前はどこからきたのですか」

俗説によれば、このあたりに赤岸溪という川が流れており、地の色が赤く、そこに軍隊の所在地である「鎮」がおかれてこの名が出たという。私たちも、赤い岸をイメージし、この村に入ってからその風景を探したがどこにもない。

兪先生は意外なことをいった。

「赤岸鎮の赤は、赤い色のことではありません。道教の五行では南の方角を赤で示します。ですから赤岸鎮とは南の方にある鎮を意味します」  
赤岸鎮の空想を抱き続けてきた私たちは少し失望したが、それはひとつの発見であった。



私たちは中国側が用意してくれた帆船に乗って湾に出た。広々とした湾をめぐる五人の真言僧は白い砂浜に船をつけ、たぶん空海もおりたつたであろう渚に足を入れて上陸し、自分たちが千百八十年ぶりに、祖師漂着の地に立ったことを報告する法要を、はるかかなたの日本の高野山にむかって行った。

この浜まで追いかけてきた村人の中には、その姿に手をあわせる人たちもいた。

「空海・長安への道」はその砂浜から二千四百キロの旅へ出発する。

初めてみる唐の国空海の胸は躍った

赤岸鎮いみな巳南ノ海口——。空海が着いた場所である。空海に関心がある人ならば一度は立ってみたい浜だ。その名の響きがよいだけでなく、「赤い岸」というイメージが、きらびやかな伝説に包まれる空海にふさわしいロマンを感じさせるからである。

その赤岸鎮のある湾はまるで湖のように静かであった。

八〇四年八月十日、空海を乗せた第十六次遣唐使船の第一船が漂着した日も、この日のように晴れわたり、海がない日であったろうか。



船は、十数人の水夫が、ろをこぎながら、ゆっくりとこの湾に入つて来ただろう。空海はそのときの船のどこにいたのだろうか。おそらく甲板に立っていたにちがいない。そして初めて見る唐の風土をどのようにながめていたか。

空海のそのまなざしを知りたくて、私たちは湾の入り口まで船を出した。

湾の名前は福寧湾という。湾の入り口に火烟山島という小さな島がある。福寧湾自体がそう大きくない湾だが、その湾の中に、さらに小さな湾があり、その一番奥に赤岸鎮はあった。

遣唐使船は火烟山島の右を通つたか、それとも左か。ゆっくりと湾の中へ入つてゆく。

湾の入り口で正面にある竜首山（四三メートル）が見える。低いが姿のいい山だ。その背後には馬安山と獅山という山がひかえている。

小さな湾の左手には松山という山が、その奥には塔下という山がある。おそらく空海の時代には島だったのが、陸つづきになった。右手には后岐嶺と古嶺下という山がある。そして、正面の竜首山のふもとにわずかな平野がひろがり、赤岸鎮（現在の赤岸村）はその右のはずれにあった。空海一行は、船が岸に近づくにつれて、村人たちが騒ぎながら、浜辺



をかけて来るのを見ただろう。当時、湾に外国の船が入って来ることはほとんどありえない。

人々は、あるいは怖れて、かくれるように見ていたかも知れない。しかし、この浜に人家があるのを見た大使をはじめとする船上の人々は「これで助かった」と涙ぐんだであろう。

それほど過酷な航海であった。

四隻からなる第十六次遣唐使船が日本を離れたのは八〇四年の七月六日である。船団は肥前(長崎県)の海岸沿いに南下して平戸に着き、さらに五島列島の久賀島の田ノ浦を最後の寄港地とし、食料と水を積んで出発する。

大海に出て二日目に嵐になった。当時としては大型船であるとはいえ、全長二十メートル。最大幅七・八メートル程度の木造船である。木の葉のようにもまれたであろう。

四隻の船はちりぢりになった。大使の藤原葛野麻呂のちに復命書で「第三、第四両船、火信応ぜず」と報告している。

嵐の中で松明をともし、必死で連絡をとりあう水夫たちの姿が浮かぶ。



### 上陸許されぬまま船の上で二カ月を

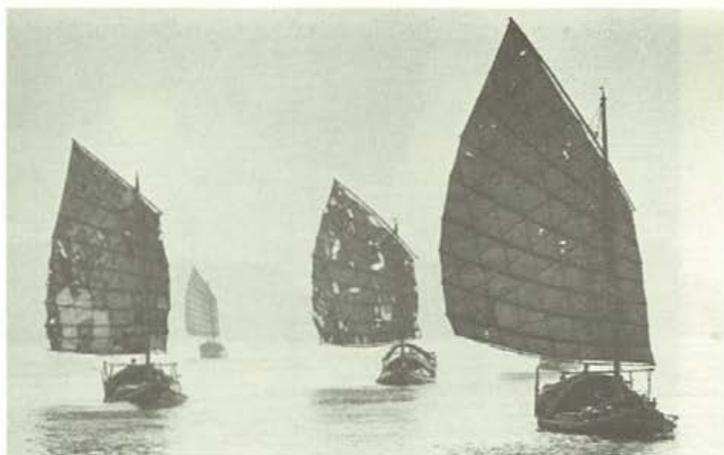
その嵐のすさまじさについては空海自身が、大使の代筆をした「大使のための福州の觀察使に与うるの書」の中でこう書いている。

「暴雨帆を穿ち、戕風舵を折る。高波漢に沃ぎ、短舟齧齧たり。(中略)浪に随つて昇沈し、風に任せて南北す。ただ天水の碧色のみを見る。(中略)波上に掣掣たること二月有余、水尽き人疲れて海長く陸遠し……」

大使と空海たちが乗った第一船と、副使と、のちの伝教大師最澄が乗った第二船はかろうじて助かり、第二船は明州に流れついたものの、第三、四船はついに行方不明のままである。

日本の地を最後に見た日からすでに三十四日。小さな船の中に百二十人が乗っている。食料も水も底をついたであろう。東シナ海の真夏の太陽はようしやなく照りつけたはずである。精も根もつきはてて着いたのが赤岸鎮である。

一行の実感、目的の唐に着いたという喜びよりは「命だけは助かった」といったほうが正直だろう。



浜に着いた大使はすぐに村の役人(県令)に連絡をとらせたにちがいない。当時の中国は、直接海岸から上陸するのを禁止されていた。その許可を待たなければならない。

村人たちは見るかげもない船と、自分たちと同じような顔をし、しかし、まったく言葉が通じない船上の人々をどう見たか。

役人はすぐに浜へかけつけたであろう。県令の名は胡延沂、軍人である鎮将の名は杜寧といった。

県令は「自分には許可を出す権限がない」と、皇帝と直結した役人がいる福州へ使いを出した。

その間、空海たちは上陸も許されなのまま、船の中で約二カ月を過ごす。食料と水は村人たちが運んでくれたであろうか。密輸船、または海賊船として追ひ払われてもしかたがない状況に遣唐使船はあった。

二カ月。唐土を目の前にした空海はその間、何を考えていただろうか。唐土の感触を足の裏でたしかめるために、浜辺のなぎさにはおりたろう。

結局、赤嶽鎮の役人は「福州へ行ってくれ」と、一行を追いつ出す。ただ「山がけわしく、海路を行った方がよい」とすすめてくれたのは、県令の親切といつてよい。

それから千百八十年たつ。



### 福州の觀察使は密輸船と間違えた

閩江<sup>閩江</sup>の河口は広い。その河口から約三十キロ上流にのぼった馬尾港のあたりでも対岸がかすむほど遠い。川というよりは湾にちかく、大型貨物船が行きかっている。馬尾港は天然の良港として栄え、江戸時代は琉球が対外貿易の窓口としてここに「琉球館」を置いた。

それはともかく、長溪県赤岸鎮で上陸を拒否され、觀察使のいる福州へ回航することを指示された空海の乗る遣唐船は再び外洋へ出た。福州で觀察使に会い長安へ入京する許可をもらうためである。

嵐にあい三十四日間の漂流のあと、やっとの思いで赤岸鎮にたどり着きながら、もう一度外洋へ出て約二百五十キロの航海をしなければならぬ一行の気分は、ゴールに着いたマラソンランナーがもう数キロ走らせられるようなものだったろう。

船は、赤岸鎮から陸を右に見ながら南下した。リアス式海岸のように入り組んだ陸には、ときどき人家が見えただろうが、いずれも赤岸鎮と同じくらの村だ。

そして閩江の河口に着いたとき、おそらく一行はその大きさに驚いた

馬尾港船着場で



にちがいない。そのスケールはまさに中国的な雄大さだ。

閩江の「閩」の字は、このあたりに古くから住む閩越人からきている。漢の時代に閩越王なる人物がこの地を治め、その名を川に残した。

観察使のいる福州にはその河口からさらに三十キロさかのぼらなければならぬ。

私たちはその川をさかのぼって来た空海の視座を体験するために船で馬尾港周辺を巡航した。馬尾港とは福州市の閩江に面した港である。

河口からさかのぼって来ると、閩江は馬尾港近くで北西にむけてほとんど九十度近く曲がる。その曲がり角の高台には北宋時代に建てられたという羅星塔が立っているが、もちろん空海はその塔を見てはいない。

その塔の下から馬尾港ははじまる。それは唐の時代と同じ場所であった。遣唐使船は港の近くで停止してイカリをおろしただろう。当時、直接海からの入国は禁止されていたからだ。

そしてすぐに観察使あてに使いが出されただろう。いや、すでに赤岸鎮の役人から連絡を受けて、奇妙な船がやってくることを観察使は知っていたにちがいない。

観察使はこの船を密輸船と判断したらしい。着くやいなや船に乗っている百二十人を船からひきざりおろした上、船を封印してしまった。そ



のうえ一行は、上陸することも、船にもどることも許されず、湿った砂の上で生活しなければならなかった。

「私は日本国の大使である」と藤原葛野麻呂は主張したが役人はとりあわなかった。大使ならば、当然持っているはずの国書や印符を持っていなかったからである。

空海、自筆の伝記であり遺言でもある「御遺言」に書いてある（一説にはこの書は弟子によって書かれたともいわれる）。「然りといえども、船を封じ、人を追って湿地の上に居らしむ」

葛野麻呂は観察使の閻濟美（たんのけい）に何度も手紙を書いた。しかし、それは徹底的に無視された。文章によってその人を知ろうとする中国人にとつて大使の文章はあまりにもたどたどしすぎたからである。葛野麻呂をせめるわけにはいかない。現在、どれほど中国語に熟達した人でも中国の名文家以上の文章を中国語で書ける日本人はいない。

そこで空海が登場してくる。空海入唐の最もドラマチックな場面のひとつである。

だれが空海を推薦したのか、大使は空海に懇請して代筆を頼む。

このとき空海が書いた「大使の為に福州の観察使に与うるの書」は、名文家空海が残した文章の中でも名文中の名文といわれ、私たちにも、



その音のリズムと華麗なる文体が伝わってくる。

### 随行員にもれて空海再び嘆願書

「賀能（葛野麻呂の別名）啓す」からはじまるこの文章を要約すると、まず大唐の聖帝に会いに来た自分たちの旅がいかに過酷であったかを訴える。そして唐と日本とはいまさら印符などは必要ないほどに心が通じあっており、中国と日本の天子は友好を結んでいるのに、その天子の使いでやって来た自分たちを信じないのは何ごとかとせめる。しかし、あなたたち官吏から見れば、自分たちを疑うのは役目から当然のことだと相手を尊重しながらも、これにしても自分たちを海中におくのは何ごとだと再びせめる。まだ天子の徳酒を飲んでもいないのに、このような仕打ちをうける理由はないと。そして、自分たちを長安へ導くことが、すべての人々を唐の皇帝になびかせることではないかと書く。

みごとに論理というほかはない。しかもこの文章は四六駢儷体（せんれいたい）というきわめて華麗な文体でそれぞれの文章がきちんと韻をふみ、形式だけではなく、内容的にも、中国の文学書である「文選」や孔子、孟子の儒教、老子、荘子の道教の教養ある言葉がいたるところにちりばめられている。



空海のこの教養は、おじの阿刀大足あらおおたりに授けられたというが、知識はともかくその文体は空海のみみはずれた才能が作り出したものだろう。

この書を受け取った閻濟美は驚いた。文をもって出世する中国の官僚の中にもこれだけの文章を書ける者はいないばかりか、長安にもまればないか。

この一文をもって閻濟美の、遣唐使に対する待遇は一変した。これほどの文章を書く者が密輸船にいるはずはないからだ。

使者を長安へ出すとともに、船の封印をとき、一行のための仮の宿舎十三戸を作った。

そして長安へ走った使者が「大使を国賓として待遇せよ」という皇帝からの命令を伝えると、さらに待遇は激変した。

そして大使一行は、長安からの勅使の迎えを待つて出発することになる。もつとも百二十人がすべて長安へ行くわけではない。大使と随行員二十数人が選ばれ、残りは船を修理したあと海路北上し、大使らが帰国の途につく明州（現在の寧波）で待たなければならぬ。

ところが観察使によって選ばれた入京組の中に空海の名がなかった。理由はわからない。想像によれば、空海の文章力にほれきってしまった閻濟美が、自分の文章秘書として空海を欲しくなったともいわれている。



それでは何のために命がけて入唐したかわからない。

空海は再び嘆願書を書く。

「日本国留学の沙門空海、啓す」という文で始まるこの書は、自分は非才ながら国から新しい学問を勉強することを荷わされてきている。いろいろ事情もあるだろうが入京させて欲しいと、閻濟美の人徳にすがっている。

もしこのとき閻濟美が「ノー」といったら、日本の真言宗はないばかりか、日本の仏教と文化はまったく別の方向へ行っただろう。それほど重要な意味を、このとき三十一歳の空海は背負っている。結果は入京を許された。

### 大河を前に開眼法要

大使と空海一行が福州を出発し、長安へ向かったのは、秋も終わりに近い十一月三日である。

私たちは、空海たちが罪人のごとく湿った砂の上ですごし、一転して国賓待遇をうけた馬尾港がはるかかなたに見える鼓山（九二五メートル）の涌泉寺の山門の前に立ち、千百八十年前の空海の時代を想像している。



木々の間から空海たちがさかのぼって行ったであろう閩江の大きな流れがよく見える。

涌泉寺は空海が入唐してから約百年のちの九十八年に建った。この寺に私たちがのぼったのは、空海の石碑をたて、その開眼法要をするためである。

「弘法大師がこの地にやってきて長安へ向かったことを私たちは誇りに思っております」と涌泉寺の普雨法師は、山門を入った正面に石碑の場所を選んでおいてくれた。寺の一等地である。石碑の位置から山門を通してはるかに閩江をのぞむことができる。

阿部野竜正・高野山真言宗務総長の書による「空海入唐之地」の、新しい石碑の前で五人の真言僧は千八十年前の空海に思いをはせながら、おごそかに法要を営んだ。

青年空海が、三十一歳の能力のすべてをかけて突破した福州上陸と入唐のドラマの舞台はこの福州市から二千四百キロの道程にある。

私たちが、空海のとを追って福州から閩江をさかのぼる。



### 唐代の船交通は想像以上に発達

「唐の時代に、福州から南平へ向かうには陸路をとることはまずありえません。途中、山がけわしく、大きく迂回しなければならず、遠回りになるでしょう。空海大師もおそらく水路をとったでしょう」と、福州の西禅寺の梵輝法師は重要な示唆をしてくれた。

空海一行が、福州から長安へ向けて出発した最初の旅が陸路なのか、それとも大河・閩江（びんかう）をさかのぼる水路であったのか、空海の足跡をたどる私たちは選びかねていた。

定説では、長安から遣唐使一行を迎えに来た勅使が用意してくれた馬で出発したことになっている。しかし、唐代の閩江は船による交通が思っていたよりはるかに発達していたようだ。

「当時は、福州には水夫がたくさんおり、閩江をさかのぼる船が浅瀬にのりあげると、綱をつけてひっぱりあげて歩いたものです。俗に閩江には三千八百段の階段があるといわれていまして、それほど浅瀬が多く、そこでは川の流れが階段のように段をつくる。その急流にはどうしても水夫の力が必要なのです」という。



私たちはその閩江を左手に見ながら、車で南平へ向かった。

川の流れは実にさまざまな風景を見せる。あるときは大人のようにゆったりと幅広く、止まったように流れたかと思うと、急に狭くなって激しいあわだちを見せながら荒々しく流れる。

その流れの中を、動力をもたない多くの船が行き来している。流れを必死でさかのぼる手こぎの船も多い。彼らは急流がさかまいて逆流する場所を実に巧妙に選んで乗り、激流には、瞬発力を発揮して一気に流れを乗り切り、再びおだやかな流れを選びながら上流へとこのぼって行く。その技術は、空海の時代にはあったのだろうか。

現在、動力をつけた船は福州―南平約百六十キロを上りに十六時間、下りに八時間をかけるという。

閩江に沿った陸路は現在の水口あたりから大きく迂回して古田に出るために南平までの距離は二百四十六キロである。もし空海たちが陸路をとったとすれば赤ちゃけた土がむきだしになった山道をくねりながら何度も上り下りをしなければならなかったであろう。

南平は四方を山にかこまれた峡谷のような土地でありながら、唐の時代からこの地方の中心地として栄えた。ここで建溪と富屯溪が合流して閩江となるために、その二つの川の上流から運ばれてくる農作物や材木



もまたここで合流し、大都市福州へと運ばれる。逆に福州から山の中の町や村へ運ばれる物資もまたこの南平を通る。

早朝、南平を出発して閩江を下るイカダの群れは壮観である。

南平市街の対岸の高台にある九峰公園にのぼってみる。公園からは南平の町並みと二つの川が合流するさまが眼下に見下ろせる。

公園の中にある冷風閣に立つと閩江の左右の山の上に二つの塔を見ることができ、けんしんまきちう剣津双塔という。

閩江は十一月でも水量がたっぷり

二つの川は剣の刃のごとく鋭く、そしてしばしばはらんした。そこで南平の人々は閩江の左右の岸に塔を建てて「人」の字のように流れる川の左右に二つの点を入れ「火」という文字に変えた。火によって水を押さえようというのである。ところが、火に変えたとたんに南平市内に火事が多くなり、そこで九峰公園に「冷風閣」を建てて、火を押さえたいのである。

閩江をさかのぼって来た空海の一行はもちろんこの剣津双塔は見えない。しかし、閩江が終わって二つの支流にわかれる地点から富屯溪に



入ったところにひとつの城門を見たはずだ。「延寿門」という。船で南平に着いた人は必ずこの門をくぐって南平の城内に入った。空海たちも閩江をのぼって来て、城内でひと休みしたとすれば、当然この門をくぐった。現在の門は明の時代以後のものだが、形式はそれ以前と変わっていない。

私たちも市内に入る。

南平の夏玉瑚市長は日本にも来たことがあり、「空海・長安への道」になみなみならぬ興味を示してくれた。

「唐の時代に遣唐使と空海大師がこの町を通ったという記録か伝承があるか、市の歴史家に調べてもらいます。もし新しい事実がわかったら必ずお知らせします」と市長は約束してくれた。

市長によれば、南平から建甌けんおうや浦城ほじょうへの道は陸路よりもやはり水路の方が便利だという。

「大きな船だと無理ですが、四、五人乗りの百葉船ならば十分にのぼって行けます。特に八、九月の水量の多い時ならば浅瀬も少ないし、大師一行がのぼった十一月でも水量はありますから」

二十三人の一行と勅使らが何隻もの百葉船をつらねて建溪をのぼっていく光景を、現在の川をのぼる風景とダブらせながら、建甌へ向かう。

建甌通濟門



### 千七百年の歴史を耐える通濟門

その建甌で後漢の時代からそのままの姿で約千七百年の歴史を耐えている城門に出合った。南平の延寿門と同じように、港にあり、船人たちはみなその門をくぐって城内に入る。名前を「通濟門」という。その古色はいかにも千数百年を経た色で、私たちの想像力を空海の時代へと飛翔させるのに十分であり、城内に入る空海の姿をなぜか確信し、感動した。

空海は、いま私たちがこの門をくぐりぬけるように、ゆっくりと歩いて行ったはずである。城内に入ると、食べもの屋、雑貨屋、その他もろもろの店と、人々の喧騒がとび込んできたに違いない。人々が暮らし、生きている体温のようなものを感じる光景は千七八十年前も今も変わりはなないだろう。

船はこの建甌からさらに浦城までさかのぼることができる。最初私たちは空海一行が水路をとることができるのは南平までが限界だと考えたのだが、旅を進めてくるにつれて、意外にも水路は浦城までのびていることがわかった。



最盛期には、無動力船の時代でも一日百隻以上の船が建甌から浦城へと向かったというのである。

ただし、水路をとると、建甌から浦城までの百六十四キロは、五日かかる。陸路ならば無理すれば三日で歩ける距離だという。

正月の皇帝の拝賀に間にあうように旅を急ぐ大使一行は、楽な水路よりも旅を短縮できる陸路を選んだかも知れない。大使の藤原葛麻呂のちに書いた復命書によれば「星に発し、星に宿す。晨昏兼行せり」(日本後紀)というような旅であった。

もし彼らが陸路をとって浦城へ入ったとしたら、最後の峠を越えて瞬間「アツノ」と驚いたにちがいない。

武夷山脈のまっただ中にある浦城の町は、山に囲まれた盆地ながら、日本の平野に近い壮大さをもっている。日本の地理感覚からは想像できない。

町の歴史は二千年以上もあり、人口は三十八万。福建省と江西省と浙江省の境界近くにある。「古来、中国では浦城を得た者は勝利し、失った者は敗れるといわれるほど戦路上重要な都市です」と市の幹部は自慢げに語った。

浦城登瀛門



### 杭州めざし、旅路急ぐ

そもそも水路をとって来たならば、南平、建甌と同じように港に着き、「登瀛門」という門をくぐっただろう。何度か建てかえられながらも、今もその門は残っている。

この浦城の料理は山の中ながらすこぶるうまい。

しかし、空海たちはその食を楽しんでいる余裕はなかっただろう。中間目標である杭州へ一日も早く着きたかったはずだ。

杭州は、多くの遣唐使が日本を出て明州に着き、長安へ向かうときのメインストリートにある。古都である。

杭州に出るには、もうひとつ仙霞嶺という最大の難所がある。

浦城で集めた情報によると、浦城からほぼ北北東に二十四キロ行ったところに漁梁駅という宿場があり、その中心に万葉寺という寺がある。そこからさらに二十六キロ先に浮蓋山という山があり、大雲寺という寺がある。浦城から浙江省の江山方面へ抜ける僧たちは、みなその寺へ泊まるというのだ。その浮蓋山のところの嶺が仙霞関(唐代の名は仙霞関)という関所がある。その関所を通れば、江山まで下り道の六十キロ。足



の速い人ならば一日の距離だという。

その楓嶺関は省の境界にあり未開放のため、旅の全行程でただ一カ所私たちは通ることを許されなかったが「空海大師が杭州に抜けるには、そのコースしかありえない」と浦城の人たちは言った。

楓嶺関を下って江山に出れば衢江という川があり、それはやがて富春江、錢塘江せんとうがしという大河になって杭州湾へそそぐ。その川の流れにさえ乗れば「空海・長安への道」はスピードを増し一気に杭州まで下る。

最澄はまっすぐ天台山めざした

長安への道でも最大の難関のひとつである仙霞嶺を越えた遣唐使と空海一行は江山へと転がるように下ったであろう。

江山には蘭溪江という川がある。この川には途中、七里灘、富春江と名前を変えながら水の量を増し、最後は錢塘江という巨大な川になって杭州湾にそそぐ。

錢塘江が杭州に流れ込むと、左手に巨大な塔が見える。六和塔である。この八角十三層の塔と、錢塘江をまたぐ全長一・五キロの錢塘江大橋は巨大な自然にたちむかうような人工の建造物として調和のとれた景観を



作り出している。

江山から川を下ってきた空海が船を寄せたであろう唐代の船着場は、この塔の下流、三百メートルほどのところにある。

浙江省海洋学研究員であり、運河の専門家である朱士俊さんによれば、唐時代の杭州は、現在の市内の中央まで海であった。その南西のはずれに柳浦という船着き場があり、銭塘江を下って来た空海たちはそこで船を降りたか、京杭運河につながる市内の細い水路に入った。

「もし市内に上陸したならば、当時の宿泊施設である樟亭駅に泊まったと思います。この駅には、美しい梅の木があり、詩人の白居易は、その梅を見ないでこの地を去ったことを後悔する詩を書いています」

そして、寺に泊まったとするならば、当時、杭州にあった大きな寺、開元寺と龍興寺のどちらかだっただろうと朱さんは推定した。

市内に入った空海たちは中国の湖の中でも最も美しい湖のひとつに数えられる西湖をながめるくらいの時間はあつたはずだ。

古来、杭州は「上に天堂（天国）あれば、下に蘇州、杭州あり」といわれ、多くの文人墨客がこの地の風景を愛する詩を残している。唐の文学にも深い造詣をもっていた空海のことだからその詩のいくつかをそらんじていたかも知れない。



私たちは、この杭州から逆もどりをすることになるが、ぜひともたずねなければならぬところがある。杭州から南東へ約二二〇キロの天台山国清寺である。

八〇四年、日本を出発した第十六次遣唐使船は、空海以外にもうひとり日本の文化史にとつて忘れられない重要な人物をのせていた。のちの伝教大師・最澄である。

大使と空海たちが乗った第一船は、台風のとちとちで赤岸鎮に漂着したが、最澄たちが乗った第二船は五十五日間漂つて明州に着いている。

しかし、最澄は長安へ行かずに一直線に明州から天台山へ向かった。当時、唐の高僧の七割以上は都の長安に集まっていたといわれる。にもかかわらず最澄は天台山をめざした。

天台山は、中国天台宗を大成させた隋の智顛ちでんが開いた。インドから中国へ伝わった経典や論は、非体系的であったが、それを体系化し、教判きょうはんとして、全体像をまとめあげることによって智顛は中国仏教史に大きな足跡を残した。

空海の天才に対して、最澄という不世出の秀才はその全体を天台山で学びたかったにちがいない。



しかし空海はちがっていた。その仏教の全体像を超える新しい体系としての密教を長安に求めた。

最澄にとつての密教は、法華や禪や浄土などと並列する仏教のひとつの宗派にすぎなかったが、空海にとつての密教は、それら頭教と一線を画する世界であった。

二人のこのちがいは、帰国後、両者に決定的な溝をつくる。しかしいざれにしても日本文化にとつて、同じ時代にまったく異なった二人の偉大な才能をもったことは幸運なことだったといつてよい。

空海が、銭塘江を下り、杭州を通過してさらに長安に向かった同じ時間に、最澄は天台山で必死に学んでいた。二人が中国本土で最も接近した瞬間である。

その天台山へ行く。

天台山国清寺は、最澄の時代も今も厳格なる朝課をもつてなる。午前三時起床。三時半には、大きな寺の境内から、八十数人の僧と、百人を越す在家の男女が大雄宝殿に集まり、六時まで荘嚴なる勤行を行う。その間、仏に向かって何十回もの仏足頂礼（仏の足下を拜する最敬礼）をくりかえす。鐘と太鼓を鳴らし、堂内を何度も巡歩する。その行を行うまじめそうな僧の中に、最澄の姿を見るような気がした。朝の冷気が一瞬



の弛緩しかんも許さないほどきびしい朝課であった。

貪欲な空海は万般の書物を求めた

私たちの旅もまた急がなければならぬ。この天台山から約百キロ北東にある寧波市にも足をのばしたい。かつての明州は最澄たちの第三船が漂着したところであり、また帰路の空海が八〇六年に日本にむけて出発したところである。

途中に阿育王寺と天童寺がある。阿育王寺は円仁が、天童寺では曹洞宗の道元が修行をしている。いずれも日本仏教には深いかかわりをもつ寺である。

寧波の港は、もはや唐代の面影などどこにもなかった。当然のことだろう。唐代から天然の良港とされ、交通、通商の中心地として栄えたこの町は「ニンポー」という呼び名の響きのよさとともによく知られる港町だ。

その寧波から、紹興まで急いでもどる。私たちはこのは地域でもう一カ所、調査しなければならない重要な場所を残している。

八〇六年、恵果和尚から正純密教のすべてを伝授された空海は、帰路、



この紹興(越州)に滞在し、集め残した経書などの収集を必死でやっている。その滞在の寺の場所を探さなければならない。

空海が、何月にこの地へやって来たかわからないが、四月には「越州の節度使に与えて内外の経書を求むる啓」という文書を残している。

越州に入った空海は、この地でシヨッキングなことを聞く。遣唐使藤原葛麻呂とともに、先に帰国した最澄が、惠果と相弟子にあたるこの地の龍興寺の順暁(じゆんきやう)という僧から、密教を伝授されたという話である。

のちにその密教は、空海が惠果から受けた密教全体の一部であることがわかり、最澄は空海に弟子入りして密教の本流を学ぼうとするのだが、このとき空海は、一瞬ガク然としたにちがいない。

しかし、精神と肉体がバネのようだったと思われる空海は、その失望にもめげず、中国の文化のあらゆる書物などを集めるために活動する。すでに長安で、使える金のほとんどは使い果たしてしまっただが、空海は貪欲だ。

「今、げんに長安城の中にして写し得るところの経論疏等、すべて三百余軸、及び大悲胎藏金剛界等の大曼荼羅の尊容、力をつくし、財をつくしてもとめ逐うて図画せり。然れども人は劣に、教は広くして未だ一毫をだも抜かず。衣鉢つき尽きて人を雇うこともよくせず、食寝を忘れ



書写に勞す……」と、越州の節度使に窮状を訴え、「伏して願はくは、かの遺命を顧みてこの遠涉をあはれみて、三教の中の經・律・論・疏・伝記ないし詩・賦・碑・銘・卜・医・五明所撰の教の、蒙をひらき、物を濟ふべき者、多少遠方に流伝したまえ」

ともかく仏教書はもとより詩から医学から五明（インドの諸科学）にいたるまで、人々のためになる書物すべてを日本に伝えたいと頼んでいるのである。

その空海が四カ月以上は滞在したと思われる寺は開元寺という。その寺の所在だけでも探し出すのが今度の調査の目的であった。

唐代の越州にくわしい同市文物管理委员会の陳維子さんは「開元寺は唐代初期のものと末期のものと二つある」という説を出した。

「おそらく、空海大師の滞在した開元寺は唐末の開元寺で、その寺のあとは、今、病院になっています」というのである。

私たちはその病院に行ってみたが、もはや空海の影はなかった。ただ、二つの開元寺の位置を確認したことで、空海の足跡がもうひとつ具体性をもったことで満足するしかなかった。

— 急ぎ杭州へもどる。さらに空海の後を追って、蘇州へ向かうためである。それは、空海のドラマを予感する旅の持続でもあった。



蘇州美人と花鳥風月と

杭州方向から蘇州に入る運河はその手前で二又に分かれる。右に行く  
と、そのまま蘇州の町に入り、左へ行くと、町を右に見ながら、無錫に  
向かう。空海たちはどちらの運河で蘇州を通過したか。いずれにしても、  
唐代の蘇州の船着に場は市の西側、金門の近くにあったというから、京  
杭運河を杭州からやってきた空海一行は市内に入るにしても出るにして  
も必ずそのそばを通らなければならない橋がある。「楓橋」である。京杭  
運河から蘇州市内への河の門のようにあるこの橋は、何よりも「楓橋夜  
泊」という七言絶句の詩で知られる。

月落ち、鳥啼いて、霜、天に満つ

江楓 漁火 愁眠に對す

姑蘇城外 寒山寺

夜半の鐘声 客船に到る

この詩はおそらく日本で最も知られた唐詩だろう。楓橋に着けた船の中  
で一泊した作者が、夜半しばしまどろんで夢うつつの光景をうたった  
ものである。作者の張継は七五六年ごろの人というから空海の時代には



すでにこの詩は作られている。

その楓橋から寒山寺までは二百メートルと離れていない。六朝時代(二〇一五八九)に建てられたといわれるこの寺は、小さいながらも名刺である。中国の仏教的人格が到達する「自在の境地」の典型ともいえるべき「寒山と拾得」の二人の僧が住んだともいわれる。

空海もおそらくこの詩を知っていたであろう。そして寒山寺境内に入つて伽藍の構造くらいは見学したかもしれない。

美しい詩と湖の町・杭州に心を残しながら空海一行は、蘇州に向かう船上の人となつたであろう。

中国では「南船北馬」という言葉が今も残り、浙江、江蘇の両省は驚くほど水路が発達している。

現在の北京付近から揚子江を越えてその杭州を結ぶ大運河を完成させたのは隋の煬帝である。六〇五年、淮水と黄河を結ぶ通済渠つうさいきよという運河を開いたのをかわきりにわずか五、六年の間に大運河を完成させてしまった。その完成を記念して四階建ての超豪華な竜船を浮かべ、美女をばべらせて揚州から北京付近まで行幸した。その船を引いた人夫の数は八万人だったという。

中国は自然の美も巨大だが、それを作り変える力も巨大だ。



空海も当然、その運河を通って長安へと急いだ。当時の杭州市内の船着きは現在、北のはずれの拱宸橋きょうしんきょうという橋のあたりだと聞いて検証に出かけた。長崎の眼鏡橋を巨大にしたようなもので、その下を何隻もの船が往来している。

私たちがこの杭州から船の旅にすることにした。現在の船着き場はこの拱宸橋よりも市の中心に近く、航運会社の船発着所がある。

### 煬帝の大運河を幻想招く夜の旅

夕方、その発着所に着くと、待合室はごったがえしていた。ここから出発する船は、蘇州方面だけでなく、杭州から四方に散る。何隻もの船が連結され、低い汽笛を発して出発していく。その光景と喧噪は港というより夜行列車駅の発着に近い。

船が動きはじめる。私たちの船は二隻連結である。ひとつの寢室には上下四つのベッドがある。

運河の夜の旅は不思議な光景を見せてくれる。すぐ目の前の岸の家々の生活が目の前を通りすぎる。明るい電灯の下で食事をする家族、談笑する家族、読書をする人、それらの人々の生活ぶりが目の前に現れたか



と思うと、闇の中に消えて行く。幻想のような風景と、船のスピードとが不思議な感覚を与えてくれる。

夜が明けると、もう蘇州の町だった。船はゆっくりと運河を走る。蘇州の町は外城河という運河によって四角にかこまれるようにしてある。

つまり運河が外濠そとぼりのように町を囲み、その町は八つの大きな橋で城外とつながっている。それは唐の時代にも変わりはない。

京杭運河は、この寒山寺の目の前を通っているのである。

空海たちも余裕があれば、蘇州市内を歩き、この東洋の水の都を味わっただろう。

中国の風流人は、官を辞してのち、この蘇州に庭園つきの邸宅を建て、蘇州美人と花鳥風月に囲まれて余生を送ることを理想とした。今も市内に残る百七十以上の名園は、それら風流人たちの感性の遺産である。

宇宙と自分の一体感を密教に求めた空海は、箱庭のような感性とは無縁であったと思われるが、まれにみる詩質をもっていた空海がその中国的風流をどう感じとったか――。



初めて「実像」つかんだ

蘇州にはもうひとつ重要な寺がある。市街より西十二キロのところにある靈巖山寺だ。

この寺は、呉王・夫差と寵妃・西施の離宮として建てられたが、唐の時代、天台宗の中興の祖の一人である道邃（ちゆうすい）が法華三昧を行じた寺でもあるという説もある。

道邃はのちに天台山で最澄に天台宗を授けた人だから、日本の仏教史にも関係なくはない。しかしその故事よりも、現在この寺が重要なのは、一九八〇年十二月、中国仏学院靈巖山寺分院が建てられ、現在も十六歳から三十歳までの学生たち百二十人が勉強していることである。

中国仏教と寺院は一九六六年から六九年にかけての文化大革命の時代にほとんど破壊され、仏像はくだかれ僧は寺を追い払われた。

そして現在、破壊された寺は政府の援助と信者の寄金によってめざましく復興されつつあるが、仏学院は、その担い手である若い僧の養成機関である。修行期間二年を終えると、若い僧たちは、地方の寺へ散って行く。



霧がたちこめる靈巖山に登り、寺の応接室で明学法師に仏学院の現状を聞き、唐代のこの蘇州周辺の仏教地図を聞いているうちに、法師は突然意外なことを言った。

「実は、この寺の経藏殿には、空海大師の銅像が二体あります」

私たち一行八人のだれも、それが私たちがその影を追いつめている弘法大師空海とは思えず、同名の中国僧のことかと錯覚するほど突然の「空海の出現」であった。

「それは日本の弘法大師空海のことですか」と問い直したほどである。

「そうです。空海大師です。その像は、解放後の一九五〇年ごろ、蘇州に住む呉谷宜さんという在家の人が、この像を寺であずかってほしいと持つて来たものです」という。呉さんはいまは亡いが、生前、中国では「東密」と呼ばれる日本の真言宗系の仏教を信じていたらしい。

さっそくその経藏殿に案内してもらうと、二体の空海像は、金色の釈迦の涅槃像涅槃の前に座していた。一体は台座の上に座し、一体は結跏趺坐の姿勢のままである。案内の僧が、像を抱きかかえて後ろ姿を見せてくれるとそこには二体ともに空海像の文字がはっきりと書かれている。

「おそらく、明の時代につくられたものでしょう」と僧。

一体、いつ、どこで、だれが鑄造したものかはわからない。



ふつう、日本における空海像は右手に五鈷を持ち、左手に数珠を持つ独特のスタイルをしているのだが、この像は二体とも「仏像」の形をとり、その顔は気品が漂っている。

五人の真言僧たちは、空海の突然の出現に、最初はとまどいながら、その像を胸に抱き興奮した。

その広い中国の風土の中に埋没してしまっただかに見えた空海が、突然像となって現れてきたのだ。それは、空海の影が見えかくれするだけで、なかなか実像とを結びえないことにいらだつ私たちへの、「勇気づけ」の出現だったかも知れない。

### 人々の生活眺め快適な運河の旅

蘇州から無錫、常州、鎮江と船の旅が続く。隋の煬帝ようていがその絶大なる権力にものをいわせて完成させた運河の旅である。

運河の幅は、ときには百メートル以上に広がることもあるが、ふつう五十メートル、狭いところは三十メートル。そして橋をくぐるときには、すれちがう船とぶつかりあいながら進む。

それにしても、なんたる人工の力か。浙江省から江蘇省、河南省にい



たる幹線は大小の運河が網の目のようにはりめぐらされている。それは人体模型図に見る血管のようでもある。

そして運河の旅は、バスや汽車の旅では絶対に見られない光景を見せてくれる。ふつうの道路から見た中国の旅が表玄関からの旅だとするならば、運河の旅は台所口を見て歩くような旅だ。沿岸の人々は、運河の水で野菜を洗い、その運河の水で生活物資のすべてを運ぶ。それは中国の人々の「生活図鑑」を見るような旅でもある。

遣唐使と空海一行も唐の人々の生活ぶりを見ながらの旅だっただろう。密教の形而上学的な宇宙観と論理にむかいながら、一方で民衆の生活にかぎらない興味をいだいていた空海は、目を輝かせながらその光景を見ていたにちがいない。

当時の船の旅はどのようなものだったか。運河の沿線に住む何人もの人々にたずねた。その話を総合すると……

遣唐使といえば国賓である。一行の船は、この運河を往来していた当時の船では最上級に属していただろう。風を利用する蓬船（ほりせん）という帆船があった。風が止まると、兩岸から人夫が綱で引っぱった。動力船が行きかう現在でも、中国の運河には船を引っぱる人夫たちの石の道が運河の中に延々と続いているところがある。その道の建設だけでも気の遠くな



るような話だ。

隋の煬帝の船は一度に五百人の人間が引いたという。空海たちの船を何人が引いたかはわからない。一行の食事はどうしていたのだろうか。食事のときには陸にあがったのか。

「いや、船の中で食事を作り、食べながら旅したでしょう」。案内の人は明快に答えた。現在でも船上で暮らす人々は行灶しんくわという七輪に似た鉄のカマドを使っている。昔は粘土と麦ワラをこね、型にはめて作ったというからまさに七輪だ。その火で料理を作った。運河の岸々で米や野菜を求め、どんなメニューの食事だったのか。「食べる」というきまめて人間的な行為と空海とを結びつけての想像は楽しい。

船は無錫むしゃくに入る。かつては錫すずの特産地であったのに、掘りつくされてしまったので「無錫」の名がついたといわれるこの町は中国の五大淡水湖のひとつ太湖のほとりにあり、町の中を大運河が通っている。空海たちも当然、船でこの町に入ってきた。

古運河が町に入ったそのつきあたりに古い町並みが残っており、唐代に船き場があった南禅寺跡がある。山門は中華民国時代のものであり、寺院はあとかたもなく、本堂である大雄宝殿のあったあたりは無錫第二ゴム工場になっている。ただひとつ、かつて南禅寺の塔があったところ



に、北宋時代に建てられたという妙光塔があり、わずかに寺の所在を教えてくれるが、ここでも空海の足跡は消えていた。

無錫から常州への船の旅はさらに楽しいものであった。現代中国の人々の暮らしがパノラマのように展開するのだ。それを見学し、さまざまな想像をするには船の速度は快適だ。

### 日本僧が学んだ江南第一の禅林

常州に着く。町のほぼ中央に艤舟亭という公園があり清の乾隆帝が愛した庭園が残る。現在の船着き場はその公園のそばだが、唐代の古運河の河港は、天寧寺という寺の山門の目の前にあつた。現在、その運河は使われていないが、かつては、上り下りの船のすべては、そこに止まつた。

天寧寺は唐代の禅の高僧の一人、法融禪師が六四九年に創建した寺で、現在でも江南第一の禅林と呼ばれている。明から清の時代にかけて、何人かの日本の僧が留学し、この寺からも月霞という僧が日本に渡った記録がある。現在は洪徳法師というすぐれた禅僧が住職をしているが、法師は「この寺に空海大師が留学していたという伝説がある」と話しはじ



めた。

解放前（一九四九年以前）までこの寺の四天王殿の前には、縦八〇センチ、横三〇センチほどの板に「空海上人留学處」という文字が書かれていたという。そして一枚の写真を見せてくれた。そこには「山川草木轉荒涼十里風」という一節ではじまる詩の書が写っており、その書の最後には「爲食橋先生、空海上人留学處、民國二十九年八月、常州天寧寺、若愚」の文字が見える。

つまり、この書は、中華民國二十九年（一九四〇）にこの寺の若愚という僧が、日本の倉橋という人のために書いたものであり、写真はその書を見つけた人が撮影し、この寺に送ってくれたものなのだ。

はたして空海はこの寺で禅を学んだ事実があるのかどうかはわからないが、空海がこの寺の前の運河を通った八〇四年から千百八十年たった現在もなお、空海の伝説が脈々と生きていることに驚く。

#### 各寺に残る空海伝説

中国における空海伝説は長江（揚子江）の川畔の都市、鎮江へ行くときらに具体的になる。この町には金山寺と定慧寺という二つの古刹がある。



長江の川の中にある焦山の定慧寺の住職である茗山法師は、中国仏教協会の理事であり、この地方の仏教界の重鎮だが「空海大師が二つの寺に立ち寄ったことはまちがいない」という。

鎮江は長江をはさんで対岸の揚州と船によって結ばれており、運河を通ってきた船は、揚州に渡る前に必ず鎮江に停泊した。

「空海大師の時代から定慧寺は天台、法相など中国の各宗派を兼学しており、中国仏教のすべてを学ぼうとした大師は、当然ここに寄ったはずだ」というのである。そして金山寺には空海大師をしたので書かれた詩が書として今も残っていることを教えてくれたうえ案内までかつて出してくれた。

金山寺は金山寺味噌の発祥地といわれ、十五世紀には雪舟が訪れた寺としても知られる。

その応接室には三幅の書の掛け軸がかけられていた。いずれも、その詩の前に「空海上人修行古刹」または「弘法大師修行古刹」と書かれており、金山寺の住職であったと伝えられる善性という和尚の書である。

詩の内容は金山寺を中心としたこのあたりの風光の美しさや、仏教的心情をうたったもので、禅味にあふれている。しかし、善性という和尚が、いつの時代の人なのかは記録に残っていない。茗山法師の推定では



明の時代の書ではないかという。「おそらく、空海大師がこの寺に寄ったことを忘れないために書いたのでしよう」

対岸の揚州には、日本の律宗を伝えた鑑真和尚の住した大明寺があり、和尚が日本に渡るための船を造らせた港のあとも残っている。そして、二つの都市よりもわずかに上流にある南京を含めた三つの都市は、唐の時代、仏教が最も盛んだった地方であることもわかった。その南京は、三論宗の発祥地、棲霞寺がある。寺には、随の文帝が作らせた石の五重塔があり、大小の石仏が岩に彫られている。

これまでの説では、南京は空海の長安への道からはずされていたが、私たちは、時間に余裕があった帰路、空海は南京にも足をのばしたかも知れぬという仮定をもちはじめた。空海が出家得度したのは「三論宗」であり、その総本山ともいべき棲霞寺が目と鼻の先にあるのに、無視するほうが不自然だからである。

論理を抽象化することに天才的でありながら、同時に野性のような行動力をもっていた空海が、中国のひとつの象徴ともいべきこの長江をまたぐ寺々を、どう巡り歩いたか。空海の頭の中に描かれたであろう唐代の中国仏教地図を推論しながら、私たちは、さらに長安(西安)へ向かう。



### 砂煙の中に中国最古の「白馬寺」

遣唐使と空海一行は揚州からさらに運河を進み、淮安、商丘、開封(汴州・べんしゅう)へと船の旅をした。汴州からは陸路をとったはずである。馬または馬車の旅である。当時の官道は、現在の鉄道とほぼ一致しているというから、その道は、唐代の第二の都市、洛陽まで、まっすぐにのびていただろう。道は現在には完全に舗装されているが、そのころは、もうもうたる砂煙のあがる道だったと思われる。洛陽に近づくと、その砂煙の中に巨大な寺が現れたはずだ。白馬寺である。この寺は中国最初の寺といわれ、その歴史的な意味もふくめて、いつの時代にも大切にされてきた。

現在、門の前には左右に二頭の石の馬が立ち、観光客の記念撮影の場となっている。この馬には古い伝説がある。

後漢の明帝は、ある夜、金色に輝く人の夢を見た。それが仏であることを教えられたので、秦景という使者を西域に派遣して仏法を求めさせた。ところが秦景はその旅の途中で白馬に仏像や経典をのせたインド僧の迦葉摩騰カセツマツと竺法蘭シツポランの一行に出会ったので連れて帰り、明帝に報告した



ところ、喜ばれ、都洛陽の門外に白馬寺を建てて住まわしたという。門前の馬はその白馬の記念である。

空海はその伝説を知っていたかどうか。しかし、自らが学ぼうとする中国仏教の最古の寺に敬意を表して参拝しただろう。

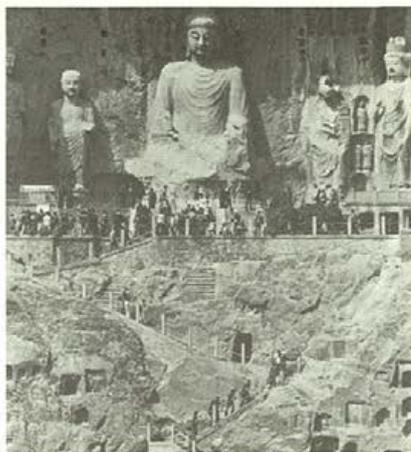
白馬寺から洛陽の都までは十キロたらずである。その規模とにぎわいは長安に劣らないほどだったという。春秋の時代(紀元前七七〇年)から王城が建ち、九つの王朝が城を築いた。唐の皇帝たちは、しばしば長安を離れ、この風光明媚な副都に長期滞在したという。

### 岩に刻み込まれる「洛陽仏教史」

空海一行はどの門から城内に入ったか。城内の中央を大きな川が流れている洛河(洛水)である。そしてその川をまたぐ天津橋は、当時、漢籍を読む日本の教養人ならば知らぬものがないほど有名な橋だったというから、空海一行もその橋を、特別の感慨とともに渡ったはずだ。

その橋は現在の洛陽市では、町のはずれにあたり、石だらけの河原の中にコンクリート橋化されて残されている。

洛陽にはもうひとつ巨大な仏教遺跡がある。龍門の石窟だ。この石窟



は北魏の時代から石仏が彫られはじめ、唐の時代に、かの女傑・則天武后が自分の化粧料で彫らせたという毘盧遮那仏をはじめ、大小十万の仏が、岩肌いばしに彫られている。いわば、岩に刻みこまれた洛陽仏教史の記憶である。

しかし、空海にとつて、それらの石仏群よりもはるかに興味があつたのは、善無畏ぜんむゐと金剛智こんごうちという二人の密教の相承者たちの墓がある寺へ行くことであつたらう。

インドで、釈迦によつて生まれた仏教は、七世紀ごろになると完全に密教化し「大日経」と「金剛頂経」という画期的な経典を生みだす。仏教経典のほとんどは教主が釈迦であるのに対し、この二つのお経は、大日如来という「宇宙の真理」ともいうべき形而上学的な仏を教主とする。つまり、密教は、大日如来という絶対的な仏を生みだすことによつて仏の世界をひとつのマンダラにまとめあげた。大日経は胎藏マンダラを、金剛頂経は金剛界マンダラという仏教絵画を生みだした。

二つの経典はインドの異なつた地方でつくられ、まったく異なつた人によつて中国に伝えられた。それが善無畏と金剛智である。

善無畏は中インドのオリッサの国王であつたが、位を捨てて出家し、ナーランダー寺で密教の奥義をきわめ、西域から天山南路を通つて七一

福先寺（古唐寺）



六年に長安に着いた。八十歳になっていたという。時の玄宗皇帝はこのインドからはるばるやって来た高僧を厚遇した。彼はその庇護の下で八十九歳のときに「大日経」を漢訳している。

一方、金剛智は中インドの人だ。十歳のとき、ナーランダー寺で出家し、三十一歳のときから龍智について密教を学び、その後、セイロンから海路中国に渡った。善無畏に遅れること三年の七一九年のことだ。その後「金剛頂経」を漢訳する。

この二人の僧の布教という宗教的情熱なしには、密教はインドから中国に伝わっていない。そして二人の密教僧は長安で活躍したあと洛陽で没した。

二つの密教が合流空海に伝えられた

善無畏は、大日経系の密教を一行と玄超に伝え、玄超はそれを惠果に伝える。金剛智は金剛頂経系の密教を不空に、不空は惠果に。

つまり二つの密教は長安の惠果和尚のところで合流し、それが日本からやってきた空海に伝えられるのだが、それはのちの話だ。

空海は遣唐使とともに唐にわたる以前にすでに「大日経」は読んでい



たといわれる。日本ではどうしてもつかみ切れないその經典の真理を会得するために入唐を志したといわれる。当然、その訳者であり、法の継承者である善無畏の名を知っていただろう。

また空海は、自分は不空の生まれかわりだと信じていたといわれるから、その師である金剛智の存在も、当然知っていたとしても不思議はない。

その二人の僧が住した寺と墓はこの洛陽の龍門にあるはずだが、具体的な場所がわからない。

私たち「空海・長安への道」の調査隊は、その寺を見つけだすことをこの町での第一の目的とした。

二つの寺の跡は、比較的安易にわかった。洛陽の龍門文物保管所の研究員で、仏教考古学者の温玉成さんは、唐の時代の洛陽の寺院の跡を専門に研究する学者でもあった。

「二人の密教者の寺の跡は、いまはもう麦畑になっていますが、もしよろしければこれから案内いたしましょう」という申し出に、われわれはあぜんとした。密教史の中で光り輝く二人の先師たちとはいえ、千二百年以上も昔の寺の位置がそれほど簡単にわかるとは思えなかったからである。



善無畏の広化寺は龍門の石窟よりも約一・五キロ手前の丘の上にあった。一面の麦畑の中である。「また発掘をしていますがのでよくわかりませんが、調査をすれば山門の位置から塔の位置、あるいは大雄宝殿の位置まではつきりとわかると思います。善無畏の墓石が出てくる可能性もあるでしょう」

その寺の跡には石碑が建てられ、いずれは発掘して調査しなければならぬ地点であることははつきりと示していた。

金剛智の奉先寺は、その広化寺跡から、龍門の石窟の裏側を通るようにして南に三・三キロほどのところにあった。こちらの寺の跡は広化寺ほどはつきりせず、わずか三十メートル四方ほどの台地が残っているだけだ。しかし、後の本格的な調査のために、畑を一メートル以上は掘り起こさないように注意されているという。

もし、これらの二つの寺が発掘されれば、中国の密教の歴史は、その全体像をあらわすはずだ。

それはともかく八〇四年の空海。

空海が洛陽を通過した時点では二つの寺は当然、まだその威容を誇っていただろう。二人の祖師の墓があれば、空海はその前にぬかずいたにちがいない。



### 長安への最後の難関「函谷関」へ

生まれ故郷のインドから八十歳の年齢をおして、熱砂のシルクロードを歩き、入唐した善無畏。

ベンガル湾を横ぎり、インドネシアを通る海路を乗り越えて唐に入った金剛智が生きた時代から六、七十年のちに、日本の一青年僧、空海がいまその洛陽を通る。

密教を伝えるために、あらゆる艱難辛苦（かたがたしんどく）を耐えた人たちと、その密教を学ぶために死を賭して入唐した青年僧が、ひとつの歴史の舞台で交差する。

しかし、空海たちは、そのような歴史的な感慨にひたりきっている時間はない。

目的の唐の都・長安へ入るためには函谷関という最後の難関が待っているからである。



### 徒歩での通過は許されなかった

洛陽から長安(西安)への道は、地図の上では一直線に延びている。しかし、その道は旅人を簡単には唐の都・長安へ入れてくれない。途中「函谷関」という自然の関所がある。「箱根の山は天下の険、函谷関も物ならず」と唱歌でうたわれる難所である。

私たちはその関を徒歩で通りたいと熱望したが、未開放地区であることと、危険であるという理由で許可されなかった。しかし、この道に關しては大正十年に講演され、のちに文章化された桑原隲蔵博士のくわしい考証「大師の入唐」の記録がある。

博士はその道を実際に歩き、空海の時代を考証している。

その記録によれば、洛陽から馬車で西へ二日、澠池マキ界があり、そこからさらに一日で硤石、そしてさらに二日で函谷関だというから洛陽からはまる五日ということになる。

その函谷関は「両側壁立千仞」という有様で、その間に辛くして一馬車を通ずる事ができる。実に函谷の名に背かぬ。ソレデ三町位の間隔で処所に崖を切り開き、両馬車に途中で行違う時に、一を避け一を過ごす余



地を作つてある。この函谷関を通過する間は、馬方は絶えず一種の大声を揚げて、前方から来る馬車を警戒する」

そしてうっかり途中で出くわすと、その狭い道でおたがい前進も後退もできず、行き違いでできる幅だけ崖を切りくずして歩かなければならぬはめにおちいるという。

函谷関から、また二日行くと潼関である。ここまでくれば、もう長安は目の前である。長安の約三〇キロ手前に、唐の玄宗皇帝が愛する楊貴妃のために華清宮を作つた驪山温泉がある。広い池のまわりに朱塗りの亭が点在する庭園は中国的美の極致である。その「華清池」から秦始皇陵は近い。

空海たち一行は、玄宗と楊貴妃がくりひろげた盛唐の華麗にして耽溺の限りともいえる世界をどのように想像しながらその横を通りすぎたか。まもなく潮橋はきょうという橋がある。長安の人たちは、親しい人が東に旅をするときにはこの橋まで送り、柳の枝を折ってはなむけのしるしにしたという。その橋の下を渭河が流れる。

土手には、植られたばかりの新しい柳の木が風になびいていた。空海の時代からすでに何代目かの柳であろう。

その潮橋からさらに五キロ歩くと、長安の郊外である長樂坂である。

長安城、東門に到着



唐の時代、すべての人はここで送り迎えした。徳川時代の江戸に対する品川の役割をしていたらしい。

遣唐使・藤原葛野麻呂と空海一行は、八〇四年の十二月二十一日にここに到着した。

福州を出て四十九日目である。私たちもその旅程を追跡したが、あらためてその旅の過酷さを想像できる。

おそらく、人も荷もすべて土ぼこりにまみれた到着であったろう。一行は、この地に二日滞在している。旅の疲れをいやすためだけではなく、遣唐使としての体裁を整えるためには、最低それくらいの時間を必要としたのだろう。

### 唐の都・巨大な雑踏

長安へ入ったのは十二月二十三日である。春明門をくぐって城内に入ると、北には興慶宮があった。古くはこの宮殿で皇帝の王子たちが育ったが、空海の時代には役人たちが事務をとる官庁として使われている。そこからさらに城内に入ると、南に東市がある。長安には当時、東西に大きな市があり、人々はみなその市で買い物をしていた。



なにしろ、長安はその当時、人口百万の巨大な国際都市である。その台所をまかなうだけでも、想像を絶する量の食物が、その城内に運び込まれてはいたはずだ。

その市のにぎわいを空海たちはどう見たか。

おそらく「これが長安だ」という実感はその巨大な雑踏の中に足を踏み入れた瞬間にわきおこっただろう。当時、長安にいた外国人は約四千人といわれる。西域の人、ペルシャ人、インド人、あるいは遠くローマあたりから来た人々もその雑踏の中にいたはずである。

大使一行は本来ならば、国立の迎賓館であった鴻臚寺（こうらじ）にその宿舎をかまえるはずであったが、満員だったのか、宣陽坊にあった公館に落ち着いた。

しかし、一行は、長安の街を見物して歩く暇もないほどに忙しかった。皇帝への正月の拝賀の準備をしなければならぬからである。

そして正月の公式儀礼をすませると、その月の二十三日、今上皇帝である徳宗が六十四歳で崩御した。国賓である大使たちも、当然その葬列に参加しなければならなかっただろう。空海は、唐の大皇帝が葬られる華麗にして荘厳なる葬儀を、どのようなまなざしで見ていたのだろうか。

葬儀を終えた大使たちは、二月十日に長安を去っている。儀礼をすま



せたら、すみやかに去るのが、皇帝に出費をかきねさせないための礼儀だからだ。

都に残った空海たち留学生は、小うるさい上司がいなくなった気楽さを味わったかも知れない。それでなくとも、処々を歩きまわることの好きな空海は、あこがれの長安の町を隅から隅までのぞき歩いたか。

長安は南北八キロ、東西九キロの巨大な壁によって囲われた都市である。その町のまん中を、北から南へむかって朱雀大路がまっすぐ走り、皇城を背にして左側（東）に五十五坊、右側（西）に五十五坊の、やはり壁によって囲われた坊があった。

左街は主に屋敷や公官庁などがあり、右街には民家や食堂、酒樓、商店などがひしめいていた。そして東西に二つの巨大な市場があった。

大使が帰国の途についたあと、空海は宣陽坊から右街の延康坊にある西明寺に移っている。

唐の時代に最大の規模を誇ったこの寺は「大唐西域記」で知られる玄奘三蔵が設計した寺で、インドの祇園精舎を地上に再現したものだといわれている。その大きな寺の一室をあてがわれた空海は、そこを拠点に長安の街を歩きまわった。西明寺のすぐ北には西市がある。西市の周辺は庶民の街である。このあたりは西域の商人などがたくさん住んでいた



といわれる。

キリスト教との出会いを楽しむ

シルクロードを通って、ギリシャ、ローマ、ベルシヤなどの商品が運ばれて来ただけでなく、多くの文化が集まっていた。

例えば宗教ひとつとっても祇教(シキョウ)(ソロアスター教)マニ教(ソロアスター教)とキリスト教が影響しあってできた宗教、それにキリスト教までもが伝わっていた。いうまでもなく、儒教、道教、そして仏教がそれに加わる。

西安陝西省博物館の碑林には「大秦景教流行中国碑」が保存されている。景教とはキリスト教ネストリウス派の中国名で、この碑が建てられたのは、空海たちがその死に出合った徳宗の建中二年(七八一)というから、空海の時代、長安ではキリスト教も大いに流行していたとみていい。日本という世界の東の端の島国の中で独学しながら、インドで生まれた仏教の宇宙論の結晶ともいうべき密教の、ほとんどすべてを知りつくしてしまったほど想像力豊かな空海は、おそらく、それらの宗教寺院や教会を見てまわったにちがいない。キリスト教の十字架の前で、この宗



教の人間観や宇宙観、そして神なる概念に思考をめぐらす空海の姿を想像することは楽しい。

もつとも、この時期の空海が、単に長安のにぎわいを楽しみ、他宗を見学してばかりいたわけではない。

長安の醜泉寺に住む北インド出身の般若三蔵と牟尼室利三蔵について、サンスクリット語とインド哲学を学んでいる。

密教は五感を総動員させる仏教だといわれるが、その中でも口から出る言語がもっているそのものの音や意味を大事にすること。空海はそのことの本質を見ぬき、入唐してその最初の学習をサンクルリット語にあてたとと思われる。

言語を修習するというきわめて地味な勉強をする一方で、空海は長安の名士たちと、次々と交際したようだ。こんどの旅の間に、中国の人々から「五筆和尚」という名をしばしば聞いた。空海が、二本の手と二本の足、そしてもう一つ、口で筆をくわえ、五本の筆と一緒に動かして書を書いたという伝説から生まれたニックネームだが、空海は詩と書によって社交界でスターであったらしい。

空海の感性はまた、国際都市・長安で、水を得た魚のごとく自在に開いていたのだろう。そうして、青龍寺の恵果と運命的な出会いをする。



## 七世紀、密教に画期的な二経典

その出会いのドラマが展開した舞台の背景をまず説明しなければなら  
ないだろう。

釈迦によって生まれた仏教は、五、六世紀になってインドウー教など  
のインド土着の宗教を包摂したり、あるいは習合したりしながら密教化  
していく。それを仏教の墮落ととらえる人もいるが、仏たちの宇宙を構  
造化し、図像化し、体系化したことにおいて、密教はそれ以前の仏教と  
はまったく異なった独自の世界を創りあげたことによって、東洋のさま  
ざまな哲学や宗教の中で異彩をはなつ。

そしてその密教は、七世紀に入って、大日経と金剛頂経という画期的  
な経典を生みだす。大日如来という宇宙の絶対的真理ともいえるべき形而  
上学的な最高仏を教主としたこの二つの経典は、インドのまったく異な  
った地方で別々に生まれたといわれるが、中国にもまったく異なったコ  
ースで、異なった人の手によって伝えられる。大日経は胎蔵マンダラと  
いう仏教絵画に図案化され金剛頂経は金剛界マンダラにその宇宙を具体  
化して、それぞれ、善無畏、金剛智という二人の巨匠によって中国に伝

大興善寺の法輪殿跡



えられた。そして、二つの密教の流れは、不空、一行、玄超らを通して、惠果のところで合流する。

この宗教の特長は、加持祈禱と修法の実際的な面に強いことだ。なかでも不空のそれは、唐代随一であり、三代の皇帝がその祈禱能力を信頼していたという。

当時の中国はすでに法相、華嚴、天台、浄土、律、禅などの仏教が中国仏教として独自の発展をとげていた。インドから最後に伝わった密教が、中国で急速に力をのびしたのはその祈禱力によるものだといっている。

また、きらびやかな祭壇を使い、派手な舞台装置を駆使させる密教の華やかさが、中国史上、最も絢爛たる文化を作りあげた唐の時代に似あっていたともいえる。

いずれにしても空海というスーパースターは、その華やかな唐の都・長安の、最も華やかな仏教である密教の表舞台に登場した。

都に着いて半年入念な準備期間

空海が、密教の正統なる相承者である青龍寺の惠果を訪問したのは貞



元二十一年（八〇五）の五月の末か、六月のはじめだといわれている。長安へ着いて半年の月日が流れている。その半年を「空海は、惠果に自分のウワサをふきこませ、じらせておいて会いに行つた」と皮肉に見る人もあるが、二十年の予定で入唐した空海にしてみれば、偉大なる密教の相承者に会うための入念な準備期間であつたと見るほうが素直だろう。

空海は、西明寺で起居をともにしている志明、談勝ら数人の僧とともに青龍寺の東塔院を訪れている。

空海をひと目見た惠果は、手をとらんばかりに歓迎の身振りを見せ、満面に微笑をたたえて、

「われ先きより、汝の来れるを知り、相待つこと久し、今日、相まみゆるは大いに好し大いに好し。報命つきなんとするに、付法する人なし。必ずすべからく速かに香花を弁じ、灌頂せんじょうだん坦に入るべし」といった。

僧じられぬほどのほれこみ方である。一面識もなかつた三十二歳の青年僧、それも、東の隅の小さな国の一人の僧に、密教の法のすべてをすぐ授けるといふのだ。

惠果には当時でも千人を超す弟子がいたと伝えられる。その中でわずか一人にしか伝えなかつた金剛界、胎藏界の両部を一気に授けたいと、師自ら申し出たのだ。

青龍寺（右）と大雁塔（中央）



奇跡なのか。いや、むしろ空海の密教はすでに惠果に会うときに、満月が満ちる直前までできあがっており、惠果に会って一滴の水をもらえばそれで完成する力量に達していたと見るべきだろう。

六月上旬には学法灌頂壇に入って大悲胎藏の灌頂を受け、七月上旬には金剛界灌頂を、八月上旬には伝法阿闍梨位の灌頂を受けている。

灌頂とはもともと国王が即位のときに四大海の水を汲んで帝王の頭上にそそいで四大海の掌握を意味した儀式だが、密教では如来の五智を象徴する五瓶の水を用いて秘密法門の印可伝授、師資相承、密教の法灯をつたえる儀式であり、阿闍梨とは、密教に精通した偉大なる師の意味だ。空海はわずか三カ月でそのすべてを授かった。

### 日中共同で往時の青龍寺を再現

惠果のいる青龍寺へ。空海は居住する西明寺から毎日徒歩で通ったと伝えられる。

その肉体的距離感と、空海が見たであろう風景の視座を知りたくて歩いてみた。

西明寺は今はない。民家がたてこみ、道路には貸本屋が店をだし、子



供たちが立ち読みをしている。

歩きはじめる。長安(西安)の街は、現在でもほぼ碁盤の目のようになっており、きわめてわかりやすい。歩く速度というのは、その街を見るには最高だ。人々の暮らしぶりや生活の中の感情までもがじかに伝わってくる。肉屋、靴屋、漬物屋、雑貨屋、食堂、それらの店先で笑い、怒り、話し、うずくまる人々のさまざまな表情が見える。密教のすさまじいばかりに形而上学的な哲学とその修法を学ぶ通学の途中で、空海は街の人たちの下世話な生活ぶりにふれたのであろう。

西明寺から、青龍寺へ行く途中、小雁塔と大雁塔という唐代の代表的な塔が、町の屋根の上に見えたりかくれたりする。

そして、玄奘三蔵が自らも土を運んで建てたという大雁塔をすぎると、高台にある青龍寺の屋根が見える。いま、そこでは、日本の全真言宗と中国仏教協会、西安市が協力して唐代の建築様式そのままに、青龍寺を再現しつつあり、この九月には完成する。

青龍寺までは約十キロ。ふつうに歩いて二時間半の距離であった。

それはともかく、恵果は空海に密教のすべてを伝授したあと、リレーのランナーが次のランナーにバトンを渡したあととばかりと倒れるがごとく入滅した。十二月十五日のことだ。もし空海の入唐が半年遅れていた



たら、密教の本流は日本に伝わらなかった。空海はそれほどの幸運さで恵果と会った。そして「空海・長安への道」のドラマはここで終わる。

空海は恵果の死の翌年の十月、二十年の留学をわずか二年半で切りあげて帰国している。師・恵果の遺言で、日本へ帰り密教の布教をするためだ。しかし、空海がその二年半の留学で得て、日本にもちかえった哲学や請来物が、その後の日本文化に与えた影響ははかり知れない。

第二章

大師と入唐道



## 弘法大師の福州から長安への道

備前 有隆

### 一、大師長安への道に関する碩学の説

弘法大師空海が、第十六次遣唐大使藤原葛野麻呂の船に搭乗して、唐貞元二十年（八〇四）に福州長溪県赤岸鎮已南の海口に漂着したのが同年八月十日。それから福州に廻航して上陸を許され、十月三日に福州を発つて長安の都に赴き、十二月二十一日に長楽駅に到着したことは知られている。しかし、福州からどのような道筋を採られて長安の都に上られたのかは記録が残っていない。

このたびの「空海・長安への道」の踏査と追体験をするに当り、参考にした碩学の想定になる道筋を要約すると次のようになる。

#### (一) 桑原隲藏説

唐代の交通道路はほぼ一定しているから大師一行の採られた道筋も大体見当はつく。

福州から閩江の流れを溯つて、南平県、建安県、浦城県を経て浙江省に入り、錢塘江の流れに沿うて杭州に出られたと想像する。福州杭州間の距離は約千六百六十(華)里で十七、八日間の行程である。私はこの道筋については何等の体験がないので何事をも申述べることができない。

杭州からは隋の煬帝の開いた運河を蘇州から更に水路を往くこと三百八十(華)里で潤州(鎮江)に至る。ここで長江(揚子江)を渡ると、その対岸が陽州である。

揚州から運河によつて、更に千三、四百(華)里進むと、遂に汴州(開封)に達する。運河は汴州で一段落を告げる。黄河にも荷物船は通ずるがかなり急流を溯ることになるので、時日を要するから、旅客はこれを利用せぬ。大師一行は汴州で船を辞して、陸路に就かれたであろう。

陸路に行くには所謂北馬で、身分のある人は大抵馬車を雇うから、大使と弘法大師の一行は勿論馬車を利用されたことと想う。

汴州から洛陽まで四百(華)里。馬車では普通五、六日を要する。洛陽から二日で澗池県がある。ここから唐時代に有名な潼関まで四百(華)里。大体に黄河の南岸に沿い、山谷の間を行くので道路は険悪である。

澗池から西の方一日程の所に硤石という所がある。丁度東西の谷底に当つて通行頗る困難である。硤石から更に西へ二日路で、有名な函谷関に差し掛る。我が二里許りの間は、両側壁立千仞で、その間に辛く一馬車を通ずることが出来る程だ。函谷関から更に二日程で潼関に達する。潼関から三日程前進すると臨潼県で驪山の温泉がある。ここから日本里数で三里許り往くと灊水の澗に出る。川には瀾橋が架してあり、長安から東へ旅立する時に別れを惜しむ所である。灊水から我が一里程行くといよいよ長安の郊外に達し、長安坡という長さ一町餘りの坂があり、長安出入の人々をここでも送り迎えた。長安駅はこの長安坡下にあつた。弘法大師一行が貞元二十年十二月二十一日に到着し

た所である。

福州から長安まで約五千三百〔華〕里。『元和郡縣圖志』に五千二百九十五里とある。『日本後紀』に此州（福州）去京七千五百廿里とあるのは間違いと断ぜねばならない。

帰路は往時と同一の駅路を反対に杭州に下り、杭州から越州に往き、明州から帰朝された。（『桑原騷藏全集』第一卷「大師の入唐」より）

## （二）常盤大定校閲、大宮権平説

長安の行途は記録の微すべきもの未だ発見されず明確に記するを得ざれども、唐代の交通路より福州から長安への道を推断すれば、蓋し二路有り。一路は、閩江上流より江西省の南昌に出、九江を経て長江を溯り武昌より漢水に入り、襄陽、光化を過ぎて陸路を執り商南、藍関を踰えて長安に入るものである。しかし、この行程を五十日弱で踏破するのは困難である。運河路を執られたものと推定すれば第二路となる。すなわち、

閩江を溯り南平、建甌、浦城の各県を経て、仙霞嶺を踰えて浙江省に入り、錢塘江流域を下り、江山、衢、龍游、蘭溪、建德、桐廬、富陽の各県を経て杭州に入る。此間千六百六十華里。杭州からは運河にて三百五十華里で蘇州。また三百八十華里にて潤州（鎮江）に達し、長江を北に渡り揚州に入る。

ここより西北千六百五十華里は隋の煬帝の汴水開鑿の通済渠にして、河南省汴州（開封）に達す。この運河は元時代には黄河の氾濫水道となり、其の後廢滅淤塞した。現代その位置を推考すれば、河南省商邱、永城の南方より安徽省宿、靈璧、泗の間に点々とその痕跡を印する古汴河のそれであろうか。

汴州以西は陸路によられたと推断し、中牟、鄭、滎陽、汜水、鞏、偃師の各地を過ぎ洛陽に到る。此間四百華里。洛陽から新安、湍池、硤石、陝、靈宝を経、函谷関を過ぎ閎郷を経て潼関に到る。此間五百華里。これより以西は関中渭水の流域にして、華陰、華、渭南、臨潼を経て灊橋を過ぎ、長樂坡に到る。此間三百華里。福州出発以来日を経、て四十九日。道程五千三百華里。

帰朝の途は、往路を還り、杭州より東して越州へ向う。長安より三千五百三十華里。明州より出帆して帰朝された。  
〔掛軸「弘法大師入唐巡路想察図」弘法大師入唐経路概要誌より〕

### (三) 蓮生観善説

大師一行は福州より閩江の流れを溯つて、今の南平県、建安県、浦城県を経て浙江省に入り、錢塘の流れに沿うて杭州に出られたと思われる。福州より杭州までの間は中華里数の千六百六十里で、十七、八日間の行程である。この杭州から水路三百五十里往くと蘇州である。蘇州から水路三百八十里往くと江蘇省丹徒県に至る。ここで揚子江を向う側へ渡ると揚州である。

揚州からは運河に依つて更に千三、四百里北に進むと汴州に達する。汴州からは陸路が便利であるから陸路を採り、馬車に乗られたに違いない。

汴州から西へ四百里餘り行くと洛陽に着する。馬車にて五、六日の行程である。洛陽から更に西へ四日程行くと名高い函谷関があり、この函谷関から六日程行くと長安の郊外長樂坡に至る。〔弘法大師傳〕より〕

#### (四) 三浦章夫説

大師等、福州より上都長安城に到る道程の記事を闕く。今其往路を考えるに、陸路閩江を下り建州に至る六百里。建州より浦城県を経て衢州に至る七百里。衢州より睦州に至る二百八十一里。錢塘江を遡りて杭州に至る三百十五里。杭州より江南河の運河により蘇州に至る三百七十里。蘇州より常州に至る百九十里。常州より潤州に至る百七十里。揚子江を渡りて淮南道揚州に至る七十里。揚州より水路刊溝の運河によりて楚州に至る三百里。楚州に上陸す。汴州より鄭州に至る百四十里。鄭州より東都(洛陽)に著す二百八十里。更に東都より陝州に至る三百五十里。陝州より潼関に至る二百里。関より華州に至る百二十里。華州より西方百八十里にして上都に達する。(弘法大師傳記集覽)より)

以上発表年代の古い順に道程の部分のみを要約して記してみた。

(一) 桑原隲藏氏は明治四十年四月から四十二年三月まで満二年間清国へ留学の間に、洛陽長安方面、山東河南方面、東蒙古地方、江南地方などを旅行している。

「大師の入唐」はこの旅行の記録と体験を土台に大正十一年六月十五日、弘法大師降誕記念に講演されたものである。氏は大師の道筋の中で福州杭州間は何等の体験がないといっている。江南地方の旅行の際は南京、鎮江、上海、杭州、紹興と行ったが、上海、杭州、紹興間はまだ鉄道がなかった。洛陽長安方面の旅行では臨海線も僅かに開封鄭州間がやっと開通した許りで、交通上の不便さは大師入唐の頃と大差ないとされている。

(二) 大宮権平氏は「日露戦後以来引続き二十餘年間中国内地踏査旅行中、唐代の交通路を調査し、大師当時の御巡路を略観察しつつ尚研究中の所、桑原隲藏博士が宗祖降誕会において講演せられたる御巡路想定と偶然一致したるは実

に觀喜極りなし。」と「弘法大師御入唐巡路想察圖」の附記に述べている。また汴州以南淮陰間の唐代の運河は、全く淤塞湮滅し、その地を踏査するも知らずして通過する如く、或は古書伝説に據りて知るも、その遺跡認むるに由なく、時代の推移に伴い水路の変遷は大陸平野においてその例多し。としている。

(三)蓮生觀善氏の「弘法大師傳」の「福州より長安へ」の項は、桑原氏のものをもとにした記述と思われ、殆ど同じである。

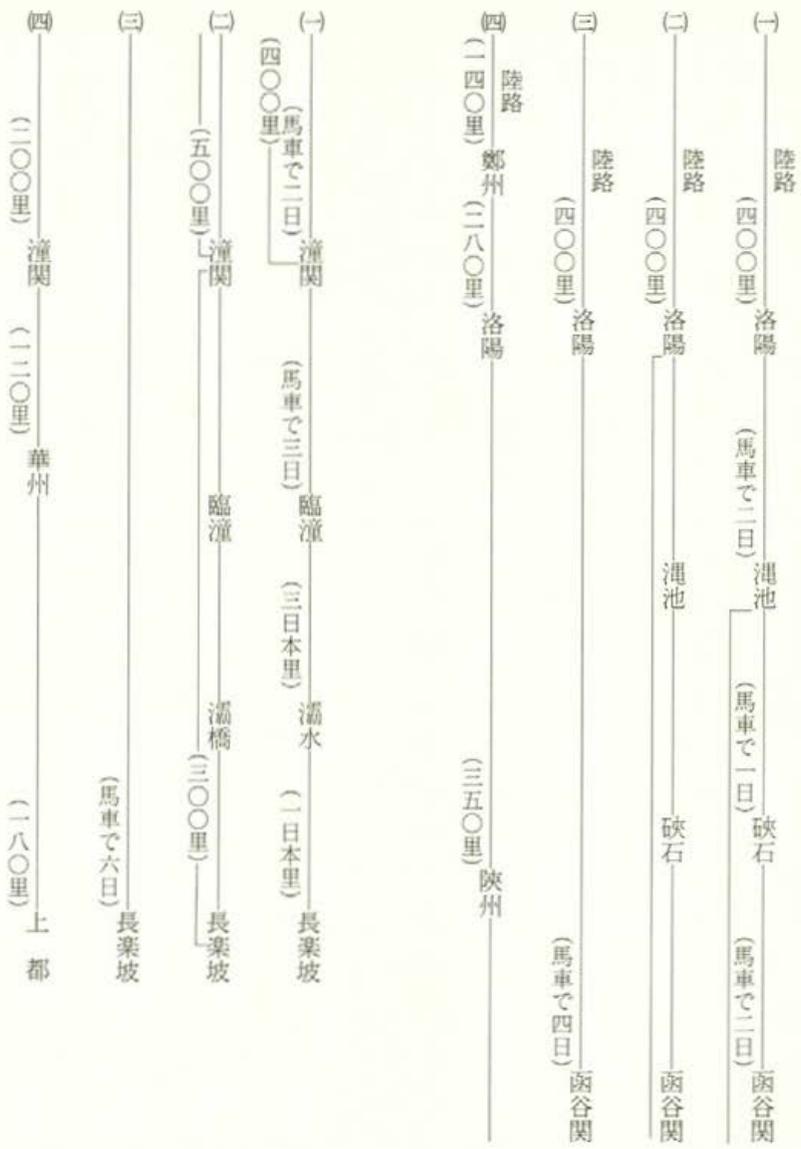
(四)三浦章夫氏の「弘法大師傳記集覽」の延暦二十三年十一月三日の大師等福州を發し上都長安城に向う項の説明文章は、同本の索引部分の前の所に「大師入唐地圖」として大宮權平氏の地図と全く同じものを縮小して載せている所から、その巡路道筋については、これに據つたものと思われる。

文中の表現、「閩江を下り」は「閩江を上り」、「錢塘江を遡りて」は「錢塘江を下りて」でないとおかしい。

これら四説はその道筋において殆ど同じで、交通手段の違いも少い。里程については区々であり、どれも不完全で福州から長樂坡までの全行程の距離数は計算できない。(二)の大宮權平氏のもの、揚州間の里数が記されていないのみで、合計してみると五千二百四十里となり、「元和郡縣圖志」福州の項に記す「西北至上都五千二百九十五里」に近い数が出ている。

四説の道筋里程を次に比較して表にして記した。

- (一) 桑原隲藏 福州 閩江を溯って 南平 建安 浦城 錢塘江の流れに沿って (二六六〇里) 杭州
- (二) 大宮権平 福州 閩江を溯って 南平 建甌 浦城 江山 衢、龍游、蘭溪、建德、桐廬、富陽 (二六六〇里) 杭州
- (三) 蓮生觀善 福州 閩江を溯って 南平 建安 浦城 錢塘江の流れに沿って (二六六〇里) 杭州
- (四) 三浦章夫 福州 陸路 (六〇〇里) 建州 浦城 (七〇〇里) 衢州 (二八一里) 睦州 (三二五里) 杭州
- (一) 水路 (三五〇里) 蘇州 水路 (三八〇里) 潤州 (?) 揚州 運河 (一三〇〇~一四〇〇里) 汴州
- (二) 運河 (三五〇里) 蘇州 運河 (三八〇里) 潤州 (?) 揚州 泗、盩、宿、永城、商邱 (一六五〇里) 汴州
- (三) 水路 (三五〇里) 蘇州 水路 (三八〇里) 潤州 (?) 揚州 運河 (一三〇〇~一四〇〇里) 汴州
- (四) 江南河 (三七〇里) 蘇州 (一九〇里) 常州 (一七〇里) 潤州 (七〇里) 揚州 刊溝水路 (三三〇里) 楚州 (?)



## 二、唐代の交通路

唐代の交通路はどうなっていたのであろうか。「世界歴史大系」(平凡社)や「唐宋時代の交通と地誌地圖の研究」(青山定雄著)から、弘法大師空海長安への道に関する方面のものを挙げてみたい。

唐代には、道路は中央では刑部司門郎中、地方では州の戸曹司・戸參軍の掌どるところで普通官路といわれ、重要なは大路と呼ばれた。都の長安を中心にして、主要幹線路が放射線状に全国に及んでいて、その官用交通の發達は、中央集権的封建国家として、政治的經濟的な發展を促進した。

唐代の交通路は陸路と水路に分けて確認するのがよいと思う。先ず陸路として、

第一は、長安より東し、潼関の関門を通り、陝州(河南省陝県)洛陽を経て汴州(河南省開封県)に至り、汴河淮河に沿うて東南行し、ついで揚州(江蘇省江都県)において揚子江を渡り、潤州(江蘇省鎮江県)蘇州(江蘇省吳県)より杭州(浙江省杭県)に至り、更に錢塘江に沿つて衢州(浙江省衢県)に出で、信州(江西省上饒県)建州(福建省建甌県)を経て福州(福建省閩侯県)に通ずるものである。

この第一路については、次のような説明もある。

汴州より東南揚子江下流域方面への街道は、南北連絡の運河即ち汴河に沿つて東南行し泗州(安徽省泗県東南百八十里、今洪澤湖中に没す)より揚州に出た。泗州は淮汴合流点に位置し、それより揚州に赴くには楚州經由の水路と淮河の対岸肝胎經由の陸路とがあった。陸路は「元和郡縣圖志」に泗州より東南陸行して揚州に至る二百七十三里とある。揚州からは揚子江を渡つて潤州(鎮江市)蘇州(吳県)杭州等を経て、錢塘江に沿ひ睦州(建德県)婺州(金華市)等よ

り衡州（衡県）に達した。これは建州（建甌県）に出て福建への街道をなしている。

第二は、長安より東南行し、南山の関門たる武関を経て襄州（湖北省襄陽県）に至り、沔州（湖北省漢陽県）において江を渡つて鄂州（湖北省武昌県）に出で、それより洪州（江西省南昌県）虔州（江西省贛県）を通過つて今の江西省を縦断し、大庾嶺を越えて韶州（広東省曲江県）に出で広州（広東省番禺県）に達するものである。

第三は、長安より東南行し、武関を経て襄州に至り、第二の路と分かれ、荊州（湖北省江陵県）より揚子江を渡つて南行し、岳州（湖南省岳陽県）衡州（湖南省衡陽県）郴州（湖南省郴州）を経て今の湖南省を縦断し、韶州において再び合して広州に至る。

これらの三路は第一路の信州（上饒県）より分岐して洪州（南昌県）袁州（江西省宜春県）を経て衡州に至る路によつて横に連絡されていた。この三路は南北交通の陸路幹線道路である。

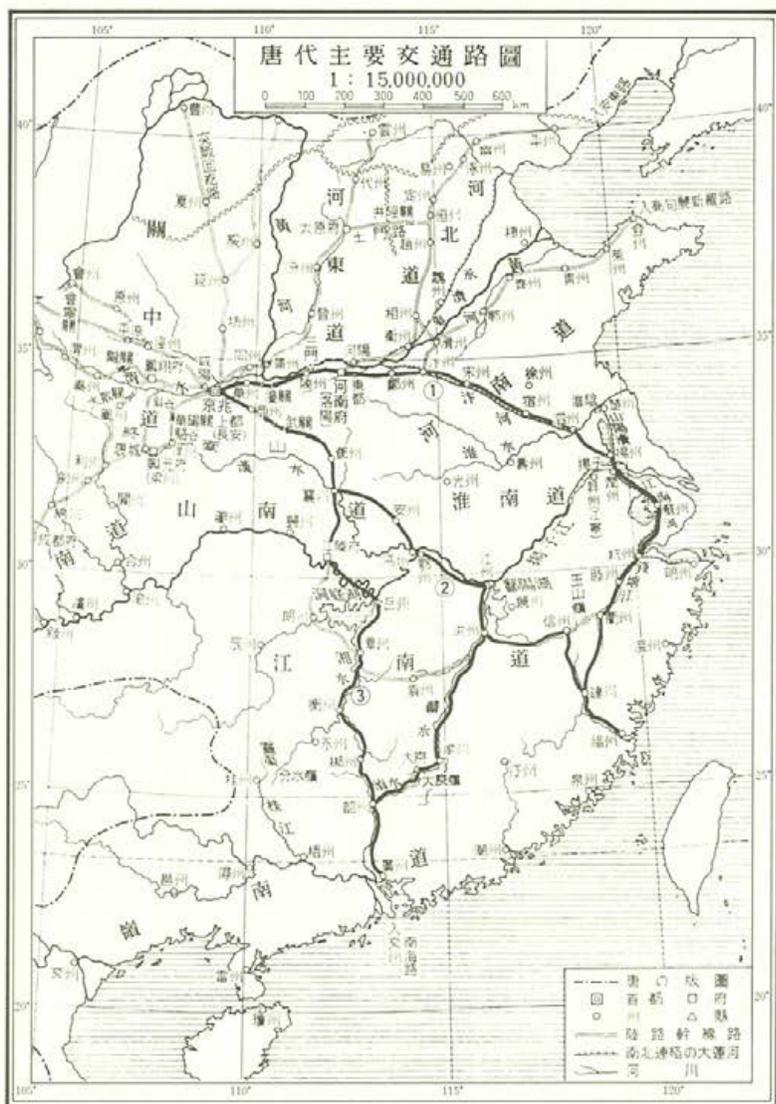
次に水路であるが、水路は南方北方南北連絡の三水路に分けることができる。今は大師入唐に関するものとして、南方水路と南北連絡の水路とを見てみよう。

南方においては揚子江及びその支流の湘水、贛水、漢水等をはじめ、淮河、錢塘江、洞庭湖、鄱陽湖等があり、これらの河川と湖沼とは運河の連絡と相俟つて縦横に通じている。

湘水は、陽子江、洞庭湖から衡州、潭州（湖南省長沙県）の都市に連なり、更に靈渠や漑水桂江等の水路によつて広州に通ずる。

贛水も揚子江から鄱陽湖、洪州、虔州に連なり大庾嶺を陸行して瀘水に入つて広州に出るものである。

これらの水路は福州からの大師入唐の道とはあまり関係はない。ただ（二）大宮権平氏の初めの説を考える時、福州、信州、洪州から贛水で江州に出、揚子江を溯り、鄂州より漢水に入つて襄州に至り、ここから陸路を執り長安へ至つ



たと考える時は参考にせねばならない。

大師が利用されたと思われる福州から北方への水路は、閩江、錢塘江、江南河、山陽瀆、淮河、広済渠と南北連絡の運河と水路が考えられる。

広済渠は隋代の通済渠で、隋の煬帝が古汴河（隋以前の南北連絡水路）を利用して大業元年（六〇五）に開いたものである。

河陰（河南省河陰県東）より黄河を分流し東南流して汴州、宋州（河南省邱県）を過ぎ、泗州において淮河に入り、黄淮二河をつなぐものである。

山陽瀆は泗州の東、淮陰県（江蘇省淮陰県）より楚州（江蘇省淮安県）を経て揚州揚子県（江蘇省儀徵県東南）に達し、淮河と揚子江とを結ぶ。山陽瀆は古く春秋時代、呉王夫差によつて刑溝が穿たれ、その後放擲されていたものを、隋の文帝が開皇七年（五八七）に再び開修したものである。

江南河は、揚子県の南、揚子江対岸の潤州より杭州に至り錢塘江に連絡する運河で、煬帝が大業六年（六〇六）初めて開鑿したものである。

### 三、大師長安への道

前述の「一、二」を参考に、今回踏査して得た資料を基に、大師が福州から長安に上った道筋を想定してみたい。

福州から長安への道は「二」に記した第一の幹道に據つたと考えるのが自然であろう。安祿山・史思明の乱（七五五～七六三）以後、河南、淮南方面の藩鎮が時に反乱を起して、南北連絡の運河を塞ぐや揚子江下流域の地方も第二路により襄州

より武関、商州經由によつて長安に達したり、白居易が長慶二年（八三三）杭州刺史に赴任する時、汴路が不通であつたので洛陽から南陽（河南省南陽県）、鄧州に出て、第二路に合して杭州に赴いたということもあるが、徳宗（大師入唐時の皇帝）より憲宗にかけて唐朝は権力の国内伸張につとめ、漕運に力を入れ、運河や道路の整備をしていることや、唐の官吏李翱が元和四年（八〇九）に嶺南に赴任する時、南北連絡の運河によつて浙江に至り錢塘江を溯つて江西に出て広州に赴いたことによれば、大師入唐の貞元二十年（八〇四）の第一路は支障はなかつたとしてよい。

先ず福州から杭州に至る道筋を想定してみよう。

第一路の杭州から福州への道筋を再度確認してみると。杭州から錢塘江に沿つて富陽、建徳に至り錢塘江を渡つて婺州（金華市）より衢州に至り信州（上饒市）建州を経て福州に通じている。衢州から建州（建甌）に至る道としてここでは信州經由になつてゐるがこれにはもう一つの道がある。衢州から南行して浦城經由で建州に至る道である。『唐宋時代の交通と地誌地圖の研究』では、福建街道として、衢州から浦城、建州に出て古田県を経て福州に至る道を『東萊呂太史全集』巻十五の記事から挙げてゐる。

弘法大師の一行は、この建州、浦城經由で衢州に出る道によつて杭州に向われたと思われる。

唐朝の李吉甫撰になる『元和郡縣圖志』は憲宗元和八年（八二二）に著わされてゐるので大師入唐時に一番近い地理志である。それによつて建州から衢州までを見てみると、建州八到の條には西北微東至衢州七百里。西北至信州五百四十里とあり、衢州八到の條には南至建州七百里、西至信州二百五十里とある。建州、衢州間を信州經由で行けば七百九十里、浦城經由で行けば七百里ということになる。福州八到の條、西北至上都五千二百九十五里を第一路の道順で追つて行くと、建州・衢州間を七百里として計算した方が、至上都五千二百九十五里に合致する。ただ『元和郡縣圖志』の各都市八到の條の里程は計算してみると、合わない所がかなり出てくる。合う所を拾つて表にしてみたが、そ

れに基づいての言である。また、信州經由の道は建州・信州間で武夷山、信州・玉山間で玉山嶺と二つの大きな嶺を越さなければならぬ。遣唐大使と弘法大師の一行は長安への道を少しでも速くと急いでいた。少しでも近い浦城經由を選んだとしても不自然ではない。

「一」で述べた碩学は福州からの道を多く閩江を溯ったとしている。私達は閩江、建溪、南浦溪を眺めながら陸路を古田、南平、建甌、浦城と追体験した。

私は初め陸路も閩江に沿って南平まであるものと思い込んでいた。古田県を經由して南平に入った時、どうしてこんなに山路を迂回したのだろうかという疑問を懐いたが、これが唐代の官道であったわけである。現在の鉄道は閩江に沿って南平に通じていても、道路は雄江県までしか沿っていない。私達はその雄江県よりまだ福州寄りの溪口鎮から閩江を離れて古田県に向かった。古田県には北宋時代太平興國四年（九七五）建立の吉祥寺塔が残っており、さすが官道の歴史を持った街だと思った。しかし、この古田県經由南平の道はかなりの山路である。閩江を現在も多くの船が上下している状態を見、唐代も船の往来は盛んであったと聞くにつけ、大師の一行は閩江を船で溯ったものと思われる。

南平市にある閩江の船着場には「延壽門」という宋代の門が残っている。下船したものはそこから南平城街に入った。この船着場は富屯溪（西溪）と建溪（東溪）との合流地点にある。この二溪が合流して閩江となるのである。富屯溪に沿って行くと鷹潭市の方面である。建甌への道は建溪に沿って北上することになる。建溪の流れは緩やかで船行は頻繁である。唐代も百葉船と名づける船が往来し、水路としてよく利用されたという。

建甌の船着場には「通濟門」という後漢時代の門が残っており、歴史の深さを感じさせる。建甌から浦城までの水路は南浦溪である。これも地図の上で想像していたのとは違って緩やかで船の往来もある。陸路は必ずしもこの溪に沿ってはいない。私達は陸路を追体験したが、峠が続く困難な所も多い。

浦城の船着場には現在南浦新橋という近代的な橋が架っている。唐代は浮き橋（船をつなげて板を渡した橋）であったという。ここが唐代の船着場のあった所で、現在は清代の「登瀛門」が残っている。宋代には毎日百隻ほどの百葉船でにぎわったという記録があるという。浦城県は地図の上ではどんな田舎かと思つたが、大きくて明るい街であった。浦城は昔から「食糧の倉庫」とも言われ、肥沃の土地は農業に適し、ここで取れる米は水路を福州まで運ばれた。またこの地は交通の要路で古來戦略上「浦城を陥落すれば戦いに勝つ」といわれていた。

このようにみると、大師一行の道は、南平から浦城の間も水路を利用したのではないかと思えてくる。ただ建甌、浦城間は陸路を歩けば三日、水路を溯れば五日は要するという。大師の一行は一日を急いだ旅だけにどちらとも言いかねる点は残る。

浦城からは陸路である。江山を経て衢州に至る。この間の追体験は許可にならなかつたので、浦城県副県長、陶瑞祥氏の話を紹介してみよう。氏は県の知識人達と大師の道について検討した結果だといつた。要約すると、

大使大師の一行は建甌から浦城へは船でこられたと思われる。唐代の官にある人はみな船行によつたと伝承がある。浦城から江山までの陸路は仙霞嶺を越える山路である。唐代には駅亭があつた。浦城から二十四キロ程行くと漁梁という所があり万葉寺（禪宗）がある。漁梁から更に二十六キロ程行くと廟湾という所に至り、大雲寺（禪宗）がある。ここら辺は駅亭の跡地だという。官吏は駅亭で泊るが、寺を利用することも多かつた。大雲寺のある所は浮蓋山（二巴メートル）といつてこの辺の最高峰である。浮蓋山を越えると楓嶺関がある。唐代には楓嶺関の名はみえない。仙霞嶺といつたらしい。福建省と浙江省の境界に当る。ここから江山までの道は六、七十キロ程であろう。江山から杭州までは水路を利用したと思われれることであつた。

浙江海洋学会研究員の朱土俊先生は運河や水路についても造詣の深い学者である。先生は唐李翱の「<sup>1</sup>来南録<sup>2</sup>」を挙

げて、江山から杭州への大師の道を想定した。

李翱は憲宗元和四年（813）広州に赴任する時、洛陽より南北連絡の水路によって杭州に至り、ついで錢塘江を溯つて睦州、衢州を経て常山県より玉山県まで陸行し、更に水路により洪州より広東方面に赴いている。

李徳裕も唐大中元年（857）湖州（広東省潮安県）の司馬に貶された時、同じ水路を利用して任地に赴いた。

このことからすると、大師一行は錢塘江を下つたものと思う。衢州からの水路を利用した確率は非常に高い。江山から衢州までの水路も可能であろう。衢州からの水路は、蘭溪江（蘭溪まで）七里灘（桐廬まで）富春江（富陽まで）錢塘江と名を変えて杭州に至る。水路の場合、錢塘江の支流に臨む婺州（金華）は通らないのが普通である。

朱士俊先生の説明は吾々を納得させた。

杭州から汴州（開封）までは、南北連絡の運河に據つたと想定する。

杭州、蘇州、無錫、常州を経て鎮江に至る江南河は唐代とあまり位置を違えていない。私達はこの運河を追体験することができた。

鎮江から揚子江を渡れば揚州である。揚州から山陽濱で楚州（淮安まで）船行し、楚州から淮河を溯つて泗州盱眙県に至る。この泗州盱眙県は泗県東南二十二里で今は洪澤湖に没している。現在の淮河南岸の盱眙とは違う。唐代において楚州、泗州盱眙間はいずれも淮河によって往来したが、淮河の水路はかなり流れが急で溯行は大変だったようだ。当然陸上からの索引に據つての船行であつたと思われる。宋代には淮河による不便を避けるため、沙河、洪澤、龜山の三運河ができていた。

『元和郡縣圖志』の泗州八到の條には東水路至楚州二百二十里とあるが、同志は卷二十四淮南道を闕くため、楚州、揚州間の水路の里程などは判明しない。泗州條にはまた東南陸行至陽州二百七十三里とある。弘法大師の一行は「星

発星宿、晨昏兼行」の旅であったから不便な淮河の溯航を避けてあるいはこの陸路を泗州に至ったかもしれない。

泗州から汴州への道は「広済渠」の運河を溯つたとみるのが順当であろう。この「広済渠」は隋代の「通済渠」で、河陰県において黄河を分流し、東流して汴州（開封）を貫き東南流して宋州（商邱）永城、宿、靈璧、泗、臨淮を経て泗州盱眙県に至って淮河に連絡している。この運河は北の黄河方面に高く、南の淮河方面に低いため溯航する場合は陸上よりの索引によるが多かったと思われるが、利用は多い。神宗熙寧五年（一〇三三）入宋の日本僧成尋も杭州から江南河、山陽濱淮河を経てこの運河を利用して宋の首都開封府に入っている。

汴州（開封）からは陸路である。黄河の流れは不安定で客船の航行には適していない。汴州から洛陽を経て長安に至る道は唐代第一の大路である。鄭州、洛陽、陝州を経、難所の函谷関（『元和郡縣圖志』には在靈寶界南十里、路在谷中、深險如函、故以為名とある）を通って潼関、華州、臨潼を経て長安に至るのである。汴州からの陸路は馬車を利用したと思われる。

蒲橋は長安の手前二十里。長楽坡は十二里の渾川の西岸にあった。

弘法大師一行は、十一月三日福州を発つて長楽坡に到着したのが十二月二十一日。そして長楽駅で休養の後、十二月二十三日、唐朝廷より派遣された内使趙忠と美しく飾った二十三頭の馬上に威儀を正して「春明門」より長安城に入ったのである。

註（一）李朝 生没年不詳

貞元十四年（七九八）の進士。元和年間（八〇六〜八二〇）国子博士、史館修撰となり、考功外郎となった。宰相李逢吉の過失を面折して廬州刺史に出されたが、後、中書舎人となり、山南東道節度使を歴任した。韓愈の姪娣。

著書『復性書』は有名。武宗の会昌四年ごろ没。謚を文という。(中国学芸大事典)

(2) 『來南錄』一巻

李翱の洛陽から広州までの紀行文。出発は元和四年(八〇九)正月十二日で、洛陽の旌善坊の邸を妻子と共に出て、十八日船出をした。韓愈、孟郊が見送り、韓愈に「送李翱」と題する五言古詩がある。汴州、宋州、揚州、常州、蘇州、杭州、衢州、吉州、韶州を経て広州に達した。同年六月九日。『來南錄』の南は、嶺南または南方への旅の意。紀行文としては初めてとされている。全文八百四十二字。我国『土佐日記』に影響を与えたとされている。

(中国学芸大事典)

(3) 七九頁の地図は『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』(青山定雄著・吉川弘文館刊)の「唐代主要交通路図」に據った。



## 越州の弘法大師

武内 孝善

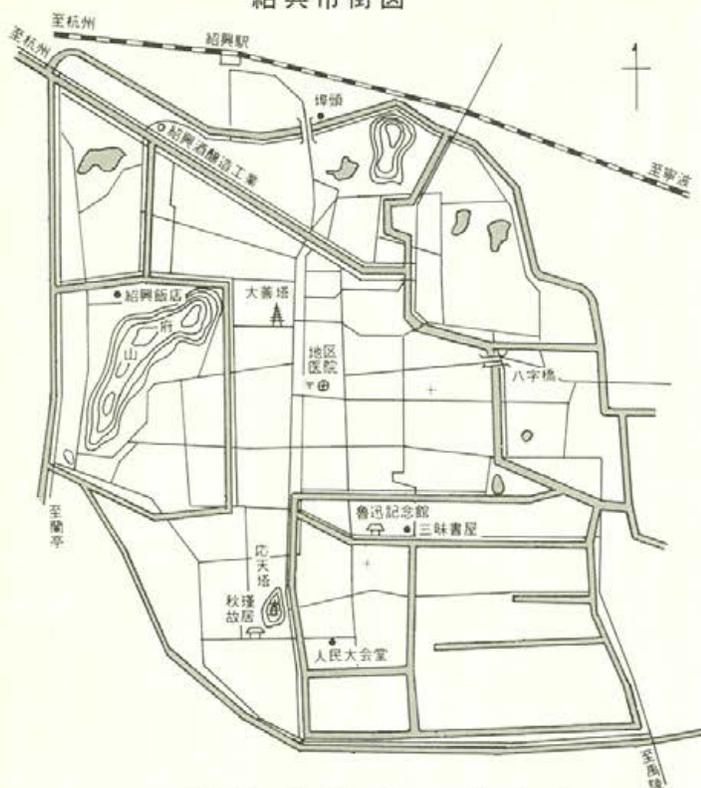
### 一

越州（現在の紹興）は、大師の足かけ三年にわたる入唐求法の旅のなかで、福州・長安についてその足跡が確実に辿れる数少ない場所の一つである。とともに、遣唐使のメイ・ロードにあたり、最澄・円珍・成尋をはじめ、多くの留学僧が留錫、通過するなど、古来揚州とならびわが国とのつながりが深い都市でもある。そこで以下、越州における大師の足跡を追い、大師が入唐された当時の越州の仏教について考えてみたい。

### 二

延暦二十三年（八〇四）七月六日、遣唐大使藤原葛野麻呂の第一船に乗って肥前田浦をあとにし、同年十二月二十三日都長安に到着した大師は、翌年三朝の国師と仰がれていた青龍寺東塔院に住む惠果阿闍梨に出逢った。六月から八月にかけて三度にわたり、惠果から大悲胎藏生と金剛界、伝法阿闍梨位の灌頂を受け、金剛智——不空——惠果と相

紹興市街図



承された『大日経』『金剛頂経』に基づくインド伝来の正統な密教の大法を余すところなく受法した。大師は二十年間留学する予定であったが、師の恵果は伝法の終わるのを待つかのごとく、

早く郷国に帰りて以って国家に奉り、天下に流布して蒼生の福を増せ。然れば則ち、四海泰く万人楽しまん。

のこぼを遺して、同年十二月十五日示寂した。この師恵果の遺命は、その後の大師の宗教的、社会的活動の指針となった。

翌大同元年（八〇六）、遣唐判官高階遠成が帰国する好便をえて帰朝の途についた大師は、四月越州の節度使に書状を送り、内外の経書（弘典ならびに諸々の一般典籍）を請い求められた。「日本国求法沙門空海啓す」ではじまるその書状には、

長安では自分のすべての力と財力をもつて三百余巻の経論疏等を写し、大悲胎藏・金剛界等の大曼荼羅の尊容を描いた。しかし、教法は広大であり、み

ずから写しえたところのものは九牛の一毛にも及ばない。すでに資財はつき、書写の人を雇うこともできない。日夜寝食をわすれて書写に専念しているが、帰国の期日がせまっております、心の憂をいかんともなしがたい。と窮状を訴え、

伏して願くは、かの遺命を顧て、この遠涉を慫み、三教の中、經・律・論・疏・伝記、乃至は詩・賦・碑・銘・ト・医・五明、撰するところの教にして蒙を發ひらき、物を濟すうものは、多少なりとも遠方に流伝せしめよ。

と仏典だけでなく、詩賦・医術など人びとを啓発し、幸福をもたらすものであれば、多少にかかわらずすべて日本に伝えたいと、節度使の援助を懇請された。

越州は春秋時代の越の地で、六朝のころから文化的に、また仏教の面でも、江南において揚都建康(南京)と並ぶ文化都市であった。越州の名は隋の時代にはじまり、唐代には一時会稽郡ともいわれた。武徳四年(六二二)に總管府が、同七年に都督府が設置され、会稽・山陰・諸暨しよ・余姚・鄞・蕭山・上虞の七県を管し、開元二十六年(七三八)に明州(寧波)とその四県が分離した。乾元元年(七五八)には浙江東道節度使の管轄下におかれ、節度使は大曆五年(七七〇)に觀察使と改称され、その後一時廃されたが建中元年(七八〇)にもとの節度使に復し、唐末には勝義軍節度使と改められた。

大師の「御請来目錄」には、求得された經論疏章は二一六部四六一卷であったとすると、単純に計算すると越州で一五〇余卷の典籍を求められたことが知られる。それらの具体的な書名はわからない。しかし、隋唐時代の越州の仏教文化は江南随一と目すべきであったといわれ、その一端は伝教大師最澄の「伝教大師将来越州録」にうかがうことができる。そこには、仏典とともに、

天台智者大師別傳一卷 章安和上述 卅紙

剡山石城寺弥勒石像碑一卷

国清寺智者大師影堂記一卷 長安沙門曇拜

長安座主傳一卷 天台沙門乾濟述

瓦官寺維摩碑一卷

傳大士還詩十二首一卷

など、大師の啓にみられる「詩・賦・碑・銘」等に類する典籍を少なからず見出すことができる。それはともあれ、帰国直前まで昼夜にわたり、ひたすら經典等の蒐集に努められた大師の姿と、入唐求法の旅が生命がけのものであったことを考え併せると、身の引きしまる想いである。

### 三

大師は日本へ帰る船が出る八月までの四カ月余り、おそらく越州に滞在されていたであろう。ではその間、大師は何を見、どこに行かれたのであろうか。

杭州から越州にいたる水路は東漢時代から開かれていた。成尋の『參天台五臺山記』によると、延久四年（一〇七二）五月五日、成尋は杭州→蕭山→越州間一〇五里を船に乗って一日で着いている。大師の時代もほぼ同じであったであろう。杭州から水路によって越州に入った大師が最初に見たのは、右手前方に建つ七層の大善塔であったろう。この塔は梁の六監三年（五〇四）に創建された大善寺に建つ。この塔が造られた経緯を、紹興市文物管理委員会の陳維

于氏はつぎのように語ってくれた。

錢という姓の金持ちの夫婦がいた。二人には千善という名の一人娘がいた。夫婦は一所懸命たくわえた財産を、娘が嫁に行くときすべて与えるつもりだった。娘は熱心に仏教を信仰していたが、花嫁になる前に十六歳で亡くなった。娘は「両親からいただく財産で大善寺に一つの塔を造っていただきたい」と言い遣して亡くなった。残された両親は、娘のために大善寺に塔を建てた。

心あたたまる話である。

この大善寺は、唐開元二十三年（七三八）開元寺と改名され、天下各州に設置された官寺の一つになった。仁寿三年（八五三）入唐した円珍は、同四年九月から翌年二月までこの開元寺に滞在し、講天台座主良諤の『法華經疏』の講義を聴聞するとともに、十月から十一月にかけて『胎藏旧図様』一卷を弟子の豊智と描き、十一月十六日には「護摩壇三十七尊賢劫三昧耶形」一卷を描くなど、經論の書写に努めている。齊衡三年（八五六）五月二十三日にも日本への帰途この寺に立ち寄り、良諤から智者大師撰『法華經玄義』十巻など三十五巻を贈られた。大師も恐らく官寺であったこの開元寺に滞在していたと考えられるが、記録はない。その後の開元寺の歴史は詳かにすることができない。今日、大善塔が残るだけである。註一（本書三二頁写真）。

#### 四

話は前後するが、大師は越州に着くやいなや、ちょうど一年前、同じく第十六次遣唐使とともに入唐した最澄がこの地を訪れ、龍興寺の順暁和上から灌頂を受けたことを耳にし、驚愕したにちがいない。つぎにそれが三部三昧耶の

灌頂であつたことを知り、安堵されたであらう。

最澄は遣唐副使石川道益の乗る第二船で田浦を出発し、半月余りのち明州鄞県に着いた。九月十五日天台山に向つた最澄は、翌年三月末までの間台州にとどまり、龍興寺の道邃、天台山の行満、禪林寺の脩然等から天台、禪、戒律を学んだ。延暦二十四年四月、明州に引き返した最澄は、船出までに一ヶ月余りあることを聞き、台州で求得した經典の欠を補うために、四月十一日越州龍興寺におもむいた。そこで、順暁和上に会い、十八日鏡湖の東峯山道場において、「三部三昧耶法」を伝授された。この法は、善無畏——義林——順暁と相伝されたものであつたが、大師が学んだ密教に比べると不十分なものであつた。五月十三日、最澄は明州で『越州録』を撰述した。それによると、一月余りの越州滞在中、順暁の助けをうけて一〇二部一一五巻の典籍を入手している。このなかには、明らかに純密関係の典籍と考えられるものが若干みいだされる。

大師はおそらく順暁和上の存在を知つていたのであろうし、一方順暁にしても都長安で両部の大法を受法した大師のうわさは、聞きおよんでいたであらう。しかしながら、この二人が相まみえたかどうかは知るよしもない。

## 五

つぎに、越州で想像される大師の姿を追つてみたい。

永和九年(三五三)三月三日、書聖王羲之は会稽山のふもと蘭亭に名士四十一名を集め、曲水の宴を催した。この時詠まれた詩に付けたのが、あの著名な『蘭亭序』である。王羲之の書を完全にマスターし、自家菜籠中のものときられていた大師であるから、蘭亭の地には必ず足を運ばれたであらう。蘭亭はいまも紹興市の南西一二、三キロのここ

ろにあり、低い竹林の中に曲水の宴を行った小川、流觴亭などいくつかの亭がある。

また、三論宗中興の祖吉蔵は隋の開皇年間（五八一―六〇〇）越州の南の会稽にあった嘉祥寺に住して三論教学を宣布し、その講席には千余人の人々が集まった。吉蔵の主要な論疏もこの地で著わされた。よって、吉蔵はこの寺号をとって嘉祥大師と呼ばれる。吉蔵の弟子智顛も嘉祥寺に来て三論を講じており、越州は三論教学の中心地の一つであったといえる。大師は三論宗の寺である大安寺の僧として出家したともいわれ、帰朝後の天長六年（八二九）十一月大安寺別当に任ぜられるなど、大師と三論との結びつきは極めて強いものがあった。したがって、大師は經典書写のあい間をぬって三論関係の寺を訪ねられたことは十分考えられる。

## 六

では、大師が入唐された前後の越州の仏教について見てみよう。大師には先にあげた節度使に差し出した啓しか残されていないので、ここでは最澄の将来録と円珍の記録類を手懸りにみて行こう。

最澄は貞元二十一年（八〇五）四月、越州に向うにあたって明州の刺史に対して旅行許可証である過所を求めている。そこには具体的に、越州の龍興寺・法華寺に行き、台州で求め得なかつた一七〇余卷の典籍を書写したいと願ひ出、四月六日付で許可されている。四月十一日、越州龍興寺に赴いた最澄は、順暁和上と出逢ひ、同月十八日湖境の東峯山道場で「三部三昧耶法」の灌頂を授けられた。その経緯を『伝教大師将来越州録』は

右件の念誦法門等ならびに念誦供養具様等は、越府の龍興寺に向つて順暁和上のところに詣して、すなわち最澄ならびに義真、和上にしたがつて湖境の東峯山道場に到る。和上、両僧を導きて道場を治え、五部灌頂曼荼羅壇

場に引入して、現に真言法を授けることを蒙り、また真言水を灌頂せらる。すなわち、写し取る上件の念誦法門ならびに供養具様、勘定すでに畢ぬ。

と記している。最澄は五月十三日に明州に帰っているから、約一ヶ月越州に滞在したことになる。この間、灌頂を受けるとともに、新しく一〇二部一一五巻の典籍等を書写、求得された。その中には、

無量寿如来瑜伽儀軌一卷

一字頂輪王瑜伽法一卷

十八会瑜伽法一卷

卅七尊名一卷

卅七尊心要一卷

壇様一卷

卅七尊様一卷

卅七尊供養具様一卷

壇様并供養具様一卷

といった少なくとも三十部を下らない密教関係典籍をはじめ、「念誦供養具様」として、

五鈷抜折羅様一口

五鈷金剛鈴様一口

金剛輪二口

金剛羯磨二口

真言和上付法印信三鈔拔折羅一口

と五種の密教法具も入手しておられる。最澄は、これよりさき約七ヶ月のあいだ滞在した台州では、一二八部三四五巻の仏典等を求得している。しかし、その大部分は天台関係の法華経、摩訶止観、天台山に関するもので、密教関係の典籍類は、『新訳梵漢両字大仏頂陀羅尼一卷』など梵漢両字の陀羅尼七部七巻と、

梵漢字随求即得曼荼羅一張

梵種子曼荼羅一張

大仏頂通用曼荼羅一張

の都合十点だけである。

このように、最澄が将来した密教関係典籍のなか、台州で求められた典籍類は少ない。それに対して、台州で得られなかった典籍を探し出し書写された『越州録』には、八割方が含まれている。とすると、最澄の将来目録からは、天台山には密教がどの程度伝わっていたかは明確にしえないが、越州には灌頂道場もあり、伝法の阿闍梨もいて、明らかに密教が伝わっていたことが知られる。

このことは、円珍の記録類からも裏付けられる。円珍は、仁寿三年（八五三）八月入唐し、同年十二月十三日天台山に登り、翌年九月まで約九ヶ月天台山に滞在した。仁寿四年九月二十日、越州に入るや、ただちに開元寺に行き、講天台座主の良諤和尚にまみえ、翌二十一日からは旅の疲れも見せず、良諤和尚の『法華経疏』の講筵に列席している。円珍は翌年三月まで越州に滞在するが、その間十月から十一月にかけて『胎藏旧図様』を弟子の豊智とともに写し取り、十一月十六日に完成させ、これと前後して、『四種護摩壇三十七尊賢劫三昧耶』一卷を写し取っている。

ここにいう『胎藏旧図様』とは、胎藏マンダラを分解して卷子本仕立てに描いたもので、大師が請来した現図マン

ダラに比べて、その図様が古式を伝えているのでこのように呼ばれる。胎藏マンダラには、善無畏系と不空系の二系統がある。前者はインドのナーランダール寺で修行した善無畏三蔵が、入唐後洛陽の大聖善寺において、『大日経』の翻訳とあわせて経中の諸尊を描いたマンダラで『胎藏図像』とよばれ、胎藏マンダラの最も古い形を伝えるものである。後者は『胎藏旧図様』『現図・胎藏マンダラ』に代表されるもので、『胎藏図像』に代表される胎藏マンダラの伝統の中に、不空の訳になる金剛界系の諸尊が導入されたものである。

一方『四種護摩壇三十七尊賢劫三昧耶』は、息災・増益・敬愛・調伏の四種の護摩壇様図、毘盧遮那如来以下金剛界三十七尊および金剛部二十天の三昧耶形などを図絵した金剛界に関する図像集である。

円珍が開元寺をおとずれたのは、会昌二年（八四二）から同五年にかけて行われた武宗の破仏の直後で、開元寺も主要な堂は破壊され、後楼だけが残り、階上に仏像を安置し、階下を僧房に当てていたといわれる。このような状況の中で、円珍が最初に写し取ったのが胎藏マンダラ集と金剛界の図像集だったことは、彼が越州に来る前に福州・温州・台州で求得した四五八巻の典籍類の中にしめる密教関係典籍がきわめて少ないこととともに、注目されよう。

最澄は延暦二十四年（八〇五）、円珍は仁寿三年（八五三）と、二人が越州をおとずれた年代にひらきはあがるが、二人の記録から越州に密教関係の典籍が少なからずあったことは確かである。

## 七

もう一つ越州の仏教を考える上で見のがせないのは、天台山との関係である。

明州にひき返し、船出までに一カ月余りあることを聞いた最澄は、ただちに越州の龍興寺、法華寺をめざしておら

れる。この裏には天台山に滞在されていた時、越州の仏教界の情報を手に入れておられたことが十分考えられよう。

一方円珍は天台山国清寺から開元寺に趣き、定詔和尚のもとで『法華經疏』の講筵に列なり、齊衡二年（八五五）正月六日には良詔著『法華文句義科』三巻を、二月十日には梁肅著『摩訶止観略本』六巻を書写している。また、翌三年五月二十三日には、開元寺において良詔から、

智者大師著『法華經玄義』一部十巻

湛然著『法華疏記』十巻

智雲著『法華私志』十四巻

『法華諸品要義』一巻

の計四部三十五巻を賜与されている。この良詔和尚は、天台山禪林寺の伝教和上であつた広修の弟子であり、良詔も講天台座主をつとめていた。

これらのことから、越州の仏教界は天台山と徐々に人的交流を深めて行き、円珍が訪れたころには天台宗の盛んな土地の一つではなかつたかと考える。

## 八

我々は旅をしていて、大師が天台山へ足をのばされたかどうかを、たびたび話題にした。越州から天台山国清寺までは円珍・成尋の記録から、およそ三五〇里、七日前後の行程である。大師の旺盛な知識欲、探求心からすると、また大師の脚力から考えても、十日や半月の行程など物の数ではなかつたであろうことは考えられるが、天台山へ行く

必然性があったかどうか、確かなことはわからない。

かつて、江南随一とまで称された越州仏教のおもかげは、今日の紹興にはどこにもない。ただ、大師の入唐求法を知るものは大善塔だけである。

註(1)紹興市文物管理委員会の陳維于氏は、「大師が越州に滞在したとすれば、大善寺よりも現在地区医院となっている唐末にできた開元寺であろう」と話された。陳氏のいわれる唐末の開元寺とは、長興元年(九三〇)呉越王錢武肃によつて建てられた寺で、それまでの開元寺はもとの大善寺に復した。したがつて、大師が官寺に滞在されたとすれば、もとの開元寺すなわち大善寺である。

本稿をまとめるにあつて左記の著書を多く参照させていただいた。深甚の謝意を表したい。

小野勝年著「入唐求法行歴の研究」上・下 法蔵館

石田尚豊著「曼荼羅の研究—研究篇—」東京美術

## 江南地方の仏教

— 鎮江・揚州・南京を尋ねて —

中村 正文

### 一、はじめに

弘法大師空海（以下大師とを略称す）が大学を退いて、一人の山岳修行者として自分のとるべき立場を披露されたのが『三教指帰』（七九七年十二月一日）である。これより大師が入唐されるまでの足跡は全く不明である。

しかしながら、伝統的には次のように推測されている。大師は、この数年間、山岳修行に励むと共に奈良朝の仏教である、俱舎・成実・律・三論・法相・華嚴の六宗の研鑽につとめられていたであろう。もう一つ重要なこととして、当時すでに伝来していたといわれる『大日経』の大和久米寺東塔における感得である。大乘仏教を代表する三論・法相・華嚴を学ばれている中での『大日経』とのめぐりあいは、大きな衝撃であったように思われる。しかしながら、『大日経』における教理、とくにより多くの事相に相当する部分の理解は、大師にとって困難を極めたものと考えられる。

いずれにしても奈良仏教にあきたらないものを感じられたことは想像にかたくない。

これらのことが大師と入唐させる大いなる要因となったと思われる。このへんの消息をうかがえるものとして、『遍

照發揮性靈集、卷第七」中にある「奉為四恩造二部大曼荼羅願文」（八二一年九月六日）がある。

「弟子空海。性熏我を勸めて還源を思と為す。徑路未だ知らず。岐に臨んで幾たびか泣く。精誠感有て此の秘門を得たり。文に臨んで心昏して赤縣を尋んことを願ふ。人の願ひ天順て大唐に入ることを得たり」

更に明らかに『大日經』を学ぶ為とその動機を示されたものとして、『御遺告二十五箇條』（八三五年三月十五日）があげられる。

「吾れ佛法に従つて常に要を求め尋ぬるに三乘五乘十二部經心神に疑有て未だ以て決を為さず。唯し願くば三世十方の諸佛、我に不二を示し玉へと。一心に祈感するに夢に人有りて告て曰く。此に經有り。名字は大毗盧遮那經と云う。是れ乃か要むる所なりと。即ち隨喜して件の經王を尋ね得たり。大日本の國高市郡久米の道場の東塔の下に在り。此に於て一部總を解く普く覽るに衆情滯有りて、憚問する所無し。更に発心を作して、去し延暦二十三年五月十二日を以て入唐す。初て學習せんが為なり。天應慰勸にして勅を載せて海を渡る。」

ここには、従来の仏教に対する不満と、『大日經』に対する異常なる期待がうかがわれる。但し、この『御遺告』が現在、偽作の可能性が大きいといわれているだけに、大師入唐における直接的要因の根拠と決定するわけにはいかにい。

けれども唐の都長安の青龍寺における夢にまで描いた密教の阿闍梨・惠果和尚との邂逅、そして問をおかずに密教の相承者として、大法を付嘱されるという事情背景からも想像しうるように、大師は入唐以前に、種々の密教經典を通して、その思想にふれておられたとしても全く不思議ではない。むしろ肯定的に、密教の教理を熟知されつつあり、密教の真髓を会得すべく充分なる準備をした上での入唐と観る方が自然である。

このような大師が朝廷の許しを得て、第十六次遣唐使の一員として、大阪の難波を出発するのが、今を去ること一

百八十年前の八〇四年五月十二日、更に九州の肥前田浦を発つたのが七月六日である。途中、暴風雨にあいながら海上を漂流すること三十四日の後、福州長溪県赤岸鎮に到着する。この福州で二ヶ月余りの逗留を余儀なくされた後、唐の都長安に到るのが八〇四年十二月二十三日といわれる。大師一行は福州から長安までの七千五百二十里(約二千四百キロ)を実に四十九日間という日数で踏破するのである。

註(1) 『弘法大師全集』第三輯 四七六頁

(2) 〃 第二輯 七八三頁

## 二、問題の所在

この四十九日の旅の途上、大師が唐土をどのようにうけとめられながら、長安をめざされたのであろうかということは、今回の訪中団の関心事の一つであった。『日本後紀卷十二』に「星に発し、星に宿す」と表現された大師の長安への道は、多くの唐の文化・風土に触れられると同時に、特にその当時隆盛を極めていた仏教文化については意識的に、寧ろ積極的に接していかれたであろうと思われる。であるならば、七千五百二十里を四十九日という日程は大師にとつて非常に過酷すぎる旅であつたであろうと思われる。それにもまして、大師の胸中をかりたてるものは、大きなものであつたのであろうと想像をはこぶ時、それは不必要な取り越し苦労とも思えなくもない。それは入唐後の大師の業績をみることによつても理解し得ることであろう。

いずれにしても、今、問題の所在を大師が長安へいく途上の各地方における仏教事情ということにおいて検討することとしたい。



大師の入唐道の中で大師に多大の影響を与えたところとして、長江（揚子江）流域の江南地方の仏教事情をとりあげてみたい。揚子江流域は中国文明の一つの発生した源泉地であることは史実が一様に認めることである。この揚子江を中心に栄える江南文化は、南北の水運の大動脈である隋の煬帝が築いた京杭大運河が開かれると同時に益々繁栄することとなる。この大運河が開通して、南の豊かな物資が北へどんどん運ばれると共に、都の文化が花開いていったのである。これに対し、北の文化は南下するという傾向をいつしか辿るようになる。特に唐代その頂点にいたるといふ仏教文化の交流は南朝四百八十寺と詩われた江南の仏教事情から察して、さかんに行なわれていたことであろう。

今回、具体的には、揚子江と京杭大運河の接点にあたる鎮江・揚州・南京の三都市に焦点をあわせて、種々の面で歴史的意義をもちながら発展をとげ、現在も尚、その衰えをみせないこの地域の仏教事情と大師との繋がりを明らかにすることとする。

### 三、中国の佛教史

仏教が中国に伝播した時期については、一、西周穆王の時とする説。二、孔子仏教を知るの説。三、阿育王の仏塔建立説。四、釈利房伝来の説。五、前漢武帝の金人礼拝説。六、劉向仏典を見るの説。七、伊存の仏教口授説。八、後漢明帝永平十年説等、諸説存在し、未だその解決をみていない。

その中で有名なものが、『後漢書』等に見られる、後漢の明帝(二十六―七十五年)が仏法を求める為、使節を西域に遣して、迦葉摩騰・竺法蘭を招聘し(六十七年)、彼らの為に洛陽に白馬寺を建立したことに由来するというものである。しかし現在、史料としてその価値が高いとされているのが、『魏略』の伝えるものである。それには、前漢・哀帝の元寿元年(紀元前二年)に博士弟子景盧が大月氏王の使伊存により浮屠經を口授されたと記載されている。『魏略』は『三国志』中の『魏志』西戎伝に引かれているもので、信憑性の高いものとされている。

その後、仏教は約二千年という長きにわたって中国において発展をするわけである。これを時代別に区分すると、第一期伝訳時代、前漢より東晋時代の初期。第二期研究時代、東晋の初期より南北朝時代。第三期建設時代、隋から唐朝会昌法難まで。第四期実行時代、会昌法難から南宋時代。第五期継承時代、南宋時代以後元・明・清代というようにわけることができる。因みに第一期時代は、全くの翻訳時代であり、思想としては幼い状態であった。第二期研究時代は、国による仏教保護政策にともない、急速に仏教が普及しだし、各地に建立された多数の寺院から多くの高僧を輩出した時期である。第三期建設時代は仏教が翻訳され、更に研究されていた結果、従来の輸入仏教というのに対して中国独自の仏教思想を形成するにいたり、その全盛期を迎えるのである。第四実行時代は隆盛を極めた唐仏教が、種々の中国思想と融和しはじめる時期である。第五期継承時代は隋・唐の仏教を維持し継承した時期で、仏



教の思想的発展はみられない。しかし、一方、教団の勢力が隋・唐以上の発展をみせるのはこの時期である。

大師が入唐された八〇四年頃は、前述の時代区分でいけば、第三期建設時代という最もはなやかな時期だったわけである。この頃は、毘曇宗・成実宗・四論宗・三論宗・涅槃宗・天台宗・地論宗・摂論宗・雜密・諸禪・諸律・念佛と濫立しながらも教理的形成をなそうとした時代である。これらの学派はより純化され、俱舍宗・天台宗・華嚴宗・法相宗・真言宗・禪宗・南山律・念仏の八宗となった時期にあたる。

(一説には第三期後半に隆盛だったのは法相宗・華嚴宗・禪宗・真言宗であったという説もある。)

#### 四、江南地方の仏教の萌芽

江南地方に仏教が伝播するのは三国時代からである。建業(現在の南京)に呉の孫権が都を建立するのであるが、この時代には支謙・康僧会を中心に維祇難・竺律炎等の訳経家がいたといわれる。中でも康僧会が呉赤烏十年(二四七)に呉都・建業に入ってから、呉王孫権・孫皓等の帰依もあって寺塔をたてたことにそのはじまりをみる。この寺は建

業に最初に建てられたということから建初寺と称された。

爾來、この地方一帯には急速に仏教が発達することになる。

## 五、鎮江における仏教事情

### (一) 鎮江の概況

鎮江は江蘇省の中部に位置し、二千五百年以上の歴史を有するところであり、多くの古跡が存在する。ここは、古くから水陸交通の要路として栄えている。隋の煬帝が造営した北京と杭州とを結ぶ京杭大運河と長江が交わる所に位置し（現在はこれに加えて上海と南京を結ぶ鉄道が横断している）南北東西の水陸の通路として、物資の集散をはかる場所となり、経済・政治・軍事上の重要な拠点として、その占めていた役割りには非常に大きなものがある。三国時代、呉の孫権が一時期、北固山に都をおいたことは有名なことである。鎮江には北固山のほかに、金山・焦山という特色のある山がある。この三山には夫々金山寺（金山）・定慧寺（焦山）・甘露寺（北固山）という寺がある。続いて今回の調査にあたった金山寺・定慧寺について考察してみたい。

### (二) 金山寺

金山は鎮江市の西北部に位置する。高さ四十四メートル、周囲五百二十メートルの山である。古くは山の相状から浮玉山・獲符山・伏牛山・龍游山・石罈山と称されていたが、現在は金山と呼称するようになった。古代、金山は長

江の中に屹立する島であったが清朝同治初年（一八六二）ころから陸続きとなり出したのである。（一説には道光年間（一八二一—一八五〇）とする説もある）。

この山に金山寺がある（本書四五頁写真）。金山寺は今から千六百年以上前の東晋時代に建てられたものである。その当初「沢心寺」といったが、宋代に真宗皇帝（在位九九八一—一〇二二）から大中祥符五年（一〇二二）に「龍游寺」を賜わり、清代康熙皇帝が金山に巡遊した時（一六八五）に「江天禪寺」の名を賜わったりしたが、唐代より通称として金山寺といわれてきている。この名称の由来は、金山寺の開山祖師とされている法海が、貞元年間（七八五—八〇四）

に、ここに参禪の為にやってきた。そしてこの山の中腹にある洞窟に住み、人々に害を与える白蛇を退治した後、そこに住したのである。ある日、ここにおいて金を掘りあて、皇帝の許しにもとづいて、この金を寺の修復にあてた。この頃から金山寺と称されるようになるのである。全盛期には三千人の僧侶がおり、参禪にくる僧俗が数万人というおびただしいにぎわいをみせている。自然に国内外にも有名になり、多くの人達がおとずれている。室町時代の一四七二年には、日本の禪僧雪舟（一四二〇—一五〇六）がここに来て「大唐揚子江心金山龍游禪寺之図」（日本では「金山真景図」と称す）をはじめ、多くの絵画を描いている。

東晋時代に建立されたとされる金山寺が唐代の法海法師の出現まで全く消息がないのかというところではない。

史書によっていうならば、梁代に寶誌と僧祐、唐代に靈坦という三僧がここに來た形跡がある。



開山祖師法海法師像

寶誌と僧祐の二僧は「金山志」が伝えるところによると、天監四年（五〇五）に武帝の要請により、金山において大陸の儀文を成し、大齋会を建<sup>建</sup>めるといふ行事を行なつてゐる。この「建水陸大会」といふ齋会の儀式はその後何度も行なわれてゐる。

寶誌は金陵（現在の南京）の人で、姓を朱という。朱氏の婦人が、ある日、鷹の巢の中でない子を抱きあげた。それが後の寶誌であるといふ。幼少の頃、出家して、江東の道林寺の僧儉に師事した。天監十年（五一二）、華林門之佛堂において寂してゐる。（二説に天監十三年（五一四）説もある。）

僧祐は建業の人で、姓を兪という。五六才にして道（仏道）を業い、父母はその志しを憐んで、建初寺の僧範に師事させる。そして十七年（五一八年か？）五月二十六日、七十六年の生涯を建初寺においてとじてゐる。

その後、唐代、靈坦禪師は大曆八年（七七三）に金山に巡錫してゐる。この時期、金山の山北には龍のいる穴があつて、常に毒氣を吐き、まわりの人々を病にいたらしめたり、死にいたらしめたりしてゐた。禪師はこの毒龍を撃退するのである。これは金山寺開山祖師法海と同様の伝説であり、この兩者の間に何らかの相関々係を想定することは難しくないと思われる。「金山志」が伝えるところによると、この靈坦をもつて開山祖師とし、この人によつて金山（寺）に禪宗がはじまるとしてゐる。また現在「鎮江游覧手冊」等、白蛇伝の発祥の場として、法海洞と同様に扱われている（白）龍洞は、靈坦の伝承を残すのみで、法海と関わりについての記述はみられない。このような点から「続金山志」には、靈坦をもつて開山第一沙門とし、法海として開山第二沙門とする。

「景德伝燈録」や「九域志」の中にみられる法海には龍にまつわる伝承が残つていないにもかかわらず、「欽定古今圖書集成」等には龍とのつながりが残つてゐる。一方、靈坦は「宋高僧伝」中にみられるように龍との伝説が残つてゐる。このような靈坦と法海のかかわりにおいて、現在、金山に伽藍を建立した法海をして開山祖師とすることに、

歴史の変遷上における装飾やすり替えをみようとすることは不自然なことであろうか。いづれにしてももう少し詳細なる調査と史料の研究の要を今は感じる。もう一度靈坦にもどる。

『続金山寺』に開山第一沙門とみられる靈坦禪師は「宋高僧伝卷十」によるならば揚州の華林寺の僧である。姓が武であり、則天武后の姪孫にあたる。師は洛陽の荷沢寺の神会禪師（六六八—七六〇）に師事したといわれている。靈坦までの禪宗の伝承系譜を見ると、菩提達摩—慧可—僧璨—道信—弘忍—慧能—神会—靈坦<sup>10</sup>である。

慧能の直接の弟子は四十三名程いたといわれている<sup>11</sup>。その中で最も有名なのが、懷讓（六七七—七四四）、行思（七一七—四〇）年寂神会である<sup>12</sup>。いづれにしても靈坦禪師のこの時期から金山寺が禪宗としての色彩を濃くしだし、禪宗の名刹としてその名を拡めていくわけである。

現在、金山寺には隆盛期を彷彿されるような歴史的遺産が数多く残っている。

千四百年以上の齋梁時代に創建をみた高さ三十メートル、八面七層の金山寺を代表する塔。宋代に改めて荐慈塔・荐寿塔の二塔が建立されたが、その後、倒壊し、一五六九年に慈寿塔として一塔が建てられた。しかしながら現在のものは一九〇〇年に建立されたものである。

蘇東坡が写経をしたという楞伽台、清朝の皇帝が康熙二十四年（一六八五）に金山にこられた時、「江天一覽」という文字の残された留雲亭、その他に妙高台・七峰亭等。また山中には法海洞・朝陽洞・白龍洞・仙人洞の四古洞がある。特に、日本における「娘道成寺物語」の源流ともいえる「白娘子水漫金山」の神話物語は、法海洞・白龍洞にまつわるものである。中国にはこのような「白蛇伝」に関する民話が各地にある。また金山寺は、日本人にはなじみ深い「金山寺味噌」の発祥の地としてもつとに有名である。

江南地方には弘法大師に関する伝説（蘇州・靈巖山寺の「空海像」や、常州・天寧禪寺の「空海上人留学處」の看板等）

が根強く残っているところであるが、この地・鎮江では一層明瞭に、より具体性をおびてくるようになる。

金山寺には弘法大師に関する詩が三幅残っていたのである。それらの詩の題を掲げる部分には、「空海上人修行古刹」、又は「弘法大師修行古刹」のいづれかが書かれ、曾て金山寺の住持であったであろうとされる「善性」法師の名が記されている。これらの詩は現在、中国仏教協会の常務理事であり、更に鎮江定慧寺・南京栖霞寺の住職である茗山法師が、近年、南京博物館？より見つけたし、これをゆかりの地・金山寺へもつてきたものであるらしい。その三篇の詩とは、次のようなものである。

① 空海上人 修行古刹

金山竹影幾千秋 雲鎖高峰水自流

萬里長江飄玉帶 一輪明月流全球

鎮江金山寺善性書

② 弘法大師 修行古刹

半間石室安禪地 蓋代功名不易磨

白蟒化龍掃海去 山中留下老頭陀

鎮江金山寺善性書

③ 弘法大師 修行古刹

金山一點大如拳 打破維揚水底天

醉依妙高台上月 玉簫吹澈洞龍眠

鎮江金山寺善性書

以上であるが、詩の内容は金山寺周辺の風景を賛美したものと開山祖師法海を讀えたものである。一般的に詩を參考資料とする時には歴史的な考察にともなう典拠が必要とされている。

続いて、これらの詩について少し考察を加えてみたい。それは次のような視点からこころみた。(一)詩の作者、(二)詩の内容、(三)善性なる人物、(四)弘法大師或いは空海と名前を同じくする人物が金山寺の歴代の住職の中に含まれているかどうかという点についてである。

順序が前後するのであるがまず②からはじめたい。

②詩の内容について。「金山寺」には、二ヶ所である。その部分を列挙しておく。

① 頭陀

唐裴頭陀生而穎異胎素不群乃河東裴相國休公之子也因作文送出家行頭陀行精煉形神清齋一食六時危坐後來潤之金山塔傍巖洞中每入禪觀降龍斷臂重興殿宇功成而不知所之宋相張商英題云半間石室安禪地蓋代功名不易磨白蟬化龍歸海去岩中留下老頭陀(傍点は筆者)

② 裴公洞

張商英

中間石室安禪地蓋代功名不易磨白蟬化龍歸海去巖中留下老頭陀(註)

①②の二つの詩は宋代に金山寺に來た張商英という人が詠んだものである。①の詩中における(裴)頭陀とは開山

祖師法海法師のことである。この詩は師の素性を詩い、その後、白蛇退治・金山寺復興等の徳と讃えてつくられたものであることが理解できる。また④の詩も一字の違いこそあれ、全く同じ詩である。「裴公洞」を詩ったものであるが、この「裴公洞」とは法海上人をまつてある法海洞であることは疑う余地のないことである。

このように②の詩について、結論論的というならば、この詩は内容からみても法海法師を詩ったものであり、弘法大師との繋がりをさがしだすことはできない。また「金山志」の中に僧善性なる人物を歴代の住職の中に見い出すこともできない。しかしながら、貞元年門に法海が金山寺を復興したという「金山志」の伝える史実が真実であるならば、貞元二〇年（八〇四）に入唐した弘法大師と法海法師とは同世代の人物であることが明らかになる。だがそこに法海法師と弘法大師の繋がりをみい出すということはかなり難しいように思われる。

つづいて③の詩についてであるが、この詩も「金山志」中に二カ処でている。

明王陽明年十一歳時其祖竹軒播往京師過金山寺翁與客酒酣擬賦詩末就陽明從旁賦曰金山一點大如拳打破維揚水底天醉倚妙高臺上月玉簫吹徹洞龍眠客大驚異復賦蔽月山詩曰山近月遠覺月小便道此山大于月若人有眼大如天還見山小月更濶（傍点は筆者）

これによると、③の詩は明代の儒者王陽明（一四七二—一五二八）が、十一才の時に金山に立ち寄り、その時に金山の風景をうたったものであるらしい。従つてこの詩においても弘法大師との関わりを見つけることは難しい。しかも年代的にもあわない。

①の詩については作者等不明のままである。①の詩は明らかに金山の風光を詠んだものである。けれども詩の題である「空海上人修行古刹」との直接的な結びつきを論証することは不可能のように思われる。

以上、三点の詩についてみてきたのであるが、大師との関係をこれらの詩にみることは甚だ困難のようにも思われ

る。

それにしても、いつの頃からか、この周辺には、「弘法大師の修行古刹」としての伝承がおこり、それが現在も尚、根強く残っているようである。金山寺・定慧寺、或いは常州の天寧寺の天王殿の前には、昔、「空海大師留学處」という看板がかかっていたらしい。この為、満州事変・日華事変・太平洋戦争という一連の日中戦争の時に、日本の軍隊がこの地にやつてきても、これらの寺は破壊等の難からのがれることができたという。この裏に政治的背景というものゝを払拭できないのであるが、詳細については未解明のままである。

ところが『経国集』巻十には、大師作なる次のような詩がある。

過<sub>二</sub>金心<sub>一</sub>(<sub>二</sub>金山<sub>一</sub>)寺<sub>二</sub>一首 釈空海

「古貌<sub>三</sub>満<sub>二</sub>堂<sub>一</sub>塵暗<sub>二</sub>色<sub>一</sub> 新華落<sub>二</sub>地<sub>一</sub>鳥繁<sub>二</sub>声<sub>一</sub>

経行<sub>二</sub>観<sub>一</sub>礼<sub>二</sub>自<sub>一</sub>心<sub>二</sub>感<sub>一</sub> 一両僧人<sub>二</sub>不<sub>一</sub>審<sub>二</sub>名<sub>一</sub>

この詩の題にある「過<sub>二</sub>金心<sub>一</sub>(<sub>二</sub>金山<sub>一</sub>)寺<sub>二</sub>」が鎮江の金山寺を示すのであれば、大師は明らかにこの地に来られたことになる。しかし現段階において、それを論証する手懸かりはない。

註(1) 『中国佛寺志』 36 二二頁

(2) // 38 一六三頁

(3) // 36 二二頁・38 一六一―一六二頁・39 一五八―一五九頁

(4) // 36 二二七―二二八頁

(5) // 36 二六二―二六三頁

(6) // 36 三一―一頁

- (7) " 36 三〇・五八頁
- (8) " 39 一五九—一六三頁
- (9) 宋高僧伝卷第十 大正蔵五十卷 七六七頁
- (10) 隋唐仏教宗派研究(顔尚文著) 六八—六九頁
- (11) 「景德伝燈録卷第五」 大正蔵五十一 二二三五頁
- (12) 中国禪宗史の研究(阿部肇一著) 一五頁
- (13) 中国佛寺史 38 二九三頁
- (14) " 36 二六四頁
- (15) " 36 三〇七—三〇八頁・38 二二三頁

(三) 定慧寺

焦山は鎮江市の東北部に位置する高さ七十一メートル、周囲二千メートルの長江の中に屹立する山である。

昔、樵山と称したが、東漢末に焦光という人物が隱居の為にここに住みついたことから焦山といわれるようになった。

この山は鎮江市の西北部に位置する金山と十三キロ位しか離れておらず、古来よりこの両山は相並べて扱われ、「焦山山里寺、金山寺里山」と称せられている。

この山には定慧寺という寺がある(本書四四頁写真)。この寺は今から一七八〇年程前の東漢時代の興平年間(一九四—一九五)に創建され、当時は普濟寺と云われた。その後、唐代に玄奘三蔵の弟子法宝<sup>1)</sup>が来て大雄宝殿を建てた。現在の

宝殿は唐代のままであるらしい。この時代この寺の宗派は法相宗であった。続いて律宗を学んだ神邕が来た時には、天台宗であつたらしい。神邕は律宗の系譜からいうと、慧光―道雲―道洪―智首―道宣―文綱―道岸―玄儼―神邕ということになる。神邕は「宋高僧伝」によると、字は道恭、姓は蔡氏といった。東晋代の太尉謨即度江祖十五代の孫にあたる。十二才の時、道を学ぶため法華寺の俊師に師事し、孔积二典を学ぶ。一度読み学んだらすぐに誦する程であつたという。その後、法華寺の玄儼師について四分律鈔を学んだ。貞元四年に病に遇い、七十九才で寂している。また宋代には金山寺の住職であつた佛印了元禪師（一〇九二）がここに来た頃から禪宗になつてゐる。その頃普濟禪院と称した。

佛印について、「金山志」にはこのようにでている。

「宋佛印了元禪師字覺老生饒州浮梁林氏世業儒父祖皆不仕元生二歲琅琅誦論語諸家詩五歲誦三千首既長從師授五經畧通大義因讀首楞嚴經于竹林寺愛之盡捐舊學白父母求出家度生死禮……中略……自承天遷淮之十方廬山之開先歸宗潤之金山焦山江西之大仰又住雲居云々……」

師は饒州の浮梁の人で、姓は林という。二歳の時から論語や詩を誦するという神童であつた。そののち出家し、修行の後、金山寺の住職となつたが、その名声は遠くまで聞こえたということである。

元代には、この寺は焦山寺と改められたが、後に火災にあつて焼失し、明時代の宣德年間（一四二六―三五）に修復されている。この頃は禪宗の中でも臨済宗であつた。清朝の康熙四十二年（一七〇三）に定慧寺と改められ、曹洞宗となる。その後、清末に浄土宗となり、現在にいたつてゐる。

このように古くからこの定慧寺は禪宗の名刹金山寺とは好対照に一宗派に固執することなく、諸宗兼学の寺として今に来てゐる。従つて、各宗の教理を修学する為には、この寺に修行にくることになつており、唐・宋以来、この寺

に來た僧侶は多かつた。全盛期には一千人以上の僧がいたらしい。

「中国国際旅行社鎮江支社」発行のパンフレットには、弘法大師空海が二度この寺に參禪の為に立ち寄つたことになつてゐるが、その根拠については金山寺同様不明である。

民国二十三年（一九三四）にはここに仏學院が出来て、日本の友松円諦・藤井草萱の諸氏が一時期滞在されていたこともある。

この寺にも多くの歴史的遺産が残つてゐる。

定慧寺の天王殿前には、樹齡八百余年という古銀杏の大樹がある。その横に乾隆皇帝（一七三六—一七九五年在位）の御碑亭がある。清朝代乾隆皇帝は五回焦山に来てゐる。第一回目にこられた乾隆十六年（一七五二）に「游焦山歌」を作つてゐる。また乾隆二十七年（一七六二）には焦山に行宮を建ててゐる。清朝道光二十年（一八四〇）に建てられた觀潤閣は、この行宮の址に建てられたものである。

寺の東には焦山碑林（宝墨軒）がある。ここには鎮江に蔵されていた歴代の碑刻二百六十余りが集められてゐる。唐代の儀鳳二年（六七七）に刻された魏法師碑をはじめ、著名な書家・顔真卿、宋代には蘇東坡・米芾、元代には呉鎮、明代には文徵明・楊繼盛などの碑刻が残つてゐる。その中に「瘞鶴銘」なる碑がある。これは東晋時代の書家・王羲之の碑である。これは焦山の西麓の岩に刻んであつたが、これが崩れて、長江に落ちた。そこで、この碑を清の康熙五十二年（一七一三）に長江より拾ひあげたらしい。その大部分は拾うことができたが、十一文字程不足してゐるといふことである。最初に「瘞鶴銘」が刻まれていた周辺には、宋・元・明・清の約一千年程を通じてここに訪れた人々の残した石刻（摩崖石刻）がある。この為、焦山は「書法の山」としてその名を擧げてゐる。

また焦山の西麓には「三詔洞」といわれるものがある。ここは焦山の名の由来の人でもある焦光が後漢末に住した

ところである。三詔の意味するところは、時の皇帝献帝が官職を退いた有能なる焦光をもう一度官職にもどらせる為に、三度招いたことによる。結局、焦光はこの誘いを三回とも断わっている。

その他、定慧寺には、明朝の天順年間（一四五七—一四六四）に李白の「登高壯觀天地間」という詩の意味内容から名づけられた壯觀亭をはじめ、別峰庵・吸江樓・百寿亭等がある。

註（1）『支那佛教史講話』（境野黄洋著）四一〇頁

（2）『隋唐仏教宗派研究』一一六頁

（3）『宋高僧伝』卷十七 大正蔵五十卷八一五頁中下—八一六上

（4）『中国佛寺志』36 六四—六八頁

## 六、揚州における仏教事情

### （一）揚州の概況

揚州の歴史をさかのぼると、今から二千四百年程前の春秋時代までもどる。呉王夫差が邗城を紀元前四八六年に築いたことに始まる。隋代には煬帝が京杭大運河を造り、更にこの地に多くの離宮（江都宮）を建てて住した。揚州は地形的には、南を長江、北を淮河、中央を古運河、東側を京杭大運河が通るとい位置にある。隋・唐時代を通じて、南北の経済・文化の交流をはかる拠点として、また対外的には貿易港として重要なところであった。

歴史上において唐代の天宝年間（七四二—七五五）に大明寺の鑑真和尚が日本に來られたことは有名なことである。

揚州市街図



ところで大師の入唐された当時の揚州は二つの地区、牙城・羅城にわかれていた。古運河から街を横断するように内河が流れているが、その北側を牙城、南を羅城と呼んだ。羅城が民衆の町であるのに対して、牙城は現在の古城遺

また、南宋代末にはここにイスラム教の布教の為、マホメットの十六代の子孫、ビハオ・アルディンがやってきている。世界的な旅行家マルコ・ポーロも元朝初年時にここにやって来て、三年間揚州の総官をしたことがある。

一方、この地より輩出した文化人として、唐代には李白・白居易・杜牧とはじめ、宋代には蘇東坡・歐陽修などの人がある。

この揚州は二千四百年の歲月の中で、様々な文化を創造していった。

千五百年の歴史をもつ大明寺・唐代古城遺跡、隋の煬帝、清の康熙皇帝・乾隆皇帝（五亭橋・白塔等）の残した遺址がある。その他、唐代の開成三年（八三八）に建てられた石塔、明の万歴十年（一五八二）・十三年（一五八五）に建立された文峰塔・文昌閣等が残っている。



文峰塔

跡を中心とする城下町（官吏が住した）であった。

(二)大明寺

大明寺は揚州の西北部の蜀岡という丘の上にある。この寺の前には瘦西湖という揚州の中でも最も美しい湖がある。これは杭州の西湖をほっそりさせた湖、或いは湖面が細長いために「瘦」といわれてきている。しかし、この「瘦」を秀れるという風に読ませてもいる。則ち揚州が南北文化の交流の地であったため、この湖は「北方の雄大さと南方の秀逸さ」を兼ね備えた湖といわれることがしばしばあった。

さて大明寺にもどるが、この寺は五世紀の南北朝時代の大明年間（四五七―六四）に建立されたことから、その年号をもって寺名を大明寺としたもので、千五百年以上の歴史を有している。隋の文帝が仁寿元年（六〇一）に境内に九層からなる栖霞塔を造ったため、一時期、栖霞寺と称されることもあった。この塔は会昌三年（八四三）に焼失している。唐代の詩人である李白や白居易がこの塔に登って詩を賦したことは有名な話である。現在、山門前に「棲雲遺址」とかかれた扁額のかかった牌楼が建っている。

清朝の乾隆年間に法浄寺と改称している。それは乾隆皇帝が大明という名を嫌ったためといわれている。

この大明寺は鑑真和上の住された寺として日本には馴染み深い寺である。鑑真(六八七―七六三)は唐の嗣聖五年(六八七)に揚州江陽県に生まれている。その後、大雲寺で出家し、大明寺の住職になるのは二十六才の時である。律宗は唐代初期に三派に分裂する。つまり隋朝の洪遵の法系から相部宗の法礪(五六七―六三五)、東塔宗の懷素が分れ、道洪の法系から智首(五六七―六三五)―道宣と続き、この道宣(五九六―六六七)が南山宗を起している。この中、相部宗と東塔宗はしだいに衰え、これに対し南山宗は栄えて、後に律宗といえはこの宗を指すことになる。道宣門下の弘景の後を受け継いだのが鑑真和上ということになる。

井上靖の『天平の甍』でも有名な日本僧栄叡・普照が大明寺を訪れるのは天宝元年(七四二)である。鑑真が二人の僧の要請に従い、日本に仏教(戒律)を伝える為、揚州を発ったのが天宝二年(七四三)の六月である。その出発した場所は、明代に造営された文峰塔前あたりである。現在そこには碑が建てられている。碑には中央に「古運河」と大書され、左に小さく次の文字がある。

唐天宝二年(公元七四三年) 鑑真大和尚

命弟子抵東河造船準備首次東渡

このように鑑真一行がこの場所造船を造り、渡航したことを記している。この時代、古運河には百艘以上の船が往来していた。鑑真が五回の失敗の後、第六回目の渡海により、日本の秋妻屋浦へ到着するのが七五三年のことである。

隋朝の文帝の仏教擁護政策を引きついで煬帝は晋王広とよばれた皇太子時代の揚州総管在任中に江都揚州に慧日・法雲・玉清・金洞の仏・道二教の四道場を置いている。この頃から揚州周辺の仏教はさかんに始める。唐代に



も大小あわせて四十以上の寺があったといひ伝えられている。弘法大師もこの揚州、特に大明寺には盛慨深いものをもたれながら、ここに尋ねられたと考えられるが、それを論証する史料は見い出せない。八三八年に大師の弟子である常暁・円行が揚州に来ていた。常暁は栖霞寺に留まり、寺の住職であった文瑋法師から仏教（密教も含む）の教えを受けている。

清朝に法浄寺と名を改めたこの寺は、一九八〇年、奈良の唐招提寺の鑑真和尚の里帰りを記念して、鑑真和尚が住職であった頃の呼称「大明寺」に改められている。現在、大明寺には唐招提寺を模した鑑真紀念堂が建てられている。

## 七、南京における仏教事情

### (一) 南京の概況

南京は中国における四大古都の一つである。南京の歴史は春秋戦国時代にはじまる。ここはその時代、呉・越・楚の接点にもあたるところで軍事上大きな役目をはたしたところである。

それは、後に三国時代の蜀將、諸葛亮孔明が、前を長江に臨み、その周りを紫金山・清涼山・雨花台に囲まれた天然の要害を称して、「鐘山に龍がとくろを巻き、石城に虎が距まる」といったことでも容易に理解しうる。この地形が三国時代、呉の都とされた原因となったのであるが、それ以来、西晋時代(二六五―三一六)の四十年を除いて、東晋・宋・齊・梁・陳時代、少し間をおいて、南唐・明・太平天国時代の都とされるのである。

従って、この長い歴史の流れの中で様々な文化が生み出され、消失していったことであろう。

ここにも数多くの歴史的文物を見いだすことができた。石斗城・南唐二陵・明孝陵・明故宫遺址・中山陵等があるが、その中で興味をひくものとして市の東北部に位置する棲霞山にある棲霞寺と紫金山にある靈谷寺があげられる。

## (二) 棲霞寺

棲霞寺は南京市の東北部にある高さ四百四十メートルの棲霞山の山麓に存在する。棲霞寺は靈岩寺・玉泉寺・国清寺と並んで中国四大叢林の一つにあげられている。

この寺は南朝齊永明七年(四八九)に創建されたものである。明僧紹居士が高僧法度の説法を聞く為に建てたものを、その後法度に与えて棲霞精舎と呼んだことにはじまる。梁の元帝(在位五二一―五五四)がここを訪れた時に、次のような碑を残している。

撰山棲霞寺碑銘

梁 元帝

金池無底已通寶壘之側玉樹生風傍臨綵船之上七重欄楯七寶蓮花通風承露含香映日銘日苔依翠屋樹隱丹楹澗浮山影  
山傳澗聲風來露歇日度霞輕三天不毀得一而貞<sup>1)</sup>

その後、唐代に高祖(在位六一八―二六年)が勅して功德寺と為し、高宗(在位六五〇―六八三年)に隱君棲霞寺と改

め、このあと、武宗在位（八四一―八四六年）の会昌の法難（八四二年）にあい、取り壊されたが、宣宗の大中五年（八四七）に重建され、妙因寺と称せられるに至る。北宋代の太平興国五年（九八〇）に普雲寺、景德五年（一〇〇八）に棲霞寺、元祐八年（一一〇九）に崇報禪院、又は景德棲霞寺と改められ、明代洪武二十五年（一三九二）に棲霞寺となつている。

この寺名の由来は、唐上元三年（六七六）四月に高宗が明僧紹の徳をしのんで、紀念に「明征君碑」の碑を建立したのであるが、この中に「棲霞」という二文字の高宗の真筆が存在したことによる。この碑銘は正式には「御製撰山棲霞寺明徴君碑」という。これは高宗の詞を唐代の著名な書家高正臣が書いたものであり、「朕聞鐘山玉闕羽駕之所……以下略」ではじまものである。

ここは南朝時代から仏教が盛んであった。南齊永明二年頃から梁代天監十年までの約三十年間に、佛龕三九四個、その中に大小の佛像五百十五尊ある。この佛龕の石刻時期は洛陽の龍門石窟に遅れること五十年程である。また仏教を積極的に擁護した隋の文帝が仁寿元年（六〇一年）に建てた舍利塔がある。現存するのは九三七年から九七五年にかけて再建されたものである。塔は八角七層なるものであり、釈迦牟尼佛の一生を物語る「八相成道図」が刻まれているところに特徴がうかがえる。

舍利塔を建立する時に、隋文帝がしたためた詔勅には当時の仏教界の様子的一端がうかがわれる。次にその文を引用してみたい。

#### 立舍利塔詔

隋文帝

門下仰惟正覺大悲救護群生津梁庶品朕依三寶重興聖教思與四海之内一切人民俱發菩提共修福業使當今現在爰及來世永作善因同登妙果宜請沙門三十人諸解法相兼堪宣誦者各將侍者一人并散官各一人薰陸香一百二十斤馬五



南京の古刹、棲霞寺

定分道送舍利先往蔣州棲霞寺泊三十州次五十三州等寺起塔其注未寺者就有山水寺所起塔依前舊無山者於當州內清淨寺處建立其塔所司依樣送往當州僧多者三百六十人其次二百四人人其次一百二十人若僧少者盡皆僧為朕皇后太子廣諸王子孫等及内外官人一切民庶幽顯生靈各七日行道并懺悔起行道日打剎莫問同州異州任人布施錢限止十文已下不得過十文所施之錢以供營塔若少不克役正丁及用庫物率土諸州普為舍利設齋限十月十五日午時同入石函總管刺史已下縣尉已上自非軍機停常務七日專檢行道及打剎等事務盡誠敬副朕意焉主者施行仁壽元年六月十三日內史令豫章王臣  
（3）  
 暉宣

棲霞寺の開山祖師ともいふべき法度法師とはいかなる人物であろうか。

『高僧伝』巻第八によると、法度は黄龍の人で幼くして出家し、北土の僧淵に学ぶ。同時期、高士齊部の明僧紹は人里を離れ、拱山に隱居していた。明僧紹は法度を師友の敬をもって迎えた。ここで無量寿經の説法をさせ（法度は常に安養に生れんことを願ひ、偏えに無量寿經を講じた）、後にこの自分の住んでいた所を棲霞精舎とし、法度に与えた。法度は齊永元二年（五〇〇）にここで寂している。（3）

法度の弟子に僧朗がいる。僧朗は江南地方に三論宗を説きひろめた人であるとされる。

このあたりの消息を『高僧伝』には

度有弟子僧朗。繼踵先師復綱（山寺）。朗本遼東人。為性廣學思力該普。凡厥經律皆能講說。華嚴三論最所命家。（5）

と伝えている。法度の弟子である僧朗は師のあとをついで棲霞寺に住した。僧朗は遼東の人で、広く深く学を修め、経律に通じてよく講説し、特に華嚴・三論には精通していた。

隋代に三論宗を大成させた吉祥大師吉蔵(五四九—六二三)は棲霞寺の学風をうけ継いだ人である。僧朗以降、僧詮—法朗—吉蔵とつづくのである。即ち棲霞寺は江南地方における三論宗の発祥地ということになる。因みに吉蔵は金陵(南京)で生まれている。

隋・唐代を通して三論宗の盛んな所として、五箇処あげることができる。(一)金陵棲霞、(二)会稽、(三)荆襄、(四)長安、(五)蜀部である。<sup>(6)</sup>

弘法大師は、一説に三論宗の大安寺において出家されたといわれている。天長六年(八二九)十一月五日には大安寺の別当に任じられている。また真言宗の教学を形成する上において三論宗は、大師にとって重要な意味をもったこともみのがせないことである。

三論宗と同様に大師と深く結びついていくものとして華嚴宗がある。弘仁十三年(八三二)二月、東大寺に灌頂道場を建立し修法を行ない、更に八二四年の三月二日には、東大寺で三宝供養の願文を起草している。一方、真言教学の根本ともいべき十住心思想において、第九番目の位置にあるのが華嚴教学である。大師にとって華嚴宗の与えた影響には大きなものがある。

さて中国の南北朝以来研究が盛んにされるようになった華嚴経(教学)は、唐代初期、第三祖といわれる法蔵(六四三—七一三)によって大成される。南方は北方に比べて三論学者の助力もあつて益々盛んになる。前述の僧朗をはじめ、僧詮・法朗・吉蔵等多くの三論研究者が三論を学ぶと同時に華嚴を学んでいたことが諸文献にあらわされている。<sup>(7)</sup>

註(1) 『中国佛寺志』 4 四九〇頁、34 三一九頁

- (2) // 4 五九二一六〇二頁・34 三二七—三三八頁
- (3) // 4 四九八—四九九頁
- (4) 『高僧伝』卷第八 大正蔵五十 三八〇頁中下
- (5) // 三八〇頁下
- (6) 『隋唐佛教史稿』(湯用彤著) 一二六頁
- (7) // 一六一頁

(三) 靈谷寺

靈谷寺は風光明媚な紫金山の麓にある。

この寺は梁代天監十三年(五一四)に武帝が師の宝誌和尚の寂後、師を葬う為に現在の明孝陵の所在地に塔を建立し、塔の前に「開善精舎」なるものを創建したことに由来する。以来、唐の乾符年間(八七四—八七九)に宝光院、北宋の開宝年間(九六八—七五)に開善道場に改称され、太平興国五年(九八〇)に太平興国寺、慶曆二年(一〇四二)に蔣山寺、明代の洪武十四年(一三八一)に太祖朱元璋が自分の陵をここに建てた為、現在の地に移されて靈谷禪寺と称されるようになった。

宝誌は天監年間(五〇二—五一九)に武帝の要請によって鎮江の金山において水陸大会を行なった人物である。現在、靈谷寺門前には、「寶誌禪師應化真身道場」と書かれている。宝誌の徳をしのび吳道子が宝誌の像を描き、李白が讀えた詩をつくり、それを顔真卿が書いたという「三絶碑」は特に有名である。また寺内には玄奘法師紀念堂があり、その中に、八角十三層からなる「玄奘法師頂骨土塔」があり、三蔵法師の頂骨が奉安してある。

唐玄奘法師頂骨來歴略考

玄奘法師卒于唐高宗麟德元年（六六四）初葬于長安白鹿原、後遷葬于樊川北原、營建寺塔、稱興教寺塔、法師舍利則供養于終南山紫閣寺之五重塔

宋太宗端拱元年（九八八）金陵長干寺住持可政訪問終南山紫閣寺、傳得玄奘法師頂骨、携歸金陵天禧寺（長干寺）  
宋真宗天禧二年、即一〇二八年改稱天禧寺）供養。宋景定建康志、元至正金陵新志、天禧寺条都有此記載可考。

一九四二年、十二月二十五日、本市中華門外干平治門大報恩寺三藏塔遺址丘陵地帶時發現地下有磚基石材。塔基壇下埋有石棺、內藏一石函。据石函右側宋仁宗天聖丁卯（一〇二七）年石刻、文字、知玄奘法師頂骨即保存于此石函内、與宋、元建康金陵志、書記載相合、確定為宋代從終南山紫金寺傳來之玄奘法師頂骨無疑。

解放後南京市佛教協會重修靈谷寺、於一九七三年、會商得南京博物院同意、就靈谷寺特闢玄奘法師紀念堂、奉安玄奘法師頂骨塔于此、以供廣大信眾知各界人士瞻仰致敬

と説明があるように、唐高宗麟德元年（六六四）に入寂した玄奘法師は、初めに長安の白鹿原に葬られ、後に樊川北原に移され、そのところに寺塔が建てられた。これが現在の興教寺塔である。法師の舍利は終南山紫閣寺五重の塔で供養された。九八八年、金陵の長干寺の住持にもちかえられた。それが一九四二年十二月二十五日に発見され、石函の右側の文字から玄奘法師の頂骨と判明したのである。



玄奘法師頂骨土塔

靈谷寺は明朝の時代、金陵（南京）においては天界寺・報恩寺と列せられ、三大寺といわれている。この三大寺に続く五大寺として鵝鳴寺・能仁寺・棲霞寺・弘覺寺・静海寺があつた。

靈谷寺から少しされるのであるが、南京を代表する人物の一人として、天台宗の開祖智者大師智顛（五三八―五九七）がいる。智顛は荊州華容の人である。父は梁朝の官吏であつたが、智顛が十七才の頃、内乱に遇い、一家は離散している。この時荊州の長沙寺において僧になることを決心し、十八才の時に果願寺の法緒に従い出家している。二十才にして具足戒をうけ、後に光州大蘇山慧思禪師に師事する。陳光大元年（五六七）金陵に行く。法善等三十人程と瓦官寺において禅法を弘めている。智顛は五六九年に瓦官寺において『法華經』を講じている。ここに前後八年程住して、その間、『大智度論』等を講説した。その後、夢告に従つて天台山へ行く。至徳三年（五八五）には金陵に来て、靈曜寺にて『大智度論』・『仁王般若經』等を講じたようである。<sup>1)</sup>

このように智顛と金陵の結びつきには深いものがある。

註（一）『中国仏教』二 九六頁 中国仏教協会編

## 八、おわりに

これまで鎮江・揚州・南京という長江流域の、しかも京杭大運河との交差点に位置する地域の仏教事情について、大師との関わりを想定した上で見てきたわけである。

この地域の有した歴史的役割もさることながら、唐代、この周辺において仏教は非常に盛んであつた様子が把握し得る。それだけに夫々の地域が大師にとって欠くことのできない要素をもっているように思われる。

確かに南京一つをとりあげると、大師が長安をめざされた道からは少しはずれる。しかしながら、三論宗をはじめ華嚴・天台宗等がさかんであったこの地域を大師が見過して通りすぎられるとは考えられない。当時、揚州からでも南京は船で一日のコースであった。時間的制約を感じられながら行かれた往路は別として、充分なる余裕をもつての帰路、大師がこの地を訪れたとしても不自然ではない。寧ろ積極的に今を盛りに華開いている唐の仏教に接していかれたであろうと想像されるのである。それ程の重要性をもつこの地域である。それが故に、今日も尚、弘法大師留錫の伝説がこの地方から消えさることなく根強く残っているのではないだろうか。

大師が入唐された当時その最盛期をむかえていた密教が、その後何故に衰微していったのであろうか。

四十日間の追体験の旅の中で、私達はこのような問いをなげかけつづけた。それに対して、各地域における寺院の住職の方が口をそろえていわれたことは次のようなことであった。

「何度もの法難（魏武法難四四六年、周武法難五七四年、会昌法難八四二年、後周法難九五五年）に遇い、その度に行われた寺院の破壊・僧侶への弾圧の為に仏教が衰えていった。その中で禪宗と浄土宗は残り続け、現在にいたっている。禪宗・浄土宗が何故に残ってきたのかというと、坐禪がどこでも手軽にでき、念佛も同じ性質をもっていたからである。それに対し、密教には曼荼羅・法具等が不可欠で、何よりも必要とされるのが、正統な相承者による伝授である。しかしながら寺院が壊されると同時に曼荼羅・法具等が消失し、時に従い相承者もなくなっていたのである。これが中国において密教の衰微していった一因である。」

過去の仏教の歴史をこのように回顧される住職方の説明は、私達の疑問のすべてを解決するに足るものではなかったが、かといってこの言葉を一笑に付してしまうには、あまりにも密教の特徴を的確にとらえたものと思われてしかたがなかった。次の瞬間、一人の密教徒としてその責任の重大さを感じざるを得なかった。

## 密教相承の祖師の足跡

— 広化寺・奉先寺・福先寺・恵果の墓塔 —

静 慈圓

はじめに

昭和五十九年（一九八四）三月二十八日（水）、「空海・長安への道」訪中団は洛陽についた。福州より始めた踏査もあと一息で西安に至る。訪中団の追体験もいよいよ最後に近づいた。二十八日夜、私たちは洛陽・西安について討議の結果、ここでは密教相承の祖師の足跡を追うことにしほった。洛陽の仕事は普無畏と金剛智、西安では恵果にしほって行動をすることを決定し散会した。訪中団の最後を締め括る仕事はこれしかない。誰もがそれを痛切に感じていた。

夜おそく佐藤団員が尋ねて来た。もし団としての一連の行動の中で、これら祖師にせまることが出来なければ、佐藤団員が得意とするフィールドワークで、目的にせまらるべく単独行動をしたい、との申し出である。現代中国の状況下で、はたしてそれがどこまでできるか、それは別として目的追求にはそれもやむを得ないであろう。私個人もそう思っていたが、ともかく明日龍門石窟を尋ねた結果の上で決定することとしよう。佐藤団員と話合った。ことはこのように緊迫していたのである。

龍門石窟全景



三月二十九日（木）。八時出発。龍門石窟に到着。すぐ「龍門文物保管所」を尋ねる。そこで私たちは龍門文物保管所研究員の温玉成先生と会った。温先生は一九六四年北京大学卒、仏教考古学を専門とされている学者である。温先生との懇談の中で、龍門における仏教、中でも私たちの目的とする広化寺、奉先寺、福先寺のことが明らかにになった。先生は広化寺と奉先寺に自ら案内してくださったのである。また温先生は、私たちの要請に答えて、二十九日夜、洛陽「友誼賓館」を尋ねてこれれ、三時間近く膝を交えて洛陽の仏教について懇談した。以下に示す広化寺・奉先寺・福先寺の位置については、温先生の教えによる。

今ここで洛陽・長安を報告する目的は、もちろん広化寺・奉先寺・福先寺の跡、それに惠果の墓塔の位置を発表することである。しかしながら、これらのことが含まれている遠因として、唐時代の密教のこととか、各祖師の關係などのことも述べておかなければならないと考える。それらのことを含めて述べることを許していただいて、この一文をまとめ、今回の報告としたい。

## 八祖の系譜

善無畏・金剛智・惠果を問題にするには、八祖の系譜について触れておかねばならない。真言宗では、師より弟子へと相次いで密教の教えを相統して伝えてきた阿闍梨がおり、その第七番目が青龍寺の惠果であり、第八番目を弘法大師空海とする。

真言密教では、相承系譜として「付法の八祖」と「伝持の八祖」という二つの流れがある。「付法の八祖」とは、第一祖大日如来、第二祖金剛薩埵、第三祖龍猛菩薩、第四祖龍智菩薩、第五祖金剛智阿闍梨耶、第六祖不空金剛阿闍梨耶、第七祖惠果阿闍梨耶となり、そして第八番目を弘法大師とする。七祖までの祖師の相承のことは、空海が「広付法伝」において自ら詳述されている。

この「付法の八祖」の流れでは、真言密教のたてまえからいえば足りないものがある。「付法の八祖」は、「金剛頂経」系の流れである。つまり「金剛頂経」系の密教と、「大日経」系の密教を、金胎両部の大経とし、所依の經典とする真言密教では、付法の相承では「大日経」系の流れが欠けている。そこで「大日経」の漢訳者であり、その注釈書「大日経疏」を著わした善無畏と一行を別に加えて、惠果が「大日経」系の密教をも相承したことを明らかにするのである。これが「伝持の八祖」（又は住持の八祖）といわれるもので、御室の守覚法親王（一一五〇—一二〇二）が、空海の「略付法伝」にもとづき制定したといわれる。「伝持の八祖」とは、大日如来と金剛薩埵をはぶき、龍猛、龍智、金剛智、不空、善無畏、一行、惠果、弘法と相統される系譜である。これをもととし「大日経」系の密教は、善無畏から玄超をとおして惠果に継承されたとし、ここに惠果は、金胎両部を相統したことをするのである。「金剛頂経」の系統を直系とするのに対し、「大日経」系密教相承を傍系といわざるを得ないところがここにある。

善無畏(六三七―七三五)―玄超(……七六七……)

金剛智(六七―七四二)―不空(七〇五―七七四)

〔恵果(七四六―八〇五)―空海(七七四―八三五)〕

恵果が両部を受けたという相承の系譜は以上のものであるが、ここで重要なのは、中国における密教流入の年代である。七一六年善無畏が長安に入る。この時を中国密教の始まりとしても、空海が入唐し日本へ帰ったのは八〇六年である。この間百年たらずである。中国へ仏教が伝わった時期については諸説があるが、大概にみても今日まではほぼ二千年の中国仏教の歴史の中で、密教があつたのはわずか百年ほどである。ここに中国密教の时期的な特色があるのである。

### 龍門の十寺

温玉成先生は、唐人の詩文を検索され、さらに龍門碑刻と出土文物や実地踏査を合わせて検討され、白居易(七七二―八四六)時代の「龍門十寺」を明らかにされた。「龍門十寺」の詳細は、雑誌「中州今古」一九八三年第二期・第三期に述べられている。一言しておく、唐代の「龍門十寺」は、そのはじめは白居易の詩の中に見える。白居易は、大和六年(八三二)述の「修香山寺記」の中に、「洛都の四郊の山水の勝は、龍門が第一。龍門十寺の観遊の勝は、香山が一番である」といつている。仏教が広く伝播した唐代においては、公卿や貴族、国内外の高僧は、龍門で石窟を開き、伽藍を建立し舍利を祭り、宝塔を建てる風習が盛んであった。だが政治経済の発展に随って繁栄してきた寺院も、唐代の変乱、安史の乱(七五五―七六三)以後は、洛陽市街の衰微と共に人煙なき状態であったという。広化寺・奉先寺もこの「龍門十寺」とその時代の流れの中で考えていかねばならないのである。

## 善無畏三藏と広化寺

『大日経』系の密教といえ、善無畏を無視して論ずることはできない。

善無畏は、貞観十一年（六三七）、東インドのオリッサ地方の王子として生まれた。ナーランダ寺で学び、達磨拘多阿闍梨から陀羅尼、印契、瑜伽の密教を授けられ、また灌頂もうけた。ナーランダ寺を出発して陸路唐に向かう。シルクロードを通り、迦濕弥羅（唐代闍賓）、烏揚国をへ、突厥に入り、ついで路を吐蕃に取り、唐の西方に達した。とこの皇帝であった睿宗は、迎えを派遣し、僧の若那と將軍の史献に命じて、甘肅省の玉門塞の外で到着を待たせたところがあるが、善無畏が実際に長安に入ったのは、玄宗の開元四年（七一六）のことである。八十歳の高齢であった。また金剛智が長安に入ったのは、それから三年の後七一九年であるから、中国へ迎えられ密教を伝承した最初の人は善無畏といわねばならない。

ここで注目しなければならないのは、中国に伝えられた密教教理の内容である。インドにおいて発祥した密教は、思想的にも修法の面でも呪術的な宗教であった。ところがインド中期になると、密教は新しい思想の組織化が進められる。すなわち「呪術的な教え」にすぎなかった密教が、新しい思想の展開をとげて「成仏を求める思想」に変わったのである。そしてその代表經典が『大日経』と『金剛頂経』とであった。善無畏・金剛智は、まさにその代表者であったのである。

次にまた一つ重要な問題がある。それは中国における密教の受け入れ方である。中国において七世紀後半から八世紀にかけて、朝野の人々が密教に期待していたのは、密教のもつ現世利己的な機能であった。したがって皇帝が求め

ていたものも、「大日経」・「金剛頂経」を主とする成仏をめざす教えではなくて、現世利益の呪法であった。善無畏・金剛智にとつては皮肉ではあるが、ここに彼らは唐朝の中央集権国家体制が求めている、呪術的な機能をはたさざるを得なくなるのである。

朝野の人々が求めている現世利益・除災招福を目的とした宗教は、「道教」として当時の中国にはあつた。また皇帝の多くは、道教の信奉者でもあつた。したがつて密教を中国に同化させるには、「道教」との対決において、呪術を競う場づくりも余儀なくされた。請雨法などの呪術的な儀礼を、善無畏・金剛智共に多く行なっているのも、やむを得ない行為なのである（年表参照）。以上紙幅を多くとりすぎたが、当時の唐朝と善無畏の立場の概観である。

さて、開元四年（七一六）、長安に到着した善無畏は、勅命によつて興福寺の南院におちつき、のち延康坊にある西明寺に移る。翌年より早速翻訳を開始し、最初に「虚空藏求聞持法」一卷を訳出する。この経は、その時唐に留学し善無畏に師事していた大安寺僧道慈によつて日本に持ち帰られる。求聞持法は、日本では記憶力増進の法として、奈良時代では多く使用され、弘法大師もこの法より密教に入ったことも事実である。

開元十二年（七二四）、金剛智は帝にしたがつて洛陽に入る。勅命により洛陽の延福坊にある福先寺に住んで「大日経」の翻訳にとりかかり、翌年翻訳を完成する。善無畏はこの間に「大日経」の講義も行っている。これを一行が編集して「大日経疏」二十巻として完成する。洛陽においての翻訳は、「大日経」につづいて、「蘇婆呼童子経」三巻、「蘇悉地羯羅經」三巻、「蘇悉地羯羅供養法」三巻などがある。

開元二十年（七三二）、故国に帰りたいと願ひ出たが許可がでず、開元二十三年（七三五）十一月七日洛陽にて入滅する。行年九十九歳、龍門の西山に葬つたとある。これは善無畏の俗弟子の李華によつて書かれた「善無畏三藏碑銘」に出ている。同「碑銘」によれば、この時玄宗皇帝は、善無畏の死を悲しみ、鴻臚卿という名を贈り、鴻臚丞李現を

派遣して、定寶律師を葬儀にあたらせて龍門の西山に葬った。弟子の宝思・明思などは墓の側に住して服喪した、とある。

善無畏の死年や葬年については他に一説がある。即ち、『宋高僧伝』巻二によれば、善無畏は開元二十三年（七三五）十月七日に死亡、開元二十八年（七四〇）十月三日に龍門の西山広化寺の庭に葬ったとある。両伝に五年の相違がある。

#### 〈広化寺〉

広化寺と善無畏の関係は右のようであるが、その場所は不明であった。今回温玉成先生は、私たちに広化寺の跡を確定したと話された、そしてその場所に案内して下さった。

広化寺は龍門西山の北にあった（本書五二頁写真）。現在の龍門鎮西北の小山上である（地図参照）。温先生との懇談と、温先生の論文「龍門十寺考辨」（下）を参照して、以下広化寺に触れておく。

善無畏が入滅したあと、大福先寺律師の定寶は、善無畏を龍門西山の北に埋葬して塔を建立した。そののち乾元元年（七五八）、郭令公は朝廷に懇請して善無畏の墓塔院を一つの寺として建立した。これが広化寺である。これによると広化寺の寺名は善無畏の死後出来たこととなる。

善無畏が広化寺に埋葬されたあと、密宗の胎藏界の法師らは、常に広化寺に葬られることとなった。たとえば応順元年（九三四）に去世の可止（宋高僧伝）巻七の「後唐洛京長寿寺可止伝」参照）、顕徳二年（九五五）去世した道丕（宋高僧伝）巻十七の「周洛京福先寺道丕伝」参照）などがそれである。

次に五代以後の多くの皇帝は、広化寺に来て祈禱をしたり、善無畏の遺体を拝んでいる。

後唐の莊宗同光二年(九二四)十二月、「興駕広化寺に幸して雪を祈る」とあり、同光三年五月、「帝龍門の広化寺に幸して、仏塔を開き雨を請う」とある(『冊府元龜』卷一四五)。

開宝八年(九七五)、宋の太祖は「洛陽を幸し、龍門山の広化寺に至る。無畏三蔵の塔を開き真体を瞻敬す」とある。大中祥符四年(一一〇二)三月、宋の真宗は「洛陽龍門山広化寺に幸し、無畏三蔵塔を瞻す。贊を制して石に刻す。これを塔所に置く」とある(『仏祖統紀』)。

宋代詩人宋庠有に「謁龍門無畏師塔祈雨」の詩があり、宋帝御封薰爐を賜いて供養をなした、と言っている。次に、広化寺は「詩」の中にも多く出ている。

広化寺の近くに古くより大泉があった。北宋の学者歐陽修(一〇〇七—一〇七二)に「遊龍門分題十五首」があり「宿広化寺」の詩にいう。「横棹(横を横にして)深澗を渡る。露を披いて香薇を采る」と。宋の政治家司馬光(一一〇一—一一〇八)も、かつて「潜溪を渡って広化寺に入った」といったことがある。宋人で書画を善くした蘇過も「葯寮より広化の潜溪を渡って、宝応に入る」といつている。潜溪の名前は、宋代に始めて見られる。歐陽修はまた「牡丹花品」中にいう。「潜溪の緋とは、千叶緋花である。この花は潜溪寺で見られる。この寺はもとは唐の李藩の別荘であった」と。

広化寺は確かに龍門西山の北の小山上にあった。小山は土が削り取られ四角な型にみえる。削りとられた坂道を登っていく。坂道には所々に砕けた瓦・磚などが散らばっているが、温先生の話では唐代の布目瓦も多いという。また両側は墓地となっている。登りつめると広々とした麦畑であった。善無畏の舍利塔のあったところは、一段高くなっており、その中央はこもり盛り上がっている。

麦畑の中に石碑が一つ建っている。碑は清の康熙四十四年五月二十二日に建立された「修広化寺碑」である。伽藍

を修復した時のものである。高さ一七二センチ、幅八五センチである。碑文に、当時の広化寺はなお山門・鐘樓・天王殿・伽藍殿・地藏殿・三蔵殿および大仏殿があったことが述べられている。

温先生は次のようにいった。「広化寺は清の時代まで保存されていた。広化寺の遺跡として残っていた殿堂は、一九六五年冬私（温先生）が实地踏査した時にはなお一部は存在していた」と。

私たちは広化寺の跡に立った。一九八四年三月二十九日。私たちが尋ねた広化寺は、一面の麦畑の中に、碑が一つ残っているだけであった。

### 福先寺（古唐寺）を尋ねる

温玉成先生は、洛陽近郊の遺跡に造詣が深い。先生との対談は有意義であった。金剛智は洛陽の広福寺で病にかかり、この寺で入滅する。この広福寺の所在は判明出来なかった。しかし善無畏が『大日経』を訳出した福先寺については情報が得られた。福先寺は唐代城外東北の隅にあった（本書五〇頁写真）。現在の地名では唐寺門であろうという。私たちは、洛陽市宗教委員会秘書韓学礼先生、河南省宗教所々長張学智先生らの協力を得て、その場所に行くことにした。

三月三十日、友誼賓館を出、東へ車で約二十分のところの官道に「唐寺門」のバス停があった。このあたりを探索したが寺はなかった。近くに唐寺門村があるというので、そこへ行って尋ねることとした。バスは何度か道を間違えたが、ある村についた。村の老人に尋ねると古い寺があるという。その寺に行った。荒れはてた寺であり（本書五〇頁写真）、石碑は井戸の敷石に使用されており、折れた石柱がころがっていた。だが崩れかかった門に「古唐寺」の題額

がかすかに見える。「唐寺廟」ともあり、「洛城東北云々」と書かれた文章もある。この寺が福先寺であることは、ほぼまちがいないだろう。

実は「古唐寺」があるこの場所は未開放地区であった。私たちは道をまちがえている内に、偶然にこの場所へ来てしまったのである。この地区の代表者との約束で、これ以上の発表はさしひかえたい。

### 金剛智三蔵と奉先寺

金剛智は、「金剛頂経」系の密教をはじめて中国に伝え、その教えを中国に流布させる基礎をつくった。中インドの伊舎那毘摩王の第三子である。十歳のときナーランダ寺において出家した。密教との出遭いは、三十一歳の時龍智菩薩と会い、密教の灌頂を授けられた。密教を中国に伝えようとして、海路唐に向かう。長安へ入ったのは、開元七年（七一九）である。この年一行・不空などが弟子の礼をとって集まっている。翌開元八年（七二〇）に、洛陽に入る。以後洛陽と長安の間を往復し、密教の中国移植のために各地に灌頂壇をきづき、積極的に密教宣布の活動をしている。開元十一年（七三三）より、自らがインドより持って来た密教經典の翻訳にとりかかり、多くの經典を訳出する。主として作法を中心とした密呪經典が多い。「大正新脩大蔵経」の中には、經典・儀軌が合計十五部ほどあるが、この中には後世金剛智と偽称して訳出したものも含まれている。

開元二十九年（七四二）、七十一歳になった金剛智は、帰国を願い出て、七月二十六日勅許を得る。帰国準備の途中、洛陽の広福寺で病氣にかかり、八月十五日に入滅する。九月五日、勅によって洛陽の龍門に埋葬される。天宝二

年（七四三）、二月二十七日、奉先寺西岡に塔が建てられた。

### 〈奉先寺〉

龍門奉先寺の位置は、現在の伊闕の南口の西岸魏灣村である（本書五一頁写真）。この寺も文献の中に見られるもの、現在までその場所は不明であった。

奉先寺は、唐高宗（在位六四九—六八三）の時の創建である。「河洛上郡龍門山之陽大盧舍那像龕記」に次のように述べてある。「調露元年己卯（六七九）八月十五日、勅を奉じて大像の南に大奉先寺を置く。高僧の中で行解を兼備しているもの二十七人を選んで住まわせ、欠員が出来れば補うこととした。僧の中で范法、英律法師を首座とした。二年正月十五日、高宗が額を書いた。そしてまた別に、戒行に精通する僧十六人を招いた」と。

開元二十四年（七三六）、杜甫（七一二—七七〇）は、「游龍門奉先寺」の詩を書いた。その詩にいう、「已に招提に於て遊び、更に招提境に宿す。陰壑虚籟を生じ、月林清影を散ず」と。

天宝二年（七四三）、二月二十七日、金剛智の塔を奉先寺の西岡に建てた（『貞元釈教目錄』卷十四）。これ以後、密宗金剛界の法子法孫は、多くこの祖師塔の附近に埋葬した。たとえば唐東都の臨壇開法大師如信は、宝曆元年（八二五）に「奉先寺に遷葬し、その先師の塔廟に附す」とある（『白氏文集』卷六十八）。東都の十律大德智如もまた開成元年（八三六）に「奉先寺祖師塔の西に遷附し幢を建てた」とある（『白氏文集』卷六十九）。

北宋から元代前期までは、奉先寺は隆盛であった。北宋の時文彦博（一〇〇六—一〇九七）の詩、「寄題、龍門臨伊堂、兼呈奉先寺興公」、「題龍門奉先寺興禪師房」等がある。あとの詩一首は、元豊三年（一〇八〇）積慶庄（今の伊川

県境」の墓へ行った時に作った詩である。

司馬光(一〇一九—一〇八六)も、かつて奉先寺に遊び、華嚴閣に登ったことがある。宋人張耒(一〇五二—一一二二)の「奉先寺詩」にいう。「荒涼たる城南の奉先寺。后宮の美人を官ここに葬る。角樓相望みて高き墳を起す。草間栢下石人多し。秩卑焚骨冢を作らず。青石浮図丘墳と当す。家家墳上饗亭をなす。門を守りて相向いて人声なし」。これは后宮廷の下層の宮女も奉先寺附近に葬られた詩である。悲惨な情景をうたっている。

元代の奉先寺の首座園敏禪師は、庵園照の法弟にあたる。このことなどから類推すると、元代の奉先寺は、曹洞宗の寺であった。

龍門石窟は、伊河の清流を挟んで東山(香山)と西山(龍門山)に別かれています。東山から龍門山を見ると、ひときわ目を引くのが盧舎那仏を中心に、菩薩・迦葉・阿難・神王・仁王などの大像が並んでいる「大盧舎那像龕」である。この龕は、龍門中最も大きく有名なもので、唐高宗上元二年(六七五)に完成した。現在ここを奉先寺と呼んでいるが、これはいつのころからか間違っって呼ばれたのである。

東山の側、伊河の上流に「大萬伍仏像龕」がある。ここは密教洞であり、大日如來の石像、墓塔、經塔等が多くある。

#### 惠果和尚と青龍寺

惠果和尚は、天寶五年(七四六)長安東方の郊外、昭応というところで生まれた。九歳のとき不空の門弟であった曇貞に師事し、十七歳のとき不空に師事したといわれる。十九歳のとき不空から灌頂を受けた。二十二歳のとき不空よ

り「金剛頂經」系の密教を、ついで善無畏の弟子の玄超から『大日經』と「蘇悉地經」系の密教を授けられた。つまり金胎兩部を相承したのである。

惠果の名が知られるようになったのは、大曆九年（七七四）二十九歳の時からである。この年師の不空は入滅する。同年五月の「三藏和尚遺書」、六月の「大興善寺持誦僧を請う表」にはじめて惠果の名があらわれる。またこの年は、空海が誕生した年でもある。

大曆十年（七七五）に、惠果三十歳の年、青龍寺に東塔院を賜わり、毘盧遮那灌頂道場をおいた。翌年（七七六）、代宗皇帝を加持して国師の称号を受けた。以後師不空のあとをつぎ、鎮護国家の路線を着実に継承し、密教宣布に邁進する。

惠果が空海に会ったのは、貞元二十一年（八〇五）五月である。すぐに空海に金胎兩部の法を授け終った惠果は、同年十二月十五日、青龍寺の東塔院で入滅する。行年六十歳であった。

#### 〈青龍寺〉

惠果の密教宣布の道場となった青龍寺しょうりゅうじについて、『宋高僧伝』の「唐上都青龍寺法朗伝」と、『長安志』を参照してその縁起をたどっていこう。

青龍寺は、その始めは隋の開皇三年（五八三）二とする説もある文帝の創建である。文帝が遷都する際に、城中の墳墓を掘りこれを郊外に移し、そこに寺を建立して「靈感寺」と名づけた。唐の高祖の武徳四年（六二二）この寺は廃止された。高宗の龍朔二年（六六二）に城陽公主が病気になる。この時蘇州の僧法朗が秘を誦してその平癒を祈り、靈驗

があつたので、公主が奏請して再興、「観音寺」と改めた。そののち景雲二年（七一）、更に改めて「青龍寺」と呼んだ。以上は最も一般的な青龍寺の縁起である。

開元年間（七一—七四）には、釈迦尊や釈光儀が住んでいたという。この寺は代々高僧が住んでいたが、密教の道場ではなかつたようである。密教の道場になつたのは惠果以後のようである。惠果は大暦十年（七七五）青龍寺に東塔院を賜わり、毘盧遮那灌頂道場を置いた。以後青龍寺には、多くの弟子が集まり国際色ゆたかであつた。

惠果の付法の弟子の中には、八人の高弟がいる。その中でも空海と義操は、日本密教との関係において重視せねばならない。すなわち義操の付法にまた八人の高足を見るが、その中義真と法全は、日本との関係において重要な人物となる。すなわち慈覚大師圓仁（七九四—八六二）は、義真・法全について受法している。また智證大師圓珍（八一四—八九二）は、法全について受法している。さらに入唐八家の内圓載・圓行・宗叡・真如親王なども法全または義真に師事している。つまり当時の青龍寺は、密教の道場であり、日本の密教徒は、この寺に留錫受法したのである。

さて、唐第十五代の皇帝武宗は、会昌五年（八四五）に、徹底した廃仏を挙行する。これによって長安は、左右両街に各四箇寺を残すだけとなった。この時の青龍寺の様子を語る資料は中国側にはなく、むしろ日本側にある。我が国の智證大師の『批記集』によると、青龍寺も会昌の法滅において破損したが、翌会昌六年（八四六）に「護国寺」という名で元の場所に復興した。大中九年（八五五）七月に、また前の名前で「青龍寺」と呼ぶようになった、とある。

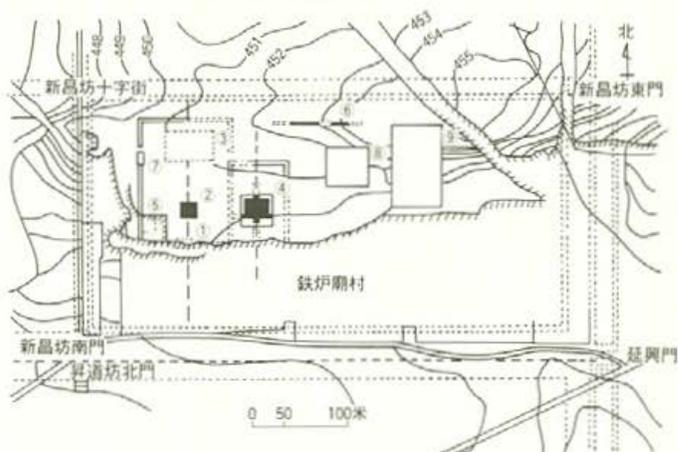
以後青龍寺という寺が、いつ頃まで存在していたかについては、文献上では的確な資料がない。ただ苦慮してこの問題を求めれば、敏求の『長安志』は、宋の熙寧九年（一〇七六）の著である。しかし『長安志』を作つた当時に、青龍寺の名が残つていたかどうかは、これまた不明である。

青龍寺の位置となると、古来から問題とされるところであるが、古くは智證大師の記録より始めねばならないであ

ろう。

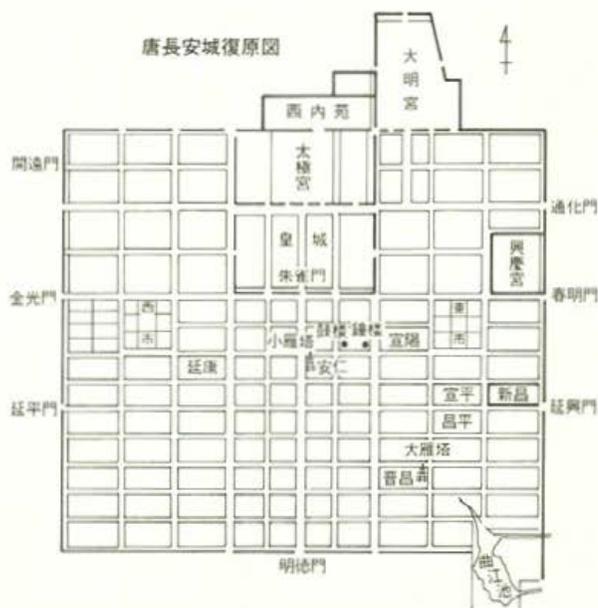
智證大師は、大中九年五月二十日に長安に入った。師の記録の中「青龍寺求法目錄」に「大唐国長安城左街新昌坊。

唐青龍寺遺跡平面図



遺跡 ①中門跡 ②塔跡 ③殿跡 ④殿跡 ⑤・⑥破壊がはげしく不規則である  
⑦回廊跡 ⑧「惠果・空海記念堂」 ⑨「空海記念碑」

唐長安城復原図



青龍寺。伝教和尚のもとで、経本を請うて写した」とある。また師の「大悲藏瑜伽記」には「大唐大中九年七月十七日、長安城左街新昌坊青龍寺の法全阿闍梨の院において、学法灌頂壇に入った」とある。これによって青龍寺は、長安城の新昌坊にあったことが明らかである。

だが青龍寺は、その名称・位置共に不明瞭なまま、この問題が真言宗徒の問題として問われ始めたのは、実に近年大正年間になってからのことである。すなわち、大正十年に桑原隲蔵氏、大正十四年に和田辨瑞氏、大正十四年に常盤大定氏、昭和二年に桑原隲蔵氏、民国二十一年（昭和七年）に中国僧積範成、昭和十四年に加地哲定氏が、それぞれの論文または踏査をし、青龍寺の位置を発表したが、決定論とはならなかった。

近年青龍寺の位置に結論が与えられた。中国社会科学院考古研究所西安研究室主任馬得志先生の研究踏査によるのである。馬先生の報告は、一九七四年に、中国の科学出版社発行「考古」第五期に「唐青龍寺遺址発掘簡報」と題して掲載されている。この論文によって発掘の踏査から青龍寺の位置が決定された。私もこの論文は読んでいたが、その後一九八〇年に馬先生と会う機会を得た。それ以後六・七回先生と会って青龍寺発掘についての助言をうけた。青龍寺についての歴史と各先徳の研究、さらに馬先生の発掘報告は、私の論文「唐青龍寺の遺跡とその発掘状況」（高野山大学密教学会発行「密教学会報」第十九・二十合併号）の中で詳しく述べておいた。

いずれにしても、青龍寺の位置は決定された（本書六三頁・六四頁写真）。新昌坊東南の四分の一がそれである（図参照）。その場所に弘法大師御入定千五百年御遠忌の記念事業として、「惠果・空海記念堂」が、唐代建築様式の姿のまま再現され、一九八四年（昭和五十九年）九月十日に落慶した。

## 惠果和尚の墓塔

私たち訪中団が、最後の目的としたのは、惠果けいこの墓塔の場所を見つけることであつた。惠果入滅の様子は、次のように記されている。

『大唐青龍寺三朝供奉大德行狀』。この書は、承和五年（八三八）に入唐した円行によって持ち帰られた。作者不明であるが、惠果についてもっとも詳しい伝記である。惠果は永貞元年（八〇五）十二月十五日、青龍寺東塔院において入滅。行年六十歳、僧曆四十年であつた。翌元和元年（八〇六）正月十七日、弟子道俗約千余人に送葬され、孟村龍原大師塔側に葬らる。宝曆二年（八二六）八月二十一日、義一・深遠・義舟らが滄川の側表蘭村に塔を建てて移葬した、とある。

空海の書した『大唐青龍寺故三朝國師惠果和尚碑』には、このところを「簡日於建寅之十七。卜塋于城邨之九泉」とある。つまり葬送の日を正月十七日に簡び、埋葬の地を城外の北邨にした、となる。

惠果の弟子吳殷ごいんが元和元年（八〇六）正月三日に書した『大唐神都青龍寺東塔院灌頂國師惠果阿闍梨行狀』には、「即ち永貞元年十二月十五日の五更を以て世を去りぬ。春秋六十法夏四十なり」とだけある。大師の『広付法伝』には、「永貞元年歲乙酉に次る。十二月十五日に至つて、告ぐるに微病をもつてして、この終あることを京都青龍寺東塔院に示す。元和元年正月十六日城東に葬る」とある。

右のような記載から、私は「青龍寺を規準として、城東の孟村龍原大師塔側」を目標とした。

この問題については、陝西省仏教協會會長許力功先生、中国社会科学院考古研究所西安分室の馮孝唐先生らの協力



を得た。私の推定では「新昌坊の青龍寺の城東城外、つまり延興門外の孟村」ということになる。ただし現在の地名で孟村という名は三箇所ある。青龍寺の位置と延興門の跡は、すでに馬得志先生によって確定されている。許力功先生らは、私たちの要望を入れ、青龍寺と際台村の石仏寺(現在は小学校である)、それに延興門跡と孟村等の場所へ案内して下さった。

現在恵果の墓塔跡と推定されるのは、延興門村の南(地図×印)である。今は耕地となっており、四方に広く麦が植えられている。ここから高台にある青龍寺が遠望できる。麦畑の中に立って許先生は次のように話した。「一九六〇年頃は、このあたりは十メートルほどの間隔で、墓が十数墓あった。誰の墓であるかは判明しないが、多くは唐代の僧の墓であり、墓のまわりには経塔・墓塔が多くあった。以後これらの墓は破壊された」と。

ここで発掘された墓塔の一部が、考古研究所西安分室に保管されているというので、私たちは研究所へ案内してもらった。仏頂陀羅尼経などの経塔、墓塔のカケラ、また拓本などがあり、その説明を受けた。これらのものはまだ調査研究中なので、公表するのは遠慮していただきたいとのことであった。

ともかく恵果の墓塔は、延興門村南の麦畑の中であろう。この場所が外れていたとしても、そう誤差は数十メートル以内である

と考えている。

おわりに

洛陽・西安では、密教の相承者である善無畏・金剛智・惠果を問題とし、特にまだ未解決であり問題である広化寺・奉先寺・福先寺と惠果の埋葬場所を求めることとした。幸いにも専門の研究者の先生方に巡り合い、各諸機関の先生方の協力によって、一応の成果は得られたと考えている。しかし青龍寺以外の諸寺院跡は、まだ発掘も始められていない。これら諸寺院と真言密教の相承者との関係は、本小論において述べたとおりである。今後はこれらの寺院の発掘が始まることを期待して、この報告はひとまず閉じておく。

年表（密教相承の祖師）

帝(唐)		西暦	元号	記 事
七二六	開元	四		○善無畏、陸路長安に入り、興福寺の南院におちつき、のち西明寺に移る。
七二七	〃	五		○善無畏、翻訳を開始。「虚空藏求聞持法」一卷翻訳。
				○不空、長安に入る。
				○一行、長安に入る。
七一九	〃	七		○金剛智、海路長安に入り、慈恩寺におちつき、のち薦福寺に移る。
七二〇	〃	八		○不空・一行、金剛智に師事す。
				○金剛智、洛陽に入る。
七三三	〃	十一		○金剛智、皇帝の命によって七俱胝菩薩の像をえがき、祈雨法を修す。
				○金剛智、長安の資聖寺に住し、インドより持ち来った密教經典の翻訳にとりかかる。「略出念誦經」の訳完成す。

	宗 肅			宗		女
七六三	乾元	廣德	一	七四三	天寶	二
七六〇	〃	〃	三	七四六	〃	五
七五七	〃	〃	二	七四九	〃	八
七五六	至德	〃	一	七五三	〃	十二
七五五	〃	〃	十四	七五四	〃	十三
七五〇	〃	〃	二	七五五	〃	十八
七四五	〃	〃	二十三	七四〇	〃	二十八
七四〇	〃	〃	二十九	七四一	〃	二十九
七三七	〃	〃	十五			
七三〇	〃	〃	十五			
七二七	〃	〃	十三			
七二五	〃	〃	十二			

〇善無畏、皇帝に従つて洛陽に入り、福先寺に住み「大日経」の翻訳にとりかかる。一行、翻訳の席に列す。

〇不空・広福寺で金剛智三蔵より具足戒を受く。

〇善無畏、「大日経」を訳出す。

〇十月八日、一行入滅、四五歳。一行「大衍曆」完成。

〇金剛智、長安の大薦福寺において翻訳事業をつづける。

〇十一月七日、善無畏入滅、九十九歳。龍門の西山に葬る。(「善無畏三蔵和尚碑銘」)

〇十月三日、善無畏を龍門の西山広化寺の庭に葬る。(「宋高僧伝」)

〇八月十五日、金剛智、洛陽の広福寺で入滅。七十一歳。九月五日、勅によつて洛陽龍門に葬らる。

〇二月二十七日、金剛智、龍門奉先寺西岡に塔が建てられる。

〇不空、セイロン・インドへの旅に出る。

〇不空、長安へ帰唐。鴻臚寺・浄影寺に住す。夏、勅命により請雨法を修す。

〇惠果誕生

〇不空、再びインドに向う。

〇不空、哥舒翰の招請により、勅命あつて長安に呼びかえされ、保寿寺で静養する。のち北西の辺地である河西に移る。

〇不空、武威の開元寺に住す。

〇安禄山・史思明の乱(七五五―七六三)

〇五月、不空、勅命によつて長安に帰り、大興善寺で除災祈願を行う。

〇九月、安禄山より長安回復。

〇乾元三年閏四月、李元璋は肅宗に対して「不空三蔵に命じて、群兇を滅ぼすために灌頂道場を置く」願いを出した。

〇十月、チベット軍に長安を占領される。



宣宗	武宗	文宗	敬宗	宗 憲	順宗	宗 德
八五六	八五五	八四五	八三五	八〇六	八〇五	七九八 七九九 八〇二 八〇四
〃	大中	会昌	太和	元和	永貞	〃 〃 〃 〃
十	九	五	九	一	一	十四 十五 十八 二〇
<p>○五月、惠果、内道場で祈雨。</p> <p>○八月下旬、惠果、皇太子のために加持す。</p> <p>○惠果、病床につく。八月、弟子義明ら七人を呼び、密教の法灯護持を依頼する。</p> <p>○空海入唐。八月十日、空海赤岸鎮へ漂着。十月三日、福州に廻航。十二月二十三日、長安に入り、宣陽坊の官邸に寓す。</p> <p>○最澄入唐。</p> <p>○二月十日、空海、西明寺に移る。六月十三日、惠果より青龍寺で学法灌頂坦に入って胎藏法の灌頂を受け、七月上旬に金剛界灌頂を、八月十日には阿闍梨位の伝法灌頂を受ける。</p> <p>○五月十八日、最澄明州を出航。六月五日、日本へ帰る。</p> <p>○十二月、十五日、惠果、青龍寺東塔院で入滅。</p> <p>○一月十七日、惠果、長安の東の龍原にある不空の塔の傍に葬らる。</p> <p>○四月、空海、越州の節度使に内外の書を求めんことを願い出る。</p> <p>○八月、空海、明州に行く。十月、空海、日本へ帰る。</p> <p>○八月二十一日、惠果の弟子ら、滄川の側の表蘭村に塔を建て、ここに惠果を移し葬る。</p> <p>○空海入定。</p> <p>○武宗の虜仏。</p> <p>○十二月十七日、円珍、広化寺の善無畏金剛塔を拝す。</p> <p>○一月十三日、円珍、龍門西岡の金剛智の塔を拝す。</p>						



第三章

大師入唐道の風景



## 大師入唐道市街案内

静 慈圓

### 赤岸村

陸路で福州市から寧徳県まで百二十五キロ、寧徳県から霞浦県まで百二十二キロである。赤岸村は霞浦県にあり、県招待所より東六キロのところである。人口千二百人、四百軒。現在の福寧湾の湾内奥にあたる。

延暦二十三年（八〇四）七月六日「日本肥前国松浦郡田浦」を出発した第十六次遣唐使船は、海上を漂うこと三十四日の後、八月十日「福州長溪県赤岸鎮己南海口」に漂着する。赤岸村（唐代赤岸鎮）は弘法大師空海（以下大師と略称す）の入唐については、唐土第一歩の重要地点であるので詳しく触れておきたい。以下に示す赤岸状況は霞浦県政文史組 兪郁田氏の報告等を参考にした。

赤岸鎮は、漢代にはすでに其の名があつた。三国時代は造船場があり天然の良港であつた。千三百数年前唐初には、県令（王務琨）がおかれる程の大村であつた。赤岸村の東側に郡城（県庁所在地）があり、村落は十八の境に別けられていた。地域としては相当に広く、ほぼ現在の赤岸、橋頭、古嶺から江辺、青澳あたりの地方までを含んでいた。現在の羅漢溪（古の赤岸溪）河口の大部分の田畑は、もとはほとんど海洋灘であつた。后港、利埕は、かつての塩田地帯であつた。



宋代の『淳熙三山志』に「当時の潮水は赤岸鎮の奥にある大橋まで到っていた」と記されている。明代の資料には、大橋は河口として記され、南北の海船はここに集まる、とある。つまり赤岸は福州と寧波とのどぼとけにあたるのである。

赤岸からは、唐・宋から元代にいたるまで大人物がぞくぞくと出た。このため民間には古くから「赤岸十八学士」の伝説があった。たとえば唐の金州刺史林嵩、宋の直隴閣閣学士林湜、資政殿学士王伯大、元の中奉大夫王積翁、参知政事王都中などである。彼らは文章で有名になったり、政事にすぐれた業績を残している。正史中にも数名の者が名をたづねている。

赤岸の地域では、多くの重大なことがある。以下に列挙しておく。

(1) 唐の貞元二十年（八〇四）長溪県の官民は、ここに漂着した日本国第十六次遣唐大使藤原葛野麻呂・空海等を救援し、接待したことがある。

(2) 乾符二年（八七五）唐の僖宗が、赤岸出身の刺史林嵩を表彰し、勅をだして赤岸を「勸儒」と改め、林嵩の郷里を「擢秀」と改めた。

(3) 五代の時、閩王王審知と呉越とが戦争した時、赤岸の住民は灘地を開墾して軍用田とした。

(4) 宋慶元年間（一一九五—一二〇〇）儒家朱熹の要請によって、ここに寓居を造り講学して多くの人材を育てた。

(5) 元の時、方国珍は官軍を支配し、ここで宣尉司をつかまえ、元帥の慰海に檄文を出した。

(6) 紅巾軍蜂起のあと、参政袁天祿は理由をつけて赤岸に害を加えた。各族の人々は、家族をつれて逃げた。これによって赤岸橋頭は九族に分かれたのである。

(7)明嘉靖年間（一五三二—一五六六）福寧の軍民は数次にわたって倭寇の侵入に抵抗し、州城を守った。

(8)清初、郷里の賢人王邦哲等は、地方兵を率いて劉中漢の清に抵抗し、明を復興する運動に加わり、ここで戦った。次に赤岸の風影を示すと、赤岸十八境といわれ、多くの名所旧跡がある。王羲之の「右軍祠」、林嵩の「桂枝亭」、

王伯大の「留耕堂」、林湜の「忠臣廟」、林王の「先賢祠」等がそれである。現存している赤岸石橋は、宋皇祐五年（一〇五三）に造られ、代々修復を重ねている。

金台寺には多宝仏塔が残り、萊台龍には石翁仲に関係するものがある。また赤岸文物陳列室には、「擢秀里界碑」、「赤岸城記碑」、「湜然の井欄」（井戸のさく）、「東際洋石槽」等多くの古建築の部材が収蔵されている。

現在の赤岸村は赤岸大隊といわれている。赤岸村の東方には赤岸大隊招待所があり、羅漢溪の河口は村の西方に流れ込んでいる。羅漢溪の河口は千数百年の間に数キロ土地が張り出し、広大な田畑となっている。かつて漁村であった赤岸鎮も今は農業村に変わっている。

赤岸村に大師の名が知られたのは最近のことである。順次に列挙しておく。

(1)一九八〇年にハルビン師範大学教授游寿女史が福建師範大学で講演するため福州に来て、故郷の霞浦県にもやってきた。游寿女史は考古・書法・歴史学で有名である。游寿女史は唐・宋時代の文物を調査したが、この時、唐貞元二十年（八〇四）に日本の遣唐使が漂着し、その中に空海が乗っていたことを話した。

(2)一九八一年に西安市の科学研究所の人が、「空海の道」という映画を作るために来て、赤岸の出土文物、赤岸石橋などを撮影した。

(3)一九八二年五月、西安市科学技術情報所から招待を受け、西安市青龍寺遺址に建立した「空海記念碑」の除幕式に霞浦県代表として三人の者が出席した。

(4) 一九八四年三月。「空海・長安への道」訪中団八名が訪問した。

(5) 一九八五年。福建省活劇団によって、「彼たちは日本からやって来た」という、大師を素材とするテレビ映画が製作され、赤岸村が報道される。

### 霞浦県

霞浦県は福州市より東北へ二四七キロ。途中寧徳県をとおる。寧徳県から霞浦県の間は、大きな峠が重なっている。海岸線は入江が複雑に入り組んでいる。

霞浦は古い歴史を持つ古城である。漢代に県地となり、西晋時代(二八〇)街城ができ、温馬県(温麻県)といつた。唐武徳六年(六二三)にこれを分けて長溪県を置いた。五代および宋代はこれによつた。元の至元二十三年(一二八六)に福寧州を置いた。明の初め県となり、のち州に昇格した。清にはここに福寧府を置き、霞浦県を兼ねて置いて、福建省福寧府の治所とした。

霞浦県には四種類の方言がある。福州と廈門(あまい)と小數民族と地元(あち)の方言がそれである。県の人口は解放前は十六万人、解放後は四十九万人である。柏翠庵(はくすいあん)という仏教寺院があり、信者が出入りしている。

### 福州

福州は福建省の省部。閩江(めんかう)の下流江岸にある都市で、政治・経済・文化・交通の中心地である。



大師は延暦二十三年（八〇四）十月三日、赤岸鎮より福州へ廻航された。ここで二通の文章を残している。一つは遣唐大使藤原葛野麻呂（中国名賀能）にかわって、福州の刺史（地方長官）閩濟美にあてたもの「大使、福州の觀察使に与うるが為の書」。一つは、大師自身が入京の許可を求めたもの「福州の觀察使に与えて入京する啓」である。同十一月三日遣唐使一行二十三名は福州を出発する。

#### 馬尾港

福州市の東南約二十二キロ、閩江の江岸にある港町。人口約四万。古くから市の良港として対外貿易が盛んな商業港である。また古来より重要な海防の地でもある。馬尾港の名は付近の馬限村に馬の形をした岩があり、その頭の方は羅星塔の方に向き、尾は港の方に向いているのに由来する。中国明末復興運動の中心人物である鄭成功（一六二四—一六六二）は閩江駐兵の主力をこの馬尾に置いた。また清の光緒十年（一八八四）入寇してきた仏軍を勇敢に攻撃した甲申戦争の戦場でもある。現在は各国からの貨物船が出入りしている（本書二二頁写真）。

#### 羅星塔

閩江は羅星山で大きく曲がっている。馬尾港は、羅星山のふもとにある。羅星山周辺は羅星山公園となっており、山上に羅星塔がある（本書二三頁写真）。高さ三十一メートル。七層八角の石塔である。塔上に登れば馬尾港が眼下一望できる。塔は宋代の創建、一九六四年に重修されている。閩江の江口はここより約三十キロ東で東シナ海にそそぐ。

#### 閩江

福建省北部を横ぎる大河。仙霞嶺、楓嶺山脈に源を発し、上流は建溪・富屯溪・沙溪の三河からなる。建溪は、北

の仙霞嶺に源を發し、南流して南平市へ流れ込む。富屯溪と沙溪は、南平市の南西で合して北東流し、南平市へ入る。南平で三河は合一し、閩江となって東流する。

閩江は福州市の西で南北二水道にわかれるが、馬尾でふたたび合し、東シナ海に入る。馬尾付近は川幅が広く、大船が航行し古来からの良港である。しかし上流は地勢がけわしく急灘が多い。古来より「一灘一灘に高く、邵武天上にあり」といわれる。邵武県の畧城は富屯溪の岸にあるが、この句は閩江には急灘が多いことをいっている。

南平市から福州市までの閩江は約百七十キロ。現代は動力船で下り八時間、上り十六時間である。

福州から南平まで陸路をとれば、福州・溪口・大坪・墓頭・横洋・大橋・古田・風都・大風・南平となる。唐代の官道もほぼこの道である。福州から古田までは百四十六キロ。古田から南平までは九十九キロである。この陸路は峠が重なり、非常にきびしい。

## 南平市

南平市は福建省南平専区にある都市で、四方を山に囲まれた峡谷の谷間にある。建溪・富屯溪の合流点にあたり、これより下流は閩江となり、福州市に至る。古来より福建省山間部の物資は、建溪・富屯溪によつて南平に集まり、閩江を利用して下流へと運んだ。

東漢末に南平県を置き、揚州会稽郡に属さしめた。三国呉の時は建安郡に属し、晋代には延平と改めた。唐代には延平軍を置いた。五代王閩は改めて龍津県を置き、宋には南劍州治と称した。元始には劍浦県と改め、南平と称した。明には福建省延安府治となし、清代はこれによつた。国民政府になつて福建省政府の直属となつた。

南平市の唐代の船着場は建溪と富屯溪との合流点にあり、その船着場のそばに「延寿門」がある（本書二三頁写真）。現在の延寿門は明代のものであるが、門の位置と門の形は唐代も現在と同じ位置にあり、変わっていないといふ。

#### 冷風閣

南平市に流れ込んでいる河の合流点と延寿門と市街との関係は、九峯山に登り、九峯公園の中にある「冷風閣」に立つと一望のもとに眺められる。

閩江の左右の山の上に劍津双塔が見える。塔は明万歴年間の建立。「人」の字に見える三河は、劍のようにするどくしばしば氾濫した。そこで閩江の左右山上に劍津双塔を建て、「人」の字を「火」の字に変えた。火によって水を押さえたのである。ところが火に変えてから南平市街に火事が多くおこった。そこで「冷風閣」を建てて「火」の字を変え、火事を押さえたのである。

この「冷風閣」のすぐ下に墓があり、その両側の石柱に「日受千人拜、夜観万盞灯」と書かれている。ここに立つと舟を漕ぐ人の姿が礼拝している形に見えるからである。

#### 建甌

南平市より建甌県までは陸路で約七十キロ。水路で建溪を溯つても、ほぼ同じ距離である。建溪には、現在も小舟・筏が多く行きかっている。動力船であれば上り一日、下り一日を必要とする。建溪は古来から福建と浙江を結ぶ交通の要所であった。この区間の唐代の交通はもっぱら水路であり、百葉船と名づける船が往来しており、普通二日間で

上るといふ。

建甌の船着場は現代と唐代のそれとでは場所が百メートル位離れているが、河幅は広くその船着場相互の距離感を感じられない。船着場に「水西橋」という名の橋がある。唐代にもこの場所に板の橋があったという。唐代ここで下船した者は「通済門」(本書二四頁写真)を通り、市街に入った。この門は東漢時代からの古跡であり、同場所に現在も残っている。門を入ると路地があり、昔の市街のおもかげを残している。

建甌とは、建安・甌寧二県を併せた名で、民国の時つけられた。古くは東漢に官県地となり、孫策(一七五—二〇〇)が建安県を置いた。唐代には建州を置いた。宋代には甌寧県を置き、元代には甌寧を改めて鷓寧とした。明代は建寧府治とし、清代もこれによった。

建甌県に残っている寺院は八ヶ寺、その内参拝できるのは四ヶ寺である。崇仁寺は建甌の中心街より車で三十分。そこから徒歩で険しい山道を四十分ほど登った山上の寺である。開山は九八〇年頃だという。清代の道光年間に修復した。建甌県の者だけでなく多くの信徒の信仰を集めている。

### 建甌から浦城へ

建甌から浦城までは陸路で百六十五キロ、水路では建甌より上流は南浦溪と名が変わっている。距離は水路の方が短い。陸路は水路とは並行しておらず、途中から大きく迂回して、くねくねと山中を走る。陸路は峠が重なり困難な道である。唐代の官道もほぼこの道である。唐代この道の交通は牛馬を用いず、独輪車(人間が一人で引く二輪車)であったという。水路は洪水期においても水量は充分にある。大師の一行がこの道を通ったのは十一月である。土地の

人の話を総合すれば、空海らは水路を溯ったとするのが妥当であろう。この区間水路は五日である。水路で上れば、浦城が最後の船着場となる。

現在、浦城の船着場のそばに「南浦新橋」という橋がある。唐代は同じ位置に浮き橋（船を浮かべて板を横に渡した橋）があったという。すぐそばに「登瀛門」（本書二六頁写真）という城門がある。現在の門は清代のものであるが、門の位置は唐代と変わっていない。宋代この船着場は、毎日百隻ほどの百葉船でにぎわっていたという。

## 浦城

浦城の町は、越王勾踐（在位四九七―四六五B・C）の弟によって開かれた。弟越王はクーデターを起し、河にそって城を作り始めた。天心勝果寺（本書一八八頁）は彼の安宮である。前百十年に漢武帝によって弟越王は鎮圧された。二〇七年に浦城は漢侯官地となった。三国時代は呉に属し、呉興県を置いた。唐則天武后天授元年（六九〇）に武寧県と改められた。七四二年浦城県と改められ現在に至る。

宋代は福建路建寧府に属し、元代は浙江省建寧路に属し、明代は福建省建寧府に属し、清代はこれによる。民国三年からは福建建安道に属す。

浦城県は四方山に囲まれている大盆地である。現在人口三十六万人。七万九千四百軒である。農業が中心である。古来より豊かな土地であるため、戦争になると必ずこの土地を奪いあった。この地域の獲得は豊の多少にかかわるためである。

山中にあるこの広々とした大盆地。一見、桃園郷のその世界に入って来た感じがする。険しい福建省の地勢の中で広々

とした盆地に入つて大師の一行もさぞ驚いたであろう。現在の町は仙廬山に登れば、一望のもとに眺められる(本書二七頁)。因みに浦城の味は格別である。食物の味つけが日本の味と実によくにている。空海ロードで最も日本人によく合う味、それが浦城である。

### 仙霞嶺越えの道

浦城(福建省)から江山(浙江省)へ出るのは山越えである。一般に浦城から仙霞嶺・江山と通る道と、建甌から上繞を通り江山へぬける道とが考えられる。上繞の道は途中に二つの山があり難関である。唐代は仙霞嶺の道をとるのが普通であつたという。

浦城から北へ二十四キロ行くと漁梁駅があり、ここに万葉寺という寺がある。

漁梁駅よりさらに北上すること二十キロで浮蓋山(二一四〇)がある。唐代はここに大きな駅があつたという。大雲寺という寺があるが、古来よりこの寺は重要であり、現在も信徒の参詣がたえない。寺の住職は月に一・二回浦城に來て説法するという。浮蓋山から江山までは六十キロである。現在の楓嶺関(唐代の仙霞関)は、仙霞嶺(嶺は六つある。)山脈のうちの一つの名であり、浮蓋山の西に位置する。唐代の仙霞嶺越えの道については、『度嶺日記』一卷、清任棟撰。『福建市舶提拳司志』一卷、明高岐輯に出ている。

## 福建省における古代交通

『福建全省図説』には、古代交通について次のような記載がある。要を得ているのでここに示しておく。

浙江より閩（福建）に入る時は、仙霞関が官道である。浦城から船に乗って下ると延平を通り、福州の水口に到るまでは崇山狭流である。乱石水面にあり、急流のため両側けわしく、船頭が手をあやまると、鉄船でも砕けてしまう。

江西省から閩に入る時は、一つは河口から入り、崇安をとおる武夷山をすぎ、建陽まで下り、建寧に合する。

浙東海岸の温州から閩に入る時は、福寧・寧徳・羅源・建江から福州に至るまでは、全てほそい山道を経、羊の腸のように曲つた道で、日中でも高嶺の霧の中を歩いているようである。天に登ったかと思えば、測に入ったよう、上下彎曲しているのは四川の山道よりも険しい。

内陵交通所用具については次の如くである。

水上においては、たよりとするものは小舟・雀舟・鸞鷲竹排（さがが上に立ついかだ）を用いる。もし逆流を登る時は、竹を編んだ筏を作り、数十人によつてひっぱって登っていく。福州から南平までわずか四百華里の水程にすぎないが、経過時間は一週間以上である。

陸上の方は、鸞籠・肩輿・牛馬以外は徒歩しかない。ロバでさえも全ての道に使えるとは限らない。

## 江山から杭州市へ

浦城（福建省）から江山（浙江省）へは山越えをして出る。江山から杭州までは水上である。つまり錢塘江を下るの

が一般的である。錢塘江に出る河は次の如く分段される。江山から蘭溪までは、唐代には蘭溪江または蘭溪とよばれ、蘭溪から桐廬までを、七里灘とよび、桐廬から富陽までは、富春江とよばれていた。富陽から杭州市までを錢塘江とよんだという。

## 杭州

浙江省の省都。杭州湾の奥にあり、錢塘江下流の北岸に位置する。京杭大運河の南の終点となつてゐる。上海から列車で三時間、北京からジェット便で一時間四十分。古くから政治・經濟・文化の中心地として發展して来た。

杭州は秦・漢時代から錢塘県として、この地方の中心地であつた。隋代以來、杭州となり、余杭郡といつた。隋の煬帝が開いた大運河の最南端でもある。唐代から「天に天堂あり、地に蘇杭あり」という諺が生じ、蘇州とならぶ中国屈指の景勝地として知られている。以後、商業の繁榮と相俟つて、宋・元には百五十万を数える大都市となる。元代に杭州を訪れたマルコポーロは「世界中で最も豪華な、もつとも富み榮えた都」と稱賛している。明・清時代を通じて浙江省の首府である。

清朝末、上海開港によつてその繁榮は上海へとうつた。また清朝後期、洪秀全を指導者とする反清運動家が南京を都とし太平天国の乱（一八五一一八六六）をおこす。杭州はこの兵火を蒙り、往年の繁榮は失われてしまう。日本は下関条約によつて、ここを開港場とし、專管居留地を設けるが發展しなかつた。

大師との關係で必要と思われる事項を述べれば次の如くなる。大師は杭州から開封（唐代の汴州）までは運河で行つた。杭州は運河の始まりであるので少し詳しく触れておきたい。大師は水路を江山から錢塘江に出て杭州へと来た。

現在の錢江大橋をすぎるとすぐ左に柳浦という船着場があり、ここで下船した。これを言うについては杭州の歴史を今一度ふりかえらねばならない。浙江省海洋学研究員の朱士俊さん等の話を総合すれば次の如くなる。

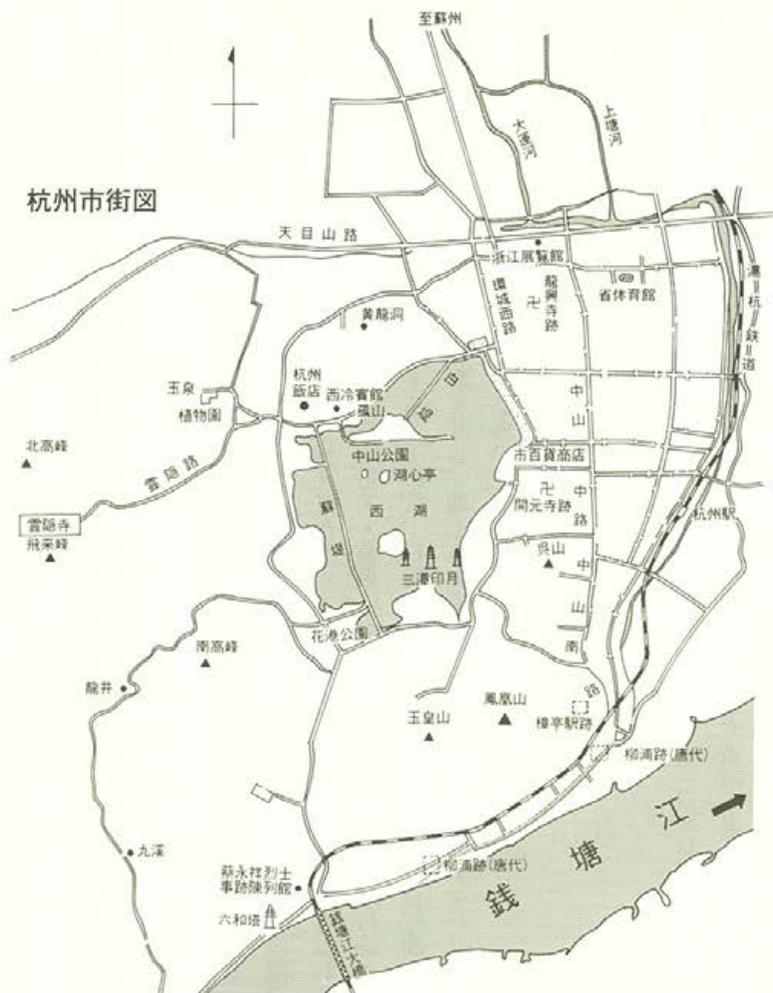
杭州の町は漢の時代には城は西湖の西側靈隱寺（本書一八九頁参照）あたりであった。そのあと都は次第に東の方に移っていった。隋の時代には城は鳳凰山ほうおうざんを中心に築かれた。唐代の城は、鳳凰山（当時の名は龍山）を中心に東に広がっていた。唐代前期の宿舎樟亭駅しょうじょうてい（淳駅）は龍山の東にあった。当時の船着場である柳浦も龍山の東にあったが、唐代は龍山の南に閘（水門）を作った。従って柳浦の名前は二つあるが、大師当時の船着場の柳浦は龍山の南の柳浦である。

また唐代の錢塘江は現在の流れとは違って杭州の東は直接大海と接しているような地形であった。市街も龍山の東も現在のような地形ではなく、市街の近くまで海が接近していたらしい。遣唐使一行は現在の錢江大橋の近くの柳浦より大運河に入り下船し、当時の樟亭駅で泊したといえる。

唐代蘇州へむかう杭州の船乗場は、市の北の汽洋湖の地点である。従って大師らは南の柳浦で下船、樟亭駅で泊して、北の汽洋湖で上船したと思われる。ただ唐代は龍山の北方に開元寺あり、その北に龍興寺りゅうきょうじあり、この二寺は有名な寺であり、龍興寺の北が汽洋湖となる。これより考えるところの二つの寺に大師が立ち寄った可能性もある。

現在、開元寺の跡は不明である。龍興寺（当時は法興寺）は現在町中にある。経幢が二つ残っているという。幸いにも今回は唐代の経幢の一つを見たが、三メートルほどの八角の石塔で仏頂尊勝陀羅尼が刻されていた。

市の北方の上船場所であるが、南宋時代に蘇州へ行く時は、現在の埠頭と同じ場所の上船している。現在は運河の定期船が毎日出ている。唐代は現在の場所かどうか不明であるが、その位置を推定すれば現在の場所よりやや南に位置し、龍興寺に近い所であろうと思われる。



### 六和塔

錢塘江は河口が三角形になっていいるため、満潮時には海水が逆流し、しばしば氾濫する。六和塔は河の神の怒りを鎮めるために建てられた。錢塘江の北岸、開化寺の境内に建つ、北宋開宝三年（九七〇）の創建、高さ六十メートルの木塔。内部は七層、外側は十三層の八角塔である。塔内には石刻仏經・石刻鎮海神像や碑文がある。螺旋状の急な階段を上ると、眼下に錢塘江の流れと

銭江大橋を一望できる。銭江大橋は一九三七年に竣工、全長千四百五十三メートル。中国が最初に自力で設計建造した鉄橋である（本書二八頁写真）。六和塔の最上段より眼下を見ていると唐代の地形が推察できる。

#### 西湖

杭州の景勝は西湖で代表される。市の西郊にあり、広さ五、六平方キロ、周囲十五キロにわたる美しい湖。湖畔のどこから眺めても诗情溢れる美しさをもっている。美観の代表は西湖十景として有名である。湖の中には蘇堤・三潭印月・湖心亭などがある。

蘇堤は西湖を南北に貫く長い堤で、北宋の詩人蘇東坡が長官をしていた時に、湖底の泥でこの長堤を築いたといわれる。途中に六つの橋があり柳が湖水に映えて美しい。三潭印月は「小瀛洲」とも呼ばれる。瀛洲とは仙人の住む島の意味。三潭印月の直接の名前は、北宋の詩人・蘇東坡が西湖の深いふち三カ所に石塔を建てて、その中での菱や蓮を植えることを禁じたことに由来する。その後、石塔は崩れたが、現在は五孔の石灯籠が置かれている。満月の夜、これに火を灯し、石灯籠の間に月影を写し、湖上の微風に吹かれると興趣この上ない。古来、多くの風流人がこの風情を楽しんだ。湖心亭は、湖の中の小島でその美しさを湖上に写している。

#### 大運河

運河の基礎は隋の煬帝がきづいた。隋第二代の皇帝煬帝（五六九―六一八）は盛んに土木事業をおこした。大業元年（六〇五）東都洛陽城の修築を行ない、さらに男女百万人を動員して黄河と淮水とをむすぶ「通済渠」を開いた。江南地方では春秋の時、呉が邗溝水（今の江南の運河）をきづいていた。煬帝はこれを改修して、淮水と揚子江をむすん

だ。大業四年（六〇八）には黄河から北に北京方面の涿郡にいたる「永濟渠」を造り、大業六年（六一〇）には揚子江から杭州にいたる「江南河」をつくった。ここに大運河の基礎ができたのである。煬帝は南北に通ずる大運河を遊樂の用にしたという。これによつても奢侈しよしのかぎりをつくし、傲慢無法な煬帝の一面がうかがえる。

## 紹興

杭州の東南六十三キロの距離。急行列車で約一時間。バスでは約一時間三十分。浙東運河と杭寧こうわい鉄道に沿っている町、そこが紹興しやうきやう。湖が実に多い水郷地帯であり、古くから錢塘江以東の一中心地である。手と脚でこぐ小舟「脚劃船」が水路を走っているのはのどかな水郷風景である。

春秋時代に越国の都が置かれた。越王勾踐えうかうけんは吳王夫差ふさに敗れてこの地に住した。「臥薪嘗胆」・「会稽の恥」の故事で有名な会稽山がすぐ南にある。後漢の時（二二九）に会稽郡をおいた。隋・唐から北宋にかけては越州といった。南宋高宗の紹興元年（一一三一）紹興府と改めた。元では紹興路と改め、明・清はまた紹興府とした。民国となつて府を廃して紹興県とした。

縦横に水路がおつているため、近郷物資の集散地となつている。絹糸・絹織物・綿などの手工業が盛んである。また、南方では茶の栽培が盛んで浙江第一の茶産地となつている。水稻・果実のほか養魚も盛んである。人口百十三万人。

紹興における空海と最澄（本書八七頁参照）

空海・最澄共に桓武天皇の延暦二十三年（八〇四）七月六日に「肥前国松浦郡田浦」を起航する。空海は第一船、最澄は第二船に乗っていた。

最澄が乗った船は九月一日に明州へ到着する。最澄は九月十五日天台山にむけて出発。天台山においては道邃どうすいから円頓戒えんどんかいを受け、さらに行満から天台法華の法門を受ける。密教は越州（紹興）において、龍興寺の順晡じゆんぷから受け、禪は禪林寺の修然から受けた。つまり最澄は天台山を中心として、主に法華一乗を学ぶが、越州の龍興寺にたびたび出入りしているのである。最澄は八百五十五年五月十八日、藤原葛野麻呂と共に明州（寧波）から帰途につき、六月五日に対馬へ到着する。

空海は同時に入唐するが、密教のみを求めて長安へ直行する。長安で密教を恵果けいこから受ける。元和元年（八〇六）の二月か三月に長安を出発し帰途につく。そして八月に明州から出航し帰朝の途についた。つまり空海は越州付近に約四ヶ月ほど留まったことになる。空海の文章に「越州の節度使に与えて内外の経書を求める啓」が残っている。この文章は元和元年四月となっている。

空海と最澄はもちろん唐土では対面していない。唐代の越州には非常に多くの寺があった。その主な寺は能仁寺、光相寺、戒珠寺、開元寺である。もし唐土における空海と最澄の接点を求めるとすれば、それは越州（紹興）であろう。そしてその場所は龍興寺ということになろう（本書三二二頁写真）。



日本にむかつて三鮎さんぜんを投げたという伝説の地でもある。

現在の寧波は近海漁船が甬江を登って来て停泊している。船の数は多く、港にひしめいている。唐代は寧波の東は現在の如く陸地ではなく、すぐ東シナ海に接していたという。

#### 杭州市から蘇州市へ

唐代、杭州こうこうから上船すると運河は二つに別れている。上塘河と下塘河がそれである。現在の運河は杭州市・塘栖・崇福鎮・嘉興市・蘇州市とつづいている。下塘河は杭州市・塘栖・崇福鎮ととおっている。つまり現在はこの下塘河を使用している。上塘河は湖をつないだものであり、この方が古い。秦代は、汽洋湖・汽息湖・臨年湖（現代の余杭）とつづいて崇福鎮に至ったという。杭州で二つに別れた河は崇福鎮そうふくちんで一つになり、そのまま蘇州へとつづくのである。上塘河は下塘河よりも距離がずつと短い。唐代初は下塘河の所は荒地であった。大師は上塘河・下塘河どちらを通過したかは不明であるが、上塘河であったと一応推定しておく。杭州から蘇州へ行く船着場の跡は決めがたいが、現在残っている最も古い場所は「拱宸橋こうしんきょう」と呼ばれている（本書三六頁写真）。これは現在の運河上船所より五キロのところにあり、下塘河に位置する。

#### 蘇州

上海から八十六キロ、南京行きの急行列車で約一時間。南京からは二百十九キロ、急行列車で約三時間。太湖の東



に位置し、京杭大運河と太湖からの水の便をうけ、市内は水路が網の目のようになっている。蘇州は人口六十三万人、文字通りの水郷。古来より二十を超える湖水に囲まれ、百七十余の庭園があり、景勝の地として「水の蘇州」・「東洋のベニス」と呼ばれている。中でも滄浪亭・獅子林・拙政園・留園は、宋・元・明・清を代表する四大名園として知られている。

春秋時代呉王闔閭が都を築いたのに始まる。秦では会稽郡、漢代は呉郡がおかれ、隋開皇年間(五八一—一六〇〇)に蘇州と呼ばれる。その後一時呉州と改称されたこともあるが、宋初には蘇州に復し、平江府と称される。元代は平江路と改められた。明代はまた蘇州府と改名し現在にいたる。

隋・唐時代に大運河が開かれると、商業都市として重要な地点となる。南宋から元代の蘇州の繁栄ぶりは、マルコ・ポーロの旅行記(二二八〇)などによって詳しく知ることができ、商業の主となるのは絹織物であり、その産地として全国に知られていた。元末に一時戦火によってさびれたが、明のなかごろは繁栄をとりもどし、清代には、絹織業とならんで綿織業や綿布の加工業なども併用して、中国最大の

商業輕工業都市となった。上海開港後、太平天国の乱による打撃をうけ、それ以後、上海にとってかわられた。現代は絹織物を中心とする繊維工業、蘇繡そしゅうと呼ばれる刺繡、白檀の扇子などの伝統工業がさかんである。各時代共に貴族、官僚、文人、墨客の出入りが多い。

大師の足跡は次の如くなるうか。杭州から京杭運河で蘇州へ、市の東南に到り、左折して外城河へ入る。現在の定期船上船場をとり市の西南角の瑞光寺のところで大きく右にまわり北上する。運河にそって船で行けば瑞光寺は見える。胥門（万年橋）をとり、金門（老昌埠頭）をとり、左へまがり直進して西園を右に見て寒山寺へ出る。他の一つは市の西南角の瑞光寺より北上、胥門の手前より大きく迂回して寒山寺へ出る運河がある。両方とも唐代に使用されていた運河であるが、いずれにしても寒山寺のところで合一する。そこに有名な楓橋がある。唐代の運河はこの楓橋を必ず通らねばならない。運河はこの楓橋をとり無錫へとつづく。

## 無錫

上海から百二十八キロ、南京行きの急行列車で約二時間。南京からは百八十三キロ、列車で約二時間半。蘇州からは四十キロのところに位置する。人口六十五万人。南は太湖たいこに臨み、西には恵山けいざんを抱くという景勝の地。市街は縦横に運河がおとっている。古来より「魚米の郷」といわれてきた豊かな土地である。

紀元前一、二四〇年周太王の長子、大伯たいたけが「勾吳国」の都とし、彼の子孫である闔閭が紀元前五一四年蘇州に遷都するまでの間、都となっていた。周代に錫を産出したが、前漢になつて掘りつくされて無錫と呼ばれるようになり今日に到っている。漢代は無錫県をおき会稽郡に属させた。後漢は吳郡に、晋より南朝までは晋陵郡、唐・宋は常州、

元は常州路、明・清は常州府に属した。とくに隋代に開かれた運河によって、経済上の重要な交通路となった。

唐代の運河は市の中心街をとっている。唐代は蘇州からは一日(十二時間のこと)、常州までは一昼夜(二四時間)

という。現在は無錫から常

州までは動力船で三時間で

ある。唐代の船着場は次の

二箇所であろうか。一つは

現在健康橋という橋がある

が、昔はこの橋を梁溪橋と

呼んでいたそうで、ここが

唐代の船着場の一つであつ

たという。ちなみに梁溪大

橋の名は現在もあるが、健

康橋のところではない。現

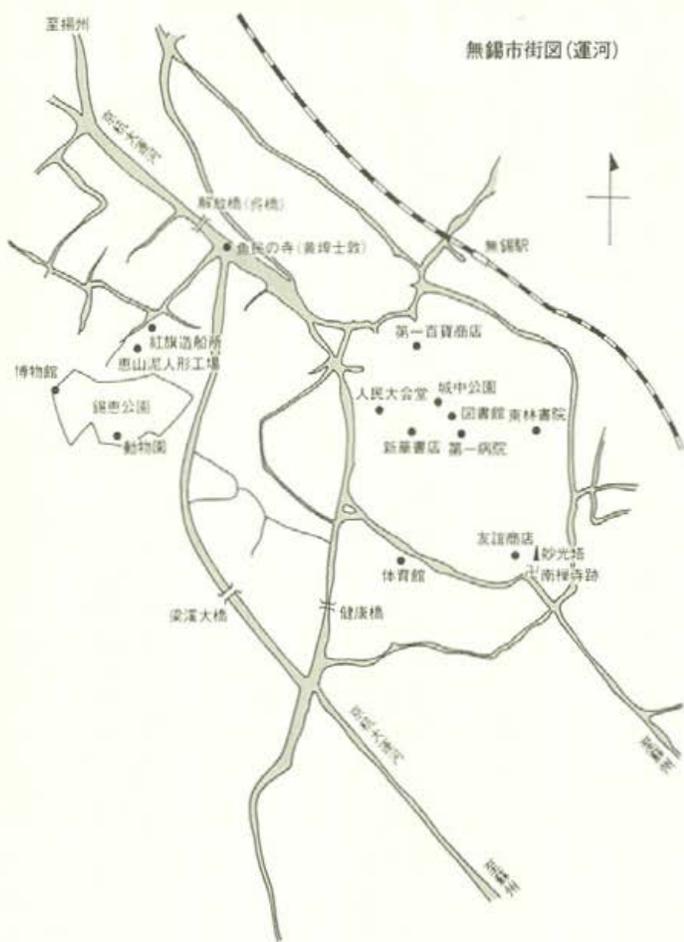
在の梁溪大橋のところは湖

濱路埠頭と呼ばれている。

他の一つは現在の友誼商店

のそばに南吊橋という橋が

ある。ここも唐代の船着場



である。

さて大師らは蓬船と呼ばれる船に乗り、無錫では南吊橋の方をとつたと思われる。このコースをとると古運河の唐代船着場のすぐそばに南禅寺と呼ばれる寺がある。

#### 南禅寺跡

古運河で船を下り、石の階段を上ると石壁でできた第一門がある。南禅寺の文字がかすかに読みとれる。路地を歩いていくと第二門跡に行きつく。第二門そのものは現在はみられない。さらに進むと城門跡に出る。この城門は三門からなる城門であつたという。現在はゴム工場になっている。ここが南禅寺跡である。大雄宝殿跡もこの場所だといふ。現在その一角に妙光塔が建っている。この妙光塔に登れば、無錫市街を流れる古運河の様子が一望のもとに眺められる。大師が無錫に立ちよるとすればこの南禅寺であろう。

#### 錫恵公園

無錫市の西郊にある公園。錫山公園と恵山公園の二つの公園であつたが、一九五八年に二つを合わせて錫恵公園とした。

錫山は標高七十五メートル、周囲一・五キロと小さい。周・秦の代にはここで錫が採掘されたという。山頂に竜光寺があり、竜光塔がある。山麓に龍光洞、百化亭、石浪庵、観潤亭があり、人工の美を築きむことができる。動物園もある。

恵山は標高三百三十メートル。周囲二十キロの大公園。十数カ所に泉がある。中でも唐の大厝頃に掘られた泉は、唐代の茶経の著者陸羽(七三三—八〇四)によって天下第二泉と名付けられた。泉は上・中・下の三池に分れるが、上池の水が最も良いという。泉を囲んで歴代名筆家の碑刻・諸堂がある。園内には梁代(五三五年)建立の恵山寺があ

り、山門前の左右に二基の塔がある。唐の乾符三年（八七六）と北宋の熙寧三年（一〇七〇）につくられた塔である。

## 常州

無錫より約四十三キロ。常州はまさに大運河の中心の町の一つである。江蘇省常州市という。市内を京杭運河が流れている。

町の歴史も非常に古く、すでに二千五百余年の歴史をもっている。周代には延陵、漢代には毗陵、晋代には蘭陵とよばれた。常州とよばれるようになったのは隋の文帝の開皇九年（五八九）である。その後、揚子江デルタ平野のほぼ中央にあたるため商業都市として繁栄した。宋代からは絹織物と製紙が盛んになり、明代からは綿紡織業が発達した。伝統的な竹細工が盛んで、明末には宮廷用の櫛をつくっていたという。現在も各種の櫛がつくられており、他にコールテン服地の生産は中国一である。古くから多くの著名人が出ており、特に明以後は蘇州とともに、江南文化の中心をなしている。

中国の運河は、現在も重要な交通路として実によく使用されている。この京杭大運河は南北の中心を貫いており、丁度、人間でいえば動脈のようなものである。この運河より左右に毛細血管のように水が引かれている。大運河は昔のままの姿ではない。時代とともに必要に応じて拡張されたり、迂回運河が造られたりしている。従って唐代の運河といってもそれを決定づけるのはなかなかむずかしい。常州の唐代の運河の位置を知るには、運河と天寧寺（本書一九四頁）とのかかわりは重要である。

## 艤舟亭公園

この公園は古運河のそばにある。北宋の文人蘇東波（一〇三六—一一〇二）は王安石の施策に反対したために、中央から左遷され、江蘇・浙江・山東各省の知事を歴任した。彼は十一回も艤舟亭公園に来たという。そしてここで滅した。また清朝第六代の皇帝乾隆帝も艤舟亭で皇后の七十歳の誕生日を祝ったという。

## 文筆塔

建元年間（四七九—九八二）の創建。文筆塔はもとは太平寺にあり、太平寺塔と呼ばれていた。常州には文人墨客が多いことを象徴している塔ともいえる。北宋の時、科擧の試験に全国で三百人が及第した。その内常州から五十三名が合格した。町の名も、この慶事にちなんで早科坊とか双桂坊のごとく名づけられた。塔の東に文筆楼があり、その名にちなんでこの塔も文筆塔と改名された。文筆塔のまわりに吉祥雲がまわるとすぐれた文人が出るといわれている。

## 鎮江（本書九九頁以下参照）

鎮江は長江下流の南岸にあり、長江と京杭大運河が交差するところにある。常州から百七十五キロ、南京から六十キロである。風光明媚な名勝古蹟が多い古都として有名。

春秋の時呉に、戦国の時楚に属し谷陽という。秦には丹徒と改め、漢には県を置いた。三国呉の時、京口鎮を置き險要の地となる。唐には潤州を置き、宋には鎮江軍を置き、元には鎮江路といい、明・清には鎮江府といった。民国十七年江蘇省に入り、県を改めて鎮江となる。アヘン戦争の際イギリス軍に攻略され、天津条約によって開港場となった。

長江江岸の甘露寺は、三国の東呉孫皓の甘露元年（二五〇）に創建された古刹である。「三国志」の英雄蜀王劉備が呉王孫権の妹と結婚した場所であり、孫権・劉備が曹操を討つために同盟を結んだ地であるといわれる。甘露寺の東には定慧寺（本書一九五頁）があり、西には金山寺（本書一九六頁）がある。

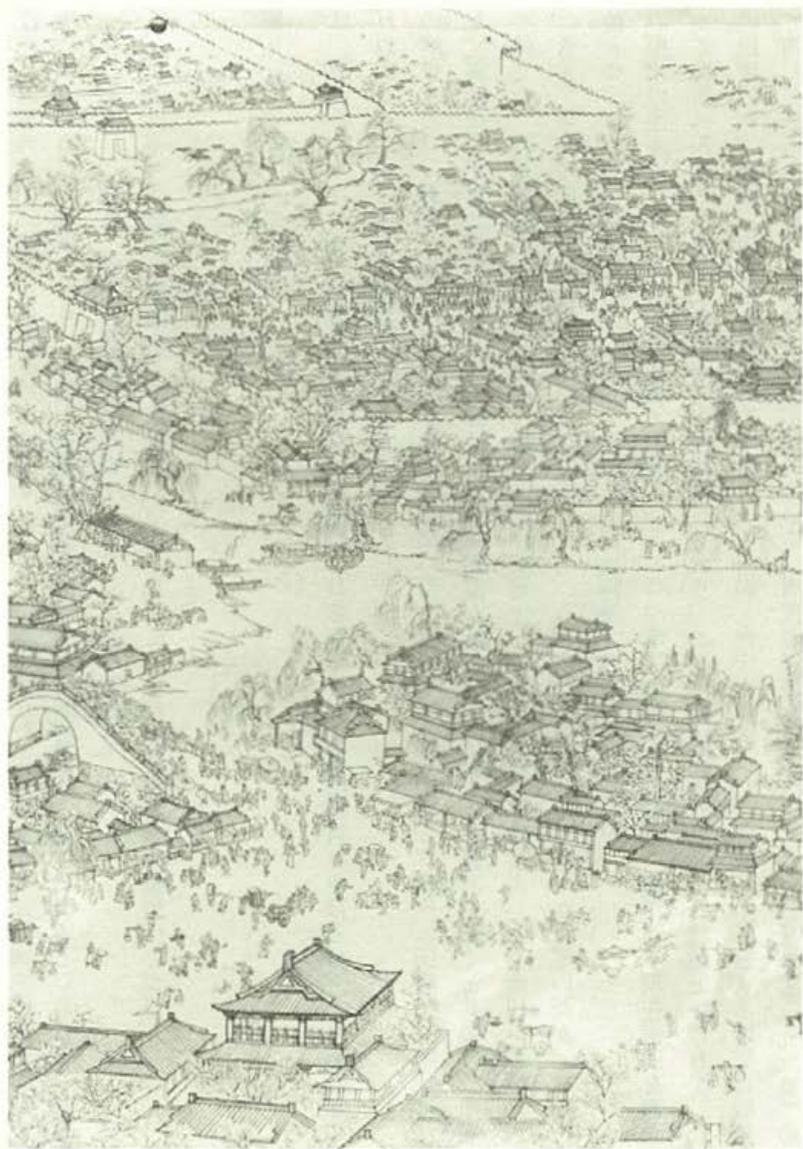
常州からの京杭運河は鎮江の市街をとり長江につながる。ここで長江を横断して揚州へとつづく。

#### 揚州（本書九九頁以下参照）

揚州は、長江の北岸にある。市の東側を京杭大運河がとおるが、この大運河四百キロほどは、一九五八年に造られた。それ以前は市内をとおる古運河が使用されていた。

揚州の歴史は古く、春秋時代、呉王夫差が邗江城を築いた（前四八六）のに始まる。秦代は広陵県、隋代は江都県と称された。漢初は呉王濞の都であった。東晋には南兗州が置かれた。隋の煬帝は大運河を開くと共に、この地に多くの離宮を建てた。揚州は南方の物資を北方に輸送する中継地として隋代は最も活気があった。唐代の都城は現在の市街を内に含んで東北に広く、周囲二十キロほどであったという。宋代は運河はよく利用されていたが、杭州・蘇州にその地位をゆずれ、明代は塩業の中心として栄えた。以後特筆すべきものはない。

唐代の揚州の区画について。唐代は牙城・羅城という二つの地区に分かれていた。長江から現在市内を流れる古運河にそって揚州へ入る。古運河より西北に内河が通じており、この内河の北は牙城、南は羅城と呼ばれていた。羅城は一般の民衆の町、牙城は現在の古城遺跡を中心とする宮殿と官庁街であった。牙城を中心とする城壁は版築の土垣をもって囲んだという。現在も版築の城壁が残っている。唐代の牙城・羅城の関係は大明寺（本書一九九頁）のとなり



の「観音山揚州唐代文物保管所」に展示している絵画にうまく表現されている（写真）。

### 遣唐使

大師入唐道の市街解説も、ここまでくれば遣唐使の道と重なっている。ここで遣唐使について触れておくのも案内の一助となろう。

遣唐使は日本から中国唐に派遣された使節である。前代の遣隋使にしたがった留学僧惠済らが帰国したとき（六二三）、遣隋使の一連のものとして今後も派遣をつづけるべきだと進言したことに由来するという。

舒明天皇二年（六三〇）より宇多天皇寛平六年（八九四）までの間に十九回派遣された（一覽表参照）。空海の入唐は第十六回とも第十七回とも記される。本書では一般説に従い第十六回と記した。第十六回とする理由は、一覽表の第六回の遣唐使を除くためである。第十三回と第十四回の遣唐使は、途中で中止となった。第十五回の人選は宝龜六年六月（七七五）に決定したが、大使以下が入れ変わって、宝龜八年（七七七）に入唐した。

ただ日本の場合には、唐をとりまく他の諸民族とは違って、派遣回数がいちたつて少ない。たとえば新羅の場合には、毎年または一年間に二度、三度ということもあるが、日本の場合は二百六十年間に、実際入唐したのは十五回である。また天平勝宝四年（七五二）、第十回目の遣唐大使として入唐した藤原清河が、正月の含元殿における朝賀の際、日本使の席次が西側第二としておかれていたのを、東側第一に改めさせたのは有名である。これらは、日本遣唐使は唐に追従する朝貢使という性格づけではなく、すでに国家的自尊心を持っていたからであるとされる。

遣唐使船は、初め二隻であったが、のち四隻を定数とした。一船には百二十―百三十人、総員五百人内外であった。

これらの遣唐使が日本文化に及ぼした影響は想像に余りあるものがある。

### 遣唐使一覽

任命順	出発年月	帰国年月	押使・大使・副使等
一	六三〇年八月	六三三年八月	犬上御田歊、葉師恵日
二	六三五年五月	六三六年七月	吉士長丹、吉士 駒
三	六三五年五月	六三六年八月	○高田根麻呂、○掃守小麻呂
四	六三五年三月	六三六年八月	高向玄理、河辺麻呂、葉師恵日
五	六三五年七月	六三六年五月	○坂合部石布、津守吉祥
六	六三五年二月	六三七年二月	○坂合部石積
七	六三七年二月	六三八年一月	×伊吉博徳、×笠 諸石
八	六三九年	?	河内 鯨
九	七〇二年六月	七〇四年七月	粟田真人、×高橋笠間、坂合部大分
一〇	七〇二年三月	七〇八年一月	多治比隈守、×阿倍安麻呂、大伴山守、藤原馬養
一一	七〇三年四月	七〇五年三月、七〇六年八月、七〇九年二月	多治比広成、中臣名代
一二	七〇五年三月(潤)	七〇五年三月、七〇四年一月、七〇四年四月	○藤原清河、大伴古麻呂、吉備真備
一三	七〇九年三月	七〇六年八月	高 元度
一四	七〇九年二月(任命)		×△仲 石伴、×△石上宅嗣
一五	七〇九年四月(任命)	七〇六年二月、七〇八年二月	×△中臣鷹主、×△高麗広山
一六	七〇七年六月	七〇八年六月	×佐伯今毛人、×大伴益立、×藤原鷹取
一七	七〇九年五月	七〇九年六月	布勢清直
一八	八〇四年七月	八〇五年六月	藤原葛野麻呂、○石川道益 空海
一九	八〇四年七月(任命)	八〇九年八月、八〇九年二月、八〇〇年四月	藤原常嗣、×小野 篁 ×△菅原道真、×△紀 長谷雄

(注) ×唐まで行かなかつたもの △任命後停止されたもの ○往復途中または唐で没したもの

## 開封

河南省の中部東寄りにある都市、それが開封。開封の名は古く春秋時代からある。魏はここに都をおき大梁と称した。以後州名として梁州、郡名として開封が用いられた。北周が都して梁州を改めて汴州とした。隋代に汴河を利用して江南に通ずる大運河ができ、汴州は黄河と運河の交差点にあたるので急速に発達していった。この形勢は唐代につづき、大運河の西の終着点ということで、国都にむかう物資はここで揚陸され、その位置の重要性は洛陽・長安よりも重視された。

大師一行も汴州まで運河を使用し、ここで上陸これより陸路をとった。

唐末朱全忠は汴州を根拠地とし、唐を奪って後梁を立てると、東都開封府と称して都とした。北宋時代も東都開封府は、統一帝国の首都として空前の繁栄をもたらしていた。当時開封は宮城を中心として三重の城郭があり、百万都市であったという。金代、汴京として宣宗・哀宗二代の都となったが、まもなく滅亡した。元代・明代は北京に都したため、地方都市となり衰えていった。

見るべきところは相国寺（本書二〇〇頁）がある。この寺は北斉天寶六年（五五五）に創建された寺である。大師はこの寺に立ち寄ったとの伝説があり、その像もあるというのが明確でない。現在は公園となっている。他に鉄塔（開宝寺塔）、龍亭がある。鉄塔は古都開封の象徴として知られる八角十三層からなる瑠璃塔である。外観が鉄色に見えるので鉄塔の名がある。北宋の皇祐元年（一〇四九）の建立。龍亭は宋・金両王朝の宮殿のあったところ、七十二段の階段の中央は、大理石に彫り込まれた雲龍がある。ここに登ると開封全市を眺めることができる。

開封では非見ておきたいのは黄河の流れである。開封市から北の黄河の方へむかうと、黄河は土砂をともなつて流れていることが一目瞭然である。古来より黄河の氾濫は有名である。それだけに黄河は漕運としては不適當であり、当然運航は大運河にたよらねばならないのである。

## 鄭州

河南省北部にある都市が鄭州<sup>ていほう</sup>である。河南省の省都。黄河の南、開封から七十二キロ、洛陽から百二十四キロのところに位置する。中国の綿紡績工業の中心地の一つであり、有数の工業地帯である。鄭州大学など研究機関も多い。

古くから河南の中心地帯として発達し、多くの殷代遺跡が発見されている。鄭州の名は隋代に始まる。宋代には一時廃止したが、その後は鄭州の名が使用されていた。鉄道の開通によって、京広・隴海鉄道の交差点にあたるので、開封・洛陽の繁栄を奪い大きく発展したこともある。

古来からの重要な土地であるために、近郊には見るべきところも多い。

河南省博物館。中国としては小さな博物館であるが、省内各地で発掘された貴重な文物が陳列されている。順次旧石器時代・新石器時代・殷代・周代・春秋・戦国・唐代等とそれぞれの時代の関係品が展示されている。その他商城遺址、黄河展覽館、邙山灌漑ステーションなどがある。

## 洛陽（本書一二九頁以下参照）

洛陽は長安と共に中国の国都として有名である。九王朝が都とした土地であるが、国都の位置は必ずしも一致していない。長安に対して東都ともよばれた。隴海・焦枝の両鉄道がここで交わっている。

春秋戦国時代は、成周が周の国都であったが、洛邑（洛陽）は王城、成周は下都と呼ばれていた。前漢には洛陽県となり、後漢は洛陽を国都とした。三国の魏、西晋もこれを受けついで。四九三年北魏が大周から都をここに遷したが、北魏末の戦乱で荒廃した。隋の統一によって、隋はここを東都とした。これが今日の洛陽の前身である。唐もこれを受けつぎ東都河南府とした。安史の乱によって次第に衰微していき、その後は地方都市となった。

洛陽は古都であるために見るべきものは多い。東約十二キロのところにある中国最初の寺白馬寺（本書二〇二頁）はもちろんのこと、南へ十六キロ伊河の畔り龍門鎮にある「龍門石窟」は、大同・敦煌と共に有名である。この龍門にある善無畏三蔵が入滅した広化寺、金剛智三蔵が入滅した奉先寺、また洛陽近郊の福先寺は、密教相承の祖師が活躍した寺として大切である。これらの寺は歴史の中に埋没し、その位置は不明であったが、今回の踏査団によって全て明らかになった（本書一三〇頁以下参照）。

## 西安

西安それは中国の最も代表的な古都である。陝西省の省都。北には渭水が流れ、南には終南山がそびえている。前漢の時初めて都が定められ、その後前趙・前秦・後秦・西魏・北周・隋・唐などが都を定めた。長安という古称は元

時代まで使用された旧都の名称で、明以後は西安と呼ぶ。

漢代の長安は、すでに東方ばかりでなく、西方西域諸国とも交流をもっていた。つまり西にむかつて「シルクロード」の出発点は、ここ長安であった。隋の文帝が開皇三年（五八三）に旧長安城の東南に新しく都を築いた。唐代はこれに修築を加えた。各時代によって都の位置は多少異なるが、現代の西安は唐代の都長安（本書一四三頁）の北寄り三分の一にあたるという。

長安は殊のほか日本との関係が深い。すなわち奈良時代には三回の遣隋使を派遣し、ついで唐代には十八回の遣唐使を派遣して、唐の先進文化の輸入につとめた。玄宗の治世がその最盛期で、人口百万に達し、文字どおり国際的色彩の強い文化都市であった。大師が入唐したのはちょうどこの時期である。

長安における大師の足跡の大概を月日をおって述べておく。

大師が長安に入ったのは、徳宗の貞元二十年（八〇四）十二月二十三日のことであった。五月十二日難波を出発してより七ヶ月余の行程であった。長安城は外壁によって囲まれており、東西両壁には共に三つの門があった。東の城壁は北から通化門、春明門、延興門という。大師の長安城への第一歩はこの春明門からである。遣唐大使藤原葛野麻呂と共にこの門に入り、右側に玄宗帝が政務をとった宮城「興慶宮」（現在は公園となっている）を見て進み、宣陽房の宮宅におちついた。十二月二十四日、葛野麻呂は国書および貢物を監使、劉昂（りゅうおう）を経て徳宗に献じた。これに対し同二十五日に皇帝の接見が宣化殿で行なわれている。

貞元二十一年（八〇五）、二月から徳宗は病気になる、六十四歳で亡くなった。皇太子が皇帝の位についた、これが順宗である。二月十日、葛野麻呂は帰国の願いがかなえられ宣陽坊を出発、帰国の途についている。大師はこの日二月十日に「西明寺」へ引越しをしている。西明寺は、長安城の西方延康坊にある。二月から六月までの約四ヶ月間、

大師は西明寺に滞在する。この間、船若三藏らと交際するなど精力的に行動しているが、志明・談勝らと共に、青龍寺東塔院（本書六四頁写真、一四一頁参照）に惠果を訪ねたのは、五月末か六月初であったという。

大師は青龍寺へ移り、惠果（当時六十歳）より法を受ける。順次これを示せば、六月十三日、学法灌頂担に入り、胎藏法の灌頂を受ける。七月上旬、金剛界の灌頂を受け、八月十日、阿闍梨位の伝法灌頂を受ける。惠果は大師への受法を終えると十二月十五日に青龍寺東塔院で入滅されている。

大師は、元和元年（八〇六）の一月十八日以後のある日、帰国を願う二通の公文書を作られた。一通は大師自身、一通は橋逸勢のものである。帰国に対する勅許は、元和元年一月となっている。元和元年二月から三月にかけての大師の足跡は明らかでない。したがって大師がいつ長安城を出発されたか、その日は明確でない。しかし四月には越州の節度使に經典等を求める依頼の文があるので、四月には越州に来ていたことは確かである。

## 大師入唐道の寺

近藤 堯寛

「空海・長安への道」訪中団は四十日でちよūd五十ヶ寺参観した。その半数は威儀を正した表敬訪問である。住職らと友好の絆を結び、参観し、調査メモを走らせるという実に忙しい旅であった。

訪問五十ヶ寺のうち五ヶ寺は遺跡である。紹興市の「開元寺址」（現在は病院）、無錫市の「南禪寺址」（ゴム工場）、龍門の「広化寺址」と「奉先寺址」（いずれも麦畑）、西安市の「西明寺址」（住宅密集地）の五ヶ寺は遺跡であるが大師入唐コース上、重要な寺ばかりである。

これから紹介する二十七ヶ寺は霞浦県の「柏翠庵」をのぞいて、弘法大師空海の在唐中（八〇四〜八〇六）に存在していたと察せられる寺ばかりである。寺の歴史を概観して千百八十年前の大師入唐の風景がどれくらい点描できるのか、わずかな資料の中から迫ってみたい。

紙幅の都合により、大師入唐以後の寺は、現在その都市を代表する寺であっても割愛した。参考文献は常盤大定博士や鎌田茂雄博士の実施踏査による論文を主軸とし、今回踏査団が現地住職から聞いた説明や、頂戴した寺史、パンフレットによってまとめたものである。

柏翠庵（福建省霞浦県松城鎮）

霞浦県には仏教寺院が三十一ヶ寺ある。その中でもっとも古い寺が柏翠庵。宋の太宗十一年（九八六）の創建といわれる。つまり、大師が赤岸鎮滞在のときはここに仏教寺院がなかったとも考えられる。

草創当初は裏の右首山にあり「経水庵」と呼ばれていた。明の万曆二十九年（一六〇二）に重建。清の乾隆十一年（一七三五）に分庵して現在地に移る。民国の初めに重修されて伽藍は大きくなったが、のち縮少した。現在、天王殿、大雄宝殿、齊堂、大寮、客堂、觀堂樓、僧宿舍など大小六室があり、僧と居士が三十五名住む。目の不自由な肅山住職は八十五歳。外国人を初めて迎え、三重通訳でとまどい気味であった。

鼓山・涌泉寺（福建省福州市）

福州市東部十二キロに、標高九百二十五メートルの鼓山がある。その中腹に涌泉寺が立ち、福州一の景勝公園となつている。亜熱帯植物が生い、参道の赤い土塀が目にしみる。

今回の訪中団は、山門をくぐった正面に石碑「空海入唐之地」を建立し、開眼供養を営んだ。弘法大師ご入定千五十年の記念碑である。石は福建省長楽県産出の花崗岩であり、高さは台座とともに一・九メートル。題字は高野山真言宗宗務総長阿部野竜正大僧正の揮毫。碑の裏側には「日本国真言宗の開祖弘法大師空海は、唐貞元二十年（公元八〇四年）仏法を求めて入唐、福州長溪県赤岸鎮に到着し、当地に上陸を許され長安に至る。弘法大師御入定千五十年御遠忌の年を記念して『空海・長安への道』を巡拝するにあたり、この碑を建立し以て宗祖の苦難を偲び、日中友好

の永遠ならんことを祈念す公元一九八四年三月吉日 日本国高野山真言宗宗務総長 阿部野電正織」と刻されている。ここから眼下はるかに大師入船の馬尾港が望める。

唐の建中四年（七八三）、鼓山の池に棲む毒龍をしずめるために靈嶠禪師が入山。華嚴經の功德によつて龍は出なくなり「華嚴寺」を草創したと伝えられる。後梁の開平二年（九〇八）、閩王審知はその池を埋めて涌泉寺を建立。神晏国師のときである。明の永楽二十一年（一四〇八）と嘉靖二十一年（一五四二）に焼毀した。現在の建築物は明代末期である。

涌泉寺の寺号の起りとされる「羅漢泉」が天王殿の前にある。「靈源洞」はかつて僧たちの修行場所で、摩崖石刻が千数百ある。「忘帰石」は宋の蔡襄年間（一〇二一〜一〇六七）で最古。

涌泉寺は仏学院を併設している。二十二名の学生が在学し、百余名が卒業した。修学期間は二年。成績優秀な学生は北京の仏学院（法源寺）へ送られる。普雨住職（七三歳）は仏学院院長であり、福建省仏教協会会長でもある。法師は、出家して三年以上経過した僧に戒を授けており、その総数は既に二千名を数える。一九八一年にはシンガポールの華僑へ戒を授けに出かけた。

寺の財源は精進料理のレストランや入場料、経典・仏具の販売、信者の布施、華僑からの寄付が主である。三十人ほど泊れる宿泊設備もある。寺の土地で野菜や水稲、みかん、茶を生産し、このような禅農双修は湧泉寺だけでなく、中国仏教全体の考え方のようである。



開平禪寺の山門

### 開平禪寺（福建省南平市）

南平市最古の寺である。千二百年前の唐代は「報国顯親院」と呼ばれていた。五代の梁時代に修復し、太祖皇帝（在位九〇七〜九二二）は寺額「開平禪寺」と揮毫。後梁の開平四年（九一〇）に「仏智開平寺」と改名された。

大雄宝殿は梁代の造立で、唐代に比られば小さい。修理が幾度か加えられた立派な木造建築である。文革中に仏像・經典・絵画・書すべてが破壊。殿内の仏たちは一九八〇年に造られ、みな新しい。古い石碑が二十五キロ先の法雲寺跡に保管されている。

この寺から多くの高僧が輩出した。湧泉寺第三世蓮茂法師は当山で出家。又、アメリカや東南アジアで大活躍した虚雲法師もここが出身で、一九五五年頃、百二十歳で円寂している。

### 天心勝果禪寺（福建省浦城県）

勝果寺と天心寺が合併した寺である。勝果寺は創建当初から現在地にあった。はじめは漢の越王勾踐の弟の安宮である。梁代に「崇雲寺」と改め、隋代に崩壊。唐代に知事劉守謙が再興し「勝果寺」と改名した。宋代と元代にも破壊している。

天心寺は宋代の建立。北の黄華山にあった。明代に破壊されて勝果寺に移り、合併して「天心勝果禪寺」となった。



靈隱寺の参拝者たち

この時、寺は拡張工事された。

仏像は一九八三年の新造。逸品とはいえない塑像である。近初住職ら僧五名、尼僧四名が住む。ほかに男女の居士も生活し、読経、法事を共に行っている。曹洞宗である。

### 靈隱寺（浙江省杭州市）

創建は東晋の咸和元年（三二六）。インドの僧慧理の開山。隋、唐、五代の時が最大規模であった。唐代に僧千人以上が住んだが、会昌の破仏（八四五）で壊滅した。五代の延寿が中興の祖。呉越の銭弘俶王（在位九四八〜九七八）は大規模な修建を行ない、九楼、十八閣、七十三殿、僧房千三百余室を大整備した。山門から方丈まで回廊で結ばれ、僧三千人が住んだ。

当初、伽藍は山中にあり、修行に適していた。おびただしい建築物は時代とともに山麓へさがってくる。靈隱寺千六百余年の歴史に十四度の兵火や落雷があり、大小十七回の修復工事がなされた。文革中は周恩来氏が北京から浙江大学の学生たちへ、靈隱寺を護るよう何回も電報で指示し、無事であった。今日の寺観は人民政府の援助によって完成。杭州最大の寺院である。

高さ三十三・六メートルの大雄宝殿は平屋建てで古代建築として有名である。その偉容は往時の隆盛を十分に物語る。本尊釈迦如来と仏壇は唐代を模して造立された現代彫刻。補で造られている。

参拝者は一日一万人。境内や堂内は香煙でくすぶる。特に旧二月十九日の観音誕生の縁日は身動きがとれなくなっ

てしまう。僧六十名が寺を管理し、精進料理の食堂や土産店を経営している。

境内に西湖最大の石仏群「飛來峰」がある。洞穴が七十二、摩崖仏が三百三十余体ある。五代から四百二十年間にわたって彫られた。開山理公塔の近くに金剛手菩薩像（元代）がある。

### 太白山・天童寺（浙江省寧波市）

西晋の永嘉二年（三〇八）に義興禪師が草庵を結ぶ。この時は現在の所在地よりも一・五キロ離れた山奥の古天童にあった。今の広修住職は第百六十八世。先覚堂には百六十七牌の先代の位牌を祭祀し、わが団が訪れたとき、若い僧が華嚴經の読経で供養を営んでいた。

天童寺の非常に長い歴史は火災と洪水のくりかえしである。今の寺観は明の万曆十五年（二五八七）に洪水で流され、崇禎十四年（二六四一）に復興したものである。近年、境内は驚くほどよく整備され、羅漢堂から眺めおろす建築群はまさに薨の海。往時は僧房千室近くあり、三個の千僧鍋が戸外で使われずに雨に曝らされている。

寺名はいろいろ変る。唐代は「天童珍瓏寺」、宋代は「天童景德寺」、明代は「天童寺」と呼称した。

日本仏教とその交流は南宋時代から始まる。榮西禪師は二年間、道元禪師は四年間参禅して永平寺にその風致を伝えた。画僧雪舟は二年留錫して天童寺の主座となった。近年は特に日本曹洞宗がよくここを訪れる。

阿育王寺（浙江省寧波市）

開山の慧達法師は地下から五層の舍利塔を湧出するという靈感を得た。その効験によって自らの病いを癒し、西晋の太康三年（二八二）に「弘利禪寺」を創建した。その舍利塔を舍利殿にて拝むことができる。

東晋の義熙元年（四〇五）に塔、亭、禪堂が勅建された。梁の普通三年（五三二）に堂殿と房廊を増築し、「阿育王寺」の額が勅賜された。周の顕徳五年（五七六）に災害をうける。

唐代は律宗であった。鑑真和尚は第三次日本渡海に失敗して阿育王寺に留まり、四回目はここから出発した。宋の初めに律宗と禅宗をあわせ「阿育王禪寺」と改名した。このころ僧千二百名が住み、最多であった。明の洪武十五年（一三八二）に「育王禪寺」となし、天下禅宗五山の第五と称した。日本との交流は唐宋時代が最も盛んであったが、清の乾隆から解放まではほとんど絶える。



塔身肉智者

天台山・国清寺（浙江省台州府天台県）

天台山はもと道教の名山であった。早くから仙術の俗信があり、三世紀から六世紀にかけて道教の寺院が多く建てられた。

天台山が仏教の道場となったのは智者大師智顛（五三八〜五九七）が入山し、太建七年（五七五）に修禪の寺を興してからである。智顛は門下千人をのこして開皇十七年（五九七）に寂す。国清寺から三十三キロ離れた山中に葬り、「智者塔院」が建てられた。わが団もここを訪れ、修膳中の

智者肉身塔を拜んだ。

智顛が入寂したその翌年、晋王は檀越となつて、第一弟子章安灌頂が「国清寺」を建立する。寺号は「寺もし成らば国即ち清からん」という智者大師の夢告によつて付けられた。かくして天台教学は、教理と実践を重んずる教風を天下に風靡していく。

唐代の中国仏教は天台宗が最も盛んである。天下に天台教学をたかめたのは荆溪湛然(七一―七八二)。その法灯を道遠が受け継ぎ、日本の伝教大師最澄に伝えられた。

一行禪師はここを訪れ、ここで入寂する。山門前の豊干橋を渡つた左側に「一行到此水西流」と刻む石碑(明代建立)が立っている。徳の高い一行禪師がここに来たために、東に流れていた川の水が西へ流れたという。その一行禪師の墓塔が七仏塔の近くにひっそりと立っている。

現在の国清寺は臨濟宗である。文革以後から朝課が復活し、唯覚住職ら八十二名の僧と信者たちは、黎明の大雄宝殿に参集し、毎朝三時間の読経と繞行がおごそかに執行されている。

### 靈巖山寺 (江蘇省蘇州市)

ここは呉王夫差(在位四九六―四七三)とその寵妃西施の館娃宮の旧跡である。境内には呉王井戸、月池、西施潭、化粧台の遺跡がある。

離宮が寺に変わったのは東晋時代である。梁の天監年間(五〇二―五一九)から次第に規模が大きくなる。最盛期の唐代は禪宗であった。高僧が多く輩出し、天宝安間(七四二―七五五)には天台中興の祖道遠(伝教大師の師)が法華三昧

を行じて不思議の瑞兆を見たという。宋代の初めは律寺。元豊年間（一〇七八―一〇八五）は禪院に変わり「秀峰禪寺」と呼んだ。現在の浄土宗に改められたのは一九二六年からである。

大雄宝殿の天井には梵字が画かれている。これは前の侍松住職が上海で東密（日本密教のこと）を学び、大雄宝殿修復の時に設計した梵字である。建物は一九三五年のものであるが、一九八〇年に伽藍と仏像が修復された。又、この年の十二月に「中国仏学院靈巖寺分院」が設立し、今は第二期目の学生八十名が学業に励んでいる。

経藏殿の二階に二体の空海像が安置されていた。蘇州市内の信者呉谷宜さんが寺に預けたものである。一体は高さ二十三・八センチ、幅十八センチ、他の一体は蓮台ともに高さ三十・八センチ、幅二十三センチ。二体とも青銅製で重く、明代の作という。二体共背中に「空海像」とはつきり刻まれている。

#### 寒山寺（江蘇省蘇州市）

六朝時代（二二〇―五八九）の創建。梁の天監年間（五〇二―五一九）には「妙利普明塔院」と呼ばれていた。唐代に寒山と拾得が住んだところから「寒山寺」と呼称されるようになった。

七言絶句「楓橋夜泊」で有名な鐘は失われ、明代に鋳造された。しかし、その鐘も日本人に持ち去られる。楓橋は寒山寺の門前にある。水の都蘇州には橋が多く、唐代には三百六十ほどあり、その中で楓橋が一番有名であった。

### 龍華寺（江蘇省上海市）

創建は三国時代の呉の赤烏五年（二四二）。上海最古の寺である。宋代には「空相寺」と称され、今のただずまいは宋代の七堂伽藍を踏襲している。

高さ四十メートル七層八角の仏塔は太平興国三年（九七八）の重建である。創建は赤烏十年（二四七）といわれているが、堂盤博士の文献考証によれば唐代の垂拱三年（六八七）である。

大雄宝殿の本尊は大毘盧舍那仏。光明普照印を結び、宝冠に五仏を頂き、脇侍として普賢・文殊を左右にしたがえている。「華嚴経」によって造立された尊像である。本尊の周囲に二十神像が祭祀されているのは珍しい。

龍華寺は創建から一九八二年まで天台宗であった。ところが、上海には浄土信者が多く、上海人が誇りとする龍華寺も浄土宗であってほしいという信徒たちの願いによって、浄土宗に変わった。現在、僧俗百八十名が住み、都会の龍華寺は活気に満ちあふれている。



龍華寺の毘盧舍那仏

### 広福寺（江蘇省無錫市）

太湖の北にある充山はちようどスツポンが頭を突き出したような形をしている。その意味でここをびんきつぽん龜頭渚という。広福寺のすぐ下に船着き場がある。

広福寺は充山の麓にある。梁の大同元年（五三五）は「広福庵」と呼ば

れていた。このころ、充山村には四百八十ヶ寺あり、広福庵はその一つ。

清代に焼失した何もない荒れ地に、一九二四年、道成法師は信徒の布施によって伽藍を興す。鐘樓と四天王殿と退盧を再建した。退盧とは隠居する住居であるが、実際には使用されず、後の普善法師が方丈とした。

#### 天寧禪寺（江蘇省常州市）

創建は唐の貞觀二十三年（六四九）。「広福寺」と号した。開山は南京の牛頭山の法融法師。法師は「牛頭の禪師」として名をはせ、多くの寺を建立した。その有名な法融法師の名前にひかれて、日本の空海大師が留錫したという伝説がある。その伝説を証明するかのように、天寧禪寺の四天王殿の門前の壁に「弘法大師留学所」と書いた看板が解放前まで掛けられていた。その伝承は常州市内の老人たちも知っているといる。

天寧寺の位置は創建以来変わっていない。山門の正面に唐代の古運河が流れ、天寧寺埠頭がのこっている。その船着場には六段と十段の石の階段があり、一の門と二の門の跡もある。その通路幅は二・八メートルある。さらに、天寧寺境内の西側に支流が通り、この埠頭は地域のネットワークでもあったのであろう。近くに五三八年建設という「新坊橋」が運河をまたいでいる。アーチ式の埤造りの橋である。大師が天寧禪寺を参禅されたならば、新坊橋を船でくぐり、船着場の十六の石段を踏まなければならない。

北宋の政和元年（一一一〇）には「天寧寺」と呼称する。八殿二十四堂の二十五楼を有する四大禪林の一つとなり、最盛期には千人以上の僧が住み、授戒が行なわれた。現在の寺観は光緒年間（一八七五―一九〇八）のもので、大雄宝殿の雄姿がかつての巨刹を如実に物語っている。今、堂内は新しくなりつつあり、仏像・仏具はほとんど新造。東南

第一の境内といわれるだけあって、作業員の作業姿が誇らしく感じられる。

焦山・定慧寺（江蘇省鎮江市）（本書一四頁以下参照）

揚子江の川の中にある古刹霊場である。東漢末に焦光がここに隠居して焦山の名が付いた。河に碧玉が浮いて見えるところから浮玉山ともいう。一帯は焦山公園で、行楽客が多い。

後漢の興平元年（一九四）の草創と伝えられ、「普濟庵」といった。時代とともに宗派がいろいろ変る。玄奘三蔵の弟子法宝大師が焦山に渡り大雄宝殿を建立した時は法相宗であった。弘法大師止宿伝説はこのころのことである。さらに、鑑真和尚の弟子神邕大師の時は天台宗。宋代に金山寺の仏印了元禪師が入山して禪宗になり、「普濟禪寺」と改名。にわかには寺号を高めた。元、明代は臨濟宗。清の康熙四十二年（一七〇三）に康熙皇帝が来山して「定慧寺」の扁額をたまわり曹洞宗となる。康熙皇帝は七回参禪する。清代末に浄土宗に変わり今日に及ぶ。

焦山は各宗の教義を兼学し研究するという伝統がある。それゆえに、茗山住職は「ここは一宗派にこだわらず、各宗の教義を集めて研究する寺である」と語り、印契をいろいろ結んで見せてくれた。法師は密教僧でもある。

唐代の木造の大雄宝殿が、樹齢八百年の大樹の中に立っている。日本の風土とよく似、日本にいる感じがする。茂る林の中に乾隆帝の碑がある。東側の焦山碑林には歴代の碑刻二百六十余りあり、唐の顔真卿、宋の蘇東坡、米芾、元の呉鎮、明の文徵明などが見られる。又、西側には摩崖石刻がある。

金山寺（江蘇省鎮江市）（本書一〇六頁以下参照）

東晋時代の創建。「沢心寺」と呼ぶ。のち「竜游寺」と改められる。唐代に法海禪師が山の中腹から金塊を掘りあて「金山寺」と改称し、重建した。一九七二年に、草創当時と思われる画像と墳墓二十四基が発掘された。

金山寺を仏教史上有名にしたのは遠觀曇顛と仏印了元禪師である。全盛時代には僧三千人を擁し、数万の僧が参拝した。

金山は標高四十四メートル、周囲五百二十メートルの岩山である。百年前までは揚子江の中にある島であった。今は川岸につながっている。その島の頂上に八角七重の慈寿塔（三十メートル）が聳え、金山寺のシンボルとなっている。かつては伽藍のシルエットが揚子江の水面に沈み、夕日に美しく映えたであろう。雪舟はここを再度訪れ、傑作「大唐揚子江心金山竜遊禪寺之図」をものにした。

金山寺の塔は千四百年前の斉梁時代の創建。宋代に双塔が立つ。二つの塔は「荐慈塔」と「荐寿塔」である。のち、双塔は倒れ、明の隆慶三年（一五六九）に一塔を重建して「慈寿塔」と名付けられた。現塔は清の光緒二十六年（一九〇〇）再建のものである。

ここ金山寺に弘法大師空海と標題する七言絶句の詩三首が壁に掛けられていた。「空海上人修行古刹」と題するもの一首、「弘法大師修行古刹」と題するもの二首である。しかし、詩の内容と弘法大師空海とはかみつかない。

江南地方には空海伝説が各所に残っている。日中戦争のころ、日本兵に「空海」「弘法大師」という名前を表示すれば寺の破壊がまぬがれたという。敵をカモフラージュするために作られた伝説のようだ。大師の名前が思わぬところで威光を発揮していたわけである。読者の中で、弘法大師の看板や貼紙を中国でご覧なられた記憶のある方は是非お

教え願いたい。その証言を筆者は帰国してから元日本兵の小塚喜作氏（七六）と浅見朝雄氏（六八）の二名から得ている。

攝山・棲霞寺（江蘇省南京市）（本書二二二頁以下参照）

明僧紹は南齊の永明七年（四八九）に本宅を捨てて「栖霞精舎」を作った。そして、その精舎に法度禪師を招いて無量寿經の説法を聞いた。そののち、法度禪師の為に精舎を寺院として開山する。

初唐の高祖（在位六一八〜六二六）は「功德寺」と改名した。高宗（在位六四九〜六八三）は「隱君棲霞寺」とし、大師入唐のころはこの寺名である。棲霞寺は揚子江の畔りにあり、四大叢林の一つとして名をはせていたので大師留錫伝承は十分に首肯できよう。

会昌で廃絶となるが、宣宗（在位八四六〜八五九）がすぐ「妙因寺」として再建する。爾來、寺号は「普雲寺」「棲霞禪寺」「崇報寺」「虎穴寺」とめまぐるしく変遷し、明の洪武五年（一三七二）に勅して「棲霞寺」と号し、今日に到る。



舍利塔

明徴君の石碑が山門の左側に立っている。明僧紹をたたえた記念碑である。碑文は高祖皇帝、書は高正臣。碑の裏側に「棲霞」の二文字が刻まれ、江南地方の貴重な文化財である。

舍利塔が藏経樓の右側に立つ。隋の文帝が勅して天下八十三州に石塔を造らせたその一基である。仁寿元年（六〇二）の建立。八角五層の白石

の基台に、釈迦の降胎、誕生、出遊、出家、降魔、成道、説法、涅槃の八相が絶妙に彫られ、江南唯一無二の名塔である。

千仏嶺が境内の一番奥にある。三百ほどの石窟に仏像が五百体ばかり刻まれている。最大は三聖殿の阿弥陀三尊。これらの仏像はほとんど近世の塑像であるが、手足首のない古仏は寺が創建された南斉時代の遺物であろうと伝えられている。

#### 靈谷寺（江蘇省南京市）（本書二二六頁以下参照）

梁の武帝蕭衍は、師である宝誌禪師のために天監十二年（五一三）「開善寺」を建立する。翌十三年に禪師は円寂し鍾山（紫金山）に葬り「宝光院」が建てられた。武帝の娘永定公主は塔を建立して宝光院をさらに拡げた。

唐代は「実公院」と呼ばれ数千の僧が修行していた。宋代には七十ヶ寺の小刹が合併して「大平興国寺」となり、明代は「蒋山寺」と改められる。明の太祖（在位一三六八—一三九八）は、自分の墓を築くため洪武十四年（一三八一）に宝光院を紫金山の東の麓に移し「靈谷寺」と改称させた。無梁殿はこのとき造られ、現在の建物の中で一番古い。宝誌禪師の石碑がある。吳道画、李白詩、顔真卿書という三絶碑であるが、原碑は風化し、一九一二年に模して再建されたものである。

玄奘記念堂に十三重塔がある。その塔中に玄奘三蔵の頭蓋骨が奉安されている。長安の白鹿原に葬られた三蔵は樊川北原に移し、総章二年（六六九）に改葬されて現在の興教寺が建った。宋の端拱元年（九八八）に金陵長の住職が三蔵の遺骨を南京に持ち帰り、南門の天禧寺の地下に埋めて、その上に塔を建立した。それを日本軍が一九四二年に掘

り起し、棺上の文字によって玄奘三蔵の頭蓋骨であることが判明したのである。遺骨は透明のガラス容器に納められていて、すぐ近くで拝むことができる。

#### 大明寺（江蘇省揚州市）（本書一一八頁以下参照）

瘦西湖は揚州の美を一層ひきたたせる美しい湖である。その湖の北に丘陵があり、蜀岡と呼ぶ。大明寺はその岡に立つ。南北朝の大明年間（四五七〜四六四）の創建。「大明寺」と号す。大明寺を「栖霞寺」と呼ぶこともあるが、これは塔名であつて寺の名前ではない。その栖霞塔は仁寿元年（六〇二）に建てられた九層の塔であるが、唐の会昌三年（八四三）に焼けて崩れた。隋の煬帝（在位六〇四〜六一七）は大明寺の東隣りに「迷楼」を建設して輪奐の美を誇り、美女をはべらせて享楽に供した。

鑑真和尚（六八八〜七六五）は二十六歳で大明寺住職となり、律を一世に風靡する。日本渡海最初の決行はこの寺である。古運河の畔りに立つ文峰塔（一五八八年建立）のあたりから出航し、長江へ出たという。奈良の唐招提寺を模した「鑑真紀念堂」が森本長老らの助力によって一九七三年に建立。唐招提寺鑑真像と同型の像も奉安し、堂内中央で鑑真和尚は千二百年前を瞑想している。

唐代の揚州は天寧寺、上方寺、大雲寺（鑑真和尚出家の寺。和尚當時に龍興寺と改名。蜀岡の東にあつたが、今はない）が最も有名で、ほかに崇福寺、仁寿寺など四十ヶ寺が城内にあり、大明寺はその中核的な存在であつた。空海の弟子常暁と円行は唐の開成三年（八三八）に揚州を訪れ、常暁は大明寺に住んで文璠方丈から密教を学んでいる。

清の乾隆帝（在位一七三六〜一七九五）は大明の二字を嫌い「法浄寺」と改称させた。その法浄寺の名称は鑑真紀念

堂ができる一九七三年まで使われ、鑑真時代の「大明寺」に復帰した。

#### 相国寺（河南省開封市）

北斉の天保六年（五五五）に相国寺の前身「建国寺」が開封城内に建てられた。寺はしばしば兵火に遇う。名僧慧雲は開封を訪れ、「福慧寺」に住んだ。北隣の宅地を買い取り、地を掘ったところ建国寺の旧碑が出土したので福慧寺を「建国寺」と改めた。唐の景雲二年（七一）のことである。その翌年、則天武后は子相五の皇位登上記念のために、寺額「大相国寺」を下賜した。

唐代の相国寺は壮大であった。しかし、唐の大順（八九二）の落雷によって楼閣や殿堂四百余間が火の海となり、延焼すること三日に及んだ。黄河の氾濫十五回、兵火十一回、大火六回。相国寺は開封城の運命とともに盛衰する。

現在の寺観は山門、大雄宝殿、八角殿、藏経楼、廻廊が立ち並ぶ大伽藍である。しかし諸堂は人民の催事場に供し、境内の広場は遊技施設が置かれて、スピーカーの音楽が騒然と鳴っている（本書四七頁写真）。心静かに合掌できる堂宇は八角殿の千手観音の前だけである。行楽家族で賑わうものの宗教的にみれば淋しい限りである。現在、開封市に仏教協会がないことに一因している。

#### 少林寺（河南省登封県）

北魏の孝文帝（在位四七二～四九四）は、インドから仏教伝道にきた跋陀禪師のために太和十九年（四九五）に寺を建

立した。その寺名は少室山の林の中にあるということから「少林寺」と名付けられた。その二十九年後にベルシャ出身の菩提達摩は、南の少室山に向って「面壁九年」の修行を行い、中国禪発祥の地となる。

草創のころは小さな寺であった。歴代朝廷の力を得てにわかに大きく発展し、ついに「天下第一の古刹」という称号を博するにいたる。最盛期は唐代の太宗（在位六二六〜六四九）のころで、三千室あった。僧二千名以上、僧兵五百人ほどいて、李世民の支持を得ていた。重結戒壇が設けられ、その六十三年後には会善寺にも琉璃戒壇が設けられ、拮抗する勢力を張った。

少林寺盛衰の中で最も打撃を受けた破壊は、一九二八年三月の軍閥による大火である。諸堂文物ことごとく灰燼し、その烈火は四十余日も山城を焦がした。今、政府の援助によって復興されつつある。

少林寺の西三百メートルに塔林がある。唐の貞元七年（七九一）から清の嘉慶八年（一八〇三）の歴代住職の墓塔である。以前は五百基あった。今は二百三十基。磚塔林や石塔が林立し、中国最大の塔群である。往時の隆盛がしのばれる唯一の場所でもある。

少林寺の塔

鞏県石窟寺（河南省鞏県）

開鑿のはじめは熙平二年（五一七）である。ここの石は堅い。したがって彫刻はこわれにくく、中国の石窟中ここが最も完璧に近い状態で美しく遺っている。

ここは北魏帝専用の石窟として掘られた。それゆえに、金五窟すべてに「帝后礼





寺窟石窟窟

仏像」が彫られている。帝后礼仏像とは、皇帝や大臣、婦人たちを僧が寺へ案内する場面の図である。第一窟と第二窟は宣武帝と靈太后の造営。三窟と四窟は孝明帝とその妃が掘る。最大の第五窟は孝荘帝による造窟である。時間と多くの信徒たちによって仏像が増し、装飾、荘厳されていった。その数量は二百五十六の仏像と七千七百四十三の仏たちである。

「鞏県石窟寺」という呼称は清代からである。創建のころは「希玄寺」「蓮花寺」といい、唐代は「十方淨土寺」と呼ばれていた。

### 白馬寺（河南省洛陽市）

後漢の明帝（在位五七～七五）は金人（仏）の夢を見た。そのために大月氏国へ仏典を求めべく使節十二名を派遣した。その三年後の永平十年（六七）に、インドの高僧摩騰と竺法兰が白馬に経巻と仏像を載せて洛陽に着いた。明帝はここに「白馬寺」を建立した（本書四八頁写真）。仏教が中国に伝来した最初の寺となった。これが白馬寺発祥伝説のストーリーである。

中国へ仏教がいつ伝わったか、その時期は諸説あって定かでない。又、白馬寺を発祥とする根拠もない。しかし、空海が帰国に際して越州の節度使に与えた手紙の中に「白馬、白象の後、乳水暗に合えば教すなわち行なわる」とあるように、大師入唐のころは既に白馬寺伝説は通念とされていたようである。安祿山の反乱（七五五）で多くの僧が白馬寺に逃げこみ、日本遣唐使たちも白馬寺の前を通らなければならなかった。大師が中国仏教発祥の白馬寺である

という深い思いでここに止宿するという想像は大いに許されよう。今日でも各宗派から訪れる人は非常に多い。

毘盧殿の前にある清涼台は明帝が避暑とした遺跡で、その後漢時代の碑が一部のこっている。白馬寺で一番古い場所である。高さ二十メートルの斉雲塔は金の太定十五年（一一七五）の建立。清代に重修。密檐式十三重の磚塔である。塔に向ってかしわ手を打てば蛙のような声がする。

#### 龍門石窟（河南省龍門鎮）（本書一三〇頁以下参照）

龍門石窟は、伊川を東西にはさむ香山（東）と龍門山（西）の石灰岩の石窟群とからなる。この谷あい伊闕とい、古くは「伊闕石窟寺」と呼ばれていた。石窟は千三百五十四洞と七百八十五の仏龕、四十余座の仏塔、大小の佛像九万七千余体、碑文三千六百八十本が彫刻され、そのほとんどは西側の龍門山にある。

開鑿は龍門山から始められた。「古陽洞」が最も古く、北魏の大和十八年（四九四）の銘がある。はじめは僧俗の民間から造営されたが、景明元年（五〇一）には宣武帝の勅が発せられ、二十四年の歳月と八十余万の工夫によって「賓陽中洞」が完成した。このように、龍門石窟群は東魏、西魏、北齊、北周、隋、唐、北宋の諸朝によってすすめられていく。

北魏と唐代の造営が最も力がいった。特に唐の高宗の上元二年（六七五）に完成した大盧遮那仏は高さ十七メートルもあり、造像エネルギーの極点に達した。中国仏教始まって以来の仏教芸術の結晶でもある。そのために則天武后は脂粉錢（化粧料）一二万貫を大仏造立に寄進した。この大仏は奈良の大仏に大きな影響を与える（本書四九頁写真）。

東山の造窟は西山が掘り尽されたころに始まった。ここには看經寺洞、万仏溝諸洞、擂鼓台三洞など、唐代の石窟

が七ヶ所ある。

大萬仏像龕は密教窟である。ちょうど伊川をはさんで大盧遮那仏と対峙する。北洞、中洞、南洞とある。北洞の入口の内側に四臂と八臂の菩薩像が立っている。南洞には大日如来が洞内中央に坐し、宝冠をかむり、瓔珞と腕釧をつけ、触地印をなしている。官能的なインド様式の仏像である。大萬五仏像龕の中庭には仏頂尊勝陀羅尼を刻んだ経塔や墓塔、密教仏が多く立っていて、密教隆盛時代に掘られた洞窟であることが伺える。密宗の徒は必ず訪問したい窟である。

#### 興教寺（陝西省西安市）

玄奘三蔵は麟徳元年（六六四）に入寂して涇水の東、白鹿原に葬られた。總章二年（六六九）、肅宗は改葬を命じ、樊川の北原に墓を移して玄奘塔を建立した。そのとき「興教」を塔額をたまわる。その塔は五層四角の樓閣式塔（二十一メートル）である。開成四年（八三九）に修建された。

玄奘塔の左右に測師塔と基師塔が並んで立っている（本書六一頁写真）。測師塔は法相宗の大学者円測の墓で、宋の政和五年（一一一五）に終南山豊徳寺から移された。基師塔は玄奘上足四人のうちの一人である法相宗開創慈恩大師窺基の墓である。

## 大興善寺（陝西省西安市）

創建は蜀の泰始二年（二六六）と伝えられ、「尊善寺」と呼ばれた。文帝は開皇元年（五八二）に隋を興し、長安に大興城を建設して首都とした。その翌年、靖善坊にある尊善寺を、大興城と靖善坊の名前に因んで「大興善寺」と改め、全国の寺を統領する寺院とした。寺域は一坊全部を占め、僧三百名が住み、仏門の淵藪となる。中宗の神龍年間（七〇五―七〇六）に隋の文帝より鄆王を追贈され「鄆国寺」と改名するが、景雲元年（七一〇）には旧名に復する。

天宝十四年（七五五）、安祿山の乱が起きる。そのために不空三蔵は翌年五月、勅をうけて大興善寺に止住して壇を築き、帝の除災祈願を行う。安祿山の乱が終息した広徳元年（七六三）に灌頂道場が設置され、その翌年正月に弟子四十九名が配属された。不空三蔵は大興善寺にて金剛頂経系の経論を翻訳し、護国思想を強調。青龍寺と並ぶ密教道場とした。晩年（七六六）には五台山に金剛寺を建立し密教道場を造営。そして五台山の文殊信仰を世にひろく吹鼓し、大興善寺にも「文殊閣」を置いた。三蔵は大興善寺を舞台に、中国に密教の根を完全に下ろして、大曆九年（七七四）六月十五日に円寂する。その九月、代宗は舍利塔を建立して冥福を祈る。建中二年（七八二）には徳宗が碑を建てて賛嘆した。

会昌五年（八四五）の廃仏に滅びるが、間もなく再興する。清の順治十八年（一六六一）に修復されて「興善寺」と称する。現在の建物の多くはこのころのものである。大雄宝殿の毘盧遮那如来など、すべての仏像は一九八〇年以後の新造立。唐代唯一の遺跡は法輪閣の礎石のみである（本書六二頁写真）。礎石は石垣に囲まれ、牡丹が植えられていて長安の春がしのばれる。僧侶はいなく、陝西省仏教協会の許力功会長が管理する公園である。

## 大雁塔・慈恩寺（陝西省西安市）

皇太子であった唐の高宗（在位六四九～六八三）は、隋代に廃された寺を「慈恩寺」と号して貞観二十二年（六四八）に復興させる。慈恩とは、亡母文德皇后の慈恩に報いるために付けられた名前である。

高宗は慈恩寺に「翻経院」を建てて玄奘三蔵を迎え、翻訳事業に専念させた。さらに、三蔵法師の発願によって、インドから持ち帰った経巻仏具を保存するための大雁塔を永徽三年（六五二）に建立（本書五八頁写真）。青埴を餅米と石灰で固めて造られた五層正四角形のインド様式の塔である。則天武后の時代に重修し、七層六十四メートルとなった。宋代に火災にあい、明代に重修、清代に修理された。第一層の南門左右の龕には褚遂良書による太宗の「大唐三蔵聖教序」（永徽四年十月十五日）と高宗の「大唐三蔵聖教序記」（同十二月十日）の碑がみられる。

慈恩寺の最盛期には、子院十数院に僧三百人が住み、晋昌坊の東半分を占めていた。般若三蔵は奉勅によって慈恩寺で『守護国界陀羅尼経』を翻訳する。金剛智三蔵は南インドから伝道のため長安に入り、慈恩寺に初めて住む。空海は永貞元年（八〇五）の盛夏、慈恩寺の北側を毎日のように通って西明寺と青龍寺を往復した。聳える大雁塔は古代も現代も都の象徴であることに変わりがない。

現在の慈恩寺は市民憩いの広場である。大門、大殿（大雄宝殿）、二殿（法堂）、大雁塔と、ここでも直一列に伽藍配置されている。二殿の前には西安市と京都市の友好モニュメント「春日石灯」が立っている。

おわりに

現在の中国仏教は禪と浄土系が主流である。しかも、ほとんどの寺院は坐禪と念仏を併用して行なう。禪宗寺院であれば坐禪を主とし、浄土宗であれば念仏を主とする「禪淨双修」である。密教は朝夕の勤行で読まれる各種の咒で残っている。

ちなみに、現在よく読まれる經典は「阿弥陀經」と「般若心經」が主である。「法華經」もよく読まれる。靈楞咒、大悲咒をはじめ、各尊の咒はこの寺でも唱えられている。まれに「無量壽經」、「楞嚴經」、「觀音經」、「大日經」、「金剛經」、「遺教經」が読まれている。

各寺院の主要行事は四月八日の浴仏や二月十九日の觀音誕生、六月十九日の觀音出家、九月十九日の觀音成道、七月十五日の盂蘭盆が広く執行され、他に、阿弥陀、地藏、釈迦、各寺院祖師の縁日が多い。文殊、普賢の縁日も多少みられる。

中国で密教を教えるところは五台山のチベット密教と、四川省都市の尼僧學院ぐらいである。しかし、中国では密教を求める声が強。わが団が中国側へ唐代の交通や仏教事情を尋ねれば、中国側がわが団に、密教を熱心に質問される場面がしばしばあった。実際、密教修得の法師にも多くめぐりあった。蘇州市西園寺の安上師、鎮江市定慧寺の茗山師、開封市河南仏学社の淨嚴師らは印契を結び真言を唱えられる法師である。青龍寺が密教道場として復活することは、日本真言宗の悲願である。そして中国側に密教が芽ぶく土壤は、青龍寺であろうと考える（本書六三頁・六四頁写真）。

## 追体験日誌〈実測距離〉

武内 孝善  
中村 正文

二月二十六日(日)〔高野山〕—大阪空港〔ホテルくれべ〕

高野山、奥の院、中の橋着(九時二五分)……徒歩

奥の院、燈籠堂にて法要(九時五〇分〜一〇時三〇分)

—高野山真言宗々

務庁(二一時一五分〜二時一〇分)……一時解散……高野山大学(二四時)

……マイクロボス大阪国際空港前ホテルくれべ(二七時)

雨の高野山。今回の計画の無事成満を祈って奥の院御廟に参拝する。その後、真言宗々務庁にて、宗団の多くの方々に激励され、事の重大さを再認識しつつ高野山を出発。大阪国際空港前の宿泊地に到着する。

二月二十七日(月)〔大阪国際空港〕—北京

大阪国際空港着(八時五〇分)

—大阪国際空港離陸(二一時五三分)

……飛行機

北京首都空港着(二五時四八分)……現地時間一四時四

八分以下中国時間)

……マイクロボス

北京友誼賓館着(二六時三〇分)

雪の舞う大阪空港で、毎日新聞大阪本社営業部長赤川修三氏・高野山大学々長松長有慶先生をはじめとする多数の方々の見送りをうける。中国への第一歩、北京空港で通一法師など多くの中国佛教協会の代表者の出迎えをうける。夕食後、中国側代表者と全スケジュールについて打ち合わせ。我々の四十日間の要求は全て通りそうである。

二月二十八日(火) (北京滞在)

北京友誼賓館発(九時三六分) マイクロボス 広濟寺(九時五六分) マイクロボス 二時四〇分 五キロ 北京飯店 一四キロ 北京友誼賓館(一二時

一六分) 一七時三四分 一三キロ 和平門北京烤鴨店(二七時五五分) 一九時三七分 北京友誼賓館(二〇時一〇分)

今日の北京は冷たく寒い。中国にきて、はじめて寺院(広濟寺)を訪問。中国の寺の山門に入ると、まず布袋尊が迎えてくれる。その裏に寺内と仏法を護持する韋駄天が祀つてあり、その周圍を増長天・持国天・広目天・多聞天がとりかこむ。中国の寺院はどれもこのような形式だといってよい。因みに布袋は弥勒仏の化身とされており、参拝する人をにこやかに迎い入れ、福を授けるといふ意味をもつ。中国らしい発想がいかされている。

午後、友誼賓館で馬得志先生と対談する。私達が西安に到着した時に、孟村・西明寺跡等を案内して頂くように要請する。この時期、北京において全国考古学大会があり、馬先生が参加される為確約がとれなかつたのが残念であつた。夕刻、中国仏教協会による歓迎レセプションに招待される。全員、ごちそうせめにうれしい悲鳴をあげた。

二月二十九日(水) (北京—福州)

北京友誼賓館発(八時一分) マイクロボス 法源寺(八時二九分) 一〇時二七分 三六キロ 北京空港(一一時二二分) …… 北京空港離

陸(一二時三四分) 飛行機 一三キロ 福州義除空港(二五時三九分) 一五時五九分 マイクロボス 華僑大廈(二六時二三分) 一七キロ

午前中、法源寺を表敬訪問する。山門を入ると昨月と同様にこやかな布袋尊がまつていた。この寺の毘盧殿にあるビルシヤナ仏には驚いた。華嚴三千大世界を想定した千体佛の上に金剛界四仏があり、その上にビルシヤナ仏が位置している。この立体的構図をもつ仏像は明代につくられたものであるらしい。ここ法源寺には仏学院(僧侶を養成す

る機関)があり、私達が訪れた時には、仏教協会理事の明哲法師が『瑜伽師地論』を三十二名の学僧に講義中であつた。

午後、いよいよ福川へ。福州の義除空港では、福建省の仏教協会の方々の出迎えをうける。福州は現在、面積三十万平方キロ、人口百二十万人という緑の美しい街である。この福建省の全行程は付丹青という女性の通訳が行ふことになる。中国という国は言葉の障害が大きく、様々な種類の中国語がある為にとられた処置らしい。福建省は福州以外すべて外国人には未開放地区である。私達の計画は、省をあげての尽力により素晴らしいものになりそうである。仏教協会(福建省)会長普雨法師をはじめ、省の要人の人達の並々ならぬ意気込みが感じられる。私達も気をひきしめてやらなくてはならない。普雨法師は昭和五十七年に高野山(日本)に来たことがあるという。

### 三月一日(木) (福州—霞浦県)

福州市華僑大厦発(六時四二分) マイクロボス 鼓山涌泉寺(七時八分) 七時二五分 ハキロ 下院(七時三十分) 七時五十分 三五キロ  
寧徳天王禪寺(二時五分) 一七キロ 寧徳県接待所(三時五十分) 四時五十分 ハキロ 霞浦県(二時三十分) 徒歩  
柏翠庵(一八時五分) 一八時三十分 徒歩 霞浦県于部招待所(一九時四十分)

普雨法師住持の涌泉寺に行く。ここに高野山真言宗々務総長筆の「空海入唐之地」の石碑が建立されるのであるが、その場所を確認するために立ち寄る。車で寧徳県へと向かう。寧徳の天王禪寺前につくと、私達を歓迎する為に集まってきた人達の垣が車のまわりにできる。そこから寺まで山道を徒歩で人込みをかきわけながら登る。山門近くになると一斉に爆竹が鳴らされ、まるでお祭り騒ぎ。あまりの熱烈な歓迎をうけ、一同どのように対応していいやら戸惑うが、住民の人達の熱い気持ち伝わりなんともうれしい。ここから念願の霞浦県へと出発する。霞浦県に入ると、

ここでも寧徳県にも勝る人々の出迎えをうける。車に人がおしよせ、前に進まない。実に千百八十年ぶりの外国人の来訪だという。それで、人々は沸き返っている。招待所から柏翠庵までのわずか百メートル程の道のりが満足に歩けない。柏翠庵の住持の蕭山法師、八十五歳という高齢の上、眼も不自由のようにみうけられたが、心から私達一行を歓迎され、礼をつくされていく様子が印象的であった。

三月二日(金) (霞浦県——福州)

霞浦県幹部招待所発(七時三十分) マイクロバス 赤岸生産大隊人民会堂(七時五十分) 九時五十分 マイクロバス 赤岸大橋(九時二十分) 九時四十分

時四十分) 一キロ 大隊人民会堂(九時五十分) 五キロ 海岸(羅漢漢川口にある港、一〇時五分) 船 福寧湾を帆船にて周航

海岸発(一二時三十分) マイクロバス 霞浦県幹部招待所(一二時三十七分) 一三時五十分 二二キロ 寧徳県招待所(一六時三十分)

一八時一〇分) 二五キロ 福州市華僑大厦(二〇時四七分)

私達の為に増設したという一・七キロの道に感激しながら赤岸大隊人民会堂へと到る。大隊の呉維孝隊長は緊張のあまり、口数が極端に少ない。羅漢漢溪にかかる赤岸大橋での説明で、赤岸鎮の「赤」は赤い色を示すのではなく、五行説の南の方角を表わすという意味でつかわれていることがわかる。人民会堂前に再びもどり、ここで記念の植樹をする。十時過ぎ、海岸に着く。大師一行が千百八十年前に漂着されたところである。県の人達の心尽しの結晶であるうか。福寧湾を周航する為に用意された船は、あたかも遣唐使船を彷彿させるかのような帆船であった。大師はどのような想いでこの土地をながめられたのであろうか。私達は砂浜に降り、大師の時代へと思いをよせ、大師の御苦労に私達の胸はいっぱいになった。そしてこの追体験の旅が成功することを祈り砂浜に額づく。午後二時過ぎ、福州市に帰る為、断ち切れない想いを残しながら霞浦県をあとにした。

三月三日(土) (福州市滞在)

華僑大厦発(七時四五分)

マイトロパス  
九キロ

下院 一三キロ

馬尾港(八時二〇分)

客船にて港を周航(八時二五分) 九時二五分) 馬

尾港発(九時四一分)

二キロ

内港 一三キロ

下院 八キロ

鼓山涌泉寺(一〇時三〇分)

一四時二七分

二八キロ

崇福禪寺(一五

時一〇分) 一六時四分)

一四キロ

西禪寺(一六時三〇分)

一八時三五分)

七キロ

華僑大厦(一八時五五分)

七キロ

華僑大厦(一八時五五分)

七キロ

華僑大厦(一八時五五分)

七キロ

華僑大厦(一八時五五分)

大師の一行は赤岸鎮での上陸を許されず、時の県令の所在地・福州へ行くことを余儀なくされるが、その大師一行が福州に上陸する為に入った港が馬尾港である。私達は幸運にもこの馬尾港を周航することができた。大師一行と同じ視線から福州の風景をみる事ができ、私達は胸を熱くした。港内に数多くみられる帆船は千百八十年前も同じであつたのではなからうか。この福州市の涌泉寺で「空海入唐之地」と書かれた石碑の開眼法要を静団長導師で行なう。法要には参詣の人達も加わり、予想以上に盛大なものであつた。この寺には歴史的遺産の一つである磨崖石刻がみられる。中国の寺院は伝統的に「禪農併重」。涌泉寺の次に訪れた崇福禪寺は尼僧の寺である。朝から体調をくずしていた通訳の蘆さんが車の中で休み、私達のみで訪問。住持の徳欽尼法師は病気の為、不在であつたが、尼僧の多いことに驚かされた。ここで言葉の障害が大ききことを痛感すると共に蘆さんの存在の大きさを認識する。十六時三十分、西禪寺着。西禪寺は復興中であつた。天王殿の中では、布袋や四天王等の仏像を造っている最中であり、幾度かの法難に遇いながらも、すぐに復興していく中国仏教の力強さを感じる。この日は、中国新聞社の福建分社記者の陳国明氏が取材の為、私達に同行する。

三月四日(日) (福州市——南平市)

華僑大厦発(八時七分) マイクロボス 二二キロ 閩江入口 一三キロ 白沙鎮 三九キロ 崇聖寺(二〇時三〇分) 一九キロ 下祝村 九キロ 常洋

村 一六キロ 大橋(二一時四三分) 二九キロ 古田県華僑連合会(二二時二五分〜一五時九分) 七八キロ 大洲(二七時二分) 二二キロ

南平市第一招待所(二八時一五分)

閩江流域の南平へ向けて八時過ぎに出発する。カメラマンの滝さんは一人、私達と離れて、荷物をのせたもう一台のマイクロボスにのりこむ。閩江のゆるやかな流れにそいながら車は先へと進む。途中、雪峰というところに崇聖寺という寺があった。中国の人はいたるところに詩や自分の名を刻んで残しているが、この寺の周辺の山にもたくさんみられる。ここをすぐにたち、次の目的地の古田県の華僑連合会に到る。この場所で、古田県要職の人達と団員全員がそろって昼食をとる予定であるが、滝さんの乗った車が約束の時間になっても着かない。車の故障の為、遅れていることがわかり、一同ホツとする。午後三時まで待つが、一向に来る様子がない。仕方なく、先きに出発する。滝さんは私達に遅れること二十五分、午後六時四十分南平市に到着する。私達の心配をよそに、いい写真がとれたと上機嫌であった。ここ南平市の市長は昭和五十八年四月二十五日に日本に来て、約一カ月間程滞在したことがあるらしい。この会談で、唐代の交通が主に水路であったことに確信を深めた。

三月五日(月) (南平—浦城)

南平市第一招待所発 マイクロボス 二六キロ 大橋 一六キロ 南雅(七時五一分) 一〇キロ 魯口 一五キロ 建甌大橋(八時二〇分) 一六キロ 徐  
厦大橋(八時三八分) 四キロ 中村 二キロ 徐墩公社婦宗大隊(八時五〇分) 徒歩 崇仁寺(二〇時〜二時二〇分) 徐  
墩公社婦宗大隊(二一時五五分) 六キロ 徐墩大橋(二二時五分) 六キロ 建甌大橋(二二時二二分) 二キロ 建甌県第一招待  
所(二二時二八分〜一四時二五分) 二キロ 建溪舟着き場(二四時三二分〜一五時八分) 一三キロ 小松(二五時二五分) 八キロ 路

口 一二キロ 伊后 三三キロ 南浦溪 (二六時八分) 一〇キロ 水吉鎮 三三キロ 馬嵐 (二七時五分) 二二キロ 石段 三三キロ 臨江 (一

七時五分) 二四キロ 浦城県招待所 (一八時四八分)

閩江支流の建溪ぞいにさかのぼり崇仁寺下に到る。そこから徒歩で一時間余り歩く。昨日から体に変調をおこしていた備前副団長がとうとう寺の門前まで来て倒れてしまう。備前副団長をその場で休ませ、私達のみ寺に辿りつく。山門で爆竹と二列に並んだ僧達に迎えられた。崇仁寺の大悲殿では多くの僧・尼僧が、南無阿弥陀佛の念仏を間断なく唱えている。崇仁寺をあとに建甌に向かう。ここで東漢時代の通済門を発見する。古来、中国の各港にはこのような門があった。大師一行が福州から水路をとられたのであればこの通済門は必ず眼に入ったであろうと思われる。建甌から浦城へと道路は舗装されていない全くの山道の為、砂ぼこりがひどく車内が白くもりだした。浦城へのこの道はきつい峠がたくさんあったが、峠を越えて辿り着いた浦城の街は意外な程、大きな街であった。

三月六日(火) (浦城—南平)

浦城県招待所発 (七時四八分)

マイクロバス

天心勝果禅寺 (七時五五分—九時五分)

一キロ

仙廬山下 (九時一五分—九時五〇

分) 一キロ 南浦溪・舟つき場

一キロ

浦城県招待所 (二〇時二〇分—二時二七分)

二五キロ

臨江 六四キロ

水吉鎮 (二五時

二五分) 四五キロ

路口

一〇キロ

小松

一〇キロ

建甌舟つき場 (一六時四五分—一六時五八分)

一九キロ

南雅 (二七時三四

分) 二〇キロ

大横 (二七時五四分)

一九キロ

南平市第一招待所

中国に来て、はじめての雨。唐代に創建された天心勝果寺に参拝する。そこから一キロ位離れたところに浦城県を一望できる仙廬山がある。閩江支流の南浦溪の舟つき場には、登瀛門がある。この門は千八百年に修復された。午前十時三十分、県の指導者と会見。浦城県の副県長である陶瑞祥さんの話しは、浦城の街の様子や歴史を知るには

充分すぎる程丁寧であり、その名調子は私達をあきさせない。静団長の質問がなければ一日中でもやっておられたのではないかと思えた。それにしても県に対する並々ならぬ情熱である。しかしながら、この話の中で浦城から江山への道の様子などを把握できたことは大きな収穫である。大師は浦城まで水路をとられ、楓嶺関を越えて江山へ出られたというのが、団の一致した見解であった。浦城の街で忘れられないこと、それは浦城の料理である。日本人好みの味。帰路、もう一度、建甌の通済門に立ち寄り南平市に向かった。

三月七日(水)〔南平市—杭州〕

南平市第一招待所発(七時四〇分) マイクロバス 開平禪寺(八時五分) 九時二八分 二二キロ 南平市舟付き場(一〇時) 一一時一三分 一四キロ 第一招待所(一一時一六分) 一二時三四分 三キロ 南平駅(一二時四〇分) 八〇六キロ 杭州(明朝到着)

早朝、中西・滝岡カメラマンが雨の南平市の写真をとりにいく。南平市の古刹といえは開平禪寺である。福建省は胡耀邦総書記や趙樸初仏教協会々長の直接的な指示がいきわたっており、どこを訪れても、熱烈歓迎、日本真言宗参拝団の横断幕がはられている。開平禪寺でもこの幕を迎えられた。ここから十二キロのところ、南平市の舟つき場がある。閩江が建溪と富屯溪の二つの支流にわかれる地点にある舟着き場には延寿門がそびえている。そこから対岸の九峯公園に渡る。渡し舟の料金は五銭。火事の災害を防ぐために建てられた冷風閣から、水害をおさえる為に建立されたという劍津雙塔を望む。第一招待所で昼食をとった後、南平駅に行く。南平市の夏玉湖市長さん達の見送りをうけ、次の目的地・杭州に向う。多くの思い出を刻んでくれた福建省をあとにする。はじめての汽車の旅である。中国の汽車は中国人の乗る車両と外国人の乗る車両がはっきり分かれている。久し振りに全員時間に拘束されないひとときをすごす。

三月八日(木) (杭州滞在)

鉄道

杭州駅(五時二五分)～五時三二分)

マイクروبス

杭州飯店(五時四四分)～八時五分)

……西湖遊覧

六和塔(二〇時

二〇分)～二時二〇分)

杭州飯店(二時二〇分)～一五時)

錦織物工場(一五時一五分)

西冷印社(二六時五〇分)

杭州飯店(一八時)

午前五時二五分杭州に着く。駅の構内周辺は早朝にもかかわらず人々で混雑している。八時ホテルを出発し、霧のたちこめる西湖を遊覧。蘇東坡・白居易が多くを詩を残しているが、詩を創作することができないことがうらめしい。広化寺に建つ六和塔は一九〇〇年に重建されたもの。ここは西湖と同様に観光名所の一つになっている為、多くの家族づれ、若い男女のカップルに出会う。最近の中国は自由恋愛が許されているようである。この地にある道元禪師の師、如浄禪師の住した浄慈寺はとりこわされており、修復中であった。住持も一緒に泥まみれになって働いておられる姿が強烈な印象として残る。午後、錦織物工場を見学。あまりの素晴らしさについていっしょに買わされてしまう。今日一日、大師との関わりがでてこない。夕食後、福建省とは少し事情が異なる浙江省の行動(計画)について対策をねりなおす。常に大師を想いながら行動しなくては観光旅行になつてしまいかねない。

三月九日(金) (杭州滞在)

杭州飯店発(八時五分)

マイクروبス

靈隠寺(八時二一分)～一五時五分)

杭州飯店(二時)～一四時二〇分)

拱宸橋(二四

時四〇分)～一五時二〇分)

杭州站(運河の船渠場一五時四〇分)～一六時)

杭州飯店(一六時一六分)

飛來峰で有名な靈隠寺に参詣。この寺の釈迦牟尼仏は十九・六メートルもあり、迫力がある。靈隠寺は非常にたく

さんの参拝人でにぎわっている。日本という札所めぐりのようである。巡礼のような色とりどりの格好をしたおばさん達の一行が多数みられる。聞くところによると普通の日には約一万人、何かの行事がある時には数万人の人の参拝があるらしい。中国に仏教が生きていたことを実感する。飛來峰には仏龕が三百位ある。唐代は千人以上の僧侶が住していたらしい。それ以上に私達にとつて強く印象に残ったことは、兪昶熙浙江省仏教協会々長の言葉であった。師は大師が天台山に行ったという記載をみたことがあるらしい。杭州飯店での昼食後、拱宸橋にいく。橋のたもとに昔、港があつたという。現在の橋は清代のものである。続いて運河の船のり場である杭州站を見学に行く。駅は船にのる人でごつたがえしている。駅の許しを得て棧橋まで出てみた。運河は予想に反して、ドス黒く濁っている。全く画にならない。しかし、旅情をかりたててやまないものがある。最近、徐々にこの旅における団としての一つの方向性をみつけつつある。夕食後、团长室にて今後の方針について検討する。

### 三月十日(土)〔杭州—天台山〕

杭州飯店発(六時七分)	マイクロバス 七キロ	銭塘江大橋(六時一八分)	九キロ	嵐山駅(六時三六分)	一五キロ	南銭清(七時一分)	九キロ
何橋鎮(七時一〇分)	三キロ	紹興駅(七時三〇分)	一五キロ	陶堰(七時五二分)	一〇キロ	東関鎮(八時三分)	三キロ
面との分岐点(八時九分)	五キロ	高壩(八時一六分)	六キロ	上浦(八時三三分)	一七キロ	三界駅(八時四一分)	一一キロ
岩(九時五分)	九キロ	嵯県(九時一五分)	一五キロ	新昌駅(九時三三分)	八キロ	拔茅(九時四二分)	三七キロ
二分)	一六キロ	天台駅(一〇時四八分)	三キロ	国清寺前(一〇時五四分)	——	ホテル着(一〇時五五分)	——
二時四五分)	徒歩	国清寺(一七時)	——	ホテル着	——	——	——

朝、六時すぎ天台山国清寺に向けて出発。ホテルの好意でつくってもらったサンドイッチを食べる。天気が悪く、

しかも寒い。霨がたちこめ行手をささぎる。十時過ぎた頃、新昌県と天台県の県境あたりに着く。小休憩。天台山国清寺は想像していたよりもはるかに小さい。霊隠寺を覗いてきているだけに期待にそわない。しかし、こんな山奥の寺であるにもかかわらず参拝者は多い。ここにもやはり仏教は生きていた。国清寺の方丈唯覚法師は一九七八年に高野山に来たことがある。この国清寺に一行禅師の墓があった。門前に一行禅師の伝説を物語る、「一行到此水西流」の碑文がある。一行がくる前は、門前の水が東に向かって流れていたが、一行がここに来てから西に向かって流れるようになったらしい。日本天台宗の創った最澄の碑もある。かなり親密な交流がかわされているようだ。

### 三月十一日(日)〔天台山—寧波〕

(国清寺朝課に参列の為) ホテル発(三時四〇分)……徒歩……国清寺(一五時五〇分)……徒歩……ホテル着  
 ホテル発(七時三八分) マイクロバス 上方広寺跡(八時三〇分)……徒歩……右梁瀑布(八時四七分)……徒歩……中方広寺(九時一〇分)九時五三分) 智者肉身塔(一〇時二分)一十一時九分) 七キロ ホテル(二時三分)一十二時五〇分) 国清寺(一三時一七分) 担頭(一三時三三分) 一〇キロ 洪求(一三時四四分) 五キロ 温州への分岐点(一三時五二分) 五キロ 赤(一三時五六分) 四キロ 蛤口(一三時五九分) 六キロ 麻舌(一四時七分) 三キロ 桑洲(一四時一分) 六キロ 岔路(一四時一八分) 一キロ 黄壇(一四時三二分) 五キロ 寧海県(一四時四一分) 一キロ 梅林(一四時五一分) 一三キロ 西店(一五時一分) 五キロ 下陳(一五時一五分) 七キロ 方門(一五時三二分) 六キロ 尚田(一五時二八分) 四キロ 奉化県(一五時三三分) 八キロ 江口(一五時四三分) 六キロ 横溪(一五時五一分) 一八キロ 寧波港(一六時二分)一六時五三分) 九キロ 盛塾(一七時九分) 六キロ 五郷(一七時一五分) 一〇キロ 五仏塔(一七時二九分) 六キロ 天童寺(一七時四〇分) 宿泊  
 午前三時四十分、国清寺の朝課に参列する為に出発する。正面の山門から入れず、寺の人をおこして、くぐり口か

ら入れてもらう。鐘がうち鳴らされている。三時五十五分、大雄宝殿入堂。そのち太鼓が鳴らされる。昨日から泊っていた信者はすでに堂内に入っている。僧侶は一人一人とぼつりぼつりあらわれ、いつのまにか六十名程にふくれあがっていった。これを見る限り、文革以来、中国には確実に仏教が育ってきているといえよう。五時五十分、勤行が終了。一旦ホテルに帰る。

智者肉身塔を参観する為に出発する。この肉身塔は智者大師の遺言によってその場所に葬られたとのこと。時の皇帝は三度ここを尋ねた。一・二回目までは土を掘ると坐禅姿の肉身が見られたけれども三回目にはそこには何もなかったという伝説がある。

天台山国清寺より更に山に入った。小一時間あまり、上方広寺跡に建てられた石で造られた建物の近くで駐車する。中方広寺まで二十分程歩く。その下に下(古)方広寺がある。中方広寺には六名、下方広寺にも六名の僧侶がいた。中方広寺の通知法師の弟子の定基という人は現在、京都の仏教大学に留学中とのこと。ここから車で三十分余りで智者肉身塔の入口に着く。集落を左手に小径を下ると、途中に湛然をはじめ三人の祖師の墓塔にぶつかる。そこをすぎるのだらだら坂があり、登りつめたところに山門が見えてくる。山門に「智者塔院」とある。この智者大師の塔の置かれた建物は現在修理中であつた為、全くのランドウである。智者塔院からホテル(天台賓館)にひきあげ、午後一時を少しまわつた頃、天台山をあとにした。次の目的地は寧波である。午後四時二十一分、寧波市の現在の港につく。唐の時代、ここは海であつたという。市の中心である港らしく活気に満ちあふれている。寧波市ではパーマをかけた若い女性が見られた。ここから日本曹洞宗の祖師道元禪師の修行の地である天童寺まで約一時間。天童寺にいたる一キロ位の松並木の参道はとにかく素晴らしい。現在の中国仏教において浄土宗と同様に盛んなのが禅宗である。

寺に入ると非常によく整つた境内が目に入る。この寺の方丈である広修法師は中々現代的な傑僧で、昭和五十七年

十一月に來日し、永平寺、總持寺等を參觀している。夕食中、団員の佐藤さんが「空海ロード」という案内書をつくることを提案。宿舎に特別室を与えられたが暖房がきかず寒い。照明も十時過ぎ自動的に消えてしまった。寺は自家発電であるらしい。

三月十二日(火)〔天童寺—紹興〕

天童寺発(九時二分) マイクロバス 宝幢(九時三分) — 阿育王寺前(九時五分) 宝幢から 大碇鎮(九時四分) 九キロ 亞浦  
 駅(九時三六分) — (一時停車) 七キロ 北宿港(一〇時三五分) — 一〇時五二分) 亞浦駅(一一時五分) 八キロ 大碇鎮(一  
 時一四分) 八キロ 阿育王寺(一時三三分) — 一三時三八分) 二キロ 邱隘鎮(一三時五三分) 八キロ 寧波大橋(一四時三  
 分) 九キロ 庄市(一四時二六分) 八キロ 駱駝鎮(一四時三三分) 七キロ 鎮海・慈溪県境(一四時四二分) 徒歩 海  
 岸 徒歩 一キロ 泉境(一五時一〇分) 三キロ 龍山(一五時一六分) 二キロ 范市(一五時三一分) 一キロ 觀城(一五時四三  
 分) 一四キロ 慈溪県(一六時二分) 一九キロ 泗門鎮(一六時二五分) 五キロ 臨山(一六時三〇分) 一キロ 小越付近(一六時  
 四二分) 九キロ 上虞駅(一六時五二分) 三キロ 天台山方面との三叉路(一六時五八分) 四キロ 東関鎮(一七時二分) 三キロ  
 紹興(一七時二九分) 三キロ 紹興飯店(一七時三七分)

寺には信者の為の宿泊施設があるが、粗末なものである。それでも多くの人達が朝課に参列するために宿泊してい  
 る。寺の朝課は朝の三時頃からで、信者の人達が熱心に礼拝している姿が美しい。朝食後、修祥監院・永通副寺の案  
 内で寺を拝観する。清代の順治皇帝・康熙皇帝・雍正皇帝の碑文が並ぶ。先覚堂には寺の祖師百六十八名の位牌が祀  
 られている。應供堂には千僧鍋と呼ばれる三つの大鍋が置かれていた。宋代、僧千五百人がいたといわれるなごり  
 いう。寺内の僧位は首座・西堂・後堂・堂主の順である。

九時、天童寺を出発。ここから十二キロの場所にある宝幢では鉄道を設けるための工事が行なわれている。工事は近代的な機械を用いず、つるはしやスコップ等を用いてやっていた。中国政策の大海戦術である。

十一時二十二分、阿育王寺着。通一方丈から唐代に港が三つあったことを聞く。鎮海・寧波・余姚である。大型船が鎮海に着き、小型船は余姚に着いたとのことである。阿育王寺で昼食をとり、紹興に向かう。

鎮海県と慈溪県の県境で車を止め、海岸に向かつて歩く。道路から海岸まで約一キロ。大師の見た明州の海である。ここには軍事基地があるらしく、通訳の蓬さんの態度が硬化する。二人の軍人が実際にいた。このあと蓬さんは、私達の胸に残る名言(?)を放った。

「皆さんはそれでいいかもしれませんが、私は大きな誤ちをおかします。……」

午後五時半、今日の宿舎、紹興飯店につく。

三月十三日(火)〔紹興——杭州〕

紹興飯店(八時一分) — マイクロバス — 蘭亭(八時二七分) — 九時三七分) — 四キロ — 魯迅記念館(九時五五分) — 一〇時四六分) — 三キロ — 紹興輪船埠頭(一〇時五二分) — 一 — 國營紹興酒廠(一〇時三五分) — 埠頭から — 紹興飯店(一一時三八分) — 一五時) — 一・五キロ — 地  
区医院 — 一・五キロ — 紹興飯店(二五時二三分) — 二・二キロ — 柯橋鎮(二五時三九分) — 八キロ — 南銭清(二五時四七分) — 三〇キロ — 蕭山(二六時一三分) — 一・五キロ — 杭州錢塘江大橋(二六時三四分) — 四キロ — 杭州花家山賓館(二六時四二分)

雨の蘭亭、書聖王羲之のおもかげが今も残る。十時前、魯迅記念館を見学に行く。ここで日本人の団体に中国に来てはじめて会う。十時四十六分記念館を出発し、國營の紹興酒製造工場を尋ねる。水郷の街、紹興。古い家並み、酒がめと運河、すべてが絵になりそうである。この街に弘法・伝教兩大師の字ばれた開元寺がある。

午後、市の政府宗教事務局の陳培福先生、文物管理委員会の陳維干先生と会見。

唐代、紹興には二つの開元寺があった。唐初に建立され、一時は大善寺と称された開元寺と唐末に建てられた開元寺である。前者の寺には塔（大善塔）があった。この塔にまつわる娘さんの物語りは仏教説話にでてくるものと同質の内容をもっている。大師のいかれた開元寺は後者の方であるという。現在、そこは地区医院となっていて、午後三時、その地区医院に行く。事前に許可をうけていなかったために車中からの見学となった。続いて、府山付近の民家から大善塔の写真をとる。ここで撮影上のトラブルが発生。中国の国情からすると私達はかなりいきすぎた行為をしてしまったらしい。それにしても今日最大の成果、それは開元寺の位置が確認できたことである。

宿舎の花家山賓館で、昼間のゼミ旅行の日本人にあう。神奈川大学佐伯教授の熱弁に酔う。日中友好に大いに働いておられるようだ。明日は天気になってほしい。

三月十四日（水）（杭州——蘇州）

午前中（九時三〇分～一四時四〇分）、花家山賓館にて朱士俊先生との会見に費す。花家山賓館発（一四時三十分）——龍興寺跡

（一四時五十分）——航運公司客運埠頭（一七時二〇分～一七時四〇分）——運河（船）——蘇州（明朝到着）

宿舎で、浙江海洋学会研究員の朱士俊先生達と会見する。中国側出席者合わせて七名。

浦城から江山へぬけるコースについて、杭州の舟つき場について、唐代の運河について、あるいはその時代の宿舎について等の質問に明確なる解答をもらう。

杭州には龍興寺・開元寺という寺が唐代にあった。現在、龍興寺の経幢が残っている。

午後二時半、龍興寺跡を見学に行く。八角の堂があり、その中に仏頂尊勝陀羅尼を刻した経幢が建っている。許可

を申請していなかったので写真がとれない。残念である。

この経幢の位置（杭州市对外经济贸易部の裏）は、丁度、路地裏にあり、数人の人がさかんにバクチ？をしていた。午後五時四十分、航運公司客運埠頭から運河をつかつて蘇州へ旅立つ。はじめての運河の旅である。中々快適。夜間であるのが惜しい気がする。

### 三月十五日（木）〔蘇州滞在〕

運河  
蘇州船つき場（六時四〇分～六時四八分）マイクロバス 南林飯店（六時五五分～八時二五分）七キロ 西園寺（八時四〇分～一〇時七分）一六キロ 靈巖山寺（一〇時四三分～一四時三五分）五キロ 寒山寺（一五時二〇分～）徒歩 楓橋（一六時五〇分）〇・一五キロ 寒山寺（一七時一〇分）六キロ 萬年橋（一七時二五分～一七時四三分）三キロ 南林飯店

早朝、蘇州の舟つき場につく。市の仏教協会の方々の出迎えをうける。八時四十分、南林飯店から西園寺に到着。西園寺の方丈、明開法師は蘇州市の仏教協会々長である。法師は耳が不自由らしく、安上法師がかわりに話されていた。この蘇州で解放されている寺は、西園寺・靈巖山寺・寒山寺の三寺である。

西園寺の羅漢堂は一見の価値がある。十時過ぎ、西園寺をたち靈巖山寺に向かう。寺の下で車を降り、そこからかなりきつい坂道を三十分程歩く。あいにくの雨で、まわりの風景がはつきりしない。この寺には一九八〇年十二月、中国仏学院の分院が設けられ、現在八十名位の学僧がいる。寺の僧侶と合わせる。と百二十名位。方丈明字法師は話しの中で思わぬことをつぶやかれた。

「この寺に弘法大師の像、二体が安置してあります……。」

明代に蘇州市の呉谷宜居士が寺に寄進したとのこと。雑然とした雰囲気の中で話しをきいていた私達は、一瞬、自

分の耳を疑った。昼食後、念仏堂の二階に安置してある空海像とまみえる。感激の瞬間。確かにはつきりと「空海像」と刻まれている。姿・形はとても日本でみられる大師像ではない。仏・菩薩の尊像の姿をしている。とりつかれたように空海像にかわるがわる近づく。大師がこの寺でまつられていた、とそのことに私達全員は思いをよせた。誰がどのような信仰をもち、この像を拝したのか興味はつきない。中国歴代美人の一人、西施の伝説のみが大きくクローズアップされていた靈巖山寺は、一躍、大師所縁の地となる。みんな満足そうである。

去りがたい想いを残し、靈巖山寺を寒山寺に向けて出発。

寒山拾得・楓橋夜泊で有名な寒山寺。そこでお会いした性空法師はユーモアのある人である。これまで各地区で書を求められた静团长は、この寺でも求めに応じて書をしたためる。それに対し、性空法師は本場中国の意地なのか、何幅もの書をかいて私達を驚かせる。中国はどこへいっても書を求められる。团长が書家でなかったことを想像すると恐しくなる。

唐代の港であった萬年橋下の港を見学し、宿舎にもどる。

三月一六日(金)〔蘇州—上海〕

蘇州南林飯店発(五時三一分) マイクロバス 蘇州駅(五時四三分) 六時 鉄道 上海駅(七時二〇分) マイクロバス 衡山賓館(七時

五一分) 九時二九分 六キロ 玉佛寺(九時四八分) 一二時一分 六キロ 衡山賓館

午後、資料蒐集の為に新華書店等に出かける。

早朝、蘇州から鉄道で上海に向う。七時二十分上海駅着。朝食の後、玉仏寺に向う。宿舎から九キロのところにある。この寺には仏学院があり、私達が訪れた時には「維摩詰所説経」の講義中であった。受講の学生は二十四名。も

う一室では、勸発菩提心文を三十一名の学生に講義中であつた。玉仏寺の歴史は浅く、百年あまりであるが、多くの人が参拝し、先祖の供養をさかんに行なっているのが目についた。

午後、毎日新聞社の人達は新聞にのせる原稿を送りに出かけ、残つたものは新華書店に資料をさがしに出かける。さすが人口世界一の街、上海は人の波である。朝はやくから夕方おそくまで交通の主流である自転車かけたたましい音を響かせながら通る。毎日新聞に掲載される原稿の第一便が無事につき、四月一日には日本全国一斉に報道されるらしい。

三月十七日(主)〔上海—無錫〕

衡山賓館発(九時八分) マイクロバス 龍華寺(九時一九分—一時五分) 五キロ 衡山賓館(二時一五分—二時二七分) 八キロ 上海駅(二時五一分—三時二八分) 鉄道 蘇州駅(四時三九分) 四二キロ 無錫駅(二時四五分—二時五五分) 五キロ  
泥人形工場(二時一〇分) 〇キロ 太湖飯店(二時一九分)

久し振りの晴天。龍華寺に参拝。寺は修復中で三年ぐらいかかるらしい。三国時代につくられたこの寺は千七百年以上の歴史をもつ。参拝のおばあさん達でにぎわう大雄宝殿には、光明普照印をくみ、五仏を戴くビルシヤナ仏がある。これは一九八一年に創られた。本尊のビルシヤナ仏を中心に、右に文殊、左に普賢が位置するという配列は華嚴経にもとづいてつくられている。この寺はこの地方の人達が浄土宗を多く信仰している為、人々の要請により天台宗から浄土宗に変わったという。唐代、上海には龍華寺・静安寺・沈香閣という三つの寺があつた。十一時、龍華寺を発ち一度宿舎にもどる。午後一小时前上海駅から無錫に移動する為に列車に乗る。私達の乗る車両と異なり、中国人の乗る車両は鮎詰めの状態である。とにかく超満員。

午後四時頃、無錫につく。駅で隆賢無錫市仏教協会々々長さん達の出迎えをうける。無錫市は漢代まで大量の錫がとれたが、掘りつくされたため無錫と称されるようになったという。現在市内の人口八十一万人の美しい街である。宿舎にいく前に無錫市の産業の一つであり、四百年以上の伝統をもつ泥人形工場を見学。器用さと無器用さが奇妙に矛盾することなく、同居している中国文化を見るような気がする。

宿舎太湖飯店で、午後五時三十分から約一時間、無錫におけるスケジュールとその間の要望を提出。私達の要求に何とかこたえようと市の仏教協会の人達も一生懸命である。

三月十八日(日)〔無錫滞在〕

太湖飯店(八時三分)

マイクروبス  
六キロ

龍頭渚(八時一七分)

徒歩

広福寺(八時二七分)

船

太湖遊覧(九時三五分～一時

二五分)マイクروبス

太湖飯店(二時四三分～一四時)

八キロ

梅苑(二四時一九分～一四時五二分)

八キロ

錫恵公園(二五時一〇

分～一五時五七分)

五キロ

南禅寺(一六時一〇分～一六時五二分)

一キロ

太湖飯店(一七時二六分)

雨の無錫市。八時過ぎ太湖飯店を出発。龍頭渚まで車でいき、そこから歩いて広福寺へ。

南北朝以来の歴史をもつ広福寺は現在十七名の僧侶がいる。寺の方丈隆賢法師は非常におだやかな人格にみえる。広福寺のすぐ下にある舟つき場から太湖の遊覧に出かけた。まるで海を連想させる太湖。ここにかかる霧も格別である。

午後、梅園に行く。雨の中、案内の人の後についていったら、たちまち出口に着いていた。もう一度入口から入りなおし、記念写真をとる。梅園から八キロのところ錫恵公園がある。以前ここは恵山寺という、五三五年に開創された寺であった。大きな寺であったことを思わせるこの公園には、唐代の石塔や橋が残っている。このあと唐代の舟

つき場にいく予定であったが、隆賢法師が「南禅寺に大師はいかれたのではなからうか？」といいだされ、急にそこを尋ねることになる。

古運河の通う南禅寺山門前の舟つき場を、外国の観光客をのせた船が通り過ぎる。山門から石畳みの参道が続く。しかし、以前大雄宝殿のあったところは、今、ゴム工場になっており、その横に凜として建っている放光塔がものがないにみえる。放光塔は閉まっていたが仏教協会の人の尽力によって開けてもらう。頂上より市をながめる。塔より宿舍まで十一キロ。帰舎、午後五時二十六分。

三月十九日(月)〔無錫——常州〕

無錫太湖飯店発 (八時四分)	<small>マイクروبス 七キロ</small>	湖濱路碼頭 (八時一八分—八時四五分)	<small>運河・船</small>	石塘灣 (九時五〇分)	<small>船</small>	洛社鎮 (二〇時五分)
~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~	~~~~~
常州賓館 (二時五九分—二時七分)	<small>二キロ</small>	天寧禪寺 (二時一五分—二時一〇分)	<small>無錫から 四五キロ</small>	常州水門橋埠頭 (二時四五分—二時五〇分)	<small>マイクروبス 四キロ</small>	宿舎

湖濱路碼頭から運河で常州へ向かう。中国の大動脈ともいえる運河。日本における国道に相当し、運河に県境等の表示がみられる。

碼頭からしばらく進むと運河の真ん中に黄埠墩という漁民の寺がある。運河には舟で生活している家族がたくさんみられる。女性も男性も同様たくましく働いている。

運河は現在も拡張工事をしている。月から見える唯一の建造物といわれる始皇帝の造った万里の長城と隋の煬帝が開いた京杭大運河と、中国人にとってどちらの方がどれほど中国に影響を与え、貢献したのであろうか。運河をみる

限り、そのはたした役割りは非常に大きいものと思われる。交通の中心である運河を大・小とりまぜた船が、縦横無尽に往来する。船の操縦は荒っぽいが、要所要所になると抜群にうまい。常州から無錫に運ばれるものは、石・砂・石炭・材木・農産物等。運河の両側には民家が建ち並び、その様子が手にとるように理解できる。四時間あまりに及ぶ運河の旅は私達一行を充分に満喫させるものとなった。写真もとった。すべてが画になりそうな風景である。

常州の水門橋埠頭では、文永法師をはじめ常州市仏教協会の方々々と周辺の住民の人達の熱烈なる歓迎をうける。福建省の再現である。文永法師達はこの寒い日に二時間も待っていてくれたらしい。

荷物を宿舎(常州飯店)に置き、現在常州市で唯一開放されている天寧禪寺に向かう。

寺は六四九年に創建され、当時広福寺と称していた。大師がこの寺を尋ねられたであろうことを力説する天寧禪寺の方丈、洪徳法師は常州市仏教協会々長である。その理由として開山祖師の法融法師が有名な僧であったこと、また当時の寺の山門の前には運河が通っており、舟つき場があったことをあげられた。更に決定的な事として、この寺の四天王殿前に文革以前に「空海上人留学處」の看板がかかっていたことを明された。それは文革中に消失したらしい。従っていつごろからそのような伝承があったのかということについては不明のままである。

方丈は大師に大変な感心を示された。帰国後、大師の御影像を送ることを約束する。天寧禪寺で頂いた精進料理はおいしかった。もう少し大師にまつわる伝説について詳しく知りたいと思う。

三月二十日(火) [常州——鎮江]

常州賓館発(八時三四分) マイクروبス 蟻舟亭公園(八時四四分〜九時五二分) キロ 天寧禪寺前(一〇時〜一〇時三六分) キロ

紅梅公園(一〇時三九分〜一一時四二分) 四キロ 常州賓館(一一時五四分〜一四時一〇分) 三キロ 大龍橋(一四時三二分) 徒歩

南大街橋(二四時五六分)

一キロ

常州賓館(二五時二分〜一六時六分)

二キロ

常州駅(一六時一四分〜一六時四二分)

七五キロ

鉄道

鎮江駅(二七時五九分〜一八時六分)

五キロ

金山飯店(一八時一八分)

八時四十分蟻舟亭公園に出かける。『蟻』はつなぐという意味である。詩人蘇東坡が舟をつないだ所。清の乾隆皇帝も何度かここに立ち寄っておられる。案内の人が私達に説明をしている間中、後から後から参観の人達が興味深くついてくる。案内人の説明よりも寧ろその人達の表情を見ている方がおもしろく思えた。

次に昨日参観した天寧禪寺の古運河を調査する為にもう一度天寧禪寺に向かう。寺の前にある道路の向こう側に山門跡が残っている。今から四十年前程前にはまだその姿をとどめていたらしい。かなり立派な山門であったことが想像される。

このあと寺の裏側にある紅梅公園に急ぐ。唐代にこの地に道教の寺院・紅梅樓閣があったことによる名称である。紅梅公園には、孤山松雪等の八景となづけられるものがあつた。公園の奥まったところに文筆塔がある。これはもともと太平寺塔といつた。太平寺という寺があつたといわれる。昔からこの塔のまわりに吉祥なる雲があらわれるとこの周辺の地方から勝れた人物が輩出するとされている。

午後、宿舎から古運河をみるために出発する。大龐橋のところを下車。そのすぐ眼の前に新坊橋という常州で一番古い橋を発見。この橋の間から天寧禪寺がみえる。素晴らしいとりあわせである。

新坊橋から南大街の橋まで歩き、運河の様子をさぐる。その街の様子などはやはり歩いてみてはじめて肌が感じられる。

午後四時四十分、常州駅から鎮江に向けて出発。金山寺の住持慈舟法師や鎮江市仏教協会の方々に鎮江駅で迎えら

れる。鎮江には八つの寺があるが、開放されているのは三カ寺である。

宿舎の金山飯店では歓迎の準備が整えられていた。市の仏教協会々長の茗山法師は、日頃あまりものおじすることのない静団長を緊張させる程の人物である。茗山法師の名刺には中国仏教協会常務理事等、たくさんの肩書きがみられた。

夕食後くつろいでいると、鎮江市での通訳金さんと韋さんの二人が、思わぬことに「弘法大師に関する詩」を三つもつてくる。

これらの詩は現在金山寺にあるが、もともとは茗山法師が南京の博物館で見つけたものらしい。とうとうまことにまっていたものが出てきた。明日の金山寺参観が楽しみである。そういえば、明日は大師入定千五百年の当日にあたる。そこに深い意味を感じてしかたがない。

三月二十一日(火) (鎮江—揚州)

金山飯店発(八時八分) マイクروبス 鎮焦渡(八時三七分) 八時四七分 船 焦山渡(八時五二分) 徒歩 焦山定慧寺

焦山渡 三キロ 鎮焦渡(二時三七分) マイクروبス 金山寺(二時四七分) 一六時 三キロ 金山飯店(二時四十分) 一七時五八

分 三キロ 鎮江フェリー乗り場(二八時七分) 船 揚州フェリー乗り場(二八時二六分) マイクروبス 西園飯店(二八時五五分)

弘法大師御入定千五百年正当日。茗山法師住持の焦山定慧寺に向け出発。定慧寺は揚子江に浮かぶ島(焦山)にある。古来から宗派をこだわらないという伝統があり、そういつたところからあらゆる宗派を勉強できるところであった。一九三四年仏学院が設置され、日本から友松円諦・藤井草堂両先生が来られて講義をされたこともあるという。

大師はこの市の発行しているパンフレットによるとこの焦山に二度もこられたことになっている。その根拠につい

て、法師は何かの本で読んだということにとどまり明確なものにならない。また日中戦争時、日本の軍人が定慧寺と金山寺に「空海上人留学処」という看板をかいている。

鎮江市についていうならば、日本の三重県津市と友好都市の関係にある。

定慧寺内の梅は今を盛りと咲いている。柳も見事である。

午後、白蛇伝・金山寺味噌の発祥地、或いは室町時代の禅僧雪舟の修行の地として名高い金山寺を参観。

観音さんの日にあたる為か、寺にはたくさんさんの参拝客がみられる。

門前に列をつくって私達を迎えてくれた僧達に先導され、大雄宝殿へ。時間的な制約をうけ、満足に境内を見れない。

とりいそぎ問題の詩のある方丈室へと向かう。しかしこの詩について何もわからない。金山寺の僧善性についてさえ説明できない。今一つ決め手にかける詩である。

金山寺は古来から禅の古刹として有名。大師が道中、立ち寄られても不思議なことではない。

大師の伝説の残る（留学処・詩）鎮江の再調査の必要を痛感する。また一つ将来の課題がふえた。

六時七分、鎮江から揚州に行く為、フェリーで揚子江を渡る。本当に広い河である。流れているのかいないのかさえわからない。さすがに雄大である。フェリーにのる時間ももつとはやかったらと悔やむ。

鑑真和上ゆかりの大明寺の松月法師をはじめ関係者に出迎えられる。

揚州での通訳顧燕さんは、団員の佐藤さんが五年前揚州に来た時に出会った人らしく、旧交を暖めていた。

三月二十二日(水) (揚州—南京)

西園飯店発(八時四分) マイクروبス 大明寺(八時一六分) 一キロ 観音山 二キロ 五亭橋(二時一四分) 二キロ 西園飯店(二時二二分) 一四時一八分 文峰塔(二時三三分) 一五時二二分 西園飯店前(二時二〇分) 一キロ 石塔(二時三三分) 四二キロ 青山(二六時二二分) 一キロ 横梁(二六時三八分) 一〇キロ 六合(二六時五二分) 三三キロ 葛糖(二七時四分) 二キロ 南京市内泰山 三キロ 南京大橋(二七時二六分) 七キロ 南京飯店(二七時四二分)

早朝大明寺に向かう。隋代以降揚州は大変仏教が盛んなところである。唐代の揚州の中心地は大明寺・観音寺周辺といったところであった。

日本に仏教を伝えた鑑真は文峰塔の付近で船を造り、古運河から揚子江にでたとされている。大明寺は鑑真和上の里帰りによって復活したようである。鑑真和上を祀る記念堂は奈良の唐招提寺の金堂をそのままに模してあった。ここに来られた唐招提寺の森本長老の為に、立派な建て物がたてられていたのは驚かされた。中国人のすることは、スケールが大きいというか、どうもとらえどころがない。

続いて観音山にある「揚州唐城遺址文物保管所」を尋ねる。この中に修められていた唐代の揚州の図は大変参考になった。

観音山にある唐城跡の城壁は土の堤である。壮大なるものと思っただけに期待はずれの感がぬぐいされない。宿舎に帰る途中、瘦西湖を見学。二時十八分に西園飯店を発ち、文峰塔にいたる。文峰塔前の運河のそばに建立されている石碑には、ここで鑑真和上が舟を造り、東(日本)にいく準備をしたと記してある。

ここから南京に向けて出発する。五時二十六分、南京大橋の途中で、思いがけず茗山法師達の出迎えをうける。私達の為に誠心誠意である。五時四十二分南京飯店着。

三月二十三日(金) [南京滞在]

南京飯店発(八時四分) マイクロバス 栖霞寺(八時五八分→一三時九分) 二九キロ 靈谷寺(一四時四一分→一六時四二分) 二二キロ 中山  
陵(一六時四七分→一七時一七分) 二六キロ 南京飯店(一七時四九分→一九時一分) 五キロ 中華劇場(一九時一四分→二一時四五  
分) 六キロ 南京飯店(二一時五五分)

茗山法師住持の栖霞寺を參觀。この寺は四八九年に創建、千五百年余の歴史を有している。大師との縁し深い三論宗発祥の寺である。寺の大雄宝殿には毘盧遮那仏が祀つてある。鑑真堂の前で茗山法師は三礼した。舍利塔・仏龕等、仏教的遺産が数多くみられる。藏経楼には清代の大藏經七一六八部ある。驚くことに金剛般若經は血で書かれていた。一九四〇年代には、高野山の金山穆詔師のもとで密教を学んだ僧が二名いたという。その中、一人は高野山で寂している。

栖霞寺には仏学院があり、百八十名の学生がいる。茗山法師はさかんに高野山にきたがつていた。

栖霞寺の次に訪れたところは靈谷寺である。靈谷寺は五一三年に創建された由緒ある寺である。古来、南京における三大寺の一つである。ここには一九四二年に発見された玄奘三蔵の頂骨が祀られ、紀念堂が建立されていた。

中国の寺は住持の宗派によって宗派がかわることがある。しかし特別なことがない限り禪淨双修のようである。

このあと孫文の中山陵を見学。中国の底しれないエネルギーを思う。この周辺はすべてその昔、靈谷寺の境内であった。

夕食後、中華劇場へいき、中国の音楽会にはじめて接する。中国の人々にとって唯一の楽しみのような感じがする。九時五十五分宿舎に到着。

大師はこの南京をどのようにとらえておられたのであろうか。入唐ルートからは少しはずれるのであるが、唐代非

常に仏教が盛んであったこの地。日程が終了し、課題が残る。あと二週間余りをのこし、気持ちのみが何故か焦ってしようがない。とにかく明日から新たに頑張ろう。

三月二十四日(土)

(南京——開封)

南京飯店発(八時八分)

マイクروبス  
六キロ

金陵刻経所(八時三十分—一〇時三十分)

七キロ

玄武湖(

—一〇時四〇分)

五キロ

南京

飯店(一一時五三分—一五時三十分)

五キロ

南京駅(一五時四五分—一六時一七分)

鉄道

六三キロ

開封

金陵刻経所を尋ねる。ここは揚仁山居士により開かれた。揚さんは前大谷大学教授であられた南條文雄先生と深い交流があったという。南條先生がたくさんの大蔵経をここにもつてきたり、送ったりしている。

まず昔ながらの経典づくりに驚く。文字を逆さに天才的なスピードで書いていく人、それをほりあげていく人。こういう人達の陰の力にささえられながら仏教は弘まり、残ってきたことを思うと、現在の自分の勉強不足が本当にはずかしい。刻経所の経典の製作過程の一つ一つは芸術品といった趣きがある。大師の著作も「十住心論」等、多くみられる。

金陵刻経所をあとに、玄武湖へいく。湖畔にたれかかる柳もいいものであったが、湖をとりまく城壁にはそれとは対照的に圧倒される思いであった。

午後、南京大橋の写真をとりにいく班と、南京の仏教協会の人達と会見をもつ班二つにわかれる。

僧侶の人達は一樣に、南京は大師の入唐のコースからはずれているが、その時代のこの地における仏教の隆盛を考えると無視して通り過ぎる方がおかしいから、大師はここに来られたに違いないという。当時、揚州から南京までは舟で一日のコースであるというのもその理由の一つにあげられる。

更に南京は三論・華嚴・涅槃宗の発祥の地でもあるとつけ加えられる。密教が中国で百年たらずで衰微していった理由として、種々の法難に遇い、その度に法具・曼荼羅等が徐々に紛失していった。それに対し、禪とか念佛はどこでも手軽にできるといふ性質の為に根強く残っていったと話された。もう少し時間のほしい会見であった。南京駅を午後三時四十五分発し、次の目的地開封に向かった。はげしく振動する列車の中で久し振りに自由な時間を、ノート整理・寝溜め？ 等、夫々想い思いに過す。

三月二十五日(日)

〔開封——鄭州〕

開封駅(四時四〇分)	四時四六分	マイクローバス	開封賓館(四時五五分)	八時一三分	河南仏学社(八時二一分)	九時二五分
二キロ	二キロ	三キロ	二キロ	一キロ	一キロ	二キロ
鉄塔(九時三四分)	一〇時二分	柳園口(一〇時三三分)	一〇時五八分	玉皇閣(一一時三六分)	二キロ	二キロ
二キロ	二キロ	二キロ	一キロ	一六キロ	二キロ	二キロ
開封賓館(一一時五七分)	一四時一〇分	相国寺(一四時一五分)	一五時三二分	中車	二キロ	二キロ
二キロ	二キロ	一キロ	二キロ	三四キロ	二キロ	二キロ
白沙(一六時四五分)	一九キロ	燕左(一七時一五分)	二キロ	鄭州国際飯店	二キロ	二キロ
一四キロ	一九キロ	二キロ	二キロ	二キロ	二キロ	二キロ

午前四時四十分開封駅着。河南省の仏教協会の方々に出迎えられる。

開封賓館で朝食をすませ、河南仏学社へ向かう。河南仏学社の壁には「古観音寺」と記されている。河南省仏教協会々長と中国仏教協会常務理事を兼務されている方丈の浄嚴法師は九十二才の高齢。その為体が自由にならないようである。法師の師匠である大雄法師・式松法師は高野山にいったことがあるという。浄嚴法師は十八道法と阿弥陀仏の一尊法を勉強したことがあるという。今も尚、三陀羅尼を唱えている。文革により法具・仏像等すべて破壊されてしまったのが残念であるといわれていた。開封にある相国寺に大師は泊まれたらしい。そこに随分以前に真言宗の人が来た時に大師を記念した仏堂を建てたという。私達は帰国後、四度次第と諸経要集を贈ることを約束し、ここ

をあとにした。

八角十三層の鉄塔を見学。もとは木造であった。今のは宋代のものであるらしい。

次に黄河の舟つき場の一つである柳園口に行く。途中の道路の両端には青空市場でたくさんみられ、人々の生活において沸きたっている。黄河着。悠久の歴史を伝える黄河。この自然との戦いの歴史の上になりたつのが中国なのであろうか。

十一時三十六分、道観玉皇閣前に着く。民家の中を通りぬけ玉皇閣へ。明代に建て直されたものの一部のみが残っている。これは市にある唯一の道観遺址であると説明書きされていた。『三教指帰』だけでなく、道教と大師の関係について更に深い研究の要を痛感する。

午後、相国寺参観。相国寺は児童公園として開放されている。従って寺の活動はされていない。八角殿にはみごとに千手千眼観音像がある。清の乾隆年間につくられたものらしい。藏経楼の二階は、今、開封書畫院になっている。

相国寺のパンフレットには大師が来寺されたことが載っていた。それにしても、由緒あるこの寺が仏教の活動をしていないのはなんとも惜しい気がする。しかし反面、公園で楽しんでいる人々の様子を見ると、これも一つのあり方としてとらえても悪くはない。

三時半頃、相国寺を発つ。開封でもっと時間をさきたかったが、仕方なく鄭州へ向けてバスを走らせる。

古来、南船北馬といわれてきているが、鄭州までの道は、ロバや馬が多くみられ、その感を一層深める。調査の上では、鎮江・揚州以来陸路になったせいもあり、大師のとられたコースが益々明瞭を欠いていくようである。

三月二十六日(月)

(鄭州滞在)

国際飯店発(八時八分) マイクロバス 黄河遊覧区(八時五四分) 一〇時五八分 三〇キロ 国際飯店(二時五六分) 一四時三一分 一キロ  
河南省博物館(二時三四分) 一六時三四分 三キロ 国際飯店

鄭州市の黄河遊覧区を見学。揚子江と共に中国を代表する黄河。ここでもその流れは雄大であった。黄河の専門家によると上流から下流に流れる土砂の量は十六トンで、この砂が河底に沈む為に毎年高くなる。このため黄河は交通の便には適さないといわれている。

この地区は五龍峰・駱駝峰等の三つの部分からなっている。管理所のある五龍峰には黄河を象徴する母子像が造られている。黄河は中国人民の母親であり、子供は自ずから理解し得るように人民を現わしているとの説明。

西の駱駝峰は漢代劉邦と項羽が戦ったところである。

午後、河南省博物館に行く。中国歴史の層の厚さを実感する。一行禪師がつくった子午線図が見られる。その説明文の中に唐の一里は「四五四、三六米」とかかれていた。その後、市内を車で遊覧し、宿舎国際飯店にもどる。午後五時着。「空海・長安への道」としては何も得られない一日となった。あと長安までもう少しである。ひと工夫、ひと努力しなくては……。

三月二十七日(火) [鄭州—登封]

国際飯店発(七時五七分) マイクロバス 黃尚寺(八時二四分) 五キロ 侯寨(八時三〇分) 一三キロ 白砦(八時四七分) 九キロ 岳村(九時) 八キロ 洧河(九時一五分) 二キロ 密県(九時二〇分) 六キロ 下庄河(九時二七分) 一七キロ 芦店(九時五一分) 八キロ 中岳廟(二〇時二分) 二時五〇分 四キロ 登封高山賓館(二時五五分) 一四時二九分 二二キロ 少林寺口(二四

朝食をとる為、エレベーター前にいく。突然、備前副団長が、鎌田寛道(師)の荷物を見つめる。日中戦争時、鎮江において、空海上人留学處を書いたとされる一人の人物と同姓同名である。あまりにも偶然のめぐりあわせにただ驚く。しかし不本意にも鎌田師からは詳しい事情についてきかれなかった。それは師が昔のことをあまり明確に覚えておられなかったためである。

十時頃、紀元前二百年秦の始皇帝の時代に創建された中岳廟に着く。今の建て物は明・清代のものである。面積十一万平方メートル、入口から奥まで十一の門があり、六百五十メートルもある。道教寺院はここがはじめて……。もつといろいろな道観を見ることができれば、仏教等との思想的相異などもはつきりするのではないかと思われた。寺院というのはその規模が大きかろうと小さかろうと、その宗教のもつエッセンス・世界観が凝縮されている。崧高峻極で八人の道士にあらう。会谈の余地がなかったのが残念である。十二時前、宿舎(嵩山賓館)着。午後二時半宿舎を発ち、禅宗発祥の地・少林寺に至る。少林寺拳法で名高いこの寺は山奥深いところにある。門前はここが観光名所の一つになっている為か、露店商でにぎわっている。山門で方丈徳禪法師に迎えられる。法師は七十七歳といわれるが、そのわりには老けて見える。現在もこの寺では拳法を教えているとのこと。坐禅は勿論大切であるが、体を鍛える為に拳法をやらせるといふ。動静一如をめざしている。寺は復興中で、大雄宝殿などが壊れたままであった。その中でもとりわけ私達の目をひいたのは、寺のある位置より少し奥にある塔林である。唐代から清代にかけての歴代の僧侶の墓である。もとは五百基あまりもあったが、現在はかなり減少している。大きいものは十五メートル位のものが残っており、禅宗がとぎれることなくつづいていった歴史を見るようであった。五時四十七分、宿舎着。

三月二十八日(水) [登封] 巩県——洛陽

嵩山賓館発(七時四七分)

マイクロボス  
二キロ

小林口(八時七分)

七キロ

参駕店(八時一七分)

八キロ

府店(八時二七分)

一キロ

菅

防口(八時三八分)

四キロ

回郭鎮(八時四八分)

四キロ

清易鎮(八時五七分)

五キロ

芝田(九時一七分)

五キロ

南山口

(九時二五分)

六キロ

巩県宋陵飯店(九時三三分~九時四一分)

一キロ

南河渡郷(一〇時二一分)

宋陵飯店より  
一六キロ

石窟寺(一〇時二五分)

分~一四時四〇分)

一六キロ

巩県宋陵飯店(一一時一五分~一三時二三分)

三キロ

宋永定陵(一三時三三分~一四時八分)

三キロ

芝田(一四時一三分)

八キロ

回郭鎮(一四時二六分)

七キロ

菅防口(一四時三七分)

一六キロ

首陽山(一五時二分)

一〇キロ

白馬寺前(一五時一五分)

二キロ

洛陽友誼賓館(一五時四七分)

七キロ

菅防口(一四時三七分)

一六キロ

首陽山(一五時二分)

一〇キロ

七時四七分、嵩山賓館発。途中、巩県の宋陵飯店で小休憩し、石窟寺へ。

巩県は意外に大きな街である。山の麓に住む人は山に横穴を掘って住んでいる。

石窟寺は五一三年から五三四年にかけて創られた。五つの窟と千仏龕一つの中に七千七百体あまりの仏像がみられる。千四百年以上も前につくられたとは思われない程、その石刻はきれいに残っていた。それらの仏像は一つ一つに人々の信仰が今尚生きています。決して後世に残そうなどという意図はなかったに違いない。人々のその時の祈りが、仏像として刻まれたのである。石窟寺はまだまだうもれたところがたくさんある。近い将来、その全貌を世に明かす日が来るであろう。

巩県の宋陵飯店での昼食後、宋陵の一つである永定陵を見学。巩県にみられる陵の多さには全く驚く。しかもその広大な墓陵のほとんどが今現在一面畑となつていて、中国の長い歴史を感じる。中でも永定陵のスケールの大きさは群をぬいている。この時代、自分の権力を誇示する為につくつたのであろう……。栄枯盛衰、それは歴史のしるところである。その広大なる陵が今は農民の休息に使われていたのが印象的であつた。

巩県から次の目的地・洛陽まで約七十キロ。白馬寺前を通り宿舎へ。洛陽の仏教協会はまだ設立されていないらしい。善無畏・金剛智三蔵所縁の洛陽。どこまで私達の希望するものの解答がでてるのか心配である。

今日一日のトップニュース？この旅の全行程の通訳として同行してくれている蓬さんがとうとう日本の名曲？、北国の春を日本語で覚えてしまった。日中友好！！

三月二十九日(木)

(洛陽滞在)

友誼賓館発(七時五八分)

マイクロバス  
一六キロ

龍門石窟(八時三十分～九時九分)

二四キロ

広化寺跡下(九時一五分～九時五七分)

三三キロ

奉先寺跡(二〇時五分～二〇時一九分)

三三キロ

広化寺跡前

二五キロ

大萬伍仏像龕(二〇時二八分～二一時二八分)

一八キロ

友誼

賓館(二一時五五分～二時四五分)

二二キロ

白馬寺(二時一八分～二時三三分)

二二キロ

友誼賓館(二時一〇分)

八時、龍門へ出発。龍門で文物保管所を訪れ、研究員の温玉成先生と出会う。温先生は金剛智の住した奉先寺、善無畏三蔵の寺・広化寺について詳しい話しをしてくれた。これらの両寺は元の末期になくなり、いまもなお未発掘のままであるらしい。話しのとすぐに広化寺跡と奉先寺跡に案内してもらおう。

ついに夢にまでみた善無畏三蔵・金剛智三蔵の住した寺跡を確認。大成果である。机上の文献研究調査とは異なる現地調査の大切な一面である。

広化寺跡は小高い岡の上であり、そこは麦畑となっている。善無畏の舍利塔のあったところは更に一段高い位置している。『修広化寺碑』と銘打った清代の石碑が近くにみえる。この碑は一七〇五年、多くの信者によって修復されたときに建てられたものである。

そこから三・三キロの地点に奉先寺跡がある。ここも一面麦畑。その畑の中に約六メートル位の小山ができており、

そこに金剛智の舍利塔があったという。温先生の研究によると、現在奉先寺という龍門石窟の毘盧遮那仏龕のことをさすが、本来の奉先寺はこの位置にあったということになるらしい。いづれにしてもこの二つの寺の早急なる発掘が望まれる。

十時三十分、龍門石窟の対岸にある大萬伍仏像龕着。この中には、密教の中尊である大日如来が四体もみられる。また他に尊勝陀羅尼を刻した経幢・墓幢もいくつもあった。仏像龕には華嚴宗の第三祖・法蔵が父を埋葬する為に用いた幢もある。

対岸から龍門の石窟をみると人間は蟻のように小さく、無数の仏龕は点にみえる。さすがに則天武后をモデルにしたといわれる大仏は画になる。

続いて訪れたところは、一説に中国仏教の発祥の地ともいわれる白馬寺である。観光地になっている為に多くの出店が立ち並んでいる。白馬(寺)という名称通り、白い馬が記念して建立されているのではと想像したが、意外や、門前の馬は黒い馬であった。大萬伍仏像龕と同様に撮影禁止。さらに、ゆっくり参観もできず、ふんだりけったりである。

午後七時三十分、昼間出会った龍門文物保管所の温玉成先生を迎えて会談を行う。中国仏教の流れからはじまり、唐代の洛陽の様子、奉先寺・広化寺について、或いは昔の官道等、延々と続く先生の話しにその学識の広さと深さとをうけとめる。中国にはいろんな人がいるものである。ただその人と出会えるかどうかということにかかっている。そういう意味で中国は未知数の国である。

洛陽の一日、実に有意義な一日であった。

三月三十日(主)

(洛陽滞在)

友誼賓館発(八時七分)

マイクロバス

唐寺門(八時二十九分)

六キロ

唐寺門村(

九時二十五分)

一〇キロ

洛陽博物館(九時

四八分)一〇時三六分)

五キロ

天津橋(一〇時四八分)一〇時五六分)

九キロ

友誼賓館(一一時七分)一四時八分)

一七キロ

龍門

石窟(一四時三四分)一七時三五分)

一七キロ

友誼賓館(一七時五八分)

唐寺門近くに大福先寺があるというので、いつてみるが何の手掛りもつかめない。その後、唐寺門村に行く。そこにはおもいもかけず、額に「古唐寺」と書かれた寺が存在した。しかし寺としての活動はされていないようにみえる。ここが未開放地区ということもあり、更にまたあらかじめ許可を受けずに突然にきた為、中に入ることには絶対に許されなかった。石碑がそこら中に散乱し、井戸の敷石にまでされている。時間的にもゆつくりできないひとときの調査となった。

九時二十五分、この村を出発、洛陽博物館へ。どういうわけか博物館には、あれだけ隆盛を天下にとどろかせた隋・唐代の歴史等について、詳しく展示されていなかった。

次に大師がここを通られたのでないかと思われる隋代に創られた橋、天津橋に行く。現在みられる天津橋は形だけのものであった。

昼食後、龍門石窟を見学。北魏時代の孝文帝が洛陽に遷都してから彫刻されはじめた龍門。仏像は大小合わせて十萬体あまり。中でもとびぬけているのが十七、四メートルのビルシヤナ仏。奈良の東大寺の大仏はこれを模したといわれている。

信仰という名のエネルギーが形をかえ、仏像となる。その一つ一つに込められたものは……。中でも勢力的に掘り

つづけさせたといわれる唐代の女帝・則天武后。この人物はどのような人であったのか、益々歴史のひもをほどいてみたいという衝動にかられる。仏像のほかに、仏像をつくった経過を刻した石碑が三千六百以上あることも有名なこと。

李白・杜甫・白居易などの多くの詩人も参拝し、白居易などは晩年ここに住し、寂している。

五時三十五分、龍門から宿舎にもどる。七時三十分、「空海・長安への道」第二班が飛行機の事情により一日遅く長安に入るとの電報が届く。詳細なことはわからない。かといって第二班と連絡はとれない。直通の電話が困難なためである。

明日とりあえず臨潼までいって、対処することになる。

### 三月三十一日(土) (洛陽—臨潼—西安)

洛陽友誼賓館発(八時三二分) マイクログラス 洛陽駅(八時四二分) マイクログラス 九時四五分 鉄道 鉄門(二〇時三〇分) 洛陽から 義馬(一〇時五三分) 孟塬(二四時五五分) 渭南(二六時一〇分) 三六〇キロ 臨潼駅(二六時四〇分) 八キロ 一六時五三分 マイクログラス 灊橋(二七時三三分) マイクログラス 一七時三八分 五キロ 唐代の城門入口(二七時五〇分) 西安人民大廈(二八時三〇分) 四キロ 西安東門前(一八時五分) 徒歩

九時四十五分、洛陽駅を臨潼に向かって出発。函谷門の位置を確認しなかったが、今回は許されず、次回に期待しよう。それでも好運だったのは夜の移動ではなく昼の移動であったことである。車窓からみる限りにおいて、想像しうる範囲でいえることは、ここの山越えは大変なことであろうということである。どんどん山奥深く入っていく感じである。

午後四時四十分、臨童に着く。第二班が西安にすでに入っていると情報が入り、最初の予定通り、マイクロバスで西安へ向かう。予定では、少なくともここから西安まで歩くことになっていたが、時間がまたしても邪魔をする。灊橋のところで撮影の為、下車する。代わりした柳が青々と美しい。ものめずらしか道行く人が集まってくる。ひとなつっこい人達である。

六時五分、西安の東門付近で下車。ここから東門まで歩く。何かおこったかのように人々が私達のまわりを取り囲む。それは東門に近づけば近づく程、ものすごい人数となる。はなやかな行進である。約十分後、東門につく。東門は雄大そのものである。ここで松長有慶高野山大学長先生・同学部長高木誦元先生をはじめ、第二班（第一次隊）の人達の暖い迎えをうける。握手をかわす度に、こらえられないものがわきあがってくる。ただありがたかった。この旅のすべてが報われたというような気持ちになった。

多分、大師が当時ここに到着された時には私達が感じた以上の感動をされたことであろう。長くも短かった大師を慕う二千四百キロの旅は一応ここで幕はとじる（正確にはもう少しあるが……）。事情の異なる国へ来て、これ程の旅をし、全員無事に到着できたことにいくら感謝してもしたりない。

明日は日本真言宗開祖、弘法大師御入定千五十年御遠忌法要の幕が日本の地できつておとされる。

#### 四月一日（日）〔西安滞在〕

人民大厦発（八時三七分）マイクロバス 長安県（九時二六分）四キロ 華嚴寺前（九時三三分）九キロ 興教寺（九時四八分）一一分  
時三〇分）八キロ 華嚴寺前（一一時四五分）四キロ 長安県（一一時五六分）三キロ 人民大厦（一二時一九分）一四時五三分  
分）六キロ 西明寺跡（一五時一〇分）四キロ 大興善寺（一五時二三分）一六時三〇分 青龍寺（一六時四五分）二〇分

時五分) 八キロ 和平菜館 (二〇時一六分〜二二時三八分) 一キロ 人民大厦 (二二時四三分)

弘法大師御入定千五百年御遠忌法会開白当日。

八時三十七分、宿舍人民大厦を出発。四方を城壁で囲まれた西安市をぬけ、長安県に入る。華嚴寺跡を通りすぎて、玄奘三蔵所縁の興教寺に到着。興教寺住持の常明法師は陝西省仏教協会の副会長である。

午後、西明寺跡を見学した後、不空三蔵の大興善寺へ。陝西省仏教協会々長の許力功氏等の歓迎をうける。

大興善寺から青龍寺に向かう。今日は風が強く冷たい。中国から日本に密教が伝わる舞台をつくった青龍寺の丘に立つ。惠果和尚と弘法大師の奇跡的なめぐりあいを想う。青龍寺跡につくられている「惠果・空海記念堂」は大部出来あがっていた。ここで再び新たな出会いが生まれることを願った。

遅れていた第二班の第二次隊がやっと到着する。全員そろったところで、午後七時十分惠果和尚に大師の御遠忌を記念する法会が今日始まったことを奉告する法要を行う。導師は松長有慶学長である。厳肅な奮闘気の中で、無事終了。夜、ひと月ぶりにお会いした第二班の全員の人達と食卓を囲む。緊張がすっかりほどけてなごやかな夕食となった。

四月二日(月) (西安滞在)

人民大厦発 (九時八分) マイクロボス 大興善寺 (九時三十分〜一〇時五五分) 四キロ 大雁塔 (一一時七分〜一一時五二分) 九キロ

刺繍工場 (一一時一五分〜一二時四五分) 四キロ 人民大厦 (一二時五三分〜一四時三四分) 五キロ 考古研究所 (一四時四四分〜一

五時八分) 三キロ 孟村 (一五時一八分〜一五時三〇分) 七キロ 際台村 (一六時一一分) 三キロ 東門 (一六時一八分〜一

六時四〇分) 二キロ 人民大厦 (一六時四五分)

唐代の仏教事情をきくために再び大興善寺を尋ねた。昨日同様、許力功仏教協会々長をはじめ、関係者の出迎えを

うける。大興善寺は春梅が今を盛りには咲いている。

大雁塔へと急ぐ。塔は小学生達の参観であふれている。塔の頂上に中国の人達とひしめきあいながら登る。大師も登られたことであろう。このあと鴻盧寺跡の近くまでいくが、その場所は不明のまま……。

午前中、近藤・佐藤・滝の三団員は西明寺跡から青龍寺まで、大師の通われたコースを体験するために直接歩いてみる。約二時間半。大・小雁塔は想像したように大きな目標になるらしい。

午後、中国社会科学院考古研究所西安研究室を見学。孟村から出土したという。青龍寺和尚の墓をみせてもらう。孟村の場所は三つ想定できるとのことである。その一つの場所に向う。この場所から青龍寺（現・惠果空海紀念堂）がみえる。

次に石仏寺のあった際台村に行く。現在、小学校になっている。その昔、山門をくぐると二・三のお堂があったらしい。その堂の両側の壁に加地哲定先生の書がかかれていたという。

このあともう一度東門を覗きにいき、宿舎に帰る。夕食後、中国仏教協会の招待で舞踊会を見物に行く。

#### 四月三日（火）〔西安—北京〕

西安人民大厦発（八時二五分）マイタロパス 長安県（八時五四分）八・七キロ 香積寺（九時一分〜二〇時一〇分）八・七キロ 長安県  
（一〇時二六分）二・七キロ 陝西省博物館（一〇時五〇分〜一二時）二・二キロ 人民大厦（一二時七分〜一三時三七分）八キロ 西安  
空港（一三時五五分〜一五時三〇分）飛行機 北京空港（一八時）一 前門飯店（一九時三〇分）

日本の浄土宗の開宗に大きな影響を与えた善導大師の香積寺を訪れる。寺は復興中であつた。善導は三十年間長安にとどまり、この地で六十九歳でなくなっている。善導の埋葬されたところに寺が創建された。一九八二年、日本の

浄土宗から善導と法然の像が贈られている。

香積寺から陝西省博物館へ。不空三蔵の石碑等を見学。その碑の多さにただびっくりする。もう少し参観の時間がほしい。

西安空港から北京へ向かう。中国仏教協会の歓迎式を空港内の応接室でうける。だんだんこの旅の報告書の原稿のことが気になりだした。

四月四日(水)

(北京滞在)

前門飯店発(八時五分)

マイクロバス

法源寺(八時一三分~一〇時)

広濟寺(一〇時一五分~一一時三〇分)

前門飯店( )

~

三時)——雍和宮(一三時三五分~一四時四五分)

頤和園(一五時一五分~一六時三〇分)

和平門烤鴨店(一八時三〇分

~二〇時三〇分)

早朝八時過ぎ、法源寺を参観。中国に来て二度目の法源寺。こんどはどういうわけか、一つ一つものがはっきりと見える。

法源寺に続いて、中国仏教協会のある広濟寺を表敬訪問する。私達のこの計画に御尽力いただいた中国仏教協会々々長趙樸初先生が、病気の為に入院中にもかかわらず、二時間という約束でこの席にでてこられた。法源寺・広濟寺、なつかしい人ばかりである。

午後、ラマ教寺院の雍和宮に行く。中国ではじめてみる密教寺院である。雍和宮はすべてが中国の風土・様式に消化されているように感じられた。境内の建物内の撮影は全面的に禁止。それでも雍和宮の大仏はみごたえがあった。

頤和園にもいく。多くの参観客でにぎわっている。若いカップルがめだつ。ここの長廊はその名の通りである。こ

れでもかこれでもかと趣向をこらして続いていく。

夕刻、中国仏教協会のレセプションに招待される。

四月五日（木）〔北京滞在〕

西門飯店発（八時）マイクロバス 明十三陵（九時四五分～一〇時一五分）——万里長城（一〇時一五分～一三時三五分）——居庸関（一

三時五〇分～一三時五五分）——友誼商店（一五時四〇分～一七時五分）——北京飯店（一八時三〇分～二時）

皇帝の権力の結晶、或いは象徴ともいえる明の十三陵を見学。そのすこさに圧倒されっぱなしである。

次に訪れた万里の長城でもその想いは消えない。はじめてこの眼で長城を見る。秦の始皇帝はこの築城にその生涯をかけたといわれる。そこに私達は何を視、何を感じたらいいのであろうか。

静团长と備前副团长は蓬さんの慰勞の為、一日別行動である。

夕刻、訪中団主催の答礼レセプションを行う。この席で蓬さんと佐藤さんが仲よく「北国の春」をうたった。私達は校歌を斉唱。

四月六日（金）〔北京——日本・高野山〕

西門飯店発（八時一〇分）マイクロバス 天安門広場（八時二〇分～八時三五分）——故宮博物館（八時四〇分～一一時）——北京空

港（一二時三〇分～一四時一〇分）飛行機 大阪空港（日本時間一八時五分～一九時三〇分）——マイクロバス 高野山（二四時）

天安門広場前にて全員で記念撮影。続いて故宮博物館を見学。これで中国もみおさめである。

午後二時十分、北京空港発。蓬さん達との別れが本当につらかった。思わず「また来ます」と叫んでいた。

午後六時五分（日本時間）、大阪空港につく。とうとう日本に帰ってきた。金剛峯寺の関係者の方々の出迎えをうける。午後十二時。高野山着。

四月七日（土）〔高野山〕

奥の院（八時～一〇時）——金剛峯寺（一〇時三〇分～一二時三〇分）——解散

大師の御遠忌法要が厳かに行なわれている奥の院御廟。

私達は無事に帰国したことを報告する為に参拝した。多くの期待とそれ以上の不安を携えての追体験の旅。大師の御苦労の一端でも味わえたらと思いつながら日々を重ねた。けれども私達のこの思いとは裏腹に、私達の旅はあまりにも恵まれすぎたものではなかったのか。最初から用意周到に私達を迎える準備をされた上での訪問。

事前にこの計画の為に奔走された方々の尽力はいうまでもないことである。しかしながらそこにはより大いなる働きがあったのではないかと思われる。これを宗祖弘法大師の加護と結びつけるのは余りにも短慮にすぎるであろうか。少なくとも私達にとってこの旅はそのように感じられ、思わざるを得ないことの連続であった。

一座の法要が終了した後、御廟奉前から参道へ出る。肌さす靈気がことのほか今日は心地良い。

金剛峯寺で関係者に経過報告をすませ、別殿に用意された昼食を森寛紹管長貌下の御臨席の上、一緒にいただいた。昼食後、団は解散。夫々、想い想いの処へと散っていく。金剛峯寺から出た時の陽の光りが異様なくらいまぶしく感じられた。



資

料



付 (一)

中国の報道関係紙上における「空海・長安への道」

弘法大師御入定千五百年御遠忌記念として、中国においては二つの計画が進められた。

一つは、「惠果・空海記念堂」の大事業である。この落成記念として「空海入唐」という著が出版された（株式会社美乃美、昭和五十九年七月二十五日発行）。「惠果・空海記念堂」建立の経過は、その中で阿部野竜正大僧正（真言宗各派総大本山会代表総務、日中友好真言宗協会委員長）が、「惠果・空海記念堂」が建つまで」と題して、詳しく報告されている。

また中国側からは、中国仏教協会会長趙樸初先生の「序文」中国社会科学院考古研究所西安研究室主任馬得志先生の「唐代青龍寺」と題する一文が載せられている。

他の一つは、「空海・長安への道」訪中団である。この企画もまた大きな事業であった。中国の各地において、日中友好の先駆者としての弘法大師空海の偉大さを千八十年の時代をこえて十分に理解していただいた旅であった。今回の旅の影響の大きさは、むしろ帰国後に表われた。公的・私的の文章が次々とどき、その対応に苦慮するほどであった。その

中でここでは中国において贈られた詩と、報道関係のもののみを集録しておいた。

この他にも空海関係のものが活字となって中国人によって著述、報道された。

○「文鏡秘府論校注」 王利器校注（中国社会科学出版社）

○弘法大師與「文鏡秘府論」 王利器著（中華文史論叢、一九七九年四月）

○中日文化交流先駆者空海 愈郁田（霞浦縣「松濤」郷訊社編第五期、一九八四年四月十九日）

○中国文化交流的先駆者——空海 趙安博（法音、一九八四年第三期（総第一期））

○「青龍寺惠果和尚之碑」今譯 林子青譯注（法音、一九八四年第四期（総第二十期））

○「青龍寺惠果和尚之碑」今譯 林子青譯注（法音、一九八四年第三期（総第一期））

○「青龍寺惠果和尚之碑」今譯 林子青譯注（法音、一九八四年第三期（総第一期））

○「青龍寺惠果和尚之碑」今譯 林子青譯注（法音、一九八四年第三期（総第一期））

○「青龍寺惠果和尚之碑」今譯 林子青譯注（法音、一九八四年第三期（総第一期））

○「青龍寺惠果和尚之碑」今譯 林子青譯注（法音、一九八四年第三期（総第一期））

○「青龍寺惠果和尚之碑」今譯 林子青譯注（法音、一九八四年第三期（総第一期））

右に記したものは、大部の著述もあり、ここに収めることはできない。適宜参照していただきたい。

聯句 邱繼仁

空海有真傳 赤岸巡朝逢甲子

貞元稱盛世 東隣結友繼孫會

七律 張景鶯

李白桃紅萬象春 天涯知己德爲隣  
長溪結客扶桑國 空海浮槎赤岸濱  
千百餘年巡舊迹 一衣帶水逐新賓  
由來友誼黃金貴 中日人民世代珍

五律 僧祝山

渡海求真法 高僧入大唐  
乘風堅意願 破浪得康莊  
赤岸村猶在 長溪徑未荒  
青龍親授記 化雨潤扶桑

七絕 鄭名彥

鑒真空海互交流  
杯渡千年迹尚留  
參拜團今來赤岸  
更携友誼上層樓

五律 龍山樵

中日共扶持 高僧是我師  
鑒真東渡際 空海入唐時  
巡迹傳交誼 探親慰所思  
陸隣千載事 留與子孫規

七絕 孔慶洛

聞日本客人在空海入唐登陸處植樟留念感賦一絕  
飛錫沖濤人大唐  
始教赤岸接扶桑  
春來佳客培嘉樹  
應是新章繼舊章

贈日本空海入唐足迹參拜團 李安

入唐求經教 歸國屬玄風  
高野開山祖 眞言創派宗  
青龍聯法會 赤縣禮行踪  
友誼源流遠 雲仍自無窮

眞言觀光團留念 天台山國清寺廣厚贈

口誦眞言心虛禪  
無邊妙義全体現  
從來歸元無二路  
台教眞言共一澗

日本佛教參拜團來榕

應中國佛教會邀請，以靜慈圓爲團長，備前有隆爲副團長的日本佛教眞言宗參拜團一行八人，昨天乘飛機到達福州，對我

省進行友好訪問。(林兆聲)(福州晚報、一九八四年三月一日)

### 日本佛教真言宗參拜團訪問

據新華社及本報通訊員報道 日本高野山真言宗空海入唐求法足跡參拜團一行八人，二月二十九日從北京抵達福州，沿着空海當年行進的路線，前往南平、建甌、浦城等地訪問，計劃于七日離開福建去杭州。

參拜團是來參拜其開山祖師空海(即弘法大師)到中國求法的足跡的。空海大師于公元八〇四年(唐代貞元二十年)隨日本「遣唐使」渡海來唐朝尋求佛法，左霞浦縣赤岸村登陸，來到福州，途經南平、杭州、蘇州、淮陰、洛陽至長安。他回日本後，把中國優秀文化介紹給日本人民，在高野山開創了日本真言宗。今年是空海大師圓寂一千一百五十年。

參拜團訪問期間，曾在福州鼓山涌泉寺山門內樹立「空海入唐之地」石碑。他們所到之處，受到當地政府和佛教協會負責人的熱情歡迎和款待。(福建日報、一九八四年三月六日)

### 日本空海大師和霞浦赤岸

孔慶洛

最近，日本朋友「高野山真言宗空海大師入唐求法足跡參拜團」一行多人，專程訪問了霞浦縣州洋公社的赤岸村。

一千一百八十年前的八月十日，日本僧人空海(後來成爲日本最有名的高僧，謚弘法大師)隨第十六次遣唐使訪華，坐船因風飄流到我省的霞浦縣。赤岸是他登上中國國土的第一個落脚点。這就是日本朋友這次來訪的契機。

在這之前，西安市科技情報研究所電影組應日本京都人民的要求(空海系京都人)，拍攝空海入唐之行的歷史文獻片，也來到赤岸拍了實景。

空海少年好學，後入佛門受戒，因其篤愛漢文漢語，被選拔隨遣唐使入唐。他們一行在赤岸登陸後，曾因辦入境手續稽留了一段時間，隨後轉道福州，進錢塘，過杭州、蘇州、淮陰、溯泮水到洛陽，再西入函谷關抵長安。空海在長安，師事青龍寺高僧惠果，精研佛學，并旁及其他文獻典籍，極有造詣。回國後創立真言宗(東密)，又在高野山設專門道場進行傳播。同時他方唐制，創辦日本第一所庶民學校，親自介紹中國文化藝術。他又是歷史上日本三大書法家之一。生平著述達一六〇多種，有關中國文化的占主要部分。他作爲中日文化交流的先驅者堪與我國的鑒真和尚相輝映。

霞浦赤岸，是個靠山濱海的古老村莊，漢朝時即有居民在此勞動生息，由于海上交通頻繁，唐時已頗繁榮，文風極爲鼎盛。如今這里更是一片興旺景象。閑步村里村外，摩挲唐宋遺物，找尋前人足跡，雖沒有興思古之幽情，但愛國主義之情却不禁汨汨而生。(福州晚報、夕刊、一九八四年三月十一日)

日本高野山真言宗訪華團來我縣  
參拜空海入唐求法登陸處——赤岸

爲紀念空海（弘法大師）圓寂一千一百五十年、日本國高野山真言宗「空海・長安之路」訪華團、應邀來訪。

三月一日下午，該團一行八人，由中國佛協及省、地有關人員陪同，到達我縣，縣佛教會老會長謝祝山、率僧尼在柏翠庵，以佛教禮儀予以歡迎，縣有關領導亦會見了客人。賓主都表示要爲中日兩國人民世世代代好下去多做貢獻。座談後，主人設便宴款待日本客人。

翌晨，該團驅車赤岸。當地群眾千余人夾道熱烈歡迎。茶話會上，主方有關人員致詞歡迎，並簡要介紹赤岸村的歷史沿革和空海当年在此登陸的史實。客方靜慈圓團長，代表該宗一千多方信徒，感謝我國政府和人民以及佛教界給予的極大支持，使他們實現巡訪祖入唐足跡的夙願。會後，日本客人興致勃勃地參觀了「赤岸史迹陳列室」，對有關文物、史迹，作了詳細的詢問、記錄。靜團長還興揮毫書寫行草條幅。接着，客人巡訪了空海大師当年登陸的地段，並種植五株象徵友誼長青的香樟樹，作爲永久的紀念。隨後，客人參觀了赤岸石橋、多寶佛塔等名勝古迹。

十時許，客人前往古嶺下（古風赤岸）海口，乘坐木帆船在松山、後岐一帶海面體驗大師当年入唐的情景。返航途中，五

位真言宗信徒（訪華團另三名系「每日新聞」社記者、編輯）、坐舢板、上沙灘、進行象徵性登陸活動。他們穿草鞋、戴竹笠、着和服、踐沙踏浪、緩緩行進、而後、列隊望東頂膜禮拜、反復誦讀「報答弘法大師恩德」、并念佛經、敲法器、鄭重舉行十分虔誠的宗教儀式、回憶其宗祖的遺德、表達他們崇敬、感恩之情。儀式畢，他們將數百張日本小畫片、散發給前來圍觀的當地少年兒童、表示祝福與友情。

巡拜活動至正午結束。

兩天中，日本客人三次向我縣關單位贈送該團誘有「中日友好」字樣的錦旗、以及其他禮品。我縣佛教協會向客人贈送了本縣工藝美術歷制作的貝雕畫「赤岸風光」、精湛的工藝贏得客人不住的贊譽。

臨行，賓主依握手惜別，靜團長深有感触地說：「一千一百八十年前，弘法大師得到這里官民的救援。今天，我們又得利你們如此盛情的接待。正象弘法大師爲中日友好作過橋梁那樣，我們也要繼續爲兩國友好盡心盡力、多作有益的事情。」

下午二時時，客人離開我縣——他們正沿着当年大師走過的道路，走下去，一直往前走下去……

（霞浦縣「松濤」鄉訊社編第五期，一九八四年四月十九日）

日本佛教真言宗代表團訪問記

陳國明

今年是日本佛教真言宗開山祖師空海圓寂一千一百五十年、

以靜慈圓為團長的日本高野山真言宗空海入唐求法足跡參拜團、一行八人日前來閩參觀訪問，他們表達了一個共同願望。望日中友好、代代相傳。

#### 赤岸訪古

三月二日，參拜團在福建省佛教協會副會長、廈門南普陀住持妙湛法師的陪同下，長途驅車來到閩東霞浦縣郊六公里的赤岸村訪問。

大隊部掉上擺着象徵「吉祥」的大紅橋子和蜜錢，大隊負責人與靜慈圓團長并列坐定後，縣中學一位歷史老師介紹說，公元八〇四年，空海隨日本第十七次遣唐使來華，船在途中遇台風襲擊，飄流到赤岸村海口，受到長溪（今霞浦）縣官民的救援，接待上岸後，護送到福州，再由福建觀察使派員陪同上長安，在青龍寺受密宗嫡傳後回國。然後，縣佛教協會給「參拜團」贈送了一面鑲有赤岸古橋的貝雕畫，靜慈圓團長接過禮物後，含淚合十說，「赤岸是我宗祖入唐登陸起點，一千多年後的今天，這裡的朋友又如此熱情接待空海子孫，并贈送這樣有意義的紀念品，「赤岸」將永遠銘刻在我們心中。」

#### 馬江泛舟

據記載，當年空海由長溪縣官沿水路護送到福州時，登陸點在福州馬尾港。三日清晨，參拜團又踏着空海足跡來到馬尾港口。

團員們來到江邊，靜慈圓對團員們說，「宗祖曾在這裡登陸進福州，現在讓我們沿着他的足跡去巡拜吧」說完，一個個畢恭畢敬地登上汽船。

汽船離開起伏的浪波向前。副團長備前有隆，做為高野山日中友協事務局長，他多次來到中國，但前來參拜空海足跡却是首次。他接連不斷地向船上水手打听兩岸青山的名稱，記錄下許多流傳在民間的動人傳說。他指着巍巍羅星塔下高樓櫺比的馬尾新鎮說，「過去宗祖來過的馬尾港不知是什麼樣子，今天，我們能有機會來到這畫山綉水的地方參拜宗祖足跡，真是三生有幸。」

#### 鼓山立碑

中午時分，參拜團離開馬尾港，越野車沿着盤山公路馳上鼓山。一座刻有「石鼓名山」的石碑立在眼前。披着金絲縱橫的大紅袈裟的鼓山涌泉寺方丈普雨法師已帶着兩位侍者迎出山門，數十名穿着僧服的出家人列隊兩旁合十相迎。

靜慈圓等同普雨相互合十施禮後，相携緩緩步入山門。只見寺內各尊金身佛像栩栩如生，大殿內外，金碧輝煌。靜慈圓前一天親自上山選址了這塊立碑之地。于是他再次向普雨合十施禮說道，「寶刹如此完好，并雄偉壯觀，在當今日本國還找不到，福建省政府和老法師讓我宗祖入唐紀念碑立在這風景幽美的寶刹前，放眼馬江，早晚聞得鐘鼓之聲，真是宗祖空海及其後輩信徒之幸。我要帶回福建人民和佛教徒的盛情，祈望日中友好，歷久彌新，子子孫孫，一意無偏。」

（法音，一九八四年第三期（總第二〇〇期））

追懷宗祖遺德加強中日友好

——「空海至長安之路」訪華團訪問我國——

日本真言宗在紀念宗祖弘法大師空海入定一千一百五十年之際，派遣了以靜慈圓為團長，備前有隆為副團長，武內孝善為秘書長的「空海至長安之路」訪華團一行八人，來華巡禮空海當年入唐求法從福建到長安所經過的道路，追憶宗祖的遺德，同我國佛教界進行友好交流。該團於二月二十七日至四月六日在我國進行了為期四十天的友好訪問，行程兩千七百餘公里，先後訪問了北京、福建的福州、霞浦、南平、建甌、浦城、浙江的杭州、紹興、天台山、寧波、江蘇的蘇州、無錫、常州、鎮江、揚州、南京、河南的鄭州、開封、登封、鞏縣、洛陽，以及上海和西安等地，朝拜了三十多座寺院，受到我國佛教界和有關方面的熱烈歡迎和親切款待。

訪華團在空海當年入唐時船只泊岸的副建甌浦縣赤岸鎮，舉行了足跡巡拜活動開始儀式。團員們頭戴斗笠，身披袈裟，腳穿草履，面向高野山念誦經文，向宗祖表示追念。在巡拜過程中，他們在福州鼓山涌泉寺參加了「空海入唐之地」的建碑儀式，在西安青龍寺舉行了弘法大師入定一千一百五十年紀念法會，瞻仰了鎮江金山寺所藏以「空海修行古刹」為題材的詩軸和蘇州靈岩山寺所藏明代空海銅像。他們對以趙樸初會長為首的中國佛教協會及各有關部門的大力支持和關照，表示衷心

的感謝。

通過參觀訪問，代表團親眼看到我國讓真落實宗教信仰自由政策的許多生動事實，留下了深刻的印象。靜慈圓團長說，「我們看到中國佛教界年青一代的接班人正在成長，感到十分高興。他們不但肩負着中國佛教事業的未來，也肩負着發展日中兩國佛教界友好交流的未來。我們對日中兩國佛教界友好交往的前景充滿着信心。我們決心把這次訪華巡拜活動作為進一步發展日中友好的新起點，象弘法大師那樣做日中兩國友好交流的橋梁。」（隨仁）

（法音，一九八四年第四期（總第二〇期））

為紀念弘法大師示寂一千一百五十年  
日本首相中曾根致函趙樸初會長

中國佛教協會會長 趙樸初先生

在此秋高氣爽氣候宜人的季節，相信您一定福體康壯，我亦衷心感到高興。在今年六月，我的親信友人高野山真言宗宗務總長阿部野龍正訪華時，直接的見到您，並且向您提出計劃。我亦為了能更加增進日中兩國的友好關係特地書以此信，請您多加關照。

如您所知，真言宗的元祖弘法大師空海，在中國學習了中國的文化，並且深受中國宗教文化的影響，這個影響也可以說是

建立今日日中文化交流的基礎，這是有歷史証明的。

明年，一九八四年正逢弘法大師入定滿一千一百五十年，借此機會，真言宗的信徒們提出了「空海至長安之路」的紀念活動計劃，這個計劃的內容是曾經培養了弘法大師的從福州到西安的中國各地的追憶旅行，並且從旅行中體驗大師的遺德。同時，與中國佛教的諸方信徒締結更深的親善友好，使日中兩國文化的交流更加有所進展。

爲了實現此計劃，有關中國方面的理解及支持是不可欠缺的。在此深深懇請您多多給予協助。

最後，敬祝您及佛教協會的各位先生們身體健康！

內閣總理大臣 中曾根康弘（簽名）

一九八三年十月十五日

(二)

中國佛教協會會長 趙樸初先生

正值春光明媚之季，敬祝中國佛教協會會長趙樸初先生無恙。日前高野山真言宗組織派遣之「空海至長安之路」訪華團，蒙您照顧已順利回國。派遣該團負責人乃是我老友阿部野電正高野山真言宗事務總長。據其報告，該團既能路這外國人未進之地方并受到熱烈歡迎，又蒙各地佛教協會及有關方面周到安排，圓滿結束訪問，甚爲感激。悉之令人深感會長先生精心關照及貴協會之大力協助。每日報紙發表此一旅程之情景，堅信這必定愈益加深日中兩國國民之間的友誼，并能更加促進兩國文化交流。

理應拜會尊顏致謝爲要，雖爲欠禮，茲以寸簡深表感謝。并祝

日中友好日益加強，會長先生身體健康。

日本國內閣總理大臣 中曾根康弘（簽名）

一九八四年四月十四日

（法音，一九八四年第四期（總第二〇期））

阿部野電正等致函感謝中國佛教協會

這次我們真言密宗爲了紀念弘法大師空海入定一千一百五十年，緬懷開山祖師的創業艱辛，追思昔日中國朝野的友誼思德，我特別組織了一個重踏當年「空海赴長安之道」的訪華團。承蒙古中佛協會，延途有關單位以及各位先生的鼎力協助，當初的計劃終於順利達成，而今我們深深地体会到中日兩國的友誼古今無異，歷久如新。在此，謹讓我們代表真言密宗一千萬信徒，重新向各位表達最高的敬意與謝忱。

四月一日至五月二十日，在高野山舉行的弘法大師遠忌佛事，亦已圓滿告終。佛事期間，僧俗進香，絡繹不絕，誠近年來所未有的盛況。自空海從貴國承續衣鉢以來，代有傳人，遠近歸依，而香火之盛，更有後來居上之勢，這也是我們必須在此向各位報告的事情。

另外，「空海赴長安之道」的記錄畫報，也編集完成，正式出

版、謹同函呈上、一表我們虔誠的心意。順祝各位  
安康健泰

弘法大師御入定千五十年御遠忌記念

「空海赴長安之道」実行委員会

委員長

阿部野竜正

訪華團

團長

静

慈圓

副團長

備前

有隆

秘書長

武内

孝善

近藤

堯寬

中村

正文

佐藤

健

中西

浩

滝

雄一

一九八四年六月二十一日

（法音、一九八四年第五期（總第二一期））

付(二)

「空海・長安への道」中国側関係者一覧

一九八四年二月二七日  
北京首都空港出迎之

通一	中国仏教協会	理事
游驥	中国仏教協会	副秘書長
李呈鈞	中国仏教協会	弁公室副主任
鄭立新	中国仏教協会	国際部副主任
明哲	広済寺	首座
蓮俊忠	中国仏教協会	国際部通訳
張開勤	中国仏教協会	国際部通訳
馬俊民	中国仏教協会	国際部通訳

一九八四年二月二八日  
中国仏教協会表敬訪問広済寺

李榮熙 中国仏教協会

副会長

通一	中国仏教協会	理事
游驥	中国仏教協会	副秘書長
李呈鈞	中国仏教協会	弁公室副主任
明哲	広済寺	首座
鄭立新	中国仏教協会	国際部副主任

一九八四年二月二八日  
中国仏教協会招宴

李榮熙	中国仏教協会	副会長
林子青	中国仏教協会	常務理事
孫培玉	國務院宗教事務局	所長
通一	中国仏教協会	理事
游驥	中国仏教協会	副秘書長
李呈鈞	中国仏教協会	弁公室副主任
明哲	広済寺	首座
鄭立新	中国仏教協会	国際部副主任
申在夫	中国仏教協会	国際部副主任

一九八四年二月二九日  
法源寺表敬訪問

夢覚 中国仏学院  
能行 法源寺

監院  
知客

黄炳章 中国仏教図書館

副総幹事

林傳常 福建省仏教協会  
付丹青 福建省中国旅行社

副秘書長  
通訳

一九八四年二月二十九日  
福州空港出迎え

妙湛 福建省仏教協会

副会長

一九八四年二月二十九日  
福建省指導者歓迎会

廈門市南普陀寺

主持

黄長溪 福建省政府  
温附山 福建省政府

副省長

林傳常 福建省仏教協会

副秘書長

楊中里 福建省統一戦線部

副部長

陳寬傳 福建省仏教協会

副秘書長

郭鋼 福建省宗教局

負責人

敏參 福州市仏教協会

副会長

彭世樞 福州市政府

副市長

梵輝 福州市西禪寺

当家

周偉莊 福州市宗教局

局長

理文 福州市鼓山涌泉寺

培訓班教師

会静 福建仏学院

法師

一九八四年三月一日  
福建省寧徳県碧山天王禪寺

會長

悟隆 福州市仏教協会

會計

妙果 寧徳県仏教協会

副會長

定月 福建仏学院

学生

印法 寧徳県仏教協会

副會長

乘宝 福建仏学院

学生

天王禪寺

一九八四年二月二十九日

福建省仏教協会歓迎会

鍾雷興 寧徳県人民政府

住持

普雨 福建省仏教協会

會長

陳葆清 寧徳県政治協商会議

副主席

妙湛 福建省仏教協会

副會長

王繼忠 寧徳県人民政府宗教局

局長

廈門市南普陀寺

主持

陳言烈 寧徳県城関鎮

副書記

一九八四年三月一日

寧德県招待所昼食

李治礼 寧德地区行政公署 副專員

粟鈞榮 寧德地区統一戰線部 部長

林夏仁 寧德地区行政公署宗教事務局 副主任

鍾雷興 寧德県人民政府 県長

陳葆清 寧德県政治協商會議 副主席

王繼忠 寧德県人民政府宗教局 局長

妙果 寧德県仏教協會 会長

印法 寧德県仏教協會 副会長

天王禪寺 当家

一九八四年三月一日

霞浦県招待所レセプション

李喜榮 霞浦県人民政府 県長

何小平 霞浦県人民政府 副県長

周金偉 霞浦県人民大会常務委員会 副主任

任志亮 霞浦県政治協商會議 副主席

楊茂林 霞浦県統一戰線部 部長

欧梅宝 霞浦県宗教局 局長

一九八四年三月二日

霞浦県赤岸大隊

吳維孝 赤岸大隊 大隊長

張興坤 赤岸大隊 副大隊長

陳品全 赤岸村第一中学校 歴史先生

一九八四年三月一日

霞浦県仏教協會(柏翠庵)

曾青果 霞浦県仏教協會 会長

肅山 柏翠庵 住持

李喜榮 霞浦県人民政府 県長

何小平 霞浦県人民政府 副県長

周金偉 霞浦県人民大会常務委員会 副主任

任志亮 霞浦県政治協商會議 副主席

楊茂林 霞浦県統一戰線部 部長

欧梅宝 霞浦県宗教局 局長

一九八四年三月三日

福州市崇福禪寺

馬明淨 福州崇經寺 当家

(崇福禪寺当家代理)

劉惠芳 福建仏学院女衆班 管理員

肖心清 福建省仏教協会

朱明力 福州市仏教協会

明海 崇福禪寺

淨研 崇福禪寺

淑珍 崇福禪寺

少云 崇福禪寺

開誠 崇福禪寺

工作人員

副秘書長

知客

副寺

副寺

副寺

副寺

一九八四年三月三日  
福州市西禪寺

梵輝 西禪寺

敏參 西禪寺

悟峰 西禪寺

監院

監院

知客

一九八四年三月四日  
古田県招待所

範彬 古田県政協商會議

劉印波 古田県統一戦線部

仇可靈 古田県統一戦線部

魏錫麟 古田県宗教局

妙照 極楽寺

古田県仏教協会

主席

部長

副部長

副局長

住持

負責人

胡惠仙 古田県仏教協会

一九八四年三月四日  
南平市第一招待所

夏玉珊 南平市人民政府

張全福 南平市政治協商會議

範延富 南平市政治協商會議

黃崇開 建陽地区宗教局

市長

主席

秘書長

局長

一九八四年三月五日  
建甌県崇仁寺

王正達 建甌県政治協商會議

範德光 建甌県宗教局

美果 崇仁寺

葉林波 建甌県人民政府

羅堯琳 建甌県人民政府

李金滿 建甌県人民政府

秘書長

負責人

住持

一九八四年三月五日  
建甌県第一招待所

曾学俊 建甌県人民政府

副局長

王洪成 建甌縣政治協商會議 副主席

一九八四年三月五日

浦城縣招待所

周朴孫 浦城縣政治協商會議 秘書  
周克恭 浦城縣政治協商會議 秘書

一九八四年三月六日

浦城縣天心勝果禪寺

首初 浦城縣佛教協會 負責人  
近初 天心勝果禪寺 主持

一九八四年三月六日

浦城縣負責人會見

鄭章松 浦城縣政治協商會議 副主席  
陶瑞祥 浦城縣人民政府 副縣長

一九八四年三月七日

南平市開平禪寺

崇道 南平市開平禪寺 方丈

吳義棟 南平市政府政治協商會議 副主席

花延守 南平市政府政治協商會議 秘書長  
黃崇開 建陽地區宗教局 局長  
姜聖堯 南平市宗教辦公室 負責人

一九八四年三月九日

杭州市靈隱寺

根源 靈隱禪寺 監院  
俞昶熙 浙江省佛教協會 副會長兼秘書長

一九八四年三月一〇日

天台山國清寺

唯覺 國清寺 方丈  
廣厚 國清寺 知客

一九八四年三月一日

天台山中方廣寺

通和 中方廣寺 方丈兼当家  
陳杏基 天台縣外事辦公室

一九八四年三月一日

寧波市天童寺

廣修 天童寺

修祥 天童寺

永通 天童寺

方丈  
監院  
副寺

一九八四年三月二日

寧波市阿育王寺

通一 阿育王寺

慧芳 阿育王寺

方丈  
当家

一九八四年三月三日

紹興市紹興館店

陳培福 紹興市人民政府宗教事務局

陳維于 紹興市文物管理委員會

單俊毅 紹興市外事弁公室

幹部  
幹部

一九八四年三月一四日

朱士俊先生を囲んで（杭州市花家山賓館）

朱士俊 浙江海洋学会

研究員

汪銀兒 浙江省外事弁公室

胡偉百 浙江省外事弁公室

邱建华 浙江省外事弁公室

吳樹貴 浙江省外事弁公室

陸国澎 浙江省外事弁公室

芙蓉麗 浙江省外事弁公室

一九八四年三月一五日

蘇州市仏教協会表敬訪問（西園寺）

明開 蘇州市仏教協会

安上 西園寺

德濟 蘇州市仏教協会

西園寺

西園寺

會長  
方丈  
副會長  
監院  
知客

一九八四年三月一五日

蘇州市靈巖山寺

明学 蘇州市仏教協会

静慈 靈巖山寺

貫徹 靈巖山寺

靈巖山寺

副會長  
方丈  
当家  
知客

一九八四年三月一五日  
蘇州市寒山寺

性空 寒山寺

監院

一九八四年三月一六日  
上海市玉仏禪寺

詮泉 上海市仏教協会

副会長

玉仏寺

都監

法牟 上海市仏教協会

常務理事

玉仏寺

監院

妙林 上海仏学院

教師

光慧 上海仏学院

学僧

一九八四年三月一七日  
上海市龍華寺

蔭遠 龍華寺

監院

果曙 龍華寺

監院

合成 龍華寺

知客

一九八四年三月一七日  
無錫駅出迎えの方

隆賢 無錫市仏教協会

会長

碩巨開 無錫市仏教協会

副会長

寿祥 無錫市仏教協会

副秘書長

魯文新 中国人民対外友好協会無錫分室

通訳兼案内

郭仲良 無錫市民族宗教局

秘書

一九八四年三月一八日  
無錫市広福寺

隆賢 無錫市仏教協会

会長

広福寺

方丈

寿祥 無錫市仏教協会

副秘書長

広福寺

監院

智茂 広福寺

主客師

長命 広福寺

小沙弥

一九八四年三月一九日  
常州市仏教協会表敬訪問(天寧寺)

洪徳 常州市仏教協会

会長

松純 天寧寺  
常州市仏教協会

文永 天寧寺  
常州市仏教協会

正元 天寧寺

龍儀 天寧寺

慈亭 天寧寺  
常州市仏教協会

王奇桂 常州市外事弁公室

蔣興榮 常州市外事弁公室

姜金榮 常州市外事弁公室

一九八四年三月二一日  
鎮江市焦山定慧寺

顏守國 鎮江市宗教事務局

茗山 中国仏教協会  
江蘇省仏教協会

慈舟 鎮江市仏教協会  
焦山定慧寺

法永 金山江天禪寺

松岩 鎮江市仏教協会

方丈

秘書長

監院

副會長

副監院

知客

知客

知客

秘書

通訳

通訳

通訳

通訳

一九八四年三月二一日

鎮江市定慧寺昼食レセプション

吳明政 鎮江市対外友好協会  
幹允倫 鎮江市対外友好協会

一九八四年三月二一日

鎮江市金山江天禪寺

慈舟 金山江天禪寺

茗山 焦山定慧寺

法永 金山江天禪寺

松岩 焦山定慧寺

松月 揚州大明寺

静遠 揚州大明寺

静之 揚州大明寺

聖權 揚州大明寺

李宝林 揚州市仏教協会

會長

副會長

監院

方丈

知客

知客

知客

知客

知客

知客

僧衆

工作人員

通訳

一九八四年三月二一日  
揚州市西園飯店出迎えの方

一九八四年三月二二日  
揚州市大明寺

印波 揚州市仏教協會 會長  
揚州大明寺 監院  
松月 揚州大明寺 知客  
静之 揚州大明寺 僧值  
聖權 揚州大明寺 僧衆  
静綠 揚州大明寺 知客

一九八四年三月二三日  
南京市栖霞寺

雪煩 南京市仏教協會 會長  
江蘇省仏教協會 副會長兼秘書長  
茗山 栖霞寺 住持  
真慈 南京市仏教協會 秘書長  
靈谷寺 住持  
輝監 栖霞寺 都監  
元湛 栖霞寺 首座  
李安 南京金陵刻經所 研究員  
黃常倫 江蘇省仏教協會 秘書  
劉国鈺 南京市仏教協會 秘書

一九八四年三月二三日  
南京市靈谷寺

真慈 靈谷寺 住持  
瑞祥 靈谷寺 監院  
雪煩 南京市仏教協會 會長  
元湛 栖霞寺 都監

一九八四年三月二四日  
南京市金陵刻經所

管恩琨 金陵刻經所 主任  
陳力 金陵刻經所 工作人員  
李安 金陵刻經所 研究人員  
田光烈 金陵刻經所 研究人員  
趙家璧 南京市仏教協會 工作人員

一九八四年三月二五日  
開封市河南仏学社

郭天增 開封市人民政府宗教事務所 科長  
崔慶斌 開封市人民政府宗教事務所 幹部

胡和手 開封市外事弁公室

淨嚴 河南省仏教協会

占西 河南省仏教協会

印信 河南仏学社

心印 河南仏学社

心庵 河南仏学社

幹部

会長

理事

一九八四年三月二六日

鄭州市黄河游覧区

王荊州 鄭州市黄河游覧区管理所外事科

袁云慧 鄭州市黄河游覧区管理所外事科

侯秀金 鄭州市黄河游覧区管理所外事科

楊小偉 鄭州市黄河游覧区管理所外事科

一九八四年三月二七日

河南嵩山少林寺

馬德法 登封県宗教局

德禪 少林寺

行寿 少林寺

崔穎敏 登封県外事弁公室

局長

住持

書記

一九八四年三月二九日

洛陽市龍門石窟

温玉成 龍門文物保管所

薛東風 龍門文物保管所

助理研究員

接待員

一九八四年三月二九日

洛陽市白馬寺

淨法 白馬寺

徹幻 白馬寺

伝虚 白馬寺

圓淨 白馬寺

韓学礼 洛陽市宗教委員会

住持

秘書

一九八四年三月二九日

龍門文物保管所温玉成先生を囲んでの懇談会

温玉成 龍門文物保管所 助理研究員

張韶明 龍門文物保管所 講解員

王洁 龍門文物保管所 講解員

谷莹 龍門文物保管所 講解員

鄭州から洛陽までの案内の方

張学智 河南省宗教所

所長

劉中生 河南省宗教所

秘書

史云鵬 鄭州市宗教所

秘書

一九八四年四月二日

西安市興教寺

常明 陝西省仏教協会

副会長

興教寺

住職

一九八四年四月二日

西安市仏教協会表敬訪問(大興善寺)

許力功 陝西省仏教協会

会長

周潤浩 陝西省仏教協会

副会長

白國鈞 陝西省宗教外事接待処干部

一九八四年四月二日

中国社会科学院考古研究所西安分室

馮孝唐 考古研究所

工種師

一九八四年四月三日  
西安市香積寺

常慧 香積寺

真玉 香積寺

一九八四年四月三日

陝西省博物館

田徳辰 陝西省博物館

大衆工作部負責人

一九八四年四月四日  
北京市法源寺

伝印 中国仏教協会

能行 法源寺

夢覚 中国仏学院

白光 中国仏教図書館

黄炳章 中国仏教図書館

條李良 中国仏教図書館

劉峰 中国仏教図書館

理事

首座

知客

監院

教務主任

弁公室主任

副教務長

教研主任

一九八四年四月四日

中国仏教協会表敬訪問（広濟寺）

趙樸初	中国仏教協会	会長
正果	中国仏教協会	副会長
林子青	中国仏教協会	常務理事
游驥	中国仏教協会	副秘書長
淨慧	中国仏教協会	理事
通一	中国仏教協会	理事
明哲	中国仏教協会	理事
申在夫	中国仏教協会	国際部副主任
李呈鈞	中国仏教協会	弁公室副主任
徐明	中国仏教協会	国際部工作人員
劉建	中国仏教協会	国際部工作人員

一九八四年四月四日

中国仏教協会招宴

孫培玉 国务院宗教事務局

所長

## 総括

「空海・長安への道」訪中団団長 静 慈 圓

昭和五十六年七月。私は大阪梅田にある「大阪中央病院」に高野山大学教授松長有慶先生（現学長）をお見舞いに行つた。先生は腎臓の手術をされた後だったが、元気な姿でベッドの上に坐られ、いつもと変らぬ笑顔と快活な笑い声で迎えてくれた。その時に高野山大学が中心となつて、中国における空海入唐の足跡を訪ねる訪中団を作りたい旨の話をされた。この計画について、御自身は体調が悪いので私に団長となつて訪中団を作りこの仕事を実行するよう依頼された。私は先生の御意志がかたいことを知り、また私自身も弘法大師の末徒として一度はやってみたい仕事であつたので、先生の御提案をひきうけた。先生はこの仕事を毎日新聞社と提携して行うよう示唆された。

松長教授はこれまで数多くの海外調査をされているが、インド・ラダックの学術調査では、毎日新聞社と共同調査を行つた経験も持つておられる。それらの体験から海外でおこるべき困難な問題をも想定されて、その場で色々アドバイスをいただいた。私もラダックでの海外調査の経験もあり、訪中も三回ほどしており、その他の諸経験からおして、観光旅行とは違うこの仕事に、現代の中国事情の中でいかに困難な仕事であるかを予知していた。

病院から出た私は、大変な仕事を引き受けたと思つた。しかし弘法大師を生涯の研究テーマとしている私にとって、大師の足跡を追体験できるということは、千載一偶の好機会でもある。ともかく実践あるのみである。

以後私はこの訪中団についての計画を練つた。まず最初の難解な問題は、入唐ルートの問題である。弘法大師空海

はその当時の人間としては驚くほど多くの文章を残している。しかし入唐に関したものの、中でも福州から長安(西安)にいたる中国大陸横断の記録は残っていない。

ちなみに「日本後紀」等の記録によれば、空海らは延暦二十三年(八〇四)七月六日、第十六次遣唐使船で「肥前国松浦郡田浦」を出発する。翌七日には遣唐使船四艘は四散海上を漂う。空海の乗った第一船は三十四日のち八月十日「福州長溪県赤岸鎮已南海口」に漂着する。十月三日福州へ廻航、十一月三日福州を出発、長安へ向かう。十二月二十一日長安長安駅着、十二月二十三日長安城へ入る、となる。したがって福州市から西安市までを四十九日間で行ったこととなる。

空海の入唐道については、桑原鷗藏氏、常盤大定氏らの研究史料等があるが、これらのものも再検討せねばならない。そこで唐代八〇四年を中心にした交通路の検索が必要となる。交通路の件では唐代交通史の権威である日比野丈夫先生を始め、東洋史関係の多くの方々に御協力をいただいた。

空海の入唐ルートを追体験しようとする試みは高野山大学だけでなく、高野山内において他に二つの動きがあった。高野山南院の内海有昭大僧正(高野山住職会々長)は、早くから日中の文化交流に関心を持たれていた。そして大師の入唐の跡を踏破することもすでに具体的に動き出していた。五十六年十一月「高野山日中友好協会第一次訪中団」(団長竹内崇峯大僧正)の訪中の時には、中国仏教協会に空海の足跡を追体験したい旨を口頭で話し、さらに中国國務院宗教局所長孫培玉先生に協力を求められていたのである。以後、この計画については、たびたび南院を尋ね、今回の訪中団の組織作り、訪中団の意義などについて懇切なアドバイスをいただいた。

他に、総本山金剛峯寺の企画室では、弘法大師御入定千五百年御遠忌記念として、空海入唐の足跡を辿る企画をもって、企画室課長添田隆昭師が毎日新聞東京本社で佐藤健記者と会っていた。五十七年春のことである。

あれやこれやの人間関係と組織の関係で動いていたが、この企画は次のように一つにまとめられ、昭和五十八年三月二十三日第一回委員会（於金剛峯寺）が開かれ、弘法大師御入定千百五十年御遠忌記念事業として出発した。組織は次の如く結成された。また今回の訪中団に必要な一切の経費は、各実行団体が分担することとなった。

弘法大師御入定千百五十年御遠忌記念

「空海・長安への道」実行委員会

一、実行 団体

・高野山真言宗 総本山金剛峯寺

・高野山大学

・高野山日中友好協会

・毎日新聞社

二、実行 委員

・委員長 阿部野 竜 正（高野山真言宗事務総長）

・委員 麻生 恵 光（御遠忌大法会事務局副総監）

近藤 説 巖（高野山真言宗総務部長）

中野 良 戒（御遠忌大法会事務局常務理事）

北川 智 城（企画室長）

松長 有 慶（高野山大学長）

鷲峰本賢（高野山大学学監）

高木神元（高野山大学文学部長）

竹内崇峰（高野山日中友好協会会長）

内海有昭（高野山日中友好協会副会長）

山階清弘（高野山高等学校校長）

山崎宗次（毎日新聞開発本部長）

### 三、事務局（高野山大学密教学研究室内）

静慈圓（高野山大学助教授）

備前有隆（高野山日中友好協会事務局長）

佐藤健（毎日新聞記者）

添田隆昭（企画室課長）

この委員会は強力な組織となった。委員長阿部野竜正大僧正は、中国西安に建立の「惠果・空海記念堂」をこめた御遠忌の仕事として手がけられ、中国の実情に詳しい。高野山日中友好協会は、中国仏教協会創設当初から、仏教協会と交流があり、中国の仏教者との関係が深い。特に中国人とのつきあいは回数と年数が大事である。この点、高野山日中友好協会の人達が作ってきた人脈は大きな力となった。

また毎日新聞社は、五十九年に入ると東京本社にプロモーション本部の橋爪順一編集委員を事務局長とする実行委員会を作った。編集、出版、広告、販売、事業などが協力的体制をとるためである。ひとつの取材にこれほど大がかり

なことをするのはそうないことだという。毎日新聞社より抜擢された記者は佐藤健氏、カメラマンは中西浩、滝雄一の両氏。いずれもその道のベテラン、この人をおいて他には考えられない選抜である。事実今回の動静は毎日新聞紙面に、昭和五十九年四月一日から六月二十日までの間八回にわたり大きく連載された。また「空海・長安への道」（毎日グラフ別冊、昭和五十九年六月一日発行）を発売、さらに豪華本「弘法大師空海」（監修・松長有慶、毎日新聞社発行、昭和五十九年十月二十三日発行）等に結実された。

中国側との交渉は、備前有隆団員が中心となった。昭和五十八年四月四日、「空海・長安への道」実行委員会の正式の書類をもって、中国側との交渉のために、備前・静が北京入りをした。中国仏教協会を窓口として交渉に入ったのである。書類には今回の趣旨、実行委員会の組織、派遣団員、交通路計画案をつけ期間は五十八年秋とした。趣旨は次の如くである（原漢文）。

日本の文化は、常に中国を手本としながら育って来た。特に奈良時代、平安時代はその感が強い。日本仏教においては、全ての仏教団体が共に中国から直接に入ってきた漢文の仏教聖典を、今もそのまま読経している。古来より日本は、漢字文化圏の中にあり、中国から強く影響を受けてきたことは論を俟たないところである。

僧空海、弘法大師（七七四―八三五）は、中国の文化・宗教の影響を受け、それを日本に甞し、日中友好の掛け橋となった第一人者である。弘法大師開宗の「日本真言宗」は、総本山金剛峯寺を中心に、日本仏教の信仰のメッカとして、その名を知られている。現在日本真言宗の寺院数は、一万七千八百七十三、その信徒は、約千二百万人にのぼる。これ以外にも大師が中国からもたらされた文化によってその恩恵を被っている者は、実に数知れない。

弘法大師が日本に伝えた密教は、中国僧不空三藏（七〇五―七七四）と大衍暦の著者としても知られる一行阿闍梨（六

八三一七七)の流れをついだ青龍寺東塔院惠果和尚の法燈をそのまま継承されたものである。我々日本真言宗の者は、弘法大師御入定の後千百五十年の間、大師が伝えられたこの法燈を守りつづけている。

明年昭和五十九年(一九八四)は、「弘法大師御入定千百五十年御遠忌大法会」が執行される。この大法会に際し、我々末資たる者は、宗祖の徳を慕い、宗祖当時に帰って、大師の御苦勞を慕いたいと念願している。「空海・長安への道」と題して、日本を出発して、福州市より西安市までを再現したい。

この計画を実行することによって、宗祖大師を育てていただいた各都市で、中国仏教徒の先生方との親善友好を、現在においても深めたいと考える。さらには、大師が中国からうけた恩恵・又は現代における日中友好の行動を日本国民にも広く知らしめたく考える者である。

この計画は、両国の文化交流の増進を益々進めるものと信ずる者である。

弘法大師御入定千百五十年御遠忌記念

「空海・長安への道」実行委員会

委員長・高野山真言宗宗務総長

阿部野 竜正

一九八三年三月二十一日

中国仏教協会会長

趙 撲初 先生

計画の準備では、空海入唐道のルートの設定等色々な問題があったが、一番の難関はやはり中国側との交渉であつ

た。当初我々は空海が四十九日で行った道を、中国の人達と交流を深めながら、七十日で踏破するという計画をたてた。しかし結果として与えられたのは四十日であった。それもなお二回に別けたらどうかとのことであつた。むずかしいコースなので各省を一度に通過するのは困難であるという。

弘法大師が踏破した二千四百キロの道、この中には未開放の地域も多い。福建省においては福州市以外は全て未開放地区である。そしてその許可はなかなかおられない。交渉を重ねて内にも全コースの日程の関係もあつて、バスを一台中国側へ寄付すれば何とかなりそうだとのことになつた。毎日新聞社の山崎宗次部長と佐藤健氏は数度高野山の委員会に出席していたが、バスの問題は山崎部長が気前よく引き受けてくれた。このバスを中国側へ送ることについても税関等の問題でひと苦労した。

高野山側の訪中団員派遣のメンバー五人が決定したのは、五十八年十月七日第三回実行委員会（於金剛峯寺）の時であつた。この時訪中団員八名が正式に決定したのである。以後高野山側の五名は定期的に研究会を持って、各自のテーマと実施での役割分担を決めていった。

#### 「空海・長安への道」訪中団員

団長	静 慈 圓	四一歳	高野山大学助教授
副団長	備 前 有 隆	四七歳	高野山高等学校教諭
秘書長	武 内 孝 善	三四歳	高野山大学講師
団員	近 藤 堯 寛	三七歳	高野山真言宗金龍寺副住職
	中 村 正 文	二八歳	高野山大学大学院在学中（現助手）

佐藤 健 四一歳 毎日新聞社記者

中西 浩 五三歳 毎日新聞社写真部編集委員

滝 雄 一 三五歳 毎日新聞社出版写真部員

阿部野委員長は常に積極的であった。この困難な「空海・長安への道」の企画。それには手紙や電話ではダメ、直接中国へ行かねばならぬとの主張であった。五十八年六月六日、阿部野委員長が訪中の際、中国仏教協会々々長趙樸初先生に会ってこの件を再度お願いした。七月上旬静が訪中の時、上海・西安でこの件をお願いし、八月末前団員が訪中の時、北京で仏教協会の要人と会ってさらにお願いを重ねた。しかしなおこの問題はむずかかった。そこで阿部野委員長の裁量で内閣総理大臣中曾根康弘氏の親書をいただくこととなった。そして十月十五日付で中国大使館をとおして、総理の親書が趙樸初会長にとどいたのである。その親書は次のとおりである（原漢文）。

謹啓

錦秋の候、中国仏教協会趙樸初先生におかれましては益々御健勝のこととお慶び申し上げます。

さて本年六月、私の親しい友人である阿部野竜正高野山真言宗宗務総長が訪中の際、先生に直接お目にかかってお願い申し上げました件につきまして、私からも日中両国の友好促進の見地からは是非先生の御配慮を頂きたいと存じまして書信を認める次第です。

御高承の通り、真言宗の開祖空海弘法大師は中国に学んでその文化宗教の影響を深く受け、これを日本にもたらして日中文化交流の礎を築いた歴史的存在であります。

明年一九八四年は弘法大師入定一、一五〇年に当りますが、この機会に真言宗徒有志により「空海・長安への道」と題する行事が計画されております。この計画は、弘法大師を育てて頂いた福州市から西安市までの中国の各地をいわば追体験旅行することによって大師の遺徳を偲び、併せて中国仏教徒の方々との親善友好を深める趣旨であります。さらに日中兩國の文化交流の進展に資するところも極めて大きいと考えます。

この計画の実現のためには中国側の格別の御理解と御尽力が不可欠であります。関係方面に対する先生の御高配を私からも何分よろしくお願い申し上げます。

末筆ながら先生を始め仏教協会各位の御健康を心からお祈り致します。

敬具

昭和五十八年十月十五日

日本国内閣総理大臣 中曾根康弘

中国仏教協会会長

趙 撲初 先生

また中曾根総理は、胡耀邦総書記が来日の時、この件を総書記にたのんだと阿部野委員長が上京の際、同氏に話した。事実、我々が訪中してからわかったことだが、福建省は趙撲初会長が北京から直接指揮しており、その指示は徹底していた。胡耀邦総書記の伝言は順次下って伝えられていた。

待ちに待った中国側の第一回目の回答は、五十八年十月十七日付で来た。その回答には私たちの要求はほぼみたまわっていた。そこで委員会でもう一度検討をした上で、十一月二十一日備前・静岡名が北京へ飛び、最後の交渉を持つ

たのである。ここに弘法大師入唐道が開かれたのである。

弘法大師御入定千五百年御遠忌記念「空海・長安への道」と名づけられたこの計画は、なかなか公表できなかった。朝日新聞社等の報道機関また真言宗内の御遠忌企画の諸事業はすでに実行されている。その中でこの企画は、二年余の歳月を経ながらいまだ発表できない。このようなところにも中国側との交渉のむずかしさを御理解いただきたいと思う。ただただ忍耐にたえた計画であったと思う。それだけに、十一月末の北京の交渉が終った時はうれしかった。

帰国後、委員会が開かれ、本計画は昭和五十九年正月のトップ記事として各報道機関紙上に発表することとなり、そのための記者会見が十二月十日（於高野山大学会議室）に行なわれ委員長以下が列席した。

最初に訪中団八名が一堂に会したのは、五十八年十二月二十二日であった。高野山側五名と毎日新聞社側三名、それに金剛峯寺企画室課長添田氏との計九名は、小雪の舞う九州長崎県の平戸・五島列島の福江島を尋ね遣唐使がたちよった日本側の最終地を搜索した。

一方、大学では高野山大学学監鷲峰本賢先生の御理解で、「空海・長安への道」の別動隊（第二班）が計画された。毎日新聞社側もこの計画に賛同した。別動隊は五十九年三月三十一日に西安に入り、西安で「空海・長安への道」踏査隊を迎え合流する。四月一日高野山で開白の御遠忌大法会と同時に、青龍寺において恵果・空海にこの法会を奉告する「奉告法要」を執行するという計画である。別動隊（第二班）には随喜参加者も加わった。隊員は次の諸氏である。

「空海・長安への道」(第二班) 訪中団団員(三月二十八日―四月六日)

団長 松長有慶 高野山大学長

副団長 高木紳元 高野山大学学部長

副団長 橋爪順一 毎日新聞社編集委員

秘書長 越智淳仁 高野山大学助教授

団員 堀内寛仁 高野山大学教授

堀内昌子 主婦

田中千秋 高野山大学教授

田中賀代子 主婦

氏家覚勝 高野山大学教授

中村梅之助 前進座俳優

王前安生 前進座大阪営業所所長

松長恵史 大学生

小田切恵子 東京 捜真女学校教諭

片野登喜子 東京 ㈱日本シルバー店長

川島宏之 東京 高福院住職

佐藤泰三 岡山 神護寺住職

中川 慈永 大阪 瑞祥院住職

中川 和子 主婦

日和田 住子 徳島 医光寺

吉田 英子 大阪 光フォーム印刷係役員

増田 任雄 東京 大徳院住職

村上 了海 福岡 吞山観音寺副住職

森 真清 愛知 鳥礼食堂店主

向井 米一 随行員

原田 和信 随行員

「空海・長安への道」訪中団本隊（第一班）・別動体（第二班）合同会議は、五十九年二月八日（於高野山大学密教文化研究所）で行なわれた。

「空海・長安への道」訪中団本隊八名は、二月二十五日高野山で集合。二十六日奥ノ院廟前で出発の挨拶をし、つづいて金剛峯寺で行なわれていた宗議会会場で挨拶を終え、高野山を下って大阪へ。翌二月二十七日北京に到着し、二十九日福州へ。これより空海入唐のルートを踏破して三月三十一日西安についた。

中国において第二班は五十九年三月三十一日午後五時、西安東門前において無事二千四百キロを踏破してきた本隊を迎えた。この時西安市民の人の波・自転車のは、東門に近づく本隊と共に動いた感じであった。そして両班が合流したその瞬間、東門前は大群集の円座ができていた。

四月一日、両班は西安青龍寺において、弘法大師御入定千五百十年御遠忌開白の「奉告法要」（導師 松長有慶学長）を行なった。感慨無量であった。

ついに空海が入唐してから千八百八十年ののち、福州から西安青龍寺までの弘法大師入唐求法の道を踏波したのである。

四月三日、北京へ。関係各機関への挨拶。

四月六日、中国北京より日本に帰国、高野山へ帰る。

四月七日、高野山奥の院大師廟前に帰国報告法要。つづいて帰国報告記者会見（於金剛峯寺宗務庁会議室）、のち訪中団

員八名解散。

九月二十六日、高野山大学秋季同学会で、「空海・長安への道」報告会を行なう。

私は、今回実行した「空海・長安への道」の仕事を決意のように考えてきた。ここでこの仕事に対する私の考えを書くことをお許しいただきたい。

まずこの仕事についての組織ができなければならない。その組織は仕事中心主義の組織、つまりプロジェクト組織でなければならない。この仕事を計画し、中国において実行し、そして今回の組織が解散するまでは、当初よりその過程を三つに別けることとする。それはこの仕事を円滑に取り運ぶためである。三区分とは次の如き考えである。

#### 第一、前プロジェクト

ここでは企画から始まり、訪中団を中国本土におくるための一切の仕事を行なう。私がここで書いた計画段階の内容は、全てこの前プロジェクトとしての仕事である。

#### 第二、実施（中国での活動）

空海入唐道を踏破するのは八名である。中国本土でおこるあらゆる問題は、全て八名一致協力して行う。各自が持っている分担の仕事は、その仕事においては分担者が主導権を握る。一日が終れば全員集まり問題を出しあつて反省し、「団日誌」に記す。旅行中佐藤健団員からは、適切で鋭い指摘と助言をいただいた。これが今回の成果に大きく影響していったことはいうまでもない。

中国の旅行は、目的地へ到着すれば、到着したところでこちらの要求を出し、交渉していかねばならない。入唐道のルートで唐代（八〇四―八〇六）に遣唐使一行、または大師が立ち寄ったと思われる場所・寺院は多くあつた。各地の歴史専門家や考古学者等の多くの協力を得たからである。その都度私たちはその場所へ行くことを要求した。だが未開放地区であつたり許可証がなかつたりする。しかし私たちは、今回の我々の旅行の目的を話し、容易に引き下らなかつた。旅行中毎日このことをやっていた気がする。交渉役の備前副団長は、これまでの経験を生かして、うまくこの問題を処理した。

早朝・夜の写真撮影は、今日の中国旅行の状況下ではむずかしい問題であつた。中国諸機関の協力の下で、今回私たちが持たした鮮明なカラー写真は、大師が見た中国の風物を十分に伝えているものと思つている。特に福建省における写真は、世界で始めての公開であり、現在なお未開放地区であるためにきわめて貴重なものである。中西・滝両カメラマンは、毎日二・三十キロの機材を背負い、四十日余大地を走りまわつた。その御苦労も十分ねぎらわねばならない。

中国仏教協会は、北京からの全コース、私たちの訪中団の案内役として二人の随行員を派遣した。蓬俊忠・張開勳の両氏である。旅行中我々の団と中国側との板挟みになつたのは、通訳として同行した蓬俊忠氏であつた。蓬氏と備前副団長とそれには国交回復以来の旧知の間がらであつた。蓬氏は、今回の団の目的と、歴史的意義をよく理解

し、献身的かつ積極的に通訳の労をとった。今回の成功は、現地における蓬氏の協力によるところが大きい。

西安までの踏破が終り、空路北京へ、関係諸機関への挨拶が終った。やつと肩の荷がおりた。

四月五日、両班訪中団は万里の長城へ行った。私と備前副団長は、蓬氏の慰労のために北京で一日を割くことにしていた。この日北京郊外香山へ彼を誘ってドライブした。三人共今日は仕事を離れて自由であった。蓬氏は私たちと話をしながら、今回の仕事をふりかえって涙していた。旅行中蓬氏は我々の強引な要求に「皆さんはそれでよいかも知れませんが、私は大きな過を犯します」と苦悩した顔でよく言ったものだ。仏教協会から、今回の訪中団をまかさした彼の立場が、これだけ重責であることを、私たちも理解していたのだが。

この中国本土実施における全容は、本報告書で触れているとおりである。

### 第三、後プロジェクト

後プロジェクトにおいては、実施をして帰国したその後に起る問題を想定した。後プロジェクトの仕事が終るまでは、今回の訪中団は解散しない。つまり訪中団々員は後プロジェクトで起る仕事とつきあうこと、これを団員決定の条件とした。事実、帰国後中国各地から色々な問題が来て、それに対処している。だが後プロジェクトの仕事も、この「報告書」を持って終りとしたい。

「空海・長安への道」訪中団は、ここに「解散宣言」をするものである。

「報告書」については、毎日新聞社側より佐藤団員には、「空海・長安への道」全コースについて、毎日新聞紙上掲載を中心とした記事をよせていただいた。中西浩・滝雄一両カメラマンには、写真を自由に使用させていただいた。

他の原稿は、踏査団団員の研究分担と現地での仕事をまとめたものである。また東方出版社には、本書の装幀から始まり、たび重なる御迷惑をおかけした。特に高野山大学院の私の後輩にあたる東方出版編集員板倉敬則氏には献

身的な御協力をいただいた。

日中合同の動きの中で、「空海・長安への道」の仕事は、実に多くの人たちの協力を得て成功をおさめた。文の中で記した個人や団体の方々の他にも、多くの人々の助言と指導をいただいた。あわせて感謝を申上げる次第である。

今この仕事を閉じるにあたって、「人間マンガラ」とでも呼びたいその中で触れ合った人々の顔が、彷彿として私に語りかけている。

昭和六十年早春

高野山清涼院にて脱稿

静慈園（しずか・じえん）

一九四二年徳島県に生れる。一九六五年高野山大学密教学科卒業。一九七一年同大学院文学研究科密教学専攻博士課程修了。現在高野山大学助教授。高野山日中友好協会理事。訪中七回。弘法大師と中国の哲学・文学・歴史・宗教の関係を明らかにすることを研究課題としている。

備前有隆（びぜん・ゆうりゅう）

一九三六年長野県に生れる。一九五九年高野山大学卒業（中国哲学専攻）。現在高野山高校教諭。一九八〇年高野山日中友好協会結成事務局長。一九八三年和歌山県日中友好協会理事。訪中十回。特に将来の仏教交流のため、青年僧の日中友好に関心をもつ。一九八三年には高野山高校研修訪中団を率いて、中国仏教協会との交流をはかった。

武内孝善（たけうち・こうぜん）

一九四九年愛媛県に生れる。一九七二年高野山大学密教学科卒業。一九七七年高野山大学院文学研究科密教学専攻博士課程修了。現在高野山大学講師。特に日本仏教の歴史を手がけ、密教の分野を歴史的観点から洗い出す研究を進めている。

近藤堯寛（こんどう・ぎょうかん）

一九四六年愛知県に生れる。一九六九年高野山大学卒業。現在名古屋市金龍寺副住職。本山布教師。「弘法大師の法身說法観」を卒業論文とし、以後大師の教学と自らの信仰観を実践の上で探り求めている。月刊「風信」という文章伝導を行なっている。

中村正文（なかむら・まさふみ）

一九五五年兵庫県に生れる。一九七八年高野山大学密教学科卒業。一九八四年高野山大学院文学研究科密教学専攻博士課程修了。現在高野山大学密教学科助手。弘法大師の教学を専門とする。大師が真言密教を独立した教理体系として主張する時に使用した『釈摩訶衍論』を研究中。

佐藤 健（さとう・けん）

一九四二年群馬県に生れる。法政大学社会学部卒業。毎日新聞社入社、毎日グラフ、学芸部、社会部などを経て現在サンデー毎日記者。毎日新聞の「宗教を現代に問う」や西チベットのラダック・ザンスカールの仏教ルポなど、多くの宗教ルポなどを手がけている。著書「マンダラ探険」（人文書院）ほか。

中西 浩（なかにし・ひろし）

一九三〇年静岡県に生れる。一九五〇年日本大学法学部卒業。現在毎日新聞東京本社写真部編集委員。一九七三年大相撲訪中団同行記者。一九七六年日本写真記者訪中団団長。一九七七年世界報道写真コンクール（オランダ）でニュースファイチャー部門一位。現在同コンクールの国際審査員。

滝 雄一（たき・ゆういち）

一九四九年静岡県に生れる。一九七一年静岡大学工学部卒業。現在毎日新聞東京本社出版写真部員。一九七九年高野山大学ラダック調査隊に同行するなど海外取材七回。一九八二年日本雑誌写真記者会賞受賞。

「空海・長安への道」報告書 (非売品)

---

昭和60年3月15日印刷

昭和60年3月21日発行

編集 弘法大師御入定1150年御遠忌記念  
「空海・長安への道」訪中団  
代表 静 慈圓

発行者 弘法大師御入定1150年御遠忌記念  
「空海・長安への道」実行委員会  
代表 阿部野竜正

発行所 弘法大師御入定1150年御遠忌記念  
「空海・長安への道」実行委員会  
〒648-02 和歌山県伊都郡高野町高野山

---

制作 東方出版株式会社  
〒530 大阪市北区西天満3-2-4

---

